とりあえずデュエルしようぜ！

るくは

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
とりあえずデュエルしようぜ！

【Ｎコード】
Ｎ６９９９Ｔ

【作者名】
るくは

【あらすじ】
特になんの取り得も無い少年　関口達也。ただし、趣味の遊戯王ＯＣＧだけは別！　全国大会の切符を手に入れて舞い上がっていた彼は気づかない内に、何時の間にか遊戯王の世界に飛ばされてしまっていた！
しかも、何故かラノ◯やらアニメやらで見た事のあるキャラクターまで…あれ？君達なんでデュエル知ってるの！？
基本、禁止、制限カードなどは今の環境を採用。
オリジナルカードもちょこちょこ出す予定。

ただし、一部例外を除いて主人公はオリカを使わない予定です。

プロローグ

「俺はこれでターンエンドだ。どうした、手も足もでないみたいだな関口！」

とりあえず、今の俺の現状整理。

俺の名前　関口達也。目の前のテンション高い奴　竹内康広俺のダチ。

現在、世界規模で大人気のカードゲーム「遊戯王オフィシャルカードゲーム」の大会中だ。これに勝てば、全国大会の出場権が手に入る。だが状況が芳しくない。

相手のフィールドには上級モンスターが2体、それに対して俺のフィールドにはモンスターがいない。竹内が魔法・罠ゾーンに何もカードを置いてないのは幸いだが…このドローで切り返せるカードがこなければ、俺の負け…！

ライフポイント　関口　１２００　竹内　２０００

「俺のターン…ドロー！…くっくっく…悪いな、竹内。引いちまったみたいだ」

「っ！？　まさか…！？」

「俺は、手札から魔法カード「ブラック・ホール」を発動するぜ！」

《ブラック・ホール／Ｄａｒｋ　Ｈｏｌｅ》

通常魔法

効果

フィールド上に存在するモンスターを全て破壊する。

「てめぇ…この状況でそのカードを引くとか、どんな運してややがんだよ！？」

「悪いね、昔から運だけはいいんだよ。さらに、俺は手札から魔法カードミラクル・フュージョンを発動！俺の墓地にある、Ｅ・ＨＥ

ＲＯアナザー・ネオスとサイバードラゴンを除外することで、Ｅ・ＨＥＲＯ　Ｔｈｅ　シャイニングを融合召喚するぜ！」

《ミラクル・フュージョン／Ｍｉｒａｃｌｅ　Ｆｕｓｉｏｎ》
通常魔法
自分のフィールド上または墓地から、融合モンスターカードによって決められたモンスターをゲームから除外し、「Ｅ・ＨＥＲＯ」という名のついた融合モンスター1体を融合デッキから特殊召喚する。
（この特殊召喚は融合召喚扱いとする）

《Ｅ・ＨＥＲＯ　Ｔｈｅシャイニング／Ｅｌｅｍｅｎｔａｌ　Ｈｅｒｏ　Ｔｈｅ　Ｓｈｉｎｉｎｇ》
融合・効果モンスター
星８／光属性／戦士族／攻２６００／守２１００
「Ｅ・ＨＥＲＯ」と名のついたモンスター＋光属性モンスター
このカードは融合召喚でしか特殊召喚できない。
このカードの攻撃力は、ゲームから除外されている自分の「Ｅ・ＨＥＲＯ」と名のついたモンスターの数×３００ポイントアップする。
このカードがフィールド上から墓地へ送られた時、ゲームから除外されている自分の「Ｅ・ＨＥＲＯ」と名のついたモンスターを2体まで選択し、手札に加える事ができる。

「さて、お前のライフポイントは残り２０００だったよな？俺のシャイニングの攻撃力は、ゲームから除外されてるＨＥＲＯが一枚で２９００…これで終わりだ！ダイレクトアタック！！！」
「まじかー！？」
よっし、完全勝利！これで全国大会の切符ＧＥＴだぜ！

その後、俺はスタッフの人から全国大会のルールなどの説明を受け、

竹内と共に大会場を後にした。
「しっかしあと少しだったのになぁ…やれやれ。」
「俺はジェムナイトデッキでここまで来てるお前がすごいと思うけどな」
「ジェムはやれば出来る子！　流石に全国レベルではないけど、地区の方じゃそこそこ成績残してるんだぜ？」
「ほぅ…まぁ全国レベルだと、六武や墓地ＢＦだらけなんだろうな…コイツでいけるかどうか心配だ」
「いけんじゃねえの？結構多方面メタれるだろ、そのデッキ」
「まぁね、闇を喰えんのが難点だが…」
その闇がやばいんだよな…とりあえず、目先の強敵は墓地ＢＦか…いや、六武にもいたな…怖い闇が。
「さって…俺は店でフリーして帰るかな。お前はどうする？」
「ん～…せっかくだし、俺もフリーするかな。」
「お～け～、じゃあ俺のジェムでさっそくリベンジと行かせて貰うか」
「ん、そう簡単には負けんよ」
この時の俺は、正直かなり舞い上がってた。初めての全国大会出場…ずっとこの時を夢見ていたといっても過言ではない。
だが俺、ちょっと調子に乗りすぎたな。まさかこの後、あんなことになるなんて…

プロローグ（後書き）

ルール等のご質問。または間違いの指摘などがありましたら、ご連絡いただけると幸いです。

第一話　おい、気づいたら異世界ってどんｄ（ｒｙ

「…っと……かげん……さいよ」
ん～…誰かの声がする。この声は、女…?妹の声じゃないし、アレ?そういえば昨日あの後、夜辺りまでフリーした後からの記憶が…無い。
とりあえず俺は、まだはっきりしない意識のまま起き上がる。
「あ、やっと気づいたみたいね。」
「あれ…君、どっかで見たような…?」
「?…私はアンタの顔に覚えは無いわよ」
「…っ!?」
思い出した、こいつラノ◯に出てくるキャラクターそっくりじゃないか!なんだコスプレか??
しっかし、こんな堂々コスプレしてるなんて…この辺でイベントでもあるのか?
「それにしても、アンタ何でこんな所に倒れてたのよ?」
「…へっ?倒れてた??」
「…その様子だと、自分でも気づかない内にってこと?もしかして、酔っ払い??」
失敬な、俺はまだ未成年だしタバコや酒には手を出すつもりは無い。けど、どういうことだ?そもそも辺りを見渡してみても、この景色にまったく見覚えが無い。少なくとも、俺の住んでいた町の近くじゃなさそうだ。見た感じ、今は午前中みたいだからほぼ半日近くの記憶が無くなってることになる。しかも、起きたら別の場所に連れてこられてた…
「もしかして…これが世に言うアブダクトって奴か」
「アンタ、本当に大丈夫?何か色々さ」
とりあえず、落ち着け…落ち着くんだ俺!そうだ、こういう時は素数を数えるんだ。素数は1と自分の数でしか割ることのできない孤

独な数字……俺に勇気を与えてくれる。それに俺は何を隠そうＭＭ○熟読者！　こんな不思議体験、あの世界じゃ日常茶飯事だぜ！
「えっと…正直に言うとさ、俺昨日からの記憶が無いんだ。それでこの場所にもまったく見覚えが無いんだけど、良ければ教えてくれないかな？」
「はぁ…それはまた厄介ね。いいわ、教えてあげるからとりあえず場所を移動しましょ」
「恩にきるよ…っとそういえば自己紹介がまだだったね、俺の名前は関口達也。君は？」
「私の名前は、御坂美琴よ」
マジかよ…あのキャラと名前まで一緒なんて。こいつ、相当役に入れ込んでるんだな。

そして俺達は、近くの喫茶店に入ることにした。
「で、まずここは何処かって話だったわね。ここは童実野町よ」
「…え？」
「だ～か～ら～、ここは童実野町だって言ってるの！アンタもしかして、地理不得意なの？けど、ここはかなり有名でしょ」
ちょっと待ってくれ…そりゃ俺もその地名は知ってるさ。なんたって俺の大好きな遊戯王に出てくる地名だもんな。
「えっと…御坂ちゃんだっけ？君がアニメとかすごく好きなのは分かったからさ、そろそろ本当のことはなしてくんない？」
「はぁ？何言ってるのよ。私は最初から、本当のことしか話してないわよ」
「本当に？冗談だったら、もう笑いどころ過ぎてると思うぜ」
「アンタねぇ…」
途端に御坂ちゃんの身体から電気が迸り始める。えっ…これってまさか超能力！？じゃあこの子は本当に…

「全部本当だって、いってるでしょーがっ！！」
嗚呼、俺オワタ。
「はぁはぁ……ちょっとやりすぎちゃったわね」
「ゴメン…俺が悪かった…だから許して」
幸い、御坂ちゃんから飛び出た電気は俺を軽く感電させるだけで止まってくれたみたいだ。なんだかんだで手加減してくれたらしい。
しかし、どうやらアブダクトだと思ってたけど、実際、俺は二次元の世界に飛ばされてきたらしいね。しかも童実野町の名前が出てきたってことは遊戯王の世界か…まぁ御坂ちゃんがこの世界にいる理由は謎だけど。いや～日頃から二次元に行きたいとはチラチラ思ってたけどさ、まさか本当に叶うとは…神様ありがとう！。それに、もしここが遊戯王の世界だとしたら、現実よりもかなりカードゲームが浸透してることだろう。よく考えれば、この世界は俺にとって天国なんじゃないか？
「そういえばさ、御坂ちゃんはデュエルとかするの？」
「当然でしょ、強ければ後々大人になっても有利にことが運ぶし、覚えておいて損なんて無いじゃない。そもそも、私が今日ここへ来たのだって、カードを買うためだしね」
わ～お…コイツは予想以上だ。まぁ元々この世界では遊戯王カードやってるだけで、就職にもことかかなそうだったしな。
「そういうアンタも、やってるみたいね」
「まぁね、そこいらの奴よりは強い自信はあるよ」
幸い、手持ちのデッキやら予備カードやらは大会用に全部持って来てたしね。リュックサックにボストンバック、この中に入ってるのは全部遊戯王カードだ。
「へぇ…そうなんだ。ねえ、だったら今から私とデュエルしない？」
突然のお誘い、まぁ決闘者として退く理由は無いよな。
「いいよ、お手柔らかにね」
さぁ、この世界に来てから最初のデュエルだ。何のデッキを使うか、ちょっと迷うかな

第一話　おい、気づいたら異世界ってどんｄ（ｒｙ（後書き）

第一話投稿完了です。
初っ端から美琴ちゃん登場です。
ちなみに、ここは遊戯王の世界という設定ですが、学園都市や、海鳴町もこの世界の中に組み込まれていると解釈してください。
でわでわ

第二話　ＶＳ御坂美琴　前編

所変わって、ここは近くのデュエルスペース。と言っても、俺のいた世界のデュエルスペースとは大分違うけどね。俺の知ってるデュエルスペースは室内で、机と椅子がある簡単な物だった。
しかし、ここはどうだ？室内どころかただの広場だ。椅子も机もありゃしない。その代わり、俺の左腕には良く知ってるものがある。
そう、デュエルディスクだ。俺、ソリッドヴィジョン初体験ですよ！胸が躍るね。
ちなみにこのデュエルディスク、ここに来る途中に御坂ちゃんに教えて貰った店で買ったものだ。いやはや、少し大目にお金持ってて助かったよ。
「さてと…準備はいいかしら？」
どうやら御坂ちゃんは準備万端らしい…さて、俺はどのデッキを使おうか？
今持ってるデッキは４つ…けどコイツだけは無理だな。こいつは俺の切り札、大会勝ち抜き用の専用デッキだ。その分内容もかなりえげつないことになってる、御坂ちゃんの気分を害すのも良くないしね。
となると候補は３つだけど…よし、こいつに決めた！コイツも少しメタチックだけど、俺のデッキの中でもかなり気に入ってる方だしね。
「いいよ、御坂ちゃん。始めようか」
「おっけ～…じゃあ覚悟しなさいよ！」

「決闘（デュエル）！！」
「決闘（デュエル）！！」

「先行は私が貰うわよ、私のターンドロー！」
あ～…そういやこの世界って、先に言ったほうが勝ちって流れがあったな。
「私は、手札からジェネクス・ウンディーネを召喚！更に効果で、デッキから黄泉ガエルを墓地に送り、デッキからジェネクス・コントローラーを手札に加えるわ。」

《ジェネクス・ウンディーネ／Ｇｅｎｅｘ　Ｕｎｄｉｎｅ》
効果モンスター
星３／水属性／水族／攻１２００／守　６００
このカードが召喚に成功した時、
自分のデッキに存在する水属性モンスター１体を墓地に送る事で、
自分のデッキから「ジェネクス・コントローラー」１体を手札に加える。

「さらにカードを一枚セット、これでターン終了よ」

ふむ、カードを一枚セットか…この動きから考えると、あのデッキはジェネクス帝かな？だとするとあの伏せカードは俺のターンに確実に使用してくるだろう。厄介なのは葵か…それ以外なら…まぁ何とかなるだろ。
「俺のターン、ドロー！」
よし、葵を使ってくる様子は無いな。ならこっちも早々に仕掛けるかね。
「俺は手札から魔法カード「おろかな埋葬」を発動する。デッキからカードを一枚選んで墓地に送るぜ…俺の選択するカードは…これだ！ダンディライオン。さらにダンディライオンの効果発動！このカードが墓地に送られた時、自分フィールド上に「綿毛トークン」二体を特殊召喚するぜ」

《おろかな埋葬／Ｆｏｏｌｉｓｈ　Ｂｕｒｉａｌ》
通常魔法
自分のデッキからモンスター一体を選択して墓地へ送る。

《ダンディライオン／Ｄａｎｄｙｌｉｏｎ》
効果モンスター
星３／地属性／植物族／攻　３００／守　３００
このカードが墓地へ送られた時、自分フィールド上に「綿毛トークン」
（植物族・風・星１・攻／守０）２体を守備表示で特殊召喚する。
このトークンは特殊召喚されたターン、アドバンス召喚のためにはリリースできない。

「さーて、悪いが早々に仕掛けさて貰うぜ、俺は手札から、デブリ・ドラゴンを召喚！」

《デブリ・ドラゴン／Ｄｅｂｒｉｓ　Ｄｒａｇｏｎ》
チューナー（効果モンスター）
星４／風属性／ドラゴン族／攻１０００／守２０００
このカードが召喚に成功した時、
自分の墓地に存在する攻撃力５００以下のモンスター１体を
攻撃表示で特殊召喚する事ができる。
この効果で特殊召喚した効果モンスターの効果は無効化される。
このカードをシンクロ素材とする場合、
ドラゴン族モンスターのシンクロ召喚にしか使用できない。
また、他のシンクロ素材モンスターはレベル４以外のモンスターでなければならない。

「これって…アンタまさか！？」

「察しが良いみたいだな、デブリ・ドラゴンの効果を発動！このカードが召喚に成功した時、自分の墓地に存在する攻撃力５００以下のモンスター１体を攻撃表示で特殊召喚する事ができる。俺は墓地にいるダンディライオンを選択するぜ。」
「この動き…まさか最初からあんなモンスターを出すつもり！？」
「こいつは食らうといてーだろ、特にそのデッキには相性最悪だよなっ。俺は自分フィールドのモンスターをすべてチューニング、現れろシンクロ召喚！！…氷結界の龍　トリシューラ！！」
「させるかぁー！！罠カード発動「神の警告」！！そのままトリシューラを墓地に送ってもらうわ」

《神の警告／Ｓｏｌｅｍｎ　Ｗａｒｎｉｎｇ》
カウンター罠
２０００ライフポイントを払って発動する。
モンスターを特殊召喚する効果を含む効果モンスターの効果・魔法・罠カードの発動、
モンスターの召喚・反転召喚・特殊召喚のどれか１つを無効にし破壊する。

「お～…やるねぇ…じゃあトリシューラはそのまま墓地に送るぜ。そして、チューニングにより墓地に送られたダンディライオンの効果で、俺のフィールド上にまた綿毛トークンが二体特殊召喚されるぜ。」
なるほどね、あの伏せは俺の出鼻を挫くのが目的だったわけだ…少しアド損になったけど…まだなんとかなるだろ。
「俺はカードを二枚セット。ターンエンドだ」

現状
御坂美琴　　ＬＰ８０００　↓６０００　　手札５枚
フィールド上　　ジェネクス・ウンディーネ１体　　伏せカード

無し
関口達也　　ＬＰ８０００　　手札２枚
フィールド上　綿毛トークン２体　　伏せカード
２枚

「私のターンね…それにしてもアンタ、トリシューラーなんて激レアなカード、よく持ってるわね」
丁度知り合いに、ターミナルをバカみたいに回してる奴がいたからな。でもおかしいな、この前ゴールドパックで再録もされてるし、激ってほどのレアじゃないはずだが……っとそういえばこの世界のカードのレアリティは色々とおかしいんだったな。青眼の白龍（ブルーアイズ・ホワイト・ドラゴン）だって、世界に４枚しかないらしいし、そもそも１枚で豪邸が買える値段って社長が言ってたっけ。
「まぁいいわ、ドロー！そして、墓地にある黄泉ガエルの効果を発動！私のフィールド上に特殊召喚させるわ」

《黄泉ガエル／Ｔｒｅｅｂｏｒｎ　Ｆｒｏｇ》
効果モンスター
星１／水属性／水族／攻　１００／守　１００
自分のスタンバイフェイズ時にこのカードが墓地に存在し、自分フィールド上に魔法・罠カードが存在しない場合、このカードを自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。この効果は自分フィールド上に「黄泉ガエル」が表側表示で存在する場合は発動できない。

「さらに、手札からジェネクス・ウンディーネをもう一体召喚！効果でデッキからフィッシュボーグ－ガンナーを墓地に送り、ジェネクス・コントローラーを手札に加えるわよ」
相変わらずジェネクスはハンドへらねえなぁ…羨ましい限りだぜ。
「そして、墓地のフィッシュボーグ－ガンナーの効果発動！手札か

らジェネクス・コントローラーを墓地に送ることで、私のフィールド上に特殊召喚するわ」

《フィッシュボーグ－ガンナー／Ｆｉｓｈｂｏｒｇ　Ｂｌａｓｔｅｒ》
チューナー（効果モンスター）
星１／水属性／魚族／攻　１００／守　２００
自分フィールド上にレベル３以下の水属性モンスターが
表側表示で存在する場合、手札を１枚捨てて発動する事ができる。
墓地に存在するこのカードを自分フィールド上に特殊召喚する。
このカードをシンクロ素材とする場合、
他のシンクロ素材モンスターは全て水属性モンスターでなければならない。

「見てなさい、シンクロ召喚がアンタだけの専売特許じゃないって教えてあげる！」
「いやいや…俺は自分の専売特許なんて言った覚えないぞ？」
「うっさいわね！とにかく見てなさいよ。黄泉ガエルと、フィッシュボーグガンナーをチューニング！シンクロ召喚！！来なさい、フォーミュラ・シンクロン！！」

《フォーミュラ・シンクロン／Ｆｏｒｍｕｌａ　Ｓｙｎｃｈｒｏｎ》
シンクロ・チューナー（効果モンスター）
星２／光属性／機械族／攻　２００／守１５００
チューナー＋チューナー以外のモンスター１体
このカードがシンクロ召喚に成功した時、
自分のデッキからカードを１枚ドローする事ができる。
また、相手のメインフェイズ時、自分フィールド上に表側表示で存在する
このカードをシンクロ素材としてシンクロ召喚をする事ができる。

「そして、フォーミュラ・シンクロンの効果で、カードを一枚ドローするわ」
「へいへい…ここまでやっといて、未だ手札6枚か…ほんと安定したデッキだよな」
「フフン…今更気づいたって遅いわよ♪それともここでサレンダーする？」
「まさか…俺は今でも勝つ気満々だぜ？」
「フン…言ってなさいよ！まずはアンタのフィールドをガラ空きにしてやるわ。フォーミュラ・シンクロンで綿毛トークンを攻撃！」
「罠カード発動！「棘の壁（ソーン・ウォール）」！！」
「なっ…！？」

《棘の壁（ソーン・ウォール）／Ｗａｌｌ　ｏｆ　Ｔｈｏｒｎｓ》
通常罠
自分フィールド上に表側表示で存在する植物族モンスターが攻撃対象に選択された時に発動する事ができる。
相手フィールド上に存在する攻撃表示モンスターを全て破壊する。

「甘いぜ、御坂ちゃん！相手の伏せカードは警戒しないとな。フォーミュラ・シンクロンが綿毛トークンを攻撃した瞬間、御坂ちゃんのフィールド上のモンスターは全滅したぜ」
「っ…私はカードを二枚セットしてターンエンドよ」

「じゃあ、俺のターン。ドロー！俺は、手札から魔法カード「トレード・イン」を発動するぜ。このカードの効果で、手札のレベル８のモンスター、フェニキシアン・クラスター・アマリリスを墓地に送り、カードを二枚ドローする」

《トレード・イン／Ｔｒａｄｅ　Ｉｎ》
通常魔法
手札からレベル８のモンスターカードを１枚捨てる。
自分のデッキからカードを２枚ドローする。

「さらに、俺は手札からローンファイア・ブロッサムを召喚！」

《ローンファイア・ブロッサム／Ｌｏｎｅｆｉｒｅ　Ｂｌｏｓｓｏｍ》
効果モンスター
星３／炎属性／植物族／攻　５００／守１４００
自分フィールド上に表側表示で存在する
植物族モンスター１体をリリースして発動する。
自分のデッキから植物族モンスター１体を特殊召喚する。
この効果は１ターンに１度しか使用できない。

「（あのカード…きっとあれで、さらに上級の植物モンスターを呼んでくるつもりね。来るならきなさいっ！）」

「ローンファイア・ブロッサムの効果発動！俺はフィールド上の綿毛トークンをリリースして、デッキからさらにローンファイア・ブロッサムを守備表示で特殊召喚！このローンファイア・ブロッサムの効果も発動する。リリースするのは、最初に召喚したローンファイア・ブロッサムだ。さぁ行くぜ、このデッキの切り札…こい！椿姫（つばき）ティタニアル特殊召喚！！」

《椿姫ティタニアル／Ｔｙｔａｎｎｉａｌ，　Ｐｒｉｎｃｅｓｓ　ｏｆ　Ｃａｍｅｌｌｉａｓ》
効果モンスター
星８／風属性／植物族／攻２８００／守２６００
自分フィールド上に表側表示で存在する植物族モンスター１体をリ

リースして発動する。
フィールド上に存在するカードを対象にする魔法・罠・効果モンスターの発動を無効にし破壊する。

「攻撃力２８００…随分厄介なカードを持ってきてくれるじゃない」
「（コイツの厄介なのは攻撃力だけじゃないけどな）さて、じゃあ椿姫ティタニアルで直接攻撃させてもらおうか！」
「っ…速攻魔法カード「月の書」発動！対象は、椿姫ティタニアルよ！」

《月の書／Ｂｏｏｋ　ｏｆ　Ｍｏｏｎ》
速攻魔法
フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択し、裏側守備表示にする。

「フッ…「対象」を取ったね、御坂ちゃん。じゃあ椿姫ティタニアルの効果を発動！もう1匹残ってる、綿毛トークンをリリースすることで、月の書の効果を無効化して破壊する」
「なっ…そんなっ！？」
「このカードは御坂ちゃんのデッキには相性悪そうだね…じゃあこのままティタニアルの攻撃を通させてもらうよ」
「うっ…」
御坂美琴　ＬＰ６０００　↓　３２００
「俺はこのままターンエンド…っと行きたい所だけど、ターン終了前に、墓地にあるフェニキシアン・クラスター・アマリリスの効果を発動するよ。墓地にある、ローンファイア・ブロッサムを一枚除外することで、俺のフィールド上に守備表示で特殊召喚する」

《フェニキシアン・クラスター・アマリリス／Ｐｈｏｅｎｉｘｉａｎ　Ｃｌｕｓｔｅｒ　Ａｍａｒｙｌｌｉｓ》

効果モンスター
星８／炎属性／植物族／攻２２００／守　　０
このカードは「フェニキシアン・シード」または
このカードの効果でしか特殊召喚できない。
このカードは攻撃した場合、ダメージ計算後に破壊される。
自分フィールド上に表側表示で存在するこのカードが破壊され
墓地へ送られた時、８００ポイントダメージを相手ライフに与える。
自分のエンドフェイズ時にこのカードが墓地に存在する場合、
自分の墓地に存在する植物族モンスター１体をゲームから除外する
事で、
このカードを墓地から守備表示で特殊召喚する事ができる。

「これで、本当にターンエンドだ」

現状
御坂美琴　　ＬＰ６０００　↓　３２００　手札４枚
フィールド上　　モンスター無し　　伏せカード１枚
関口達也　　ＬＰ８０００　　手札２枚
フィールド上　　アマリリス１体　ブロッサム１体　ティタニアル１体　伏せカード１枚

第二話　ＶＳ御坂美琴　前編（後書き）

第二話投稿です。
氷結界の龍トリシューラの効果は、今度ちゃんと出た時に追記します。
当分の間は、とある系のキャラがメインに出てくるかも。別キャラはその後追々ということで。

第三話　ＶＳ御坂美琴　後編

現状
御坂美琴　　ＬＰ６０００　↓　３２００　手札４枚
フィールド上　　モンスター無し　　伏せカード１枚
関口達也　　ＬＰ８０００　　手札２枚
フィールド上　　アマリリス１体　ブロッサム１体　ティタニアル１体　伏せカード１枚

「（これは流石に不味いなんてレベルじゃないわね…あのティタニアルってモンスター、厄介にもほどがあるわ。私の帝モンスターの効果が、全部無効化されちゃうじゃない）」
「どうした、御坂ちゃん。君のターンだぜ？」
「分かってるわよ！（お願い…いいカード来て頂戴…っ！）私のターン、ドロー！……この時、私は伏せカードの速攻魔法カード「サイクロン」を発動して、アンタの伏せカードを破壊するわ！」

《サイクロン／Ｍｙｓｔｉｃａｌ　Ｓｐａｃｅ　Ｔｙｐｈｏｏｎ》
速攻魔法
フィールド上に存在する魔法・罠カード１枚を選択して破壊する。

「！…俺のポリノシスが破壊された！？」
「そして、私の伏せカードが無くなった事により、黄泉ガエルの効果が使えるわ！黄泉ガエルを私のフィールド上に特殊召喚。さらに、手札から氷帝メビウスを墓地に送ることで、墓地からフィッシュボーグガンナーを特殊召喚！チューニングして再度フォーミュラ・シンクロンをシンクロ召喚！、効果でカードを１枚ドロー！」
ちっ…不味いな。保険のポリノシスが破壊された今…俺に御坂ちゃんの召喚を止めるすべは無い。

しかもあの手札の枚数だ…絶対何か仕掛けてくるな。
相手がジェネクス帝だろうから、ティタの能力用にモンスターを温存したけど…コイツは計算違いか？
「行くわよ、まずはその厄介なモンスターから倒してあげる！私は、手札から魔法カード「死者蘇生」を発動！対象は、私の墓地にいる氷帝メビウスよ。そして、フォーミュラ・シンクロンとチューニング！来なさい、シンクロ召喚ギガンテック・ファイター！！」

《死者蘇生／Ｍｏｎｓｔｅｒ　Ｒｅｂｏｒｎ》
通常魔法
自分または相手の墓地に存在するモンスター１体を選択して発動する。
選択したモンスターを自分フィールド上に特殊召喚する。

《ギガンテック・ファイター／Ｃｏｌｏｓｓａｌ　Ｆｉｇｈｔｅｒ》
シンクロ・効果モンスター
星８／闇属性／戦士族／攻２８００／守１０００
チューナー＋チューナー以外のモンスター１体以上
このカードの攻撃力は墓地に存在する
戦士族モンスターの数×１００ポイントアップする。
このカードが戦闘によって破壊され墓地に送られた時、墓地に存在する
戦士族モンスター１体を選択し自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。

うわ…これはちょっと見くびってたかな、まさかこんなにも早くこっちの弱点を見抜いてくるなんて。
「ティタニアルって、攻撃力２８００なのよね？確かに高い数値だけど…今回はその数値が災いしたわね！ギガンテック・ファイターで、椿姫ティタニアルを攻撃！」

「くっ…相打ち…だが」
「そう、ギガンテック・ファイターは戦闘によって墓地に送られた時、墓地に存在する戦士族モンスター1体を選択し自分フィールド上に特殊召喚する事ができるわ。もちろん、ギガンテック・ファイター自身も蘇生可能！蘇生したギガンテック・ファイターでバトル続行よ、ローンファイア・ブロッサムに攻撃！！」
「ちっ…アマリリスは攻撃してくれないんだな」
「当然でしょ、そいつ何度でも蘇ってくるし、その度にＬＰにダメージを受けるなんてゴメンよ。私は、このままターンエンドよ」

さてさて、今度は俺がピンチになる番か。今の手札に、この状況を変えれるカードは無い。幸いまだアマリリスもいるし、ＬＰも十分だから今は耐え時だな。
「俺のターン、ドロー！…俺はこのまま何もせずターンを終了するぜ。」

現状

御坂美琴	ＬＰ３２００	手札５枚	
フィールド上	ギガンテック・ファイター１体	伏せカード無し	
関口達也	ＬＰ８０００	手札３枚	
フィールド上	アマリリス１体	伏せカード無し	

「私のターン、ドロー！そして、墓地の黄泉ガエルの効果を発動！黄泉ガエルをフィールド上に特殊召喚するわ。更に、黄泉ガエルをリリースして手札から風帝ライザーを召喚！」

《風帝ライザー／Ｒａｉｚａ　ｔｈｅ　Ｓｔｏｒｍ　Ｍｏｎａｒｃｈ》
効果モンスター
星６／風属性／鳥獣族／攻２４００／守１０００
このカードがアドバンス召喚に成功した時、
フィールド上に存在するカード１枚を持ち主のデッキの一番上に戻す。

「！！」
「そして、召喚された時風帝ライザーの効果を発動！対象は、アンタのフェニキシアン・クラスター・アマリリスよ！！」
「…やれやれ…酷いことをするな、ドローロックなんてさ」
「言ってなさいよ…私は２体のモンスターで、アンタにダイレクトアタックするわ！」
「うおっ！？」

関口達也　ＬＰ８０００　→　２８００

「さあ、一気に形成逆転ね。次にアンタがなにも手が無いなら、アンタの負けよ」
「…くっくっく、そいつはどうかな？」
「っ！？何が可笑しいのよ！？」
「さぁてね…でも、ありがとうとは言っとくよ。これで希望はまだある！！」
「なっ！？…フフフ随分強がるじゃない、いいわ…面白い、その余裕面をすぐに凹ませてあげる。この勝負、勝った方が、なんでも一つ負けた方に命令できるってことにしましょ」
「…へっ？」
「別に構わないでしょ？アンタだってまだ負ける気してないみたいだし、何か賭けがあった方が盛り上がるじゃない。それともまさか、

ここで逃げる何て言わないわよね？」
「やれやれ…こういうのはあんまり好きじゃないだが…ＯＫ、せいぜい足掻くとしよう」
「上等！！」

「俺のターン、ドロー！」
「（何よ、そのカードは今私が風帝ライザーの効果でデッキの上に戻したフェニキシアン・クラスター・アマリリスじゃない。それで一体何をする気よ）」
「フッ…最初は手札事故だとも思ったけどな、こういう時もあるからデュエルはやめられない！俺は手札から魔法カード「トレード・イン」を発動！レベル８モンスターのフェニキシアン・クラスター・アマリリスを墓地に送ってカードを２枚ドローする！」
「なっ！？」
「来たぜ…俺は手札からデブリ・ドラゴンを召喚！そして効果を発動する。対象は、墓地にいるダンディライオン！そしてこの２体をチューニング、すべてを吹き飛ばせ、シンクロ召喚ブラック・ローズ・ドラゴン！！」

《ブラック・ローズ・ドラゴン／Ｂｌａｃｋ　Ｒｏｓｅ　Ｄｒａｇｏｎ》
シンクロ・効果モンスター
星７／炎属性／ドラゴン族／攻２４００／守１８００
チューナー＋チューナー以外のモンスター１体以上
このカードがシンクロ召喚に成功した時、
フィールド上に存在するカードを全て破壊する事ができる。
１ターンに１度、自分の墓地に存在する植物族モンスター１体をゲームから除外する事で、
相手フィールド上に存在する守備表示モンスター１体を攻撃表示に

し、
このターンのエンドフェイズ時までその攻撃力を0にする。

「そして、シンクロ召喚時ブラック・ローズ・ドラゴンの効果を発動！フィールド上のカードをすべて破壊するぜ！！」
「私の…モンスターが…」
「まだ終わりじゃねぇぞ、俺は手札から装備魔法カード「D・D・R」を発動！！手札のハリケーンを墓地に送り、除外されているローン・ファイア・ブロッサムを特殊召喚してこのカードを装備！」

《D・D・R／D. D. R. ― Different Dimension Reincarnation》
装備魔法
手札を1枚捨てる。ゲームから除外されている自分のモンスター1体を選択して
攻撃表示でフィールド上に特殊召喚し、このカードを装備する。
このカードがフィールド上から離れた時、そのモンスターを破壊する。

「！？」
「そしてローン・ファイア・ブロッサムの効果発動。自身をリリースして、デッキから椿姫ティタニアルを特殊召喚。更に、手札から魔法カード「死者蘇生」を発動。対象は、俺の墓地にいるもう一体の椿姫ティタニアルだ！　さて、御坂ちゃん…この2体のダイレクトアタックが通れば、俺の勝ちだ！」
「嘘っ…」
「俺は2体のモンスターで、ダイレクトアタック！！」
「私の…負けね」

御坂美琴　ＬＰ３２００　→　０

「いや～楽しかったぜ、御坂ちゃん！ありがとなっ！」
「……」
「ん？…どうした、もしかして調子でも悪いのか？」
「……っやしいのよっ！！私だって、これでも決闘者よ！負ければ悔しいわ」
よく見れば、御坂ちゃんの目にはうっすら涙が滲んでいた。そうだったな、この世界じゃ向こうみたいにカードゲームは単なる遊びじゃない…本当に真剣な勝負なんだ。
「…ゴメン、そうだよな。ちょっと俺、空気読めて無かったかも」
「…まぁ別にいいけど、誘ったのは私だし」
「え～と…さぁ、それで、さっきの命令がどうとかの件なんだけど」
「うっ…いいわよ、何でも命令しなさいよ」
「本当に何でも？」
「…！？（コイツまさか、え…エッチなこと命令するつもりじゃ！？）」
「…ゴホン、じゃあ命令しまーす」
「ちょっ…ちょっとまっ！？」
「これからしばらくの間、衣食住の提供をお願いします」
「…へっ？」

第三話　ＶＳ御坂美琴　後編（後書き）

第三話投稿完了です。
なんとか初デュエル部分を乗り越えました。次からはとあるの別のキャラも出して行きたいな。

第四話　これは世に言うヒモという奴ですか？

いいえ、俺はその為の必需条件を満たしていません。
「ちょっとアンタ、さっきから何一人でブツブツ言ってるのよ？」
「ナンデモナイヨ、キニシナイデ」
さて、この世界に来てから最初のデュエルを何とか勝った俺だが、初戦から相手がジェネクス帝っての言うのはちょっとビビったね。まぁ御坂ちゃんがどれぐらいのレベルの決闘者かは分からないけど、この先のデュエルも色々と楽しめそうだ。
ちなみに、俺の使ったデッキは分類的には植物デッキなのだろうけど、明確にデッキ名を挙げるとすると、かなり長ったらしくなるので割合とさせてもらう。特徴は様々なギミックがあって、引き出しが多いこと。それと、そのギミック達がある程度他のギミックともシナジーしてることかな。
最初は、ただアマリリスを使いたくて作ったデッキだったけど、今では俺を支えてくれる強力なデッキの一つだ。当分はこのデッキを使っていこうと思う。
「それにしても、アンタのデッキって高価なカードが多いのね」
「そう…かな？」
「トリシューラといいブラック・ローズ・ドラゴンといいあのティタニアルって言うカードなんて、私は見たこともなかったわ。まぁ、カードの種類は今じゃ数え切れないくらいだし、私の知らないカードなんてまだまだ沢山あるでしょうけど」
ん～…どうもこの世界のカードのレアリティは掴みづらいな。シンクロ系のカード（特にドラゴン）が高そうなのは分かるけど、ティタに関しちゃあっちの世界じゃ５００円ぐらいあれば買える筈なんだけど。
「けど、いいのかい御坂ちゃん。命令しといてアレだけど、俺みたいな奴の面倒を見るなんて」

ちなみに、別の世界から来たって言うのは黙っておくことにした。
言った所で、信じてもらえないだろうし、なにより頭がおかしい奴と思われたらただでさえ豆腐メンタルな俺には耐えられそうに無い。
そういうこともあって、俺は自分の身の上を色々と捏造することにした。まぁ、ほとんどはその場の勢いで口走っちまっただけなんだが。
俺は、最強の決闘者を目指してとある片田舎から、旅に出たこと。
とりあえず最強になるまでは、家には帰るつもりはないと言うこと。
そんなこんなで旅してる内に、誰かに襲われ気が付いたらここにいたと言う事。
いやはや…自分で言っておいて、なんて電波な奴だとも思ったが、どうやら御坂ちゃんはそれで納得してしまったらしい。
「ん～なるほどね。だから結構強かったんだ。けど、一人で武者修行の旅に出るなんてアンタ結構やるじゃない♪」
とは御坂ちゃん談である。マジかよ…納得してもらえたのは良かったけどさ、もしかしてこの世界にはそんな奴がウヨウヨいんのかな？
「まっ…命令は命令だしね、当分は面倒見てあげるわよ。その代わり、毎日私とデュエルすること！これが条件よ」
「まぁ、俺としてはその条件も願ったり叶ったりだけどな。じゃあ、しばらくの間よろしく頼むよ。」
「ん、よろしくね」

その後、御坂ちゃんの要望もあり、近くのカードショップに足を運んだ俺達。そこで俺がまず俺が驚いたのはカードの値段の高さだ…スーパーレア以上の物は、ゼロが一つか二つ多すぎると思うんだけど。それ以外は、俺のいた世界と結構同じだな。カードの種類も、昔の物から、俺の世界でてた最近の物まで揃ってる。中には俺が見たことも無いようなカードまであるじゃないか。
それと、もう一つ驚いたのが禁止・制限ルールのことだ。どうやら

俺のもといた世界の最新版とまったく同じらしい。何だかんだでリークしてる部分もあるんだな。

「そういえば、御坂ちゃんは何のカードを買いに来たんだ？」

「そうね～…最新弾をチョコっとかな」

そういいながら、ＢＯＸを何個も手にとっていく御坂ちゃん。流石お嬢様…やっぱ相当の金持ちみたいだな。

「アンタもなんか買わないの？」

「そ～だなぁ…じゃあ試しに１パック買って見ようかな」

「随分控えめね…たった１パックじゃレアカードなんて絶対出ないわよ」

俺のいた世界じゃ、１パックに最低１枚はレアがはいってったんだけどなぁ～…まぁ大昔の頃は、レア１枚当てるのも一苦労だったけど。あ～…早すぎた埋葬当てるのに、どれだけ苦労したことか。

そして、開封タイム。結局御坂ちゃんは計６ＢＯＸほどお買い上げになったようだが、収穫は余り良くなかったようだ。なんて鬼畜封入率…wとりあえず、慰めとくか。

「ドンマイ、まぁそういう時もあるさ」

「うぅ…情けは無用よ、それよりアンタもパック開けなさいよ」

「はいはい…じゃあ早速行きますか」

と言うわけで、開封～っと…ん？このカード、なんか明らかに…

「嘘っ！？　それってかなりのレアカードなんじゃないの？」

ですよねー、俺はこんなカード見たこと無いけど、レアリティがウルトラだし、能力も結構やばそうだ。

「たった１パックで当てるなんて…どう考えても理不尽じゃない」

そう言って、ちょっと落ち込んじゃってる御坂ちゃん。まぁ気持ちは分かるよ、俺も昔、ダチに目の前でミラーフォースのシクレ当てられた時は、ちょっと殺意覚えたし♪

でも、これは流石に声かけ辛いな。

そんなこんなで、俺がしどろもどろしてると、後ろから妙に甲高い声が響いた。
「おっ姉様～！！」
「うわっ！？　くっ…黒子！？」
声に反応して、俺が後ろを振り返る前にその子はどうやら御坂ちゃんにダイブを決め込んでたようだ。なんて超加速…００９もビックリな速さだなぁ～…まぁアニキには劣るけど。
そしてこの子も見覚えがあるぞ、確か白井黒子…だったか。相当な百合っ子みたいだったけど…まぁそれは現状を見るにも明らかだよな。
「なんでアンタがここにいるのよ！？」
「だってぇ～、折角の非番ですのに、お姉様がお出かけしてるんですもの。だから、大体寄りそうな場所を片っ端から覗いてたんですわぁ～」
そう言いつつ、御坂ちゃんに抱きついたまま離れない白井ちゃん。
そして、今気づいたんだが俺マジ空気…けど声掛け辛い。俺マジチキン。
「ひっ…酷いです白井さん。私達を置いてくなんてぇ～」
「あ、でも本当に御坂さんいたっぽいね～。流石白井さん！」
そうこうしてる内に、また女の子が二人増えた。一人は頭に花を載せた小柄な子、もう一人は黒髪ロングヘアーの元気そうな子だ。恐らく、俺の記憶が間違ってなければ初春飾利ちゃんと佐天涙子ちゃんったと思う。ちなみに一言いわせてもらえるなら、佐天ちゃんが俺の好み直球ドストライクだ。
「初春さん達までっ…ちょっと黒子！いい加減にしなさい」
「んふふぅ～、嫌も嫌も好きの内ですわぁ～」
しかも、向こうはさらにヒートアップしてるし…
「あれ？そういえばこの人はどちら様？」
お～ぅ、やっと俺空気脱却か！？しかも佐天ちゃんから声を掛けてもらえたのはラッキーだ。

「えっと、まぁ御坂ちゃんのデュエル仲間って所かな」
「へぇ〜、貴方もデュエルするんですか。私達もやってるんですよ。ねっ初春！」
「えっと…はい、私はまだ始めて少ししか経ってないんですけど…」
「そっか、じゃあ君達ともいつかデュエルしてみたいな。ちなみに、俺の名前は関口達也。よろしく」
「あ、はい是非！私は佐天涙子っていいま〜す」
「初春飾利です。そっ…その時はお手柔らかに」

そんなこんなで二人と話してると、なにやら悲鳴のような声が聞こえてきた。どうやら向こうも決着が付いたようだ。
「ったく…いくらなんでも調子に乗りすぎよ」
「うぅ…おねーさまのイケズ！」
「お疲れさーん」
「アンタねぇ…見てないで少しは助けなさいよ！」
「見た感じ、先輩と後輩の仲睦まじいスキンシップに見えたんでな。邪魔したら悪いｋ」
「んなわけないでしょーがっ！！」
頼むからビリビリするのは止めてくれ…毎回三途の川が見えちまうよ。しかも、先ほどまで近くにいた初春ちゃんと佐天ちゃんがびみょーに距離を取ってる。巻き添えはゴメンってことだろーな。
「あはは…暴力反対！！」
そうやって俺が御坂ちゃんを宥めてると、なにやら視線を感じた。その方向を向いてみると、さっきまで倒れてた白井ちゃんが明らかに俺を睨んでいる。うん、しかもなんか殺意が籠ってる気がするのは俺の気のせい…じゃないよな〜
「おねーさま…この殿方はどちら様で？」
「へっ？…ああ、コイツはまぁ知り合いみたいなもんかな。さっき

会ったばっかだけど、デュエルに負けちゃってさ～。んで、行く宛が無いコイツの衣食住を当分私が面倒を見ることに…」
「なっ！？……衣食住の面倒を見る…？それはつまり…同棲！？」
「ちょっ…！？何勘違いしてるのよ！そんなわk」
「うわ～…中学生で同棲なんて、流石御坂さん。大人ですね！！」
「あわわ…」
ん？…なんかえらいことになってきた気がする。つか、よく考えれば俺もどうかしてたな。どう見ても年下の子に（ちなみに俺は今年で１６になる高校１年生だったりする）いきなり養ってくれだなんて。
でも他にアテも無かったし…この子達の住んでるのが、あの話にも出てくる「学園都市」なら、何処かに住めそうな場所がありそうだと思って言って見たんだが…
俺が思考の海に落ちてる間に、俺のすぐ真下に何かが刺さる音がした。気づいて下を向くと、なにやら金属の矢のような物が突き刺さってるではないか！
「…おねーさまに寄り付く毒虫は、私が全部払いのけますの」
「え～と…とりあえず落ち着け…なっ？」
ヤバイヤバイ！？リアルファイトで俺が勝てる可能性なんて皆無だぞ！！なんとか逃げ道は…ダメだっ佐天ちゃんや初春ちゃんは遠くで気の毒そうな顔を向けてるだけだし、御坂ちゃんもさっきの発言のショックか、なんか固まってる。
「俺はただの一般市民だぜ？それにケンカだって強くないし、一方的な弱いものイジメになること請け合いだ！」
「そんなの関係ありませんわぁ～、お姉様に手を出した時点で、貴方にそんなことを言う権利はないんですの」
あ～…駄目だこりゃ。俺の冒険は間違いなくここで終わった。拝啓お母様、異界の地で倒れる親不孝な息子をお許しください。
「あの～…白井さんその辺で、止めといた方がいいんじゃないですか？」

「そうですよ、それにお二人が真剣に愛し合ってるのなら邪魔するのは野暮と言うものです！」
おお、佐天ちゃんに初春ちゃんありがてぇ…けど勘違い乙。
「ぐぐっ…しかしこれでは私の気が収まりませんわっ！」
おっ…向こうもどうやら少し冷静になって来たみたいだな。今なら交渉の余地があるかも。
「えっとさぁ、ならこういうのはどうだ？俺とデュエルして、君が勝ったら俺は金輪際御坂ちゃんのそばには近づかないってのは。その代わり、俺が勝ったらこの件は黙認してもらう。どうやら、他の子達もやってるみたいだし、君もやってるんだろ？」
「なるほど…ケンカじゃ敵わないから、せめて自分の得意な土俵に持って行こうと言うわけですわね」
「ああ、そう考えてもらって構わないよ。デュエルなら、そこそこ自信があるからね」
「…いいでしょう、貴方のそのお誘いお受けしますわ。そして、その自信ごと打ち砕いて差し上げます！！」
よし、首の皮一枚繋がった。
じゃあ、本日2回目のデュエル…始めるとしますか！

第四話　これは世に言うヒモという奴ですか？（後書き）

四話目投稿完了。

次回は　ＶＳ黒子とのデュエルです。たぶんまた前　後に分かれるかな？

第五話　ＶＳ白井黒子　前編

「そういえば、君とは自己紹介がまだだったね。俺は関口達也、一つよろしく」
「私は白井黒子ですわ。出来れば、貴方と会うのはコレっきりにさせて欲しいものです」
ありゃまぁ…これは随分嫌われたね。
「ははっ…まぁ仕方ないか。んじゃ始めるぜ…」
「ええ」

「決闘（デュエル）！！」
「決闘（デュエル）！！」

関口達也　デッキ名　（植物デッキ？）
白井黒子　デッキ名　（？　？　？）

「先手は貴方に差し上げますわ。精々楽しませてくださいまし」
「そうかい…じゃあお言葉に甘えるかな。ドロー！！」
やれやれ…どんなデッキか知らないけど、随分自信たっぷりだな。
ここはゆっくり攻めていった方が良さそうだ。なら…
「俺は手札から、コアキメイル・グラヴィローズを召喚！」

《コアキメイル・グラヴィローズ／Ｋｏａ'ｋｉ　Ｍｅｉｒｕ　Ｇｒａｖｉｒｏｓｅ》
効果モンスター
星４／炎属性／植物族／攻１９００／守１３００
このカードのコントローラーは自分のエンドフェイズ毎に

手札から「コアキメイルの鋼核」1枚を墓地へ送るか、
手札の植物族モンスター1体を相手に見せる。
または、どちらも行わずにこのカードを破壊する。
自分のスタンバイフェイズ時に1度だけ、
自分のデッキからレベル3以下のモンスター1体を墓地へ送る事ができる。

「（あのモンスター…コアキメイルと言う事は、その専用デッキでしょうか…それとも維持コストの植物デッキ…まぁすぐに分かるでしょうけど）」
「更に、俺は場にカード2枚セット。ターンエンド前に、グラヴィローズの維持コストとして手札のフェニキシアン・クラスター・アマリリスを白井ちゃんに見せてターン終了だ」
「（なるほど、これで植物デッキの可能性が高くなりましたわ）」

「へぇ～…私、あんなモンスター始めてみました」
「初春はまだ始めたばっかだもんね～、コアキメイルは専用デッキを使ってる人は少ないけど、その一枚一枚に強い効果のモンスターがいるし、維持コストがああいう風に規定の種族を見せるだけってなのが多いから、ピンとかでデッキに入れてる人もいるんだよ」
「そうなんですか、勉強になります」
「本当…アイツのデッキ色んなカードが入ってるわね」
「そういえば御坂さん、関口さんとデュエルしたんですよね？」
「ええ、もう少しで勝てたんだけど。結局最後に逆転されちゃって…」
「そっかぁ～…御坂さんに勝つってことは、相当な実力者ってことですよね！私も早くデュエルしてみたい～」

「私のターン、ドローですの！（相手は伏せが2枚…そしてグラヴ

ィローズの効果からして、何か罠が仕掛けられてる可能性が高いですの。なら、最初にすべきことは…）私は、手札からライトロード・マジシャン　ライラを召喚ですの！」

《ライトロード・マジシャン　ライラ／Ｌｙｌａ，　Ｌｉｇｈｔｓ　ｗｏｒｎ　Ｓｏｒｃｅｒｅｓｓ》
効果モンスター
星４／光属性／魔法使い族／攻１７００／守　２００
自分フィールド上に表側攻撃表示で存在するこのカードを表側守備表示に変更し、
相手フィールド上の魔法または罠カード１枚を破壊する。
この効果を発動した場合、次の自分のターン終了時まで
このカードは表示形式を変更できない。
このカードが自分フィールド上に表側表示で存在する限り、
自分のエンドフェイズ毎に、自分のデッキの上からカードを３枚墓地に送る。

ライトロードデッキか…もしくは昔俺が作ってたアマリリスバーンみたいなライトロードのギミックのみを使用したデッキか…どちらにせよ、油断してたらやられそうだな。
「さらに、ライトロード・マジシャン　ライラの効果を発動しますの！表示形式を守備表示にして、貴方の伏せカードを一枚破壊させていただきますわ」
「っ！？」
次元幽閉がやられたか…だが、このターンに攻撃される可能性は低くなったな。
「やっぱり罠を仕掛けてましたわね…ですが、奈落の落とし穴も無いようですしこれで気兼ねなく使えますわ。私は手札から、魔法カード「ソーラー・エクスチェンジ」を発動！手札のライトロード・ウォリアー　ガロスを墓地に送り、カードを２枚ドロー、更にデッ

キの上からカードを2枚墓地に送りますの」

《ソーラー・エクスチェンジ／Ｓｏｌａｒ　Ｒｅｃｈａｒｇｅ》
通常魔法
手札から「ライトロード」と名のついたモンスターカード1枚を捨てて発動する。
自分のデッキからカードを2枚ドローし、その後デッキの上からカードを2枚墓地に送る。

「!?…なるほどね、ウォルフ狙いって訳か」
「まず1枚目…サイクロン。2枚目…ライトロード・モンク　エイリン…やれやれですわ。そう上手くはいかないものでわね」
「俺としちゃ、助かったがね」
「私はカードを1枚伏せて、ターンエンド前にライラの効果で、デッキの上からカードを3枚墓地に送りますの。送るカードは、ネクロ・ガードナー　死者転生　…っと出来ればもう少し早く欲しかった所ですが、ライトロード・ビースト　ウォルフ…この3枚ですわ。そして、ライトロード・ビースト　ウォルフが墓地に送られた時に効果発動。私のフィールド上に特殊召喚しますの!」

《ライトロード・ビースト　ウォルフ／Ｗｕｌｆ，　Ｌｉｇｈｔｓ　ｗｏｒｎ　Ｂｅａｓｔ》
効果モンスター
星4／光属性／獣戦士族／攻2100／守　300
このカードは通常召喚できない。
このカードがデッキから墓地に送られた時、このカードを自分フィールド上に特殊召喚する。

《ネクロ・ガードナー／Ｎｅｃｒｏ　Ｇａｒｄｎａ》
効果モンスター

星3／闇属性／戦士族／攻　６００／守１３００
自分の墓地に存在するこのカードをゲームから除外して発動する。
相手モンスターの攻撃を1度だけ無効にする。

「私はこれでターン終了ですわ」

現状
関口達也　　ＬＰ８０００　　手札3枚
フィールド上　　グラヴィローズ1体
カード1枚　　伏せ

白井黒子　　ＬＰ８０００　　手札4枚
フィールド上　　ライラ1体（守備）　ウォルフ1体　伏
せカード1枚

「今の所、白井さんが有利な展開で進んでますね」
「ん～…確かに墓地も溜まってきたし、ネクロ・ガードナーも落ちちゃったからねー。けど、私は関口さんも負けてないと思うよ？ここからグラヴィローズの効果で、巻き返してくるんじゃないかな」
「（確かに…アイツは「あの」カードを持ってるし、次の切り替えしで出してきたら黒子は一気にピンチになるわね）」
「でも、白井さんの墓地のライトロードの数は今2種類…あと2種類で「あの」カードの条件が揃いますよ」
「あ～…アレかぁ～。確かにアレが出たら関口さんが辛くなるね」
「まっ…今は二人のデュエルを楽しみましょ」

「俺のターン、ドロー！」
「その時、永続罠カード「王宮のお触れ」発動ですの！！」

《王宮のお触れ／Ｒｏｙａｌ　Ｄｅｃｒｅｅ》
永続罠
このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、
このカード以外のフィールド上の罠カードの効果を無効にする。

「！？…なるほど、そいつはキツイね。ライトロードには相性抜群のカードだもんな、けど俺もコアキメイル・グラヴィローズの効果を発動させてもらうぜ。デッキの中から、レベル３以下のモンスターを１体墓地に送る…俺が選ぶのは、グローアップ・バルブだ！」

《グローアップ・バルブ／Ｇｌｏｗ－Ｕｐ　Ｂｕｌｂ》
チューナー（効果モンスター）
星１／地属性／植物族／攻　１００／守　１００
自分のデッキの一番上のカードを墓地へ送り、
墓地に存在するこのカードを自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。
「グローアップ・バルブ」の効果はデュエル中に１度しか使用できない。

「さらに、墓地にいるグローアップ・バルブの効果発動！自分のデッキの１番上のカードを墓地へ送り、このカードを特殊召喚する。デッキトップのカードは、ギガプラント。これを墓地に送って、グローアップ・バルブを守備表示で特殊召喚！」

「おっ関口さん動き出しましたね～。チューナーを出したってことは、シンクロ召喚するんでしょうか？」
「たぶんね…それも飛びっきりの奴よ」
「？…御坂さん、何か心当たりがあるんですか？」
「まあね」

「そして、俺はキラー・トマトを手札から召喚！そしてこの3体でチューニング！！」
「レベル9シンクロ…それはまさか！？」
「へっ…コイツは食らうといてーぜ！シンクロ召喚！氷結界の龍トリシューラ！！」

《氷結界の龍　トリシューラ／Ｔｒｉｓｈｕｌａ，　Ｄｒａｇｏｎ　ｏｆ　ｔｈｅ　Ｉｃｅ　Ｂａｒｒｉｅｒ》
シンクロ・効果モンスター
星９／水属性／ドラゴン族／攻２７００／守２０００
チューナー＋チューナー以外のモンスター２体以上
このカードがシンクロ召喚に成功した時、
相手の手札・フィールド上・墓地のカードを
それぞれ１枚までゲームから除外する事ができる。

「あわわわ！？何かすごいモンスターが出てきましたよ！？」
「あれって…今存在する3匹の氷結界の龍の中でも最強の…」
「ええ、その分手に入れることは難しいし、場に出しづらいけどその効果は凄まじいわ」

「（これはマズイですわ！）私は墓地のネクロ・ガードナーの効果を発動しますの！このカードを除外して、次の貴方の攻撃を1度だけ無効化しますわ」
「うん、懸命な判断だね。じゃあトリシューラの効果を発動させてもらう。まずはフィールド上の王宮のお触れ、それから墓地にあるライトロード・モンク　エイリン、最後に白井ちゃんのこの手札のカードを除外してもらおう」
「っ…（ゾンビキャリアーが除外されてしまいましたわ）」

「う～ん…」
「ん～？どうしたの、初春」
「ネクロ・ガードナーの効果って、何時でも発動できるんですよね。なら、なんで白井さんは今のタイミングで効果を…除外対象に選ばれた時に、「チェーン」して効果を発動すればいいんじゃないですか？」
「う～い～は～る～♪　そっかそっかぁ～、初春も遂に「チェーン」なんて難しい用語も覚えるようになったんだね！師匠として嬉しいよ」
「むぅ…馬鹿にしないでください！これでも毎日勉強してるんですから」
「あはは～、ゴメンゴメン。でもねアレには理由があるんだよ」
「そう、トリシューラの効果である手札・フィールド・墓地のうち、どの箇所のどのカードから除外するかを決めるのは効果解決時だから、対象を取らない効果なのよ。だから効果発動時にしかできない「チェーン」だと先出しになっちゃうって訳。そのことを黒子も知ってるから、除外されるよりも、効果を使う方を選んだんでしょうね」
「あ～！御坂さん酷いです。私が説明しようと思ったのにぃ～！！」
「え…あ、ゴメンゴメン！」

「さて、それじゃあトリシューラでライラに攻撃！…と行きたい所だが、さっきのネクロ・ガードナーの効果で止められるな。トリシューラの攻撃は失敗に終わる。俺はこのままターンエンドだ」

「私のターン、ドローですの！　結構やりますわね関口さん、少し見直しましたわ。流石、お姉さまを倒しただけの事はあります」
「ん、やっと名前で呼んでくれたな白井ちゃん。しかも、褒めても

らえて光栄だよ」
「けど、私負けるつもりはありませんわ！私はフィールド上のライトロード・マジシャン　ライラをリリースして、ライトロード・エンジェル　ケルビムを召喚ですの！」

《ライトロード・エンジェル　ケルビム／Ｃｅｌｅｓｔｉａ，Ｌｉｇｈｔｓｗｏｒｎ　Ａｎｇｅｌ》
効果モンスター
星５／光属性／天使族／攻２３００／守　２００
このカードが「ライトロード」と名のついたモンスターを
生け贄にして生け贄召喚に成功した時、
デッキの上からカードを４枚墓地に送る事で
相手フィールド上のカードを２枚まで破壊する。

随分厄介なモンスターが出てきたな…しかもここからカードが四枚落ちたら、十分「あの」カード召喚条件を満たせる可能性が高い。

「そしてライトロード・エンジェル　ケルビムの効果を発動しますの。デッキの上からカードを４枚墓地に送ることで、貴方のフィールド上のカードを２枚破壊ですの！墓地に送るのは　オネスト、トラゴエディア、ライトロード・ハンター　ライコウ、ソーラ・エクスチェンジの四枚。そして、貴方のフィールド上の氷結界の龍トリシューラと、その伏せカードを破壊しますの！」
「くっ…罠カード発動！「サンダー・ブレイク」俺は、手札のフェニキシアン・クラスター・アマリリスを墓地に送ることで、白井ちゃんのフィールド上にいるライトロード・エンジェル　ケルビムを墓地に送るぜ」

《サンダー・ブレイク／Ｒａｉｇｅｋｉ　Ｂｒｅａｋ》

通常罠
手札を1枚捨て、フィールド上に存在するカード1枚を選択して発動する。
選択したカードを破壊する。

「っ…やっぱりタダではやられてくれませんわね。ですが、私はライトロード・ビースト　ウォルフで貴方にダイレクトアタックですの！」
「ぐっ…」

関口達也　　ＬＰ８０００　↓　６９００

「私はカードを1枚セットして、ターンエンドですわ」
いいねぇ…楽しくなってきた。ライトロードはパワーがあるからな、下手したら今のＬＰでも1ターンでゼロにされる可能性がある。墓地のライトロードの数も4種になってるし、ここからは「あの」カードも警戒しなきゃな…ともあれ、このダメージの借りはさっさと返させてもらうぜ。

現状

関口達也　　ＬＰ８０００　↓　６９００　　手札3枚
フィールド上　　ナシ

白井黒子　　ＬＰ８０００　　手札2枚
フィールド上　　ウォルフ1体　　伏せカード1枚

第五話　ＶＳ白井黒子　前編（後書き）

第五話投稿完了です。
さて、ここで少し「チェーン」ついて補足しておきます。

「チェーン」とは、魔法や罠カードなどの応酬をスムーズに解決するためのシステムで、１枚のカードの発動に対応して別のカードを発動させる行為のことをいいます。
カードが効果を発動した時、相手プレイヤーはそれに対して、必ずチェーンするチャンスを与えられます。
相手がチェーンをした場合、今度は自分がチェーンをすることが可能になります。
相手がチェーンしなかった場合は、自分のカードを自分自身でチェーンすることも可能です。
こうしてチェーンは可能な限り積み重ねることができ、お互いにチェーンをしなくなった時、最後にチェーン発動されたカードから順に効果の処理をしていきます。

さてさて、次回は恐らく「ジャッジメント」登場ですの♪

第六話　ＶＳ白井黒子　後編

現状

関口達也	ＬＰ８０００　→　６９００	手札３枚
フィールド上	ナシ	
白井黒子	ＬＰ８０００	手札２枚
フィールド上	ウォルフ１体	伏せカード１枚

「俺のターン、ドロー…！」
「おや、どうされました？もしかして、手札事故ですの？」

このドロー…おそらく分岐点だな。流れに身を任せて行くのは容易いが…今の流れだと、相手に引き寄せられる気がする。なにより、次のドローでアレを引かれたら今の俺じゃ対策が取れない。けど、ここで手を拱いてるぐらいなら一発賭けてみた方が…何倍もいい。どっちにせよ、今の俺の手札には状況を打破できるカードは少ないしな。

「関口さん、何か考えこんでるみたいですね」
「そりゃ～、すでに「あの」カードの召喚条件は満たされちゃったしね。何か対策カードが無いと、今の関口さんのＬＰじゃすぐに終わっちゃうよ」
「ジャッジメント…まぁ黒子にピッタリのカードよね」

「俺は、モンスターを1体セット、さらにカードを2枚セットしターンエンド前、墓地のフェニキシアン・クラスター・アマリリスの効果発動。墓地のギガプラントを除外することで、俺のフィールド上に守備表示で特殊召喚する！これでターンエンドだ」

「私のターン、ドローですの！（まだあのカードは引けませんわね…けど、気になりますわね。何故、今になってカードを2枚セットしたのか。単に「あの」カードを警戒してメタ要素を強めた可能性もありますが、2枚という所がどうも引っかかりますわ。あのカードにとって、怖いのは神の警告や奈落の落とし穴といった召喚時に発動される罠のみ…逆を言えば、他のタイプのカードなら大抵は対処出来ますの。となれば、最悪あの2枚の内1枚が召喚時用の迎撃罠で、もう1枚が私の王宮のお触れなどを警戒したカウンター罠という可能性も…だとしたら、一刻も早くその迎撃罠を使ってもらう必要がありますわ）私は、手札から魔法カード「おろかな埋葬を」発動しますの！対象は私のデッキに眠る、ライトロード・ビースト　ウォルフ。そしてウォルフの効果で、私のフィールド上に特殊召喚されますの」

「2体目のウォルフか…なるほど、そいつは厄介だ。２１００の打点力はハンパじゃないねえ♪」

「（罠を使ってこない？と言う事は、ブラフかまたは温存するということでしょうか）私は、ライトロード・ビースト　ウォルフで貴方の伏せモンスターに攻撃しますの！」

「ＯＫ、じゃあ伏せカードをリバースするぜ。伏せカードはメタモルポット、守備力は６００だから普通に破壊されるな…だが」

「メタモルポットですって？正気ですの？私に手札を補充されたらどうなるか、分かってるでしょうに」

《メタモルポット／Ｍｏｒｐｈｉｎｇ　Ｊａｒ》
効果モンスター
星２／地属性／岩石族／攻　７００／守　６００
リバース：お互いの手札を全て捨てる。
その後、お互いはそれぞれ自分のデッキからカードを５枚ドローする。

「まっ…それは分かるけどな。だけどアドは稼がせてもらった、知ってるのと知らないの差はでかいぜ。メタモルポットのリバース効果発動！お互いのプレイヤーは手札をすべて捨て、デッキからカードを５枚ドローする。ちなみに俺の手札のカードはクリッターだ。カードを５枚ドローするぜ」
「くっ…私の手札のカードは、冥府の使者ゴーズ、ソーラ・エクスチェンジ、サイバー・ドラゴンですの（…まんまとしてやられましたわ。つまりあの伏せ２枚はメタモルポットの効果で捨てたくないカードだったんですのね）私もカードを５枚ドローしますの…！関口さん、貴方の賭けは失敗のようですわよ？」
「っ…？どうかな、そいつはまだやってみないと分からないだろ？」
「だったら、今すぐ後悔させてあげますの…まずは、もう１体のウォルフでフェニキシアン・クラスター・アマリリスを攻撃！」
「ちっ…だが、こいつの効果で、ＬＰを８００削らせてもらうぜ白井ちゃん！」

白井黒子　　ＬＰ８０００　→　７２００

「さあ、覚悟は宜しいですの？今、私の墓地のライトロードの種類は４種類…私は手札から、裁きの龍（ジャッジメント・ドラグーン）を特殊召喚しますの！」

《裁きの龍／Ｊｕｄｇｍｅｎｔ　Ｄｒａｇｏｎ》

効果モンスター
星８／光属性／ドラゴン族／攻３０００／守２６００
このカードは通常召喚できない。
自分の墓地に「ライトロード」と名のついた
モンスターが４種類以上存在する場合のみ特殊召喚する事ができる。
１０００ライフポイントを払う事で、
このカード以外のフィールド上に存在するカードを全て破壊する。
このカードが自分フィールド上に表側表示で存在する限り、
自分のエンドフェイズ毎に、自分のデッキの上からカードを４枚墓地へ送る。

「遂に出てきましたね、裁きの龍（ジャッジメント・ドラグーン）」
「しかも白井さんノリノリだぁ～。こりゃ、勝負決まっちゃったかな？」
「まぁ確かに、あのカードを一度出されると、除去するのはちょっと難しいわね。けど、アイツもそう簡単にやられるような奴じゃないわよ」
「あれあれぇ～…御坂さん、妙に関口さんの肩を持ちますね。やっぱり付き合ってたり？」
「なっ!?そっ…そんなわけないわよ!!だから、今日会ったばかりなんだって!!」
「またまたぁ～♪　隠さなくてもいいですよ！」
「だ～か～ら～、信じてよ～！」

ちっ…ついに来やがったか!?こりゃ、メインプランはボツだな…だけど…
「さあ、ジャッジメント（審判の時）ですの！私は裁きの龍（ジャッジメント・ドラグーン）の効果を発動！ＬＰ

１０００を払うことで、このカード以外のフィールド上に存在するカードをすべて破壊しますわ！」

白井黒子　　ＬＰ７２００　↓　６２００
「っ…永続罠カード発動「リビングデットの呼び声」！このカードで墓地にいるクリッターを蘇生するぜ！」

《リビングデッドの呼び声／Ｃａｌｌ　ｏｆ　ｔｈｅ　Ｈａｕｎｔｅｄ》
永続罠
自分の墓地からモンスター1体を選択し、攻撃表示で特殊召喚する。このカードがフィールド上に存在しなくなった時、そのモンスターを破壊する。
そのモンスターが破壊された時このカードを破壊する。

《クリッター／Ｓａｎｇａｎ》
効果モンスター
星３／闇属性／悪魔族／攻１０００／守　６００
このカードがフィールド上から墓地へ送られた時、自分のデッキから攻撃力１５００以下のモンスター1体を手札に加える。

「そして、俺のフィールド上のカードはすべて破壊される。もう一つの伏せカードはハリケーンだ。だが、クリッターの効果発動。この効果で、俺はデッキからローンファイア・ブロッサムを手札に加えるぜ」
「っ！？…ただの悪あがきですの。（なるほど…あの伏せは裁きの龍（ラグーン）も予期してのことだったんですね。これはしくじりましたわ…）
私のフィールド上のライトロード・ビースト　ウォルフ2体、そして伏せカードの月の書も破壊され墓地に送られますの。私は、ターン（ジャッジメント・ド

ンエンド前裁き(ジャッジメント・ドラグーン)の龍の効果で、デッキの上からカードを4枚墓地に送りますの。送るカードはライトロード・ウォリアー　ガロス、サイクロン、ハリケーン、裁き(ジャッジメント・ドラグーン)の龍ですわ。これでターンエンドですの」

現状

関口達也	ＬＰ６９００	手札６枚
フィールド上	ナシ	
白井黒子	ＬＰ８０００　→　６２００	手札４枚
フィールド上	裁きの龍１体	

「俺のターン、ドロー！いやはや、手札が有り余るのは嬉しい限りだね。7枚になるのなんてかなり久しぶりかもな」

「けれど、その手札もこの裁き(ジャッジメント・ドラグーン)の龍を倒せなければ意味がありませんわよ？」

「まぁね、けどそれ白井ちゃんも同じじゃないかな？そろそろ、デッキの枚数ヤバイんじゃない？」

「！？…ご心配は無用ですわ、早々にケリをつけますので」

「うん、そうだよね～。ライトロード…特に裁き(ジャッジメント・ドラグーン)の龍は短期決戦用のカードだしね、勝負は長引かせたくないよね…」

まぁ、長引かせたくないのは俺も同じだけどな。下手なカードを伏せれば、あいつの効果で全部破壊される。そして、その後ダイレクト食らえばすぐに俺のＬＰなんてゼロだ。だから、手札を少し豪勢に使ってでも、ここは勝ちに行く場面・・！

「俺は、手札から「おろかな埋葬」を発動！墓地に送る対象は、スポーアだ！更に、手札からローンファイア・ブロッサムを召喚！自身をリリースして効果を発動するよ。デッキから特殊召喚するのは

同じローンファイア・ブロッサム。そしてコイツの効果も発動！自身をリリースして、特殊召喚するのはキラー・トマト！そして、さっき墓地に送ったスポーアの効果を発動！墓地にあるローンファイア・ブロッサムを除外して、俺のフィールド上に特殊召喚！そして、スポーアのレベルが、ローン・ファイア・ブロッサムのレベル分上昇、レベル４になる！」

《スポーア／Ｓｐｏｒｅ》
チューナー（効果モンスター）
星１／風属性／植物族／攻　４００／守　８００
このカードが墓地に存在する場合、
このカード以外の自分の墓地に存在する
植物族モンスター１体をゲームから除外して発動する。
このカードを墓地から特殊召喚し、
この効果を発動するために除外したモンスターのレベル分だけ
このカードのレベルを上げる。
「スポーア」の効果はデュエル中に１度しか使用できない。

「さぁ、準備は整ったぜ。俺はこの２体でチューニング！こい、シンクロ召喚ギガンテック・ファイター！！」

「あのカードは、御坂さんがよく使ってるカードですよね？」
「ええ、戦闘で破壊されても、墓地にある戦士族をその場で蘇生されることが出来るモンスターよ。自分も対象に含まれてるから、実質戦闘じゃ死なないモンスターね」
「でも、攻撃力２８００ですよね～？裁きの龍（ジャッジメント・ドラグーン）の攻撃力は３０００ですよ。関口さん…一体どうするつもりなんだろ？」
「…！そうか、そういうことね」
「？御坂さん何か分かったんですか～？」

「アイツ…私と同じことをする気だわ」
「？」

「何かと思えば、ギガンテック・ファイターですの？そのモンスターでは裁きの龍（ジャッジメント・ドラグーン）は倒せませんわよ」
フッ…どうやら白井ちゃんは、気づいてないみたいだな…この様子じゃ向こうの三人も…いや、御坂ちゃんは気づいてるっぽいな。
「それはどうかな？こいつには、蘇生能力の他にもう一つ能力があるのを忘れてないか？」
「…！？攻撃力アップ…まさか」
「そう、こいつのもう一つの効果。このカードの攻撃力は墓地に存在する戦士族モンスターの数×１００ポイントアップする。これは、相手の墓地の戦士族の数もカウントされる。確か、白井ちゃんの墓地には、ライトロード・ウォリアー　ガロスが2枚あったよな？俺の墓地に戦士族はいないが…これで攻撃力は３０００！裁きの龍（ジャッジメント・ドラグーン）に並んだぜ！」
「そんな…！？」
「そして俺は、ギガンテック・ファイターで裁きの龍（ジャッジメント・ドラグーン）に攻撃！相打ちになるが、ギガンテック・ファイターの効果で自身を蘇生し、バトルを続行するぜ！白井ちゃんにダイレクトアタック！」
「あぐっ…」

白井黒子　　ＬＰ６２００　→　３２００

「俺はターンエンド前、墓地にあるフェニキシアン・クラスター・アマリリスの効果を発動。墓地にあるグローアップ・バルブを除外して、俺のフィールド上に守備表示で特殊召喚するぜ。ターンエンドだ」

「（私の裁きの龍（ジャッジメント・ドラグーン）がっ…この借りは必ず…）私のターン、ドローですの…！！私は手札からライトロード・ウォリアー　ガロスを召喚しますわ。そしてガロスでフェニキシアン・クラスター・アマリリスに攻撃ですの！」

「…ＯＫだ、その代わり白井ちゃんには８００ポイントのダメージを受けてもらう」

白井黒子　　ＬＰ３２００　↓　２４００

「そして、カードを1枚伏せターンエンドですの」

現状

関口達也　　ＬＰ６９００　　手札５枚
フィールド上　　ギガンテック１体
せカードナシ　　伏

白井黒子　　ＬＰ２４００　　手札３枚
フィールド上　　ガロス１体　　伏せ
カード１枚

ガロス1体だけ…しかも攻撃表示だと？おかしい。いくらアマリリスに攻撃して欲しくなかったとしても、いささか無防備すぎる。アイツはさっき墓地に落ちてたし、制限カードだからもう無いはずだけど…いや、待てよ。あの伏せ…もしかして。

「俺のターン、ドロー！…なるほどな、いい保険だ。」

「？何をブツブツおっしゃってますの？」

「なんでもないよ、気にしないで。俺は手札から永続魔法カード「増草剤」を発動！墓地にいるローンファイア・ブロッサムを特殊召

喚するよ。」

《増草剤／Ｍｉｒａｃｌｅ　Ｆｅｒｔｉｌｉｚｅｒ》
永続魔法
１ターンに１度、自分の墓地に存在する植物族モンスター１体を選択して特殊召喚する事ができる。
この効果でモンスターを特殊召喚するターン、自分は通常召喚できない。
この効果で特殊召喚したモンスターがフィールド上から離れた時、このカードを破壊する。

「さらに、ローンファイアブロッサムの効果を発動！自身をリリースしてデッキから植物モンスターを１体特殊召喚する…選ぶのはこのカードだ。待たせたな、俺の切り札！椿姫（つばき）ティタニアル特殊召喚！」

「うぉー！？何か私も見たこともないモンスターが出てきましたよ！？」
「すごく強そうなモンスターですね…しかも攻撃力２８００…」
「それだけじゃないわよ…あのモンスター。私もアイツにやられたんだから」

「俺のフィールド上には上級モンスターが2体。こいつらの攻撃が通れば、俺の勝ちだぜ白井ちゃん」
「さて…それはどうでしょうか？」
「じゃあ、試してみようか！俺のバトルフェイズ！！」
「その時、罠カード「光の召集」を発動ですの！」
「…！」

《光の召集／Ｂｅｃｋｏｎｉｎｇ　Ｌｉｇｈｔ》
通常罠
自分の手札を全て墓地へ捨てる。
その後、捨てた枚数分だけ自分の墓地に存在する
光属性モンスターを手札に加える。

「私はこのカードの効果で、手札をすべて墓地に送り、その枚数だけ私の墓地に存在する光属性モンスターを手札に加えますの。私の手札のカードは、ライトロード・ビースト　ウォルフ、ライトロード・マジシャン　ライラ、そして王宮の弾圧。そして手札に持ってくるカードは裁きの龍2枚と、オネストですわ！」
「なるほど…それでガロスを攻撃表示…ね」
「ええ、そういうことですわ。どうしますか？貴方の残りＬＰは６９００でしたわね？このまま攻撃したら、私はオネストで迎撃、貴方は１８５０のＬＰを失う。攻撃しなくても、私の手札にオネストが残り、次のターン、裁きの龍の効果ですべてを吹き飛ばし、その後でもう1体の裁きの龍とオネストを場に出してすべてのモンスター攻撃で、貴方のＬＰはゼロですのよ」
「だな…けど、そいつは見えてたぜ！保険ってのはこういうことさ！！俺は手札から速攻魔法カード「月の書」を発動！ライトロード・ウォリアー　ガロスを裏側守備表示にする！」
「なっ…月の書ですって！？（この方…私の手の内を全部読んでたんですの！？）」
「じゃあ改めて攻撃だ、ギガンテック・ファイターでガロスを攻撃…そして、椿姫ティタニアルで白井ちゃんにダイレクトアタック！！」
「そんな…嘘ですわっ！」

白井黒子　　ＬＰ２４００　→　０

「俺の…勝ちだ」
俺が、勝利の余韻に浸ってると、向こうから3人がこっちに駆け寄ってきた。
「いや～、いいデュエルでしたね。関口さんとますますデュエルしてみたくなっちゃいました！」
「御坂さんに続いて、白井さんにまで勝っちゃうなんて関口さんすごいです！」
「いや～…結構ギリギリだったけどね」
笑顔で声をかけて来る、佐天ちゃんと初春ちゃんと会話しつつ白井ちゃんの方を見ると、御坂ちゃんがそばに駆け寄っていた。どうやら慰めている様だ。
まぁ、何はともあれ。これである程度収まってくれればいいんだけど…っと、そういえば、デュエルの方で忘れてたけど、さっき当たったレアカードどうしようかな?俺のデッキにはあんまり合いそうにないけど…まぁトレ用ってことで持っとけばいいか。
それにしても、この世界は俺をすごくワクワクさせてくれる…本当、改めて神様に感謝しないとな。
俺はそう思いつつ、とりあえず白井ちゃんに声を掛けるべく二人と共に白井ちゃんのもとに向かった。

とりあえず収穫
この世界での衣食住（？）
ＵＮＫＮＯＷＮ　カード　１枚

第六話　ＶＳ白井黒子　後編（後書き）

さっそくですがすみません。皆様に謝らなければいけないことがあります。
前回の　ＶＳ白井黒子　前編で私の大それた勘違いが見つかり、その部分を少し修正させていただきました。
本当にすみませんでした。

第七話　決闘者の朝は早い

――――学園都市内　某マンション――――　ＡＭ５：００

俺は、目覚ましの音で目を覚ました。この世界に来てから、丁度２週間ほど経った。

あの後、御坂ちゃんが上手く取り計らってくれたおかげで、俺は学園都市内に入ることが出来たわけだが（その後、出入りするためのＩＤも御坂ちゃんに用意してもらった）いや～驚いたね。アニメを多少見てたから、すごいのは分かってたけどちょっと想像以上だった。超能力が普通に日常として存在する世界、見るものすべてが新鮮だった。ただ、人口のほとんどが学生と言うこともあり、ここでも決闘者（デュエリスト）はかなり多いようだ。

俺は、最初に来た日と２日目は御坂ちゃんに予約してもらったホテルに泊まり、次の日に学園都市内のカードショップに向かった。この品揃えは、童実野町にあったカードショップよりは数段劣っていたが、目的はカード買うことでないので問題なし、寧ろ逆だ。

俺はここで、余っていたりいらないレアカードを少し売ることにした。驚いたのがその買取価格で、派手に遊んでも当分金には困らないだろう程の金額になった。おそらく、何故か大量に持ってて余っていたスターダスト・ドラゴンとレッド・デーモンズ・ドラゴンが決め手だったんだろう。

これにより、ある程度の金が手に入った俺は、とあるマンションの１室を購入。そこそこ値がはったけど、広くて部屋も多く申し分ない。ここをとりあえずの拠点とすることにしたのが、丁度ここに来て３日目のことだ。

そのことを、御坂ちゃん達に報告した所その日の内にみんなで遊びに来て、ちょっとしたパーティを開いてもらった。そこまではいい、寧ろ嬉しかったし御坂ちゃん達には色々よくして貰ったから感謝している。ただ、それからと言うもの彼女らは度々現れては、デュエルをしたり騒いだりで挙句泊まっていくことまであるのだ。

流石にこれはどうかと思うのだが、そこはここが学園都市というのがあるのだろう。ここには親がいないからみんな一人暮らしだろう、だが、自分達のいる寮では色々と規則やらなんやらで、窮屈なわけだ。そういった部分もある中で、俺の住んでるマンションはそういった柵に囚われることも無く、知り合いと寛げる一種の秘密基地みたいなものとして認識されているらしい。

しかし、流石に泊まるとなると寮内などでバレれば問題となるだろうと思うわけなのだが、そこは学園都市ならではで、そういうのを上手く誤魔化せる能力者に依頼してるっぽいことを、前に御坂ちゃんが仄めかしていた。能力者ってホントスゲーな。

しっかし…いくら秘密基地感覚とはいえ、男の住んでる場所に普通に泊まってくってのはどうなんだろうな?まっ…その分そっち方面では信用されているってことなのだろう、今後とも彼女達のその信頼を裏切らないようにしないとな。

さて、そんなこんなで住居を確保した俺だが、４日目からは学園都市内にある様々なカードショップを見て回って、情報収集をすることにした。

どの店も、品揃えは似たり寄ったりだったが、その中で俺の目を引くものがあった。店舗ごとの大会である。参加費がかなり高いものが多かったが、その理由もすぐに氷解した。優勝者には賞金が出るのである。しかも、限定カードの特典付きだ。

そうと決まれば話は早い、その日から俺は片っ端から店舗大会に出場し、賞金をいただいて回った。学園都市内でのデッキの環境や流行も分かり、一石二鳥だと思ったのだが。どうも相手が弱すぎる。毎回大会にはかなりの人数が参加してくるのだが、その大半は猪突猛進型のビートダウンデッキで、少しメタれば簡単に勝てる。中にはそこそこな奴らもいたが、これなら御坂ちゃんや白井ちゃんの方がよっぽど強いだろう。

どうも学園都市の強い決闘者は、あまりこういった大会には出てこないみたいだな。

そんな感じで、今日まで経ったわけだが最近色々と物が増えてきたので、今日は部屋の整理とデッキ調整に時間を取る事にした。

とりあえず、まずは朝食の準備だ。こう見えて俺は、家事スキルが少し高い。親が共働きなのもあり、しかも長男だった俺は、親の帰りが遅い時妹や弟の食事を作ったり、洗濯や掃除などもよくしていた。

まさかこんな形で一人暮らしをすることになり、そのスキルがいかんなく発揮される日がこようとは夢にも思わなかったが。

そうこうしてる内に朝食が完成。適当にテレビを付けつつ、２０分ほど食事を楽しんだ。

ＡＭ７：００

そして、そのまま午前中は部屋の整理。ＰＣや冷蔵庫、テレビなどの家電用品はすでに購入済みだがその内クーラなども買っといた方がよさそうだな。他に必要な物は…っと。

それにしても、本当に物が増えたな…中には御坂ちゃん達の私物らしき物もある、彼女達が泊まる時用に当てている部屋が２部屋あるのだが、そっちの方はもっとすごいことになってそうだ。まぁ、勝

手に入るのも気が引けるし、彼女達が来た時に見せてもらえばいいだろう。

ＰＭ１２：００

昼食を挟んで、午後からはデッキ調整とした。
とりあえず調整対象は、この植物デッキかな…どうもソーン・ウォールが最近重くて仕方がない。
この際今2枚入れてるこいつを抜いて、何か他のカードを試してみるか…。ここではまだ使われたこと無いけど、「スターライト・ロード」されたら目も当てられないしな。
「スターライト・ロード」と言えば、ここに来てまだＢＦに当たったこと無いな…あれだけ強いデッキだ。結構流行るだろうに…まぁ大方、パーツが有り得ないほど高いとかだろうが。
おっと…少し議題がズレたな。さて、コイツを外すとしてなにか候補はあるかな…奈落や神警ってのもありだろうけど、このデッキには入れる気がしないんだよなぁ…何故か。
となるとモンスター関連を強化するか…けど、モンスター増やすと事故率が上がるし…ちなみに、俺のガチデッキのモンスター総数は１２枚。デッキ４０枚の内、２８枚は魔法・罠である。
時々、こんな構成で回るのかと聞かれるが実際はよく回る。まぁ、サーチカードなんかも多めに入ってるしな。

そうこう悩んでいると、玄関のチャイムが鳴る音がした。時計を見たらすでに午後4時を回っていた。どうやら、ちょっとのつもりがかなり考え込んでいたらしい。
俺は急いでカードを片付け、玄関に出た。
「やぁ御坂ちゃん、白井ちゃんいらっしゃい」
「ん～、お邪魔するわ。それと、ちゃん付けはやめてっていってる

でしょ、なんかこそばゆいのよ」
「どうも、お邪魔しますわ」
二人とも、学校を終えて寛ぎに来たようだ。まぁ最近ではよくある光景なんで、俺も慣れて来たけどな。

「今日は佐天ちゃんと初春ちゃんも来るの？」
「ええ、恐らくは。今日は私も初春もジャッジメントの仕事は非番ですし、その内来るでしょう」
「それより、早速デュエルよ！今日こそアンタをボコボコにしてやるんだからっ！」
「あ～…わりぃ、今デッキ調整の最中なんだ。だからちょい待ってくれ」
そんな感じで、御坂ちゃんをあしらいつつ、二人を中に入れる。その後、デッキを調整して御坂ちゃんとデュエル。結果は、まぁ俺の勝ちだった。帝とはデッキ相性がいいからな。
「そういえば、最近随分と店舗大会を総なめにしてるようですね」
と、白井ちゃんが俺に声をかけてきた。最近ではこうやって普通に接してくれるようになったのは嬉しいな。最初は、殺されるかとも思ったが。
「ああ、ちょっとした賞金稼ぎみたいな感覚でね。この辺のデッキの流行も知りたかったし」
「そうですか…けど、あんまり派手に動かない方がいいですわよ。あらぬ所に目を付けられる可能性がありますし」
…？どういうことだろう。もしかして、この学園都市にも「グールズ」見たいな遊戯王の裏の組織があるのだろうか？
「ん、白井ちゃんが俺のこと心配してくれるのは嬉しいな」
「わっ…私は別に、そのようなつもりでは…」
「うぅ…どうして勝てないのかしら…」

PM17：30

「こんちは～！また遊びに来ちゃいましたぁ～」
「えっと…お邪魔します」
「は～い、佐天ちゃんに初春ちゃんいらっしゃい」
そして、二人とも到着。相変わらず元気だな～佐天ちゃんは。
そういえば、この知り合いの中で佐天ちゃんのメインデッキとは未だに戦ったことが無いのである。本人曰く
「関口さんとは、何か大きな舞台で心置きなく勝負したいのでっ！」
とのことらしい。まぁその様な時があるとすれば、俺もメインデッキを使い、本気で勝負することになるだろう。

その後、5人で色々な話をしながら時を過ごし、俺は全員分の夕食を用意。みんな美味しそうに食べてくれるから、実に作り甲斐があるってもんだ。
「そうだ、ちょっと聞きたかったんだけど、学園都市で一番デュエルが強い奴って誰なの？」
そんな食事の中、俺がふと話題を振って見たのだが、明らかに御坂ちゃんの表情が曇った。何やら地雷でも踏んじまったか？
「…そうね、多分第1位の一方通行じゃないかしら」
ああ…そういうことか、あのセロリ君は能力だけじゃなく、デュエルでも1位なのか。ん？…と言う事は、御坂ちゃんはデュエリストとしても学園都市第3位なのかな。しかし、アイツと御坂ちゃんには色々因縁があった筈だ。
「あ～…なんか悪い事聞いちまったかな？ゴメン…御坂」
「いいわよ、別にアンタが悪いわけじゃないし」
場に重い空気が立ち込める。その空気を変えたのは、佐天ちゃんの一言だった。
「そーいえば、今関口さん。御坂さんのこと、普通に苗字で呼んで

ましたよね？…みんなにはちゃん付けなのに。もしかして、お二人の間で何か心境の変化が？？」

そう、この一言が切欠だった。突如、俺に向かって明らかな殺気が放たれる。相手はもちろん分かっている、白井ちゃんだ。

「ほ～ぅ…今のは聞き捨てなりませんわね。関口さん、少しお話を聞かせていただきましょうか」

「いやいやいや！？落ち着けよ！！第一にさっき、御坂がちゃん付けするなって言ったとき、お前もいただろーが！？」

「問答無用！！」

その後、俺の意識はブラックアウトした。何があったのかは、考えたくも無い。

第七話　決闘者の朝は早い（後書き）

第七話投稿完了です。

今回は、日常系の話とさせていただきました。
ちなみに、関口君のＩＤ等は美琴ちゃんが色々能力で弄くって作った違法物です。

第八話　あれ？コレってもしかして死亡フラグですか？

よ～し、今日もバッチリだ！
ここは、学園都市内のとあるカードショップだ。今日も何時ものように大会に出て、賞金と限定カードをいただいてきた。ちなみに、今日は趣向を変えて別デッキで戦っている。
「しかしコイツが珍しがられるとはな～…中にはかなり舐めてかかって来てる奴もいたし。まぁあっちの世界でもあんまり使ってる奴いなかったけどさ」
そんなことを思いつつ、この後どうするか考えていると、客の会話が聞こえてきた。

「なぁ、聞いたか？近々かなりデカい大会が開かれるらしいぜ」
「ああ、聞いたよその噂。なんでも、デュエルモンスターズを作った人物が主催者らしいな」
「マジかよ？それは聞いてなかったけど」
「しかも、その大会に出れるのは、かなり強いデュエリストだけって噂だ。なんでも、向こうから直々に招待状が送られてくるらしい」
「そっかぁ～…それじゃあ俺達には出るのは無理そうだな」

創始者直々の大会…もしかしてペガサスか？だとしたら、開かれる大会は決闘王国だろうな…。
だとしたら、ぜひ参加したいところだけど招待状を貰うにはもう少しアピールしねえとな。もっと大きな大会で優勝するとか…場所も重要だ、たとえば…童実野町とかな？
あそこなら、もしかしたら伝説のデュエリストであるアイツや凡骨君なんかともデュエルできるかもな。遊戯王読んでて、いつかガチ

でデュエルしてみてぇ～ってずっと思ってたんだよな。
なんにせよ、ここにはもう他にいい情報はなさそうだ。さっさと移動するかね。

「さて、ここからどうするかね～。とりあえずはさっき手に入った賞金で、たまには豪勢なとこでメシを食うってのも悪くは無いよな」
そんなことを考えてると、前方にすんごい見覚えのある人物が見えた。白い髪に赤い瞳、そしてあのいかにもな鋭い目付き…学園都市最強のレベル5、一方通行こととセロリ君です。本当にありがとうございました。
「とりあえず、逃げるか。もし粗相があってアレの逆鱗に触れたら死刑確定だ。別に俺は死が怖い訳じゃない。死にたくないといってるんだ（混乱）」
「…オイ」
ヒィィ！？何かテンパってる間に声かけられちゃったんですけど？？落ち着け俺…うろたえるんじゃあないッ！決闘者はうろたえないッ！！
「…なんだよ？俺に何か用かい？」
とりあえず、精一杯の強がりで返す俺。顔に出てないことを祈るが、内心はもはやボドボドですよ。
「お前ェ…決闘者だよなァ…さっきカードショップから出てきたしよォ」
「ああ…そんなことを聞いてくるってことは、君も？」
「まァな」
今の所は、別段セロリ君から殺気のようなものは感じない。こっちとしては、ホっとしたが何で声をかけられたんだろう？
「で、俺に何か用か？」
「風の噂で最近この編のカードショップの店舗大会を荒らしまわってる奴がいるって聞いたンでなァ～、お前ェ…なンか知らねェか？」

俺オワタ＼（＾ｏ＾）／　　荒らしてるっていうよりは、総なめにしてるだけだけど、見方によってはそう取る奴もいるよね。嗚呼…きっと白井ちゃんがこの前言ってたことはこういうことだったんだな～。

ありがとう白井ちゃん、本当に心配してくれてたんだね。

確実に立ちつつある死亡フラグ…しかしまだ回避は可能かもしれん。

ここは一つ粘ってみよう。

「君、そいつにあったらどうするつもりだ？」

「なンでもそいつは結構強いらしいンでなァ…決闘者として、一度はデュエルしてみてェ…」

決闘者として…か、なら怖いが…逃げるわけにはいかねえよな？

「なら、話は簡単だ。俺とデュエルすればいい。…君の探してる相手は、俺だよ」

「ヒャッハハハハハァ！いいねェ！最っ高だねェ！まさかこンなに簡単に見つかるとは思ってなかったぜェ！！」

ハハハ…腹括ったのはいいが、早速後悔してきたぞ。てか、セロリ君テンション高すぎなんですけどｗ

「やれやれ…お手柔らかに頼むよ。それと自己紹介…俺の名前は関口達也。君は？」

「ハッ…よく覚えとけよォ、俺の名前は一方通行（アクセラレータ）！じゃあ始めるとするかタツヤくゥン！！精々俺を楽しませろォ！！」

「へいへい…じゃあ…」

「決闘（デュエル）」

「決闘（デュエル）」

関口達也（Dデッキ）　ＶＳ　一方通行（？？？）

「先攻後攻はどうするよォ～？」
「そうだな…じゃあこのサイコロを交互に振って、出た目の大きい方が先攻ってことで」
「いいぜェ…じゃあお前から振るンだな」
「あいよ…っと出た目は「４」だな。ホラ次は一方通行、お前だよ」
そう言って、俺は一方通行にサイコロを投げる。
「…俺の目は「３」だなァ…先手はお前だタツヤくゥン！」

「それじゃあ俺の…ドロー！！」
さて…先攻か、出来れば後攻でさっさとケリを付けたかったんだけど、そうもいかないらしい。
あっちは何デッキか分からないけど、保険もあるしここは…
「俺はこのままターンエンドだ」
「はァ！？…ふざけてンのかテメェ…」
「安心しろよ、ことデュエルにおいては、俺は何時でも真剣だ。」
「…いいぜェ、なら早々にケリ付けてやるからよォ」

「俺のターン、ドロー！！（コイツ初っ端から何考えてやがンだァ…？可能性としてあるのはゴーズやトラゴエディアでも狙ってンのかもなァ。だとしても、コッチはかなり手札がいい、その余裕…後悔させてやるぜェ）俺は手札のＢＦ－暁のシロッコを墓地に送り、ダーク・グレファーを特殊召喚！更に効果で、手札からゾンビキャリアを墓地に送って、デッキからＢＦ－大旆のヴァーユを墓地に送るぜェ！」

《ダーク・グレファー／Ｄａｒｋ　Ｇｒｅｐｈｅｒ》
効果モンスター
星４／闇属性／戦士族／攻１７００／守１６００
このカードは手札からレベル５以上の闇属性モンスター１体を捨てて、

手札から特殊召喚する事ができる。
1ターンに1度、手札から闇属性モンスター1体を捨てる事で、
自分のデッキから闇属性モンスター1体を墓地へ送る。

この動き…間違いなく墓地ＢＦ！？　なるほどなら次に来るモンスターは…
「なンだなンだよなンですかそのツラはァ！？レアカードのオンパレードにビビっちゃってンのかァ～？だが、これで俺の墓地は闇３体だなァ…ひょっとしたらコレはお前にとってかなり危険な状態かもしれねェぜ」
「分かりやすいヒントをど～も、さっさと出せよ。その切り札をさ」
「ケッ…後悔しろよォ俺は手札からダーク・アームド・ドラゴンを特殊召喚だァ！！」

《ダーク・アームド・ドラゴン／Ｄａｒｋ　Ａｒｍｅｄ　Ｄｒａｇｏｎ》
果モンスター（制限カード）
星７／闇属性／ドラゴン族／攻２８００／守１０００
このカードは通常召喚できない。
自分の墓地に存在する闇属性モンスターが３体の場合のみ、
このカードを特殊召喚する事ができる。
自分のメインフェイズ時に自分の墓地に存在する闇属性モンスター１体を
ゲームから除外する事で、
フィールド上に存在するカード１枚を選択して破壊する。

「更に手札から、終末の騎士を召喚！効果を発動するぜェ…対象は、デッキの中にあるＢＦ－大旆のヴァーユだァ！！」

《終末の騎士／Ａｒｍａｇｅｄｄｏｎ　Ｋｎｉｇｈｔ》

効果モンスター
星４／闇属性／戦士族／攻１４００／守１２００
このカードが召喚・反転召喚・特殊召喚に成功した時、
自分のデッキから闇属性モンスター１体を選択して墓地に送る事ができる。

コイツ初っ端から全部手札を使い切る気か？１キルを狙いたいにしても、流石にそいつは無謀だろ？

「ってな顔してるなァ…タツヤくゥン。心配ありがとゥ、けど無駄なンだよォ！！俺は手札から、魔法カード「天からの宝札」を発動！！お互いのプレイヤーは手札かが６枚になるまでカードをドローする！」

《天よりの宝札／Ｃａｒｄ　ｏｆ　Ｓａｎｃｔｉｔｙ》
通常魔法
自分の手札と自分フィールド上に存在する全てのカードをゲームから除外する。
自分の手札が２枚になるようにカードをドローする。

ですが、原作効果は

通常魔法
互いのプレイヤーは手札が６枚になるようにカードを引く。

なのです。ここは遊戯の世界なので、コチラの効果が採用されたようですね。以上、天の人の説明でした。

ふ☆ざ☆け☆る☆な！！マジかよ…原作効果だと…そいつは聞いてねえよ！？

「ン～？どうしたよォ、タツヤくゥン顔が青いぜェ。このカードは限定カードの中でもかなり上位、流石にこのカードの存在は知らなかったみてぇだなァ。じゃあ続きだ、俺は手札を一枚デッキ上に置くことで、ゾンビキャリアの効果を発動！俺のフィールド上に特殊召喚！！」

《ゾンビキャリア／Ｐｌａｇｕｅｓｐｒｅａｄｅｒ　Ｚｏｍｂｉｅ》
チューナー（効果モンスター）
星２／闇属性／アンデット族／攻　４００／守　２００
手札を１枚デッキの一番上に戻して発動する。
墓地に存在するこのカードを自分フィールド上に特殊召喚する。
この効果で特殊召喚されたこのカードは、
フィールド上から離れた場合ゲームから除外される。

「そして終末の騎士とチューニングしてシンクロ召喚！氷結界の龍ブリューナク！！更に、墓地のＢＦ－大旆のヴァーユ効果発動。このカードと墓地のＢＦ－暁のシロッコをゲームから除外して、ＢＦ－アームズ・ウィングを特殊召喚！…まァコイツの効果は消えちまうンだがなァ」

《ＢＦ－大旆のヴァーユ／Ｂｌａｃｋｗｉｎｇ　－　Ｖａｙｕ　ｔｈｅ　Ｅｍｂｌｅｍ　ｏｆ　Ｈｏｎｏｒ》
チューナー（効果モンスター）
星１／闇属性／鳥獣族／攻　８００／守　０
このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、
このカードをシンクロ素材とする事はできない。
このカードが墓地に存在する場合、このカードと墓地に存在するチューナー以外の
「ＢＦ」と名のついたモンスター１体をゲームから除外し、
そのレベルの合計と同じレベルの「ＢＦ」と名のついた

シンクロモンスター1体をエクストラデッキから特殊召喚する事ができる。
この効果で特殊召喚したモンスターの効果は無効化される。

《ＢＦ－アームズ・ウィング／Ｂｌａｃｋｗｉｎｇ　Ａｒｍｅｄ Ｗｉｎｇ》
シンクロ・効果モンスター
星６／闇属性／鳥獣族／攻２３００／守１０００
「ＢＦ」と名のついたチューナー＋チューナー以外のモンスター１体以上
このカードは守備表示モンスターに攻撃する場合、
ダメージステップの間攻撃力が５００ポイントアップする。
このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、
その守備力を攻撃力が超えていれば、
その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。

「さァて…こいつ等全員で攻撃したら、お前のＬＰはゼロになんじゃねェか。俺のバトルフェイズ！ダーク・グレファーでお前にダイレクトアタック！！」
「させるか！俺は手札から速攻のカカシを墓地に捨てて効果発動！その攻撃を無効化し、バトルフェイズを強制終了させる」

《速攻のかかし／Ｓｗｉｆｔ　Ｓｃａｒｅｃｒｏｗ》
効果モンスター
星１／地属性／機械族／攻　　０／守　　０
相手モンスターの直接攻撃宣言時、このカードを手札から捨てて発動する。
その攻撃を無効にし、バトルフェイズを終了する。

「チッ…めンどうなカード使いやがって…だがそれも何時まで持つ

かなァ！？俺はカードを１枚セットしてターンエンドだァ！」

現状

関口達也　　ＬＰ８０００　　手札５枚
フィールド上　　ナシ

一方通行　　ＬＰ８０００　　手札４枚
フィールド上　　ブリューナク１体　ダムド１体　アームズ・ウイング１体　グレファー１体
伏せカード１枚

第八話　あれ？コレってもしかして死亡フラグですか？（後書き）

第八話投稿完了です。
まだ1ターン目終了時だと言うのに、セロリ君のフィールドがすごいことになってますw

第九話　ＶＳ一方通行（アクセラレータ）　前編

現状

関口達也　　ＬＰ８０００　　手札５枚
フィールド上　　ナシ

一方通行　　ＬＰ８０００　　手札４枚
フィールド上　　ブリューナク１体　ダムド１体　アームズ・ウイング１体　グレファー１体
伏せカード１枚

はぁ…なんとか凌ぐ事は出来たけどさ、相手はまだ手札４枚…おそらくここで１回切り返しても、向こうには次の手があるだろう。ここで俺のやるべきことは、出来るだけ俺の手札を温存しつつ、相手のモンスターを駆逐すること！
「俺のターン、ドロー！俺は手札から、Ｄ・モバホン（ディフォーマー）を召喚！」

《Ｄ・モバホン／Ｍｏｒｐｈｔｒｏｎｉｃ　Ｃｅｌｆｏｎ》
効果モンスター
星１／地属性／機械族／攻　１００／守　１００
このカードはこのカードの表示形式によって以下の効果を得る。
●攻撃表示：サイコロを１回振る。
自分のデッキの上から出た目の枚数分だけカードをめくる。
その中にレベル４以下の「Ｄ（ディフォーマー）」と名のついたモンスターが存在する場合、
１体を召喚条件を無視して特殊召喚する。
それ以外のカードはデッキに戻してシャッフルする。
この効果は１ターンに１度しか使用できない。

●守備表示：サイコロを1回振る。
自分のデッキの上から出た目の枚数分だけカードを確認して元に戻す。
この効果は1ターンに1度しか使用できない。

「オイオイ…なンだなンだよなんですかァー!?そんな雑魚モンスターじゃ慰みもンにもなンねェぞ!」
「さぁ、そいつはどうかな?俺は、D・モバホンの効果を発動!出たサイコロの目は「4」その分デッキの上からカードをめくり、その中にあるレベル4以下のDを特殊召喚する。俺が選ぶのはこいつだ。D・スコープンを守備表示で特殊召喚!」

D・スコープン／Morphtronic Scopen》
チューナー（効果モンスター）
星3／光属性／機械族／攻　800／守1400
このカードはこのカードの表示形式によって以下の効果を得る。
●攻撃表示：1ターンに1度、手札からレベル4の「D（ディフォーマー）」と名のついたモンスター1体を特殊召喚する事ができる。この効果で特殊召喚したモンスターはエンドフェイズ時に破壊される。
●守備表示：このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、このカードのレベルは4になる。

「さらにこの二体でチューニングだ。こい、シンクロ召喚A（アーリー）・O（オブ）・Jカタストル（ジャスティス）!!」
「おっと、そいつは却下だ!罠カード発動、「奈落の落とし穴」!!そのモンスターは除外してもらうぜェ」

《奈落の落とし穴／Bottomless Trap Hole》
通常罠（準制限カード）

相手が攻撃力１５００以上のモンスターを
召喚・反転召喚・特殊召喚した時に発動する事ができる。
その攻撃力１５００以上のモンスターを破壊しゲームから除外する。

「ヒャハハハッ…頼みの綱のモンスターも消えちまッたなァ」
「いやいや…これでいいのさ。生憎、手持ちに罠等に対する除去が無かったんでね。彼にはそれを引き出させる囮になってもらった。俺の動きはここからさ」
「ケッ…じゃあ早速見せてもらおうじゃないかタァァツヤくゥゥゥゥゥゥン！！」
「言われなくても、俺は手札から魔法カード「ジャンクＢＯＸ」を発動！墓地いるＤ・モバホンを特殊召喚するぜ」

《ジャンクＢＯＸ／Ｊｕｎｋ　Ｂｏｘ》
通常魔法
自分の墓地に存在するレベル４以下の「Ｄ（ディフォーマー）」と名のついたモンスター１体を特殊召喚する。
この効果で特殊召喚したモンスターはこのターンのエンドフェイズ時に破壊される。

「更にＤ・モバホンの効果発動！出た目は「３」だ。俺はデッキの上からカードを３枚めくり、その中にあるレベル４以下のＤ…Ｄ・リモコンを特殊召喚する」

《Ｄ・リモコン／Ｍｏｒｐｈｔｒｏｎｉｃ　Ｒｅｍｏｔｅｎ》
チューナー（効果モンスター）
星３／地属性／機械族／攻　３００／守１２００
このカードはこのカードの表示形式によって以下の効果を得る。
●攻撃表示：１ターンに１度、自分の墓地に存在する「Ｄ（ディフォーマー）」と名のついたモンスター１体をゲームから除外し、

自分のデッキからそのモンスターと同じレベルの
「D（ディフォーマー）」と名のついたモンスター1体を手札に加える。
●守備表示：1ターンに1度、手札から「D（ディフォーマー）」
と名のついたモンスター1体を墓地へ送り、
そのモンスターと同じレベルの他の「D（ディフォーマー）」
と名のついたモンスター1体を自分の墓地から手札に加える。

「そして俺は手札から魔法カード「機械複製術」を発動！対象は俺
のフィールド上にいるD・モバホンだ。デッキから、D・モバホン
を2体特殊召喚する」

《機械複製術／Ｍａｃｈｉｎｅ　Ｄｕｐｌｉｃａｔｉｏｎ》
通常魔法
自分フィールド上に表側表示で存在する
攻撃力５００以下の機械族モンスター1体を選択して発動する。
選択したモンスターと同名モンスターを2体まで自分のデッキから
特殊召喚する。

「（コイツのデッキ…低級モンスターの大量召喚を主軸としたシン
クロデッキか！？）」
「じゃあ2体目のD・モバホンの効果を発動するぜ。出た目は…「
6」その枚数デッキの上からカードをめくり、その中のレベル4以
下のD…D・スコープンを守備表示で特殊召喚する！そして、この
スコープンと、1体目のD・モバホンをチューニング。シンクロ召
喚、ＴＧ（テックジーナス）　ハイパー・ライブラリアン！！」

《ＴＧハイパー・ライブラリアン／Ｔ．Ｇ．　Ｈｙｐｅｒ　Ｌｉｂｒａｒｉａｎ》
シンクロ・効果モンスター
星５／闇属性／魔法使い族／攻２４００／守１８００

チューナー＋チューナー以外のモンスター1体以上
このカードがフィールド上に表側表示で存在し、
自分または相手がシンクロ召喚に成功した時、
自分のデッキからカードを1枚ドローする。

「こっから更に加速させてもらうぜ！3体目のD・モバホンの効果を発動する！出た目は…「2」か…まぁあとはレベル4のモンスターがでりゃいいだけだ…そんなにキツイ賭けじゃない。2枚の中にあったレベル4以下のD…D・ラジオンを特殊召喚！」

《D・ラジオン／Morphtronic Radion》
効果モンスター
星4／光属性／雷族／攻1000／守 900
このカードはこのカードの表示形式によって以下の効果を得る。
●攻撃表示：このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、自分フィールド上に存在する「D（ディフォーマー）」と名のついたモンスターの攻撃力は800ポイントアップする。
●守備表示：このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、自分フィールド上に存在する「D（ディフォーマー）」と名のついたモンスターの守備力は1000ポイントアップする。

「さ～て、そろそろ奈落を先に使ったこと、後悔してるんじゃないか？」
「抜かせ…そんなことを言う暇があるンならさっさとデュエルを進めるンだなァ…」
「いいぜ…じゃあお望みどおり進めてやる！俺は、2体のD・モバホンとD・リモコン！D・ラジオンをチューニング…コイツを食らうといてーぞ！シンクロ召喚、氷結界の龍トリシューラ！！！」
「っ！？…伝説の氷結界の龍…てめェも中々いいカード持ってるじゃねェか」

「まぁね。じゃあまずはライブラリアンの効果でカードを一枚ドロー。そしてトリシューラの効果を発動！お前のフィールド上のＢＦ－アームズ・ウィング、墓地の終末の騎士、そして手札のこのカードを除外してもらう。」

「っ…（カードガンナーが除外か、めんどい所を）」

「まだ終わりじゃないぜ？俺は手札から、魔法カード「シンクロキャンセル」発動！対象は氷結界の龍トリシューラ！俺のフィールド上に、Ｄ・モバホン２体とＤ・リモコン、Ｄ・ラジオンを特殊召喚！」

《シンクロキャンセル／Ｄｅ－Ｓｙｎｃｈｒｏ》
通常魔法
フィールド上に表側表示で存在するシンクロモンスター１体をエクストラデッキに戻す。
さらに、エクストラデッキに戻したこのモンスターのシンクロ召喚に使用したモンスター一組が自分の墓地に揃っていれば、この一組を自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。

「そして、Ｄ・モバホン２体とＤ・リモコンをチューニング！コイツの能力はちょっと強いぜ？シンクロ召喚、ナチュル・ビースト！！」

《ナチュル・ビースト／Ｎａｔｕｒｉａ　Ｂｅａｓｔ》
シンクロ・効果モンスター
星５／地属性／獣族／攻２２００／守１７００
地属性チューナー＋チューナー以外の地属性モンスター１体以上
このカードが自分フィールド上に表側表示で存在する限り、自分のデッキの上からカードを２枚墓地に送る事で、

魔法カードの発動を無効にし破壊する。

「更に、ライブラリアンの効果でドロー！そして手札からもう一枚の「ジャンクＢＯＸ」を発動するぜ。対象はＤ・スコープン！守備表示で特殊召喚…さて、長らく待たせたな。コレが最後のシンクロだ！Ｄ・ラジオンとＤ・スコープンをチューニング！シンクロ召喚、ギガンテック・ファイター！！そして、ライブラリアンの効果でドロー！最後に、手札から魔法カード「貪欲な壺」を発動！俺の墓地にある、Ｄ・モバホン２体とＤ・リモコン、Ｄ・ラジオン、Ｄ・スコープンをデッキに戻し、カードを２枚ドローする。」

《貪欲な壺／Ｐｏｔ　ｏｆ　Ａｖａｒｉｃｅ》
通常魔法
自分の墓地に存在するモンスター５体を選択し、
デッキに加えてシャッフルする。
その後、自分のデッキからカードを２枚ドローする。

「（あのナチュル・ビーストってモンスター…俺も見たこと無いカードだなァ。しかし、あれだけシンクロして、コイツの手札は今だ５枚…成る程よく考えられたデッキじゃねぇか）」
「じゃあバトルフェイズだ！俺はギガンテック・ファイターでダーク・アームド・ドラゴンに攻撃！！相打ちだ」
「くっ…」
「ただし、コイツの効果を使って再びギガンテック・ファイターを特殊召喚するがな。更に、ＴＧハイパー・ライブラリアンで氷結界の龍ブリューナクに攻撃！」

一方通行　　ＬＰ８０００　→　７９００

「まだまだ！ギガンテック・ファイターでダーク・グレファーに攻

撃！そしてナチュル・ビーストでお前にダイレクトアタック！！」

「がァァァ！？」

一方通行　　ＬＰ７９００　↓　４６００

「俺は、カードを２枚セットしてターンエンドだ」

「く…」

「…？どうしたんだ、お前のターンだぜ？」

「くかきけこかかきくけききこかかきくこくけけけこきくかくけけこかくけきかこけききくくくききかきくこくけくかきくけくくきくきくきこきかかか――――――！！」

ちょ…ちょちょちょちょっ！？一体何がどうしちまったんだ！？何だコレ、何か呪文の詠唱ですか！？俺はこのままマダンテとかくらってバラバラになっちまうのかなぁ…

「いいねいいねェ最ッッ高だねェェェェェェェェェ！！愉快に素敵に決まっちまったぞ！！！！最初はどうかと思ったが、中々どうして楽しませてくれンじゃねェか！コンなに楽しいデュエルは久々だなァ！！」

どうやらセロリ君はご満悦の様です。これ、俺にとっての存命フラグなのかな？それともやっぱ死亡フラグ？？

「俺のターン、ドロー！俺は手札から魔法カード「闇の誘惑」を発動！」

「おっと、そいつは無理だな。ナチュル・ビーストの効果で、デッキの上からカードを２枚墓地に送ることで、その魔法カードの発動を無効化して破壊するよ。墓地に送られた２枚のカードはＤ・パッチンとＤ・ボードンだ」

「なンだと…（魔法を無効化する誘発即時効果内臓モンスター…厄

介だなァ。なら、アイツから殺しにかからねぇと）俺は手札からＢＦ－疾風のゲイルを召喚！」
不味い！？あのモンスターは…！
「俺は速攻魔法カード「月の書」を発動！ＢＦ－疾風のゲイルを裏守備にしてもらう！」
「くっくっく…コイツがよっぽど怖いみてェだなァ」
当然だろ、永続版収縮持ちモンスターなんて洒落にならん。
「なら俺は、カードを2枚セットしてターンエンドだ」

現状

関口達也　　ＬＰ８０００　　手札3枚
フィールド上　　ライブラリアン1体　ナチュビ1体　ギガンテック1体　伏せカード1枚

一方通行　　ＬＰ８０００　→　４６００　　手札０枚
フィールド上　　伏せモンスター（ゲイル）　　伏せカード2枚

第九話　ＶＳ一方通行（アクセラレータ）　前編（後書き）

第九話投稿完了です。

いやはや、Ｄは１ターンが長くなりすぎますね・・・ｇｄｇｄになって申し訳ないです。

第十話　ＶＳ一方通行（アクセラレータ）　後編

関口達也　　ＬＰ８０００　　手札３枚
フィールド上　　ライブラリアン１体　ナチュビ１体　ギガンテック１体　伏せカード１枚

一方通行　　ＬＰ８０００　↓　４６００　　手札０枚
フィールド上　　伏せモンスター（ゲイル）　　伏せカード２枚

さて…相手は伏せ２枚だけど、この状況に相手は墓地ＢＦって事考えるなら…どちらかがゴッドバードアタックの可能性が高いよな。ただし、あのカードは利点がそのまま弱点に繋がる。発動を何とか止めれれば、向こうがアド損だ。

「俺のターン、ドロー！…俺はそのままバトルフェイズに移行するぜ。ナチュル・ビーストで、伏せカード（ゲイル）にアタック！！」
「残念賞だ、タツヤくぅぅぅぅん！罠カード「聖なるバリアーミラーフォース－」発動！！」

《聖なるバリアーミラーフォース－／Ｍｉｒｒｏｒ　Ｆｏｒｃｅ》
通常罠
相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。
相手フィールド上に存在する攻撃表示モンスターを全て破壊する。

「そっちかよ…まぁ関係ないな！罠カード「トラップ・スタン」発動！！悪いがそいつは止めさせてもらうぜ！」

《トラップ・スタン／Ｔｒａｐ　Ｓｔｕｎ》

通常罠
このターンこのカード以外のフィールド上の罠カードの効果を無効にする。

「そいつはコッチのセリフだなァ…罠カード「盗賊の七つ道具」発動!!お前のその罠を無効化する!」

《盗賊の七つ道具／Ｓｅｖｅｎ　Ｔｏｏｌｓ　ｏｆ　ｔｈｅ　Ｂａｎｄｉｔ》
カウンター罠
１０００ライフポイントを払って発動する。
罠カードの発動を無効にし破壊する。

くっ…そこまではってあったんじゃ仕方ないな。けど、向こうは手札ゼロ。コッチは４枚だ…まだ俺が圧倒的有利!

「了解だ…俺のトラップ・スタンは無効化され、フィールド上のモンスターは全滅する。」

一方通行　　ＬＰ３６００

「俺は、モンスターを1体場に伏せ、カードを1枚セット。ターンエンドだ。」

「俺のターン、ドローだ!　フッ…お寒いねェ…コッチは手札が１枚しかねェからな～。大切に使わねェと」
ぬかせ…お前のその顔、その一枚でまだどうにでもなるような顔してるぜ。
「俺はこのままこのカードをセットして、ターンエンドだ。」

現状

関口達也　　ＬＰ８０００　　手札２枚
フィールド上　　伏せモンスター１体　　伏せカード１枚

一方通行　　ＬＰ３６００　　手札０枚
フィールド上　　伏せモンスター（ゲイル）　伏せカード１枚

「俺のターン…ドロー！」
現状、仕掛けるにはまだ早いか…相手の伏せが怖い。仕掛けるなら、次にもし仕掛けるなら、ハリケーン辺りを引いた時だな。
「俺は、カードを一枚セットターンエンドだ！」
「おっと！その時、罠カード「ゴッドバードアタック」を発動させてもらうぜ。対象はお前の伏せカード２枚だァ！！」

《ゴッドバードアタック／Ｉｃａｒｕｓ　Ａｔｔａｃｋ》
通常罠
自分フィールド上に存在する鳥獣族モンスター１体をリリースし、フィールド上に存在するカード２枚を選択して発動する。
選択したカードを破壊する。

！？…威嚇する咆哮とマインドクラッシュがやられた！
これでアイツにアタッカーを引かれた…不味い！！

「さて、確かターンエンド宣言をしたよなァタツヤくゥン。じゃあ俺のターン…ドロー！！…ハッ、この状況に中々いいカードを引いちまったなァ…俺は手札から、ＢＦ－暁のシロッコを召喚！」

《ＢＦ－暁のシロッコ／Ｂｌａｃｋｗｉｎｇ　－　Ｓｉｒｏｃｃｏ

ｔｈｅ　Ｄａｗｎ》
効果モンスター
星５／闇属性／鳥獣族／攻２０００／守　９００
相手フィールド上にモンスターが存在し、
自分フィールド上にモンスターが存在しない場合、
このカードはリリースなしで通常召喚する事ができる。
１ターンに１度、自分フィールド上に表側表示で存在する
「ＢＦ」と名のついたモンスター１体を選択して発動する。
選択したモンスターの攻撃力は、そのモンスター以外の
フィールド上に表側表示で存在する「ＢＦ」と名のついた
モンスターの攻撃力の合計分アップする。
この効果を発動するターン、選択したモンスター以外の
モンスターは攻撃する事ができない。

!?何て引き運してやがんだ…あの打点…今の俺じゃ崩せねぇ…
「さァてバトルフェイズだ!おれはＢＦ－暁のシロッコで、お前の
伏せモンスターに攻撃!!」
「…伏せモンスターは、Ｄ・ボードンだ。守備力は１８００…その
まま破壊される」
「俺はこのまま、ターンエンドだ」

現状

関口達也　　ＬＰ８０００　　手札２枚
フィールド上　　ナシ

一方通行　　ＬＰ３６００　　手札０枚
フィールド上　　シロッコ１体　　伏せカードナシ

「俺のターン、ドロー!」

不味いな…Dは基本的に1体1体の能力は低めだ、シロッコを倒せるほどのカードが無い。
せめてアイツを引ければ…
「…俺はこのままターンエンドだ。」
「オイオイ、どうしたンですかァ～！さっきまでの意気込みは！？通夜みたいな顔しやがってよォ」
「くっ…」

「俺のターン、ドローカードだ！…俺はこのままバトルフェイズに移行！ＢＦ－暁のシロッコでお前にダイレクトアタック！！」

「ぐッ…」

関口達也　　ＬＰ８０００　→　６０００

「俺はこのままターンエンドだ！どうした、まさかこのまま終わるつもりじゃねェよなァ？」

現状

関口達也　　ＬＰ８０００　→　６０００　　手札１枚
フィールド上　シロッコ１体　　伏せカー
ドナシ

一方通行　　ＬＰ３６００
フィールド上　ナシ

「俺のターン、ドロー！」

このカードも状況を打開できるものじゃない…くそっこのままじゃ…
「俺は、カードを1枚セット。ターンエンドだ。」

「俺のターン、ドロー！俺はバトルフェイズに移行。ＢＦ－暁のシロッコでお前にダイレクトアタック！！」
「っ…」

関口達也　　ＬＰ６０００　↓　４０００

「俺はそのままターンエンドだ」

現状

関口達也　　ＬＰ６０００　↓　４０００　　手札3枚
フィールド上　モンスター　ナシ　　伏せカード1枚

一方通行　　ＬＰ３６００　　手札2枚
フィールド上　シロッコ1体　　伏せカードナシ

「俺のターン…ドロー！…！！」
このカード…上手くいけば、奴を倒せるが。すでに一方通行の手札は2枚…何か対策があるかも。だが伏せは無い…どちらにせよこのまま行ったらジリ貧だ。それなら…
「俺は手札から、Ｄ・スコープンを召喚！そして効果を発動する。手札から、Ｄ・ラジカッセンを特殊召喚！！」

《Ｄ・ラジカッセン／Ｍｏｒｐｈｔｒｏｎｉｃ　Ｂｏｏｍｂｏｘｅｎ》
効果モンスター

星４／地属性／機械族／攻１２００／守　４００
このカードはこのカードの表示形式によって以下の効果を得る。
●攻撃表示：このカードは１度のバトルフェイズ中に２回攻撃する事ができる。
●守備表示：自分フィールド上に表側表示で存在する「Ｄ（ディフォーマー）」と名のついたモンスターが攻撃対象に選択された時、その戦闘を無効にする事ができる。
この効果は１ターンに１度しか使用できない。

「そして俺は、このままバトルフェイズに移行するぜ！」
「あァ！？お前大丈夫ですかァ～？そんな雑魚モンスターが、シンクロもせずにＢＦ－暁のシロッコとバトルだと！？」
「ああ、Ｄ・ラジカッセンで、ＢＦ－暁のシロッコに攻撃だ！！そしてダメージステップ時に俺は速攻魔法カード「リミッター解除」を発動するぜ！！」

《リミッター解除／Ｌｉｍｉｔｅｒ　Ｒｅｍｏｖａｌ》
速攻魔法
このカード発動時に、自分フィールド上に表側表示で存在する全ての機械族モンスターの攻撃力を倍にする。
この効果を受けたモンスターはエンドフェイズ時に破壊される。

「！？」
「これで、俺のフィールド上のＤ達は、攻撃力が倍になる！そしてラジカッセンは自身の効果も合わさって、攻撃力２４００の２回攻撃…お前の残りＬＰは残り３６００…何も手が無いのなら、俺の勝ちだ！」
「…」
「どうだ？何かそっちに手があるか？」
「悪ィな…そこまで計算どおりだ！俺は手札から、ＢＦ－月影のカ

ルートを墓地に送り効果発動！シロッコの攻撃力を１４００ポイントアップさせる！！」

《ＢＦ－月影のカルート／Ｂｌａｃｋｗｉｎｇ － Ｋａｌｕｔ ｔｈｅ Ｍｏｏｎ Ｓｈａｄｏｗ》
効果モンスター
星３／闇属性／鳥獣族／攻１４００／守１０００
自分フィールド上に表側表示で存在する「ＢＦ」と名のついたモンスターが
戦闘を行うダメージステップ時にこのカードを手札から墓地へ送る事で、
そのモンスターの攻撃力はこのターンのエンドフェイズ時まで１４００ポイントアップする。

カルート…賭けには負けたようだな。

関口達也　　ＬＰ４０００　↓　３０００

「…Ｄ・ラジカッセンは破壊される。俺はカードを1枚伏せる。ターンエンド時、Ｄ・スコープンがリミッター解除の効果で破壊され、ターンエンドだ。」

「俺のターン…ドロー！…俺は手札から、速攻魔法カード「異次元からの埋葬」を発動する。俺の除外されているカード、ＢＦ－大旆のヴァーユとＢＦ－暁のシロッコ、ＢＦ－アームズ・ウィングを墓地に戻すぜェ」

「！！」

「更にＢＦ－大旆のヴァーユの効果を発動！このカードとＢＦ－ア

ームズ・ウィングを除外し、ＢＦ－アーマード・ウィングを特殊召喚。コイツは効果を無効化されるが…打点としては十分だよなァ？」

《ＢＦ－アーマード・ウィング／Ｂｌａｃｋｗｉｎｇ　Ａｒｍｏｒ　Ｍａｓｔｅｒ》
シンクロ・効果モンスター
星７／闇属性／鳥獣族／攻２５００／守１５００
「ＢＦ」と名のついたチューナー＋チューナー以外のモンスター１体以上
このカードは戦闘では破壊されず、
このカードの戦闘によって発生する自分への戦闘ダメージは０になる。
このカードが攻撃したモンスターに
楔カウンターを１つ置く事ができる（最大１つまで）。
相手モンスターに乗っている楔カウンターを全て取り除く事で、
楔カウンターが乗っていたモンスターの攻撃力・守備力を
このターンのエンドフェイズ時まで０にする。

「さァて…お待ちかねのバトルフェイズだ！この２体の攻撃が通れば…お前の負けだなァ？」
「そうだな…だが、そう簡単に俺がやられると思うか？」
「ハッ…それもすぐに分かるだろォ。俺はＢＦ－暁のシロッコでお前にダイレクトアタっ…！？」
突然一方通行の動きが止まった、どうやら誰かから連絡が来たらしい、電話に向かって何やら罵倒している。
「チッ…折角いい所だったンだがなァ。」
どうやら電話が終わったらしい。とりあえず声かけとくか。
「どうかしたのか？」
「…悪ィが急用だ。この続きは、また別の機会だなァ。…タツヤ、中々楽しめたぜまたなァ」

そういって、一方通行は去っていった。少しの間、呆然とその様子を眺めていた俺だが、最後に伏せていた、伏せカード2枚をめくる。

「伏せてたのは、シンクロキャンセルとサイクロン…」

そう、最後のあの時俺が伏せていたカードはブラフだった。あのままデュエルが続いてたら、俺は確実に負けていたわけだ。

「はぁ…事実上こっちに来てから始めての負けだな…くそっ！！」

ああ、やっぱ負けたら悔しいな…けど、このまま終わるつもりなんてあるわけない。次は確実に…俺が勝つ！

第十話　ＶＳ一方通行（アクセラレータ）　後編（後書き）

第十話投稿完了です。

始めての敗北回でした。けどイマイチ墓地ＢＦの強さを書き切れなかった感あるなぁ…

第十一話　そうだ、童実野町に行こう！

朝、俺は目を覚ました。時刻はＡＭ７：００ぐらいだろうか、何時もより少し遅くまで寝ていたらしい。まぁ、昨日は寝るのが遅かったしこういうこともあるだろう。
そう思い、俺は起き上がる。すると、なにやら台所の方からいい匂いがしてきた。
おかしいな…一体誰が？いや…そうだ、よく考えてみれば昨日はあの一方通行に負けてから、そのまま家に帰った後、部屋に籠ってずっとデッキ調整やら新デッキ作成をしてたんだった。玄関のドアの鍵も開けっ放しだった気がする。俺、なんて無用心。だとしたら、最悪今台所にいる人物は俺のまったく知らない奴で、俺が台所に行った途端包丁をちらつかせてくる可能性も…
「まぁ、常識的に考えてそれはないな」
ともかく、台所に行ってみるとしよう。

「あ、関口さん！お早うございます」
台所に居たのはなんと佐天ちゃんだった、しかも何時もの制服姿じゃないく、私服だ。そういえば今日は休日だっけ？最近曜日のことを気にすること少なかったからな～…
「それにしても酷いですよ～。昨日こっちに来てから、何度も部屋の前で呼んだのにまったく反応してくれないんですから」
マジか…まったく覚えが無い。どうやら予想以上に俺は熱中してたようだな…まぁあれがこっちに来てからの始めての負けだ。少し俺も躍起になっていたのかもしれない。
「ゴメン、ちょっとデッキ調整とかに夢中になってたみたいだ」
「やっぱりですか。まぁそんなことだろうと思いましたけど。それと、もうすぐ朝ごはんできますから、顔でも洗って来て下さい」

「ついでに風呂もだな…昨日忘れちゃったから」

そういって、俺は風呂場に向かった。しかし、ＢＦの対策は予想以上に厄介だな。いくら準制限といっても、相変わらず除去に対してゴッドバードアタックなんかを合わせられたら目も当てられないし、何よりあのデッキは、安定した打点を長く維持することにかなり長けてる。長期戦はどう考えても不利…短期戦でも、１度目の矢で倒せなかったら、そこからなぶり殺しにされるだろう。

やるなら徹底的な闇メタか…でもそれじゃあ、意味が無いよな。ＢＦのために態々デッキを変えるつもりはない。こっちの世界にはサイドデッキの概念が無いみたいだし、たとえメタるにしても、あまりやりすぎれば、デッキのバランスが崩れるのが目に見えてるからな。

となると、ＢＦだけでなく…多方面へのメタ耐性があるカード、それもデッキのコンセプトなどをあまり阻害しない数…数枚程度である程度の効果があるタイプがいい…まぁそういうのだったら少しは心当たりがあるな。

そんなことを考えつつ俺は、さっさとシャワーを浴びることにした。

その後、手早くシャワーを浴び着替えた俺は、佐天ちゃんと一緒に朝食を取った。うむ、どうやら佐天ちゃんは中々料理上手みたいだ、普通に美味しい。

「それでですね、本当だったら昨日の内に言いたかったんですけど、今日童実野町でちょっと大きな大会があるみたいなんですよ！もしよかったら、一緒に参加してみませんか？」

そうやって、俺が食事を味わっている所、佐天ちゃんがそんな誘いをかけてきた。童実野町か…この前の決闘王国（仮）の件もあるし、アピールには丁度いい機会だな。

「へぇ～…そいつは面白そうだな。俺でよければ是非同行させてもらうよ」
「はい！そうと決まれば、膳は急げですね！早くご飯を食べて、準備しましょう」
「ああ」
そして、俺達は朝食を済ませた後手早く食器を洗い片付け、大会に行くための準備をすることにした。

「う～ん…今日はちょっと大きな大会だし、メインデッキで行こうかな…」
「ほぅ、そいつは楽しみだね、やっと佐天ちゃんのメインデッキを見られるんだ」
ちなみに、サブの方のデッキはローレベルデッキだった。彼女自身の腕の方もかなりのもので、何回か冷や冷やさせられたこともある。その彼女のメインデッキだ。油断してたら普通にやられるかもな。
「だから、関口さんもメインデッキ使ってくださいよ～」
「ん～…俺はこのデッキはあんまり使う気ないんだよ。ホラ、切り札は最後まで取っとく派だから」
「うぅ…」
恨めしそうにこっちを見てくる佐天ちゃん、そんな目で見られるとどうも弱いな…けど、まっ何時か彼女ともこのデッキで勝負する日が来るだろうさ。
「じゃあ私も今回はローレベルで出よっと」
「そいつは残念…俺は、昨日作った新作デッキで行こうかな。昔作って遊んでたデッキをコンセプト換えした物だけど」
「へぇ～…どんなデッキなんですか？」
「そいつは、秘密だ。どうせなら向こうで当たってから自分の目で確認した方が楽しいだろ？例えば決勝戦・・とかね」
「むぅ…こうなったら、意地でも勝ち抜けて、そのデッキを暴いて

あげます！」
「うん、期待してるよ」
さて、そろそろ準備も出来たし、向かうとしましょうか…戦場へ。

さて、そうして童実野町までついた訳だけど…予想以上に人が多いな。ざっと３００人ぐらいいるんじゃないか？
「えっと…とりあえず最初はＡ・Ｂ・Ｃ・Ｄの四ブロックに分かれての予選が行われるみたいですね。各ブロックから、２名が予選通過で、その後残った８人でトーナメントをするみたいです。とりあえず早くエントリーを済ませちゃいましょう！」
そして、佐天ちゃんと一緒に無事登録完了。ちなみに、佐天ちゃんはＣブロック、俺はＡブロックとなった。
「あちゃ～…別のブロックになっちゃいましたね」
「まっ…これで決勝で当たれる確立が増えたね」
「ふふっ…じゃあまた後で！約束ですからね～、私が倒す前にやられないでくださいよ～ｗ」
「フッ…そいつはこっちのセリフだ」
あの様子だと、本当に決勝戦まで残ってきそうだな。楽しみにしておこう。

Ａブロックの会場にも先ほどとは随分減ったとはいえ、かなりの人数が集まっていた。やれやれ…こいつは結構時間が掛かりそうだな。上位２名が通過って佐天ちゃんが言ってたっけ？って言うことはこっちでもトーナメントかな。流石にスイスはないだろう。受付の所で聞いた所、やはりトーナメントらしい、試合は今から２０分後に開始、それまでに最終調整は済ませておくか…
「えっと…すみません」
近くにあったテーブルで、調整をしていると、小さな少女に声をか

けられた。見た所、おそらく小学校の中学年ぐらいだろうか？ツインテールで、中々愛らしい顔立ちをしていて、そして胸には何やら宝石の様な物を付けている、恐らくペンダントか何かの一種だろう。それにしても、ここに居るってことは、この子も決闘者なのだろうか？まぁとりあえず声を掛けられたのだし、返事を返さないと。

「…どうしたの、もしかして迷子とか？」

「いえ、違います。あの…ここがＡブロックの会場でいいんでしょうか？」

やっぱりこの子も決闘者らしい。マジかよ…こんな小さな女の子までやってるなんて、まぁ確かに俺も小学校中学年の時にはすでに手を出してたけどさ…友達に誘われてやって見たとかかな？

「ああ、ここで間違いないと思うよ。あと少しで開始らしいから、今の内に準備とかをしておいた方がいい。君も決闘者なんだろ？」

「はい、教えてくれてありがとうございました！」

そう言って、女の子はトテトテと歩いていった。やれやれ…流石にあんな子とは当たりたくないな…勝った後が気まずすぎる。

そうこうしている内に、どうやら試合開始が近づいてきたらしい。向こうから、俺の対戦相手らしき人物がやってきた。

さてさて…まずはさくっと倒していこうか、俺は予選の相手なんて眼中に無いんだ。さっさと勝って、佐天ちゃんとの約束を守らないとね。

さぁ…　　決闘（デュエル）開始だ！！

第十一話　そうだ、童実野町に行こう！（後書き）

第十一話投稿完了です。

やっととある以外のキャラ出せた…彼女が誰かは、次回のお楽しみと言うことで！

第十二話　どうしてこうなった…　魔法使いＶＳ魔法少女？

「わりいな、俺の勝ちだ！」

あれから、俺は順調に勝ち抜き、たった今、Ａブロック代表に決定した。しかし、今の試合は辛かったぜ…ありゃあラヴァルデッキか…ラヴァル・キャノンマジこえ～。

まぁ勝ちは勝ちだ…佐天ちゃんはどうなってるかな？

ここからのトーナメント前に１時間休憩を挟むらしい。俺は携帯（こっちに来てから新しく買った）で佐天ちゃんと連絡を取ることにした。

「あっ、関口さ～ん！こっちですよ」

そして、無事合流完了。

「でも、お互い予選を突破できて良かったですね～」

「まっ…約束だったからね。佐天さんがやられてないか心配だったけど」

「むっ…私だって、結構デュエルには自信あるんですよ～。そう簡単には負ける気ありませんから！」

「冗談だよ、ちゃんと勝ちぬけてくるって信じてたさ」

「…ほんとですか～？」

そう言ってジト目で俺を見てくる佐天ちゃん。しかしまぁ、こっちの決闘者は学園都市より数段レベルの高い奴が多いな。流石童実野町ってとこか、その中でちゃんと勝ち抜けてる佐天ちゃんは、かなりのレベルだと思ってるぜ。

「ほんとだって、けど学園都市よりこっちの決闘者はレベルが高いな。予選の最中も、結構危ないとこが何回かあったよ」

「ですね～…やっぱり伝説の決闘者がいる町は違います。っとそういえば、さっきDブロックで負けた人達が話してたんですけど、かなり珍しいデッキで勝ち抜いてる人がいるみたいですよ」
珍しいデッキか、ファンデッキの一種かな？
「珍しいデッキか…一体どんなデッキなんだ？」
「それが、詳しいことまでは分からないんですけど、なんか毒蛇の供物を使ってたみたいですから、爬虫類族のデッキなんじゃないですか？」
爬虫類か…順当にいけばワームかな…あのデッキは最近かなり頭角を現してきたし。そういえば内の身内でも居たな…爬虫類使いが。アイツ等は今でも元気でやってるのかな…今までこっちの世界に来て、色々ワクワクすることが多かったからあまり考えないようにしてたけど、そろそろホームシックになってきたのかもな。俺はいつか、元の世界に帰れるのだろうか……。
「…関口さんどうしたんですか？」
気づいたら、佐天ちゃんが俺の顔を覗き込んでいた。いかんな、つい顔にまで出てたか…第一にここに来た理由すら分からないんだ。こんなこと考えたって答えが出るわけが無い。今は、今を楽しんでいけばいい。
「なんでもないよ、ちょっと考え事をね」
「…そうですか。何か悩み事があるなら話してくださいね！私はレベル0だし、そんなに力にはなれないかもしれないけど、それでも話を聞くことぐらいはできますから」
「フッ…そんなこと言ったら、俺だってレベル0だぜ？そもそも超能力についてだって良く知らないしな」
「あはは…そういえばそうでしたね」

その後、二人で他愛の無い話をしている内に、休憩時間が残り僅かとなってきた。

「あっ…そろそろ次の試合が始まりますね」
「ああ、確か各ブロックから勝ち抜けたデュエリストをランダムに抽選してトーナメント戦をするんだったか…もしかしたら、初っ端から当たるかもな」
「もし、そうなったら全力でお相手しますよ」
「ああ、こちらこそ」
「では、また後で！」
去っていく佐天ちゃんを見送りつつ、俺も規定の場所に急いだ。

さて…俺の相手は…っと。その場で少し待つこと数分、向こうから対戦相手が歩いてきた。
オイ…ちょっと待て、あの子は確かさっきの…。
「あっ…さっきは本当にありがとうございました。もしかして、貴方が私の対戦相手ですか？」
少女は、ペコリとお辞儀し、俺に問いかけてきた。やれやれ…どうやら対戦相手で間違いないらしい。しかし、この子ここまで勝ち抜いて来たってことは、相当な実力者ってことか。
「みたいだね…とりあえず、自己紹介でもしとこうか。俺は関口達也、君は？」
「えっと…私は高町なのはって言います！よろしくお願いします」
なのはちゃんか……ん？どっかで聞いたことある気もするけど、きっと気のせいだろ。
「こちらこそよろしく、ここまで来たってことは、君もそれなりの決闘者ってことだろ？だから、手加減はしないよ、それは相手にとっても失礼だからね」
「はい、私も全力で行かせて貰います！」
「うん…じゃあ始めようか！」
「決闘（デュエル）！！」

「決闘（デュエル）！！」

関口達也（魔法使い？デッキ）　ＶＳ　高町なのは（？？？）

「先攻後攻は分かりやすくコインで決めようか、表・裏どっちがいい？」

「じゃあ、表でお願いします」

「分かった……コインは表、なのはちゃんが先攻だ」

「分かりました、私のターン…ドロー！！私は、モンスターを１体セット。更に、カードを２枚セットしてターンエンドします。」

最初は様子見ってことかな…？なら、俺は一気に攻めさせてもらうけど…

「俺のターン、ドロー！俺は手札から魔導戦士ブレイカー召喚！効果で、ブレイカーの上に魔力カウンターが１つ乗るよ」

《魔導戦士ブレイカー／Ｂｒｅａｋｅｒ　ｔｈｅ　Ｍａｇｉｃａｌ　Ｗａｒｒｉｏｒ》

効果モンスター

星４／闇属性／魔法使い族／攻１６００／守１０００

このカードが召喚に成功した時、

このカードに魔力カウンターを１つ置く（最大１つまで）。

このカードに乗っている魔力カウンター１つにつき、

このカードの攻撃力は３００ポイントアップする。

また、このカードに乗っている魔力カウンターを１つ取り除く事で、フィールド上に存在する魔法・罠カード１枚を破壊する。

「更に、魔導戦士ブレイカーの効果発動！自分の魔力カウンターを１つ取り除いて、なのはちゃんの伏せカードを１枚破壊させてもら

うよ」
「っ！！…分かりました。破壊された伏せカードは、サイクロンです」
「じゃあ、俺はバトルフェイズに移行！魔導戦士ブレイカーで伏せモンスターに攻撃！」
「伏せモンスターリバース！見習い魔術師の守備力は８００なので、破壊されます。その代わり、見習い魔術師の効果発動。私のデッキからレベル２以下の魔法使い族モンスターを１体セットします。セットするのは、同じ見習い魔術師です」

《見習い魔術師（みならいまじゅつし）／Ａｐｐｒｅｎｔｉｃｅ　Ｍａｇｉｃｉａｎ》
効果モンスター
星２／闇属性／魔法使い族／攻　４００／守　８００
このカードが召喚・反転召喚・特殊召喚に成功した時、
フィールド上に表側表示で存在する魔力カウンターを
置く事ができるカード１枚に魔力カウンターを１つ置く。
このカードが戦闘によって破壊された場合、
自分のデッキからレベル２以下の魔法使い族モンスター１体を
自分フィールド上にセットする事ができる。

「了解だよ、俺はカードを１枚セットしてターンエンドだ」
……やばい。これは非常にやばいぞ。

現状

高町なのは	ＬＰ８０００	手札３枚
フィールド上	伏せモンスター（魔術師）１体	伏せカード１枚
関口達也	ＬＰ８０００	手札４枚

フィールド上
ード1枚

ブレイカー1体

伏せカ

第十二話　どうしてこうなった…　魔法使いＶＳ魔法少女？（後書き）

第十二話投稿完了です。

ちなみに、関口君は魔法少女リリカルなのはを知らないという設定にさせていただいております。

第十三話　ＶＳ高町なのは

現状

高町なのは　　ＬＰ８０００　　手札３枚
フィールド上　　伏せモンスター（魔術師）１体　　伏せカード１枚

関口達也　　ＬＰ８０００　　手札４枚
フィールド上　　ブレイカー１体　　伏せカード１枚

「私のターン、ドロー！」
ああ…マジでヤバイぞ。何がやばいかって？それは相手のデッキがどうやら「魔法使い族」のデッキのようだということだ。ちなみに今回の俺のデッキも「魔法使い」ただ、このデッキに入っているメインカードの一つの効果は、相手のフィールドに魔法使いがいると、まったく効果がないのである。
これでは初っ端から切り札を一つ封印されたのと同じだ。
「私はこのまま、ターンエンドです」
問題はなのはちゃんのデッキが魔法使いの中でも何デッキかだ…。今の所の動きを見てる限りでは、まだデッキを絞り込めない。どーするかな…

「俺のターン、ドロー！俺は手札から、霊滅術師　カイクウを召喚！」

《霊滅術師　カイクウ／Ｋｙｃｏｏ　ｔｈｅ　Ｇｈｏｓｔ　Ｄｅｓ

ｔｒｏｙｅｒ》
効果モンスター
星４／闇属性／魔法使い族／攻１８００／守　７００
このカードが相手ライフに戦闘ダメージを与えた時、
相手の墓地に存在するモンスターを2体まで選択してゲームから除外する事ができる。
このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、
相手はお互いの墓地に存在するカードをゲームから除外する事はできない。

さて、とりあえず1回は殴っておくか、その後に来るモンスターで次に殴るかどうか判断すればいい。
「俺はバトルフェイズに移行するぜ。まずは、魔導戦士ブレイカーで伏せモンスターに攻撃！」
「分かりました、じゃあリバースします。伏せモンスターはさっきと同じ見習い魔術師、倒されますけど、効果を発動！対象は、また見習い魔術師です」
また見習い魔術師か…となると、次に俺のモンスターで殴って倒せば、今度は本命がやってくる可能性だって…その時俺にはもう殴るモンスターがいない…ここはもう1ターン様子を見るか。
「俺はこのまま、ターンエンドだ」

現状

高町なのは　　ＬＰ８０００　　手札４枚
フィールド上　　伏せモンスター（魔術師）１体　　伏せカード１枚

関口達也　　ＬＰ８０００　　手札４枚
フィールド上　　ブレイカー１体　カイクウ１体　　伏

せカード1枚

「私のターン、ドロー！」
そろそろ向こうも動いてきてくれそうだな。まぁもし動かないようなら、俺がこのまま押していくだけだが。
「…私は手札から魔法カード「精神操作」を発動！対象はタツヤさんのフィールド上の霊滅術師　カイクウです」

《精神操作（せいしんそうさ）／Ｍｉｎｄ　Ｃｏｎｔｒｏｌ》
通常魔法
このターンのエンドフェイズ時まで、
相手フィールド上に存在するモンスター1体のコントロールを得る。
このモンスターは攻撃宣言をする事ができず、リリースする事もできない。

精神操作…って言うことは、あのデッキは恐らくシンクロデッキ…しかも見習い魔術師がいることを加味すると…まさか！？　オイオイ、今日は厄日かよ。
「更に私は、手札からクロック・リゾネーターを召喚！そして、霊滅術師　カイクウとチューニング。行きます！シンクロ召喚、アーカナイト・マジシャン！！」

《アーカナイト・マジシャン／Ａｒｃａｎｉｔｅ　Ｍａｇｉｃｉａｎ》
シンクロ・効果モンスター
星7／光属性／魔法使い族／攻　４００／守１８００
チューナー＋チューナー以外の魔法使い族モンスター1体以上
このカードがシンクロ召喚に成功した時、
このカードに魔力カウンターを2つ置く。
このカードに乗っている魔力カウンター1つにつき、

このカードの攻撃力は１０００ポイントアップする。
また、自分フィールド上に存在する魔力カウンターを１つ取り除く事で、
相手フィールド上に存在するカード１枚を破壊する。

「更に、罠カード「漆黒のパワーストーン」を発動！このカードの効果で、アーカナイト・マジシャンに魔力カウンターを一つ乗せます」

《漆黒（しっこく）のパワーストーン／Ｐｉｔｃｈ－Ｂｌａｃｋ　Ｐｏｗｅｒ　Ｓｔｏｎｅ》
永続罠
発動後、このカードに魔力カウンターを３つ置く。
自分のターンに１度、このカードに乗っている
魔力カウンター１つを取り除き、フィールド上に
表側表示で存在するこのカード以外の魔力カウンターを
置く事ができるカード１枚に魔力カウンターを１つ置く事ができる。
このカードに乗っている魔力カウンターが全て無くなった時、このカードを破壊する。

「そしてアーカナイト・マジシャンの効果発動！漆黒のパワーストーンに乗っている魔法カウンターをそれぞれ１個ずつ使うことで、タツヤさんのフィールド上の魔導戦士ブレイカーと、伏せカードを破壊します」
くっ…俺の伏せカードは「奈落の落とし穴」…アーカナイトは出た時の攻撃力が４００だからな…コイツの効果が効かない…
「最後に、見習い魔術師を反転召喚！効果でアーカナイト・マジシャンに魔法カウンターを一つ乗せます」
これでアーカナイト・マジシャンの攻撃力は４４００。オイオイ…どこぞの神様すら超えてるじゃないか。

「じゃあ、バトルフェイズです！私は、見習い魔術師と、アーカナイト・マジシャンでタツヤさんにダイレクトアタック！！」
「ぐっ…！？」

関口達也　　ＬＰ８０００　↓　３２００

「私はカードを１枚セット。ターンエンドです」

「俺のターン…ドロー！」
随分痛い攻撃を食らっちまったな…けど、まだやられた訳じゃない。
ことデュエルに関しては、俺は諦めが悪いぜ。
「俺は手札からクルセイダー・オブ・エンディミオンを召喚！」

《クルセイダー・オブ・エンディミオン／Ｃｒｕｓａｄｅｒ　ｏｆ　Ｅｎｄｙｍｉｏｎ》
デュアルモンスター
星４／光属性／魔法使い族／攻１９００／守１２００
このカードは墓地またはフィールド上に表側表示で存在する場合、通常モンスターとして扱う。
フィールド上に表側表示で存在するこのカードを通常召喚扱いとして再度召喚する事で、
このカードは効果モンスター扱いとなり以下の効果を得る
●１ターンに１度、フィールド上に表側表示で存在する魔力カウンターを置く事ができるカード１枚に魔力カウンターを１つ置く事ができる。
この効果で魔力カウンターを置いたターンのエンドフェイズ時まで、このカードの攻撃力は６００ポイントアップする。

「そして、バトルフェイズに移行だ。俺はクルセイダー・オブ・エ

ンディミオンで、見習い魔術師に攻撃！」
「！…じゃあ、見習い魔術師の効果を発動します。対象は、魔草マンドラゴラです」

《魔草　マンドラゴラ／Ｍａｇｉｃａｌ　Ｐｌａｎｔ　Ｍａｎｄｒａｇｏｌａ》
効果モンスター
星２／闇属性／魔法使い族／攻　５００／守　２００
リバース：フィールド上に表側表示で存在する魔力カウンターを置く事ができるカード全てに魔力カウンターを１つ置く。

高町なのは　　ＬＰ８０００　↓　６５００

なるほどね、そいつの効果で、更にアーカナイト・マジシャンの攻撃力を維持しようってことか。
「俺は伏せカードを２枚セットしてターンエンドだ」

現状

高町なのは　　ＬＰ８０００　↓　６５００　　手札２枚
フィールド上　　アーカナイト１体　伏せモンスター（マンドラゴラ）１体　伏せカード１枚

関口達也　　ＬＰ８０００　↓　３２００　　手札２枚
フィールド上　　エンディミオン１体　　伏せカード２枚

「私のターン、ドロー！…まずは、アーカナイト・マジシャンの効果発動です！魔力カウンターを１つ取り除いて、クルセイダー・オブ・エンディミオンを破壊！」
「させねえよ！速攻魔法カード「デュアルスパーク」発動！クルセイダー・オブ・エンディミオンをリリースし、アーカナイト・マジシャンを破壊するぜ」

《デュアルスパーク／Ｇｅｍｉｎｉ　Ｓｐａｒｋ》
速攻魔法
自分フィールド上に表側表示で存在する
レベル４のデュアルモンスター１体をリリースし、
フィールド上に存在するカード１枚を選択して発動する。
選択したカードを破壊し、自分のデッキからカードを１枚ドローする。

「そ…そんな！？」
「更に、俺は効果でカードを一枚ドローする」
相変わらずパネぇ能力のカードだよな。俺、このカードが相手に使われるのが嫌なカード？１かも。
「…私はこのまま、ターンエンドです」

「俺のターン、ドロー！俺は手札からクルセイダー・オブ・エンディミオンを召喚！そのままバトルフェイズに移行だ。クルセイダー・オブ・エンディミオンで伏せモンスターに攻撃！」
「…リバース効果は対象が無いので不発ですね。マンドラゴラの守備力は２００なので破壊されます」
「俺はこのままターンエンドだ」

現状

高町なのは　ＬＰ６５００　手札３枚
フィールド上　モンスター　ナシ　伏せカード１枚

関口達也　ＬＰ３２００　手札３枚
フィールド上　エンディミオン１体　伏せカード１枚

「私のターン…ドロー！…私はこのままターンを終了します」
なのはちゃんの動きが完全に止まったな…手札事故か…それとも、何かを待ってるのか…どちらにせよ、今が好機！

「俺ターン、ドロー！俺は手札から、ダーク・エルフを召喚！」

《ダーク・エルフ／Ｄａｒｋ　Ｅｌｆ》
効果モンスター
星４／闇属性／魔法使い族／攻２０００／守　８００
このカードは１０００ライフポイント払わなければ攻撃できない。

「更に、バトルフェイズに移行だ。２体のモンスターで、なのはちゃんにダイレクトアタック！俺もダーク・エルフの効果で、１０００ＬＰダメージを受けるけどね」
「うぅ…」

高町なのは　ＬＰ６５００　↓　２６００
関口達也　ＬＰ３２００　↓　２２００

「俺はこれで、ターンエンドだ」

現状
高町なのは　ＬＰ６５００　↓　２６００

手札４枚　　伏せカード
フィールド上　モンスター　ナシ
１枚

関口達也　　ＬＰ３２００　↓　２２００
手札３枚
フィールド上　エンディミオン１体　ダーク・エルフ１体
伏せカード１枚

「私のターン、ドロー！（このままじゃ、ジリ貧だね……でも、まだ負ける訳にはいかない！フェイトちゃんやアキラ君と約束したもん…お互いと勝負するまで、絶対負けないって！だから私に勇気を貸して…レイジングハート。この人を倒せるぐらいの勇気を！！）
私は、永続罠カード「リミット・リバース」を発動します。対象は墓地にいるアーカナイト・マジシャン！」

《リミット・リバース／Ｌｉｍｉｔ　Ｒｅｖｅｒｓｅ》
永続罠
自分の墓地から攻撃力１０００以下のモンスター１体を選択し、攻撃表示で特殊召喚する。
そのモンスターが守備表示になった時、そのモンスターとこのカードを破壊する。
このカードがフィールド上から離れた時、そのモンスターを破壊する。
そのモンスターが破壊された時このカードを破壊する。

「更に、手札から魔力掌握を発動！対象は、私のフィールド上に存在するアーカナイト・マジシャンです！」

《魔力掌握／Ｓｐｅｌｌ　Ｐｏｗｅｒ　Ｇｒａｓｐ》

通常魔法
フィールド上に表側表示で存在する魔力カウンターを
置く事ができるカード1枚に魔力カウンターを1つ置く。
その後、自分のデッキから「魔力掌握」1枚を手札に加える事ができる。
「魔力掌握」は1ターンに1枚しか発動できない。

「流石にそいつは許せないな！速攻魔法カード「月の書」発動。アーカナイト・マジシャンを裏側守備表示にするよ」
「…！魔力掌握の効果が失敗に……私はカードを1枚セット。ターンエンドです」

「俺のターン…ドロー！」
おっ…やっと来たぜ切り札その2！もっと早く来てくれたら申し分なかったんだけどな。しかし、相手のフィールド上には守備力1800のアーカナイトが1体…上手くいけばこのターンで終わるけど…じっくり攻めた方がより確実！
「俺はこのままバトルフェイズに移行だ。クルセイダー・オブ・エンディミオンでアーカナイト・裏守備になっているアーカナイト・マジシャンに攻撃！」
「私は、罠カード「バスター・モード」を発動！！アーカナイト・マジシャンをリリースして、デッキからアーカナイト・マジシャン／バスターを特殊召喚します！」

《バスター・モード／Ａｓｓａｕｌｔ　Ｍｏｄｅ　Ａｃｔｉｖａｔｅ》
通常罠
自分フィールド上に存在する
シンクロモンスター1体をリリースして発動する。

リリースしたシンクロモンスターのカード名が含まれる
「／バスター」と名のついたモンスター1体を
自分のデッキから攻撃表示で特殊召喚する。

《アーカナイト・マジシャン／バスター／Ａｒｃａｎｉｔｅ　Ｍａｇｉｃｉａｎ／Ａｓｓａｕｌｔ　Ｍｏｄｅ》
効果モンスター
星９／光属性／魔法使い族／攻　９００／守２３００
このカードは通常召喚できない。
「バスター・モード」の効果でのみ特殊召喚する事ができる。
このカードが特殊召喚に成功した時、
このカードに魔力カウンターを２つ置く。
このカードに乗っている魔力カウンター１つにつき、
このカードの攻撃力は１０００ポイントアップする。
このカードに乗っている魔力カウンターを２つ取り除く事で、
相手フィールド上に存在するカードを全て破壊する。
また、フィールド上に存在するこのカードが破壊された時、
自分の墓地に存在する「アーカナイト・マジシャン」１体を特殊召喚する事ができる。

「…！へぇ…久しぶりに見たな。／バスター使いの決闘者なんて、なるほど中々やるねなのはちゃん。モンスターが特殊召喚されたため、バトルフェイズが巻き戻る。俺のフィールド上にはそのモンスターに勝てるモンスターがいないからな。このままバトルフェイズを終了。俺はカードを２枚セット、ターンエンドだ」

現状

高町なのは　　ＬＰ２６００　　手札２枚
フィールド上　　アーカナイト／バスター１体　　伏せカー

ド　ナシ　永続罠リミット・リバース1枚

関口達也　　ＬＰ２２００　　手札２枚
フィールド上　　エンディミオン1体　　ダーク・エルフ1体
　伏せカード2枚

「私のターン、ドロー！（タツヤさんの残りＬＰは２６００。アーカナイトの効果を使ってこの手札のＴＨＥ・トリッキーと2体で攻撃すれば…私の勝ちだ！）私は、アーカナイト・マジシャン／バスターの効果を発動します！魔力カウンターを2個取り除いて、タツヤさんのフィールド上のカードをすべて破壊します！」
「悪いけど…そりゃ無理だよ、永続罠カード「スキルドレイン」を発動！フィールド上のすべてのモンスターは効果を無効化される。よってアーカナイトの効果も失敗に終わるよ」

《スキルドレイン／Ｓｋｉｌｌ　Ｄｒａｉｎ》
永続罠
１０００ライフポイントを払って発動する。
このカードがフィールド上に存在する限り、
フィールド上に表側表示で存在する効果モンスターの効果は無効化される。

「そんな…！？でも…私は手札の「簡易融合」墓地に捨て、手札からＴＨＥ　トリッキーを特殊召喚！」

《ＴＨＥ　トリッキー／Ｔｈｅ　Ｔｒｉｃｋｙ》
効果モンスター
星５／風属性／魔法使い族／攻２０００／守１２００
このカードは手札を1枚捨てて、手札から特殊召喚する事ができる。

「アーカナイト・マジシャン／バスターを守備表示に変更、そしてバトルフェイズです。ＴＨＥ　トリッキーで、クルセイダー・オブ・エンディミオンに攻撃！」
「罠カード「聖なるバリアミラーフォース」発動！ＴＨＥ　トリッキーは破壊されるね」
「うっ……私はこのままターンエンドです」

「俺のターン…ドロー！…ゴメンなのはちゃん。だけど、最初に言ったとおり手加減はしない。俺は手札から魔法カード「地砕き」を発動。アーカナイト・マジシャン／バスターを破壊する」

《地砕き／Ｓｍａｓｈｉｎｇ　Ｇｒｏｕｎｄ》
通常魔法
相手フィールド上に表側表示で存在する守備力が一番高いモンスター1体を破壊する。

「…アーカナイト・マジシャン／バスターの効果発動！墓地にある、アーカナイト・マジシャンを守備表示で特殊召喚します」
「俺は手札から、魔導戦士ブレイカーを召喚、そしてバトルフェイズ！ダーク・エルフでアーカナイト・マジシャンに攻撃！そして、残りの2体でなのはちゃんにダイレクトアタック！！」
「…二人とも…ゴメン」

高町なのは　　ＬＰ２６００　→　０

関口達也（スキドレ魔法使い？デッキ）　　ＶＳ　　高町なのは（アーカナイト・マジシャン／バスターデッキ）

勝者　関口達也

「いい勝負をありがとう、なのはちゃん」
「いいえ、本当は勝ちたかったですけど…私も楽しかったです」
そうして、ぎこちない笑顔を見せるなのはちゃん。はぁ…やっぱ気まずいぜ。
「けど、私の友達達はまだ残ってると思いますから、関口さんも気をつけたほうがいいですよ。じゃあ、私は友達達の結果を見てきます」
友達か…もしかして、その子もなのはちゃんと同じぐらいの子なんだろうか?まっ…佐天ちゃんの結果を見に行くかな。心配はないと思うけど。

そして、これは佐天ちゃんが勝負してる場所についた。丁度勝負がついたみたいだが…俺はその光景を見てしばし唖然とした。
「…私の負けですね…ありがとうございました」

佐天涙子　（ローレベルデッキ）　　ＶＳ　　小池輝
（エーリアンデッキ）

勝者　小池輝

佐天ちゃんが負けた…!?
それにあの対戦…アイツは…アキラ?
それは、どう見ても向こうの世界で一緒に時を過ごした決闘者仲間である俺の後輩。小池輝の姿だった。どういうこった、この世界に来てるのは俺だけじゃないのか?
アイツは俺に気づいてなかったのか、そのまま佐天ちゃんに1礼してその場を去っていった。
俺の中で、何かが動き出した。そんな気がした。

第十三話　ＶＳ高町なのは（後書き）

第十三話投稿完了です。

さぁ、ここからドンドン他のキャラを出して行きたいな。

第十四話　因果応報？　つ因果切断で

なんて、思ったりもしてたがそんなことも無かったぜ。俺がこっちに飛ばされてきてんだ、アイツもこっちにいたってなんの不思議もねえや。え、根拠？？ねえよそんなもん。ともかく、アイツはあとでとっ捕まえて色々話を聞かないとな。

それより今は、佐天ちゃんに話しかけよう。

「あはは…負けちゃいましたね、私…」

俺に気づいたのか、佐天ちゃんはこっちに歩いてきた。無理に笑おうとしてるけど、あまりにもぎこちない。

「そうだな、そっちから約束を持ちかけて来たのに、まさか負けてるなんてな～」

「うっ…いや～…返す言葉も無いです」

「……フッ、そんなしょぼくれた顔すんなよ。冗談だって、決闘者やってりゃ負けるのなんてしょっちゅうさ。問題は、その敗北を生かせるか…だろ」

「でも、関口さんが負けた所…私見たこと無いんですけど」

「俺だって負けてるぜ…少なくとも、学園都市に行ってからも1度負けたよ」

「え…！？その相手って一体…？」

「一方通行（アクセラレータ）。流石第一位って言われるだけの事はあるね」

「そんな人とまで決闘してたんですか…」

「まぁ、成り行きでね。今度リベンジしたいんだけど、佐天ちゃんも一緒くるかい？」

「わ…私が…ですか！？…お供します！」

よし、少しは気持ちが紛れてきたみたいだな。

「けど、約束破ったのは事実だしな～、佐天ちゃんには後で飯でも奢って貰おうか」

「むっ…年下に集る高校生ってどうなんですか？」

「ハハッ…ロクなもんじゃないね」

「そういえば、佐天ちゃんのさっきの相手…」
「あ～…なんか、Dブロックで勝ち抜いてる爬虫類使いってあの人だったみたいですね」
「名前は分かる？」
「確か、小池輝って言ってました」
「そっか…やっぱりな…」
「？…もしかして、お知り合いなんですか？」
「まぁね、俺の後輩みたいなもんかな。決闘者としてはずっと、戦って来たライバルでもあり、身内でもある。まさかここにいるなんて思っても見なかったけど」
「そうなんですか…あはは、通りで強いな～って思いました！いや～…関口さんとずっと戦って来た人なんだから当たり前ですよね～」
「なに言ってんだよ、佐天ちゃんだって、俺にとっちゃとっくにライバルで…大事な身内だぜ」
「え…あ…はっ…恥ずかしいセリフ禁止ー！！！」
「あはは～、顔真っ赤だぜ。佐天ちゃん…まっ…安心しろよ、仇は俺が絶対取ってやる」
「…よろしくお願いします」
さって、そろそろ次の試合の時間か。次は準決勝だったな…相手は一体どんな奴なんだか…

「オイ、どうしてこうなった」
俺の現状整理。
とりあえず、今度の対戦相手らしき人物　金髪ツインテールの少女　しかも、何か睨まれてる気がする。
もしかして、なのはちゃんの友達かな？だとしたら、恨まれてるの

も判る気がするけど。とりあえず話しかけて見るか。
「えっと…君が俺の次の対戦相手だよね？」
「…はい、貴方がなのはを倒した決闘者ですね？」
はいビンゴー！こりゃ仕方ないな…。
「…ああ、君がなのはちゃんの友達だね。とりあえず、俺の名前は関口達也、よろしく」
「…フェイト・テスタロッサです」
あ～…会話が続かない。当然か、第一印象が余りにも悪すぎるよな～。向こうにとっちゃ、俺は友達を倒した、憎い仇なわけだし。けどこんな子に敵意を向けられるのは、いい気分はしないよ。なんかいい手は無いものか。
――思考中――　思考完了。　結果　無理だな、俺にそこまですごい交渉術は無いし。何よりこのフェイトちゃんは、友達のなのはちゃんのために必死に頑張ろうとしてるんだ。その心は尊重してあげないとね、ここは俺が敵に徹するとしましょうか。
「さて、フェイトちゃん、君が敵討ちしようって言う気持ちは分かるけどさ、それは俺も同じなんだ。その為には君を倒さなければいけない…だから、悪いけど君に負けるつもりはまったくない」
「タツヤ…貴方は私が倒します！決勝戦に行くのは私だ！！」

「決闘（デュエル）！！」
「決闘（デュエル）！！」

関口達也（スキドレメタビ？）　ＶＳ　フェイト・テスタロッサ（？？？）

「じゃっ…先攻後攻はコイントスで…フェイトちゃんは裏と表どっちがいい？」
「裏で」
「ＯＫ…結果は裏、フェイトちゃんが先攻だね」

「分かりました、じゃあ私のターン、ドロー！私は手札から魔法カード「増援」を発動！デッキから異次元の女戦士を手札に加えます」

《増援／Ｒｅｉｎｆｏｒｃｅｍｅｎｔ　ｏｆ　ｔｈｅ　Ａｒｍｙ》
通常魔法
自分のデッキからレベル４以下の戦士族モンスター１体を手札に加える。

《異次元の女戦士／Ｄ．Ｄ．　Ｗａｒｒｉｏｒ　Ｌａｄｙ》
効果モンスター
星４／光属性／戦士族／攻１５００／守１６００
このカードが相手モンスターと戦闘を行った時、
そのモンスターとこのカードをゲームから除外する事ができる。

「更にモンスターを１体セット。伏せカードを１枚セットしてターンエンドです」

「俺のターン、ドロー！」
さて…今回も後攻なわけだけど、今回は相手のデッキが割り出しやすいな。増援を入れてるってことは、ある程度デッキに戦士が入ってるってことだ。しかもサーチ対象は異次元の女戦士…おそらくデッキは次元斬か？だとすれば、さっきのなのはちゃんとの戦いで使えなかった、あのカードが使える。
「俺は、手札から魔導戦士ブレイカーを召喚！そして効果を発動したい。ブレイカーに乗っている魔法カウンターを１枚取り除き、フェイトちゃんの伏せカードを破壊するよ」
「っ…分かりました、伏せカードは次元幽閉です」
「そして俺は、手札から魔法カード「テラ・フォーミング」を発動

！デッキから手札に加えるカードはこれだ！「魔法族の里」そしてそのまま発動する！」

《テラ・フォーミング／Ｔｅｒｒａｆｏｒｍｉｎｇ》
通常魔法
自分のデッキからフィールド魔法カード１枚を手札に加える。

《魔法族の里／Ｓｅｃｒｅｔ　Ｖｉｌｌａｇｅ　ｏｆ　ｔｈｅ　Ｓｐｅｌｌｃａｓｔｅｒｓ》
フィールド魔法
自分フィールド上にのみ魔法使い族モンスターが存在する場合、相手は魔法カードを発動する事ができない。
自分フィールド上に魔法使い族モンスターが存在しない場合、自分は魔法カードを発動することができない。

「これは…フィールド魔法？」
「そうだ、効果は…まぁすぐに自分の目で確かめることになるさ。俺はカードを２枚セット、ターンエンドだ」

現状

フェイト・テスタロッサ　　ＬＰ８０００
　手札４枚
フィールド上　　伏せモンスター　１体　　伏せカード　ナシ

フィールド魔法　　魔法族の里

関口達也　　ＬＰ８０００
　手札２枚

フィールド上　　ブレイカー　1体
せカード2枚　　伏

「私のターン、ドロー！（あのフィールドカードの効果は分からないけど、私は前に進むだけだ！）私は、魔法カード…！？どうして…発動できない。…まさか！？」
「気づいたみたいだね、このフィールドカード「魔法族の里」がそれだよ。俺のフィールド上にのみ魔法使い族がいる場合、相手は魔法カードを発動することが出来ない。まっ…俺のフィールド上から魔法使い族がいなくなれば、俺も魔法カードが使えなくなるんだけどね」
「なるほど…つまり、タツヤの魔法使い族モンスターをすべて倒せばいい」
「そういうことだね、その分俺も本気で守らせてもらうけど」
「私は、伏せモンスターをリバース。異次元の女戦士を攻撃表示！そしてバトルフェイズ、異次元の女戦士で、魔導戦士ブレイカーに攻撃！」
「俺は罠カード「次元幽閉」を発動！異次元の女戦士を除外するぜ」

次元幽閉／Ｄｉｍｅｎｓｉｏｎａｌ　Ｐｒｉｓｏｎ》
通常罠
相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。
その攻撃モンスター1体をゲームから除外する。

「…私は、モンスターを1体セット。ターンエンドだ」

「俺のターン、ドロー！」
次元斬は単体除去系の魔法カードを積んでる場合が多いからな…フ

ェイトちゃんも大分動きづらそうだ。とは言っても、こっちとしてもあまり相性のいい相手とはいえないね。向こうは1：1での除去に長けてる。俺のフィールド上に魔法使い族がいなくなれば、俺に明らかに不利…まぁそれも、スキルドレインを引ければほぼ怖くないけどな。

「俺は手札から、霊滅術師　カイクウを召喚。更にバトルフェイズに移行、霊滅術師　カイクウで伏せモンスターに攻撃！」

「私の伏せモンスターは、D．D．アサイラント…。守備力は1600なので破壊されるけど、効果発動戦闘した相手とこのカードを除外する！」

《D．D．アサイラント／D．D．　Assailant》
効果モンスター
星4／地属性／戦士族／攻1700／守1600
このカードが相手モンスターとの戦闘によって破壊された時、そのモンスターとこのカードをゲームから除外する。

「だよな～…だが、魔導戦士ブレイカーの攻撃は通るよな。魔導戦士ブレイカーでフェイトちゃんにダイレクトアタック！！」

「うっ…」

フェイト・テスタロッサ　　LP8000　↓　6400

俺の魔法使いが切れるか…フェイトちゃんの除去が切れるか…この決闘はそういう勝負になるな。

「俺はカードを1枚セット、ターンエンドだ」

現状

フェイト・テスタロッサ　　LP8000　↓　6400

手札４枚

フィールド上　　モンスター　ナシ
伏せカード　ナシ

フィールド魔法　　魔法族の里

関口達也　　ＬＰ８０００
手札１枚

フィールド上　　ブレイカー１体
伏せカード２枚

第十四話　因果応報？　つ因果切断で（後書き）

第十四話投稿完了です。

次元斬最近見かけないなぁ～

第十五話　VSフェイト・テスタロッサ　前編

現状

フェイト・テスタロッサ　　ＬＰ８０００　→　６４００
　　手札４枚　　モンスター　ナシ
フィールド上
　伏せカード　ナシ

フィールド魔法　　魔法族の里

関口達也　　ＬＰ８０００
　　手札１枚
フィールド上　　ブレイカー１体
　伏せカード２枚

「私のターン、ドロー！（このフィールド、思った以上に厄介だ…とにかく、魔法使い族をフィールドに出すか、タツヤのフィールド上のモンスターを破壊しないと。フィールドカードを除去するカードは、魔法に多い…このまま突破できなきゃ、私の負け）私は、モンスターを1体セット。更に伏せカードを2枚セットしてターンエンド」

「俺のターン、ドロー！」
フェイトちゃんは完璧に守りに入ったな。恐らく俺のバックが、十中八九さっきみたいなカウンター除去だと思ってるんだろう。こっちとしては、手札が少ない分向こうが止まってくれるのは好都合なんだが…向こうも2枚伏せがあるからな。モンスターのほうは、異

次元の女戦士かD・D・アサイラント、もしくは異次元の戦士だと考えておいた方がいい。そしてスペック上、今の魔導戦士ブレイカーじゃ異次元の戦士としか相打ちが取れない…まぁ女戦士だった場合、無理やり除外してくる可能性もあるけど。

他にも怖いカードはある。激流葬だ…俺がここでモンスターを出して、発動されると厄介だ。俺は召喚権を使っちまうし、魔法使い族を用意できずにターンを終了するしかない。そうなれば、フェイトちゃんが次のターンでサイクロン等を使ってくるかもしれない。さっきの問答を見るに、何かしらの魔法カードが手札にあることは間違いないんだ。相手のデッキのことを考えると、地割れ、地砕きみたいな1：1を取れる除去は結構入ってるだろうし、そっちの可能性も否定できない。

そこまで加味した上で、俺がどう動くかだが…様子見だな。こっちも手札が欲しい、幸いバックもあることだし、何よりこれ以上魔法使いを消耗するのは痛い。さっきは向こうが次元斬である可能性を濃くするために一番相手に刺さりそうに無いカイクウを犠牲にしたけど、本来ああいうゴリ押しは長く続かないからな。

「俺は、このままターンエンドだよ」

現状

フェイト・テスタロッサ　　ＬＰ８０００　→　６４００
　　手札２枚
フィールド上　　伏せモンスター１体
　　伏せカード２枚

フィールド魔法　　魔法族の里

関口達也　　ＬＰ８０００
　手札２枚

フィールド上　　ブレイカー1体
伏せカード2枚

「（タツヤも動きを止めてきた…？当然か。このままドローしていっても、魔法カードが使えない分、私の方が手札事故になる可能性が高い…。タツヤはそれを分かってるから、長期戦の方が有利って判断したんだ。けど、逆を言えば、今のタツヤにはあまり手数がないのかも。攻めるなら…今なのかもしれない）私のターン、ドロー！…（！このカードは、なのはがくれた……そうだね、いつでもなのはは私を助けてくれた。ありがとう…なのは、この攻撃は…必ず通すから！！）私は罠カード「トラップ・スタン」を発動！そして、セットしていた異次元の戦士をリリースして手札から異次元の騎士アラヤをアドバンス召喚！」

《異次元の騎士アラヤ》
星８／闇属性／戦士族／攻２７００守１６００
このカードは「異次元」と名のつくモンスターをリリースすることでアドバンス召喚することが出来る。
１ターンに１度、相手のフィールド上のモンスターを１体選択し除外することが出来る。
このカードが墓地に送られた時、自分の除外されているモンスターを１体選択し
手札に加えることが出来る。

「そして、異次元の騎士アラヤの効果発動！タツヤのフィールド上にいる魔導戦士ブレイカーを除外！」
「っ…分かった」
ちっ…俺も見たこと無いカードか…恐らくこっちの世界だけのカードだろう。なら、もしかしたらまだ俺の知らない効果もあるかもな。

「更に私は手札から装備魔法カード「バリアジャケット」を異次元の騎士アラヤに装備する！」

《バリアジャケット》
装備魔法
このカードを装備したモンスターが、魔法・罠カードの効果によって墓地に送られる時、代わりにこのカードを墓地に送ることが出来る。1ターンに一度、このカードが墓地にある時、ＬＰを１０００払うことで
このカードを自分のフィールド上のモンスターに装備させることが出来る。

っ…また俺の知らないカードか。厄介な効果じゃなければいいんだが…
「バトルフェイズ、異次元の騎士アラヤでタツヤにダイレクトアタック！」
「うわっ…！？」

関口達也　　ＬＰ８０００　→　５３００

「私はこのまま、ターンエンドだ」

「俺のターン、ドロー！」
さて…問題はここからだな。今の俺は魔法が使えない…これは由々しき事態だ。しかもあのモンスター、1ターンに1度モンスターを除外できるんだったな。恐らく裏守備も除外できるんだろう。となれば、モンスターを出すのは愚作…ここは罠で乗り切るしかねえ。
「俺は、カードを1枚セット。ターンエンドだ」

現状

フェイト・テスタロッサ　　ＬＰ　６４００
　　手札１枚
フィールド上　　アラヤ１体
　　伏せカード１枚
装備魔法バリアジャケット　　アラヤに装備

フィールド魔法　　魔法族の里

関口達也　　ＬＰ８０００　→　５３００
　　手札２枚
フィールド上　　モンスター　ナシ
　　伏せカード３枚

「（よし、これでタツヤのフィールド上にはモンスターがいない！このまま一気に攻める！）私のターン、ドロー！私は手札から異次元の女戦士を召喚！そのままバトルフェイズへ！私は異次元の女戦士でタツヤにダイレクトアタック！」

「罠カード「聖なるバリアー―ミラーフォース―」発動！フェイトちゃんのフィールド上の攻撃表示のモンスターは全滅するぜ」

「！！…私は装備魔法カード「バリアジャケット」の効果発動！魔法・罠カードによって異次元の騎士アラヤが墓地に送られる代わりに、このカードを墓地に送る」

！…なるほど、あのカードは魔法・罠に耐性を持たせることが出来るカードか。

「じゃあバトル続行だ。私は異次元の騎士アラヤで、タツヤにダイレクトアタック！！」

「ぐっ…」

関口達也　　ＬＰ５３００　↓　２６００

「そして、墓地にあるバリアジャケットの効果を発動。ＬＰを１００払って、再びアラヤに装備！」

フェイト・テスタロッサ　ＬＰ６４００　↓　５４００

「私はこのまま、ターンエンドだ」

やれやれ…しかもあのカード、墓地に落ちても再利用できるのかよ…こりゃやるとしたら、除外するぐらいしかないか…面倒なことこの上ないな。ＬＰも残り少なくなってきた…これは本格的に不味いぞ。

俺があのモンスターに対策が取れるとしたら…頼む…あのカード来てくれっ！

「俺のターン、ドロー！！…俺は手札から、クルセイダー・オブ・エンディミオンを召喚！そしてカードを１枚セットしてターンエンドだ」

現状

フェイト・テスタロッサ　　ＬＰ　６４００　↓　５４００

フィールド上　　手札１枚

伏せカード１枚　　アラヤ１体

装備魔法バリアジャケット　　アラヤに装備

フィールド魔法　　魔法族の里

関口達也

手札1枚

フィールド上

伏せカード3枚

LP5300 → 2600

エンディミオン1体

第十五話　VSフェイト・テスタロッサ　前編（後書き）

第十五話投稿完了です。

オリカを2枚登場させてみました。ちょっと能力強すぎるかな?その辺の指摘がありましたら、是非お願いします。

ちなみに、バリアジャケットのイラストはなのはのバリアジャケットってことで！

第十六話　VSフェイト・テスタロッサ　後編

フェイト・テスタロッサ　　ＬＰ　６４００　→　５４００
手札１枚
フィールド上　　アラヤ１体
伏せカード１枚
装備魔法バリアジャケット　アラヤに装備

フィールド魔法　　魔法族の里

関口達也　　ＬＰ５３００　→　２６００
手札１枚
フィールド上　　エンディミオン１体
伏せカード３枚

「私のターン、ドロー！（なんで今になってモンスターを？異次元の騎士アラヤの効果で除外されるのに…いや、この人はそんな無駄なことはしないはず…何か考えてるんだ。もし魔法・罠で何かしてきても、アラヤがやられることは無い…大丈夫、私は強気で攻めればいいんだ）私は、異次元の騎士アラヤの効果を発動！」
「そいつは駄目だな、罠カード「スキルドレイン」発動！フィールド上のモンスター効果はすべて無効化だ…俺のなけなしのＬＰも減ってくけどな」

関口達也　　ＬＰ２６００　→　１６００

「…！（効果無効化の罠…だけど、アラヤの攻撃力なら…っ！）私のバトルフェイズ、異次元の騎士アラヤで、クルセイダー・オブ・

エンディミオンに攻撃だっ！！」
「ＯＫ、じゃあ俺はダメージステップ時に手札のオネストを墓地に送ることで、効果を発動するぜ」

《オネスト／Ｈｏｎｅｓｔ》
効果モンスター
星４／光属性／天使族／攻１１００／守１９００
自分のメインフェイズ時に、フィールド上に表側表示で存在するこのカードを手札に戻す事ができる。
また、自分フィールド上に表側表示で存在する光属性モンスターが戦闘を行うダメージステップ時にこのカードを手札から墓地へ送る事で、
エンドフェイズ時までそのモンスターの攻撃力は、戦闘を行う相手モンスターの攻撃力の数値分アップする。

「オネ…スト…」
「そうだ、コイツの効果でエンディミオンの攻撃力は異次元の騎士アラヤの攻撃力分アップする」
「…異次元の騎士アラヤの効果で、墓地に送られた時除外されているモンスターを1体手札に加えます。私が選ぶのは、異次元の女戦士です」

フェイト・テスタロッサ　　ＬＰ５４００　→　３５００

だが、スキルドレインの効果でＤ・Ｄ・アサイラントの効果は発動しない。精々壁ぐらいにしかならないはずだ。
「私は、モンスターを1体セットしてターンエンド。（大丈夫…まだ可能性が無い訳じゃない、布石は打った。次のターンあのカードを引ければ…）」

「俺のターン…ドロー！」
この二重ロックが決まれば、もう殆ど向こうには手が無いはず…後恐れるのは罠ぐらいだけど…その心配もなさそうだな。
「俺は手札から、ダーク・エルフを召喚。そしてバトルフェイズに移行だ、クルセイダー・オブ・エンディミオンで伏せモンスターに攻撃だ」
「…伏せモンスターは異次元の女戦士です。効果は発動されず、そのまま墓地に送られます」
「更に、ダーク・エルフでフェイトちゃんにダイレクトアタック！」
「うっ…」

フェイト・テスタロッサ　　ＬＰ３５００　↓　１５００

「俺はこのまま、ターンエンドだ」

フェイト・テスタロッサ　　ＬＰ５４００　↓　１５００
　　手札２枚
フィールド上　　モンスター　ナシ
　　伏せカード１枚

フィールド魔法　　魔法族の里

関口達也　　ＬＰ２６００　↓　１６００
　　手札１枚
フィールド上　　エンディミオン１体　ダーク・エルフ１体
伏せカード３枚

「私のターン……（手が震える…怖い…もしあのカードを引けなかったら…なのはの仇を取るって決めたのに…）」

「…どうした、フェイトちゃん。君も決闘者だろう?なら、自分のデッキを信じることだ。負け腰や弱気な心で臨めば、それがデッキに伝染する、悪い流れが続く。けど、自分のデッキを信じ自身を持ってドローすれば…そうすればきっと…デッキは君に応えてくれるだろう」

「!…そうだね、ありがとうタツヤ。私は信じる…私のデッキを!そしてタツヤを倒して決勝戦に行く!」

「うん…その粋だ。俺も全力で迎え撃つよ!」

「私のターン…ドロー!!……私は、墓地の異次元の騎士アラヤと異次元の女戦士を除外して手札からカオス・ソーサラーを特殊召喚!」

《カオス・ソーサラー/Ｃｈａｏｓ　Ｓｏｒｃｅｒｅｒ》
効果モンスター
星６/闇属性/魔法使い族/攻２３００/守２０００
このカードは通常召喚できない。
自分の墓地に存在する光属性と闇属性のモンスターを
１体ずつゲームから除外した場合に特殊召喚する事ができる。
１ターンに１度、フィールド上に表側表示で存在する
モンスター１体を選択してゲームから除外する事ができる。
この効果を発動するターン、このカードは攻撃する事ができない。

「(カオス・ソーサラーは魔法使い族。これで手札の地砕きと地割れを使える!この勝負、まだ分からない)」

「なるほどな、いい引きだフェイトちゃん。けど、悪いな…俺はその一歩先を行かせて貰う!俺は速攻魔法カード「デュアルスパーク」を発動!エンディミオンをリリースしてカオス・ソーサラーを破壊!更に、カードを１枚ドローする」

「っ…!?カオス・ソーサラーが…でも、まだ諦めない!私はこのまま、ターンエンドだ」

「俺のターン、ドロー！俺は、そのままバトルフェイズに移行！ダーク・エルフでフェイトちゃんにダイレクトアタック！！」
「罠カード「異次元からの帰還」を発動！」
「甘いぜ、カウンター罠「神の警告」発動！！そのカードを無効化する！」

《神の宣告／Ｓｏｌｅｍｎ　Ｊｕｄｇｍｅｎｔ》
カウンター罠
ライフポイントを半分払って発動する。
魔法・罠カードの発動、モンスターの召喚・反転召喚・特殊召喚のどれか１つを無効にし破壊する。

「攻撃は続行されるぜ、ダーク・エルフでダイレクトアタック！」
「…参りました」

フェイトテスタロッサ　　ＬＰ１５００　↓　０

関口達也　（里スキドレメタビ）　　ＶＳ　　フェイト・テスタロッサ　（次元斬）

勝者　関口達也

「負けちゃった…」
その場にへたり込むフェイトちゃん、きっと緊張が解けたんだろうな。ここは男として、フォローせねばなるまいて。
「お疲れ様、フェイトちゃん。いい決闘だったよ」
そう言って、俺はフェイトちゃんに手を差し伸べた。少し躊躇い勝ちにフェイトちゃんは俺の手を取る。

「あっ…はい、ありがとうございます」
「それにしても、次元斬なんていいデッキ使ってるじゃないか。俺の身内にはいないんだよなぁ～…1：1でどうアドを取りながら戦うか、すごくプレイングを要するデッキだし、その年で扱うなんてすごいよ」
ホント、なのはちゃんといいフェイトちゃんといい……小学生とは思えないね。
「そんなこと無いです…私なんてまだまだで…」
「いやいや…謙遜すんなって～♪」
そう言って俺は、フェイトちゃんの頭を優しく撫でてみた。…ありゃ、なんか俯いちゃったな……どうしよ…嫌だったのかな？
「まっ…また今度決闘しようぜ。フェイトちゃん達みたいな強い決闘者とはもっと決闘したいしな！」
「……はい、是非！」
さて…次は決勝戦か…相手はきっとアキラだろうな。積もる話もあるが、佐天ちゃんの仇だ。とりあえずブチ〇し確定ね。
そう考えながら、決勝戦の相手が待つ場所に行こうとした所後ろからフェイトちゃんの声が聞こえた。
「きっと、決勝戦の相手は私の友達です。関口さんもがんばってくださいね」
ん？友達…？？多分それは無いだろうと思うけど…けどフェイトちゃんも結構強かったからな～。アキラでもワンチャン負けることもあるか…。俺は前を向いたまま、後ろに手を振って決勝戦へと進んだ。

どうやら、相手は俺より先に終わってたみたいだな…俺を待ってるらしい、そしてその姿から、やはりアキラだと確信できる。さ～て、向こうが俺って気づいたら、どんな表情を見せてくれるかね。
「よ～う、アキラ。なんだかんだで久しぶりか？」

俺は出来るだけ自然に、まるで街中でふと会った友人に声を掛けるように、アキラの前に出た。
「ハッ…ハァ～!?…関口さん…ですよね?!?」
お～…いいリアクション見せてくれるね。どうやら予想以上に驚いてくれたみたいだ。
「お前もこっちの世界に来てたんだな。まぁ積もる話もあるが…そいつは後だ。今の俺は復讐鬼でね…とりあえずエーリアンをボコらずにはいられない。」
「…奇遇ですね、俺もそうなんですよ。なんかどこぞのメタビデッキに俺の友達がお世話になったようで」
「ほ～ぅ…そいつは奇遇だなぁ～!」
「ですね～、あははは…」

「んな訳で、ボコるわ。小便は済ませたか?神様にお祈りは?部屋の隅でガタガタ震えて命乞いする心の準備はOK?」
「下克上…バッチリ決めてあげますよ」

「決闘(デュエル)!!」
「決闘(デュエル)!!」

そんなこんなで、和やかなのか殺伐なのか、よく分からない空気で決闘が始まった。

第十七話　いんでぺんでんすでい　前編

関口達也　（里スキドレメタビデッキ）　ＶＳ　小池輝
（エーリアンデッキ）

「まずは、俺のターン！」
「いいえ、俺のターン！」
「ふざけるな！年長者を労われ！！」
「２．３年しか年違わないじゃないですか！こっちじゃ言ったモン勝ちなんですよ！」
「だったら先に言った俺が先攻だろ！俺のターン！」
「いいや、俺のｔ（ｒｙ」

１０分後

「はぁ…はぁ…駄目だコイツは不毛すぎる。普通にコインで決めようじゃねえか」
「はぁ…はぁ…いいですけど…イカサマとかしないでしょうね？」
「そんなこと出来るなら、俺は今頃手品師目指してます～！！」
「ですよねー」
「んじゃ行くぜ、お前裏と表どっちがいい？」
「じゃあ表で」
「あいよ……結果は裏、俺が先攻だな」
「分かりました」

「じゃあ、まずは俺のターンドロー！」
「つうか、何時ものデッキじゃないんですか？なんでも里メタビ使

ってるって聞いたんですけど」
「あ～…こっちに来てから新デッキ作ってな。まぁ昔作ったデッキの残骸を改良しただけだけど」
「昔…？それってもしかして、里ピk」
「あ～聞こえないな！それより、なんで里メタビだって知ってんだよ。まだフェイトちゃんぐらいにしか知られてないと思ったんだが」
まぁ、コイツの友達があの予選の中にいたってんなら話は別だが…
「あ～…それはですね～…」
「……ロリコン乙」
「ちょ！？…なんでそう先走るんですか！？こっちだって色々事情があったんですよ！！」
「やれやれ…身内から犯罪者が出るとはな…悲しいもんだ。まっ…冗談はさておいて、なるほどね…ってことはなのはちゃんやフェイトちゃんが、こっちのいう御坂ちゃん達みたいなもんなんだな…」
「…？どういうことです？？」
「気にするな。んじゃ俺は、手札からクルセイダー・オブ・エンディミオンを召喚。更に手札から魔法カード「テラ・フォーミング」を発動！デッキから「魔法族の里」を手札に加え、そのまま発動！」
「あ～…容赦ないっすね」
「てめーのエーリアンの動きは大概割れてるからな、さっさとケリ付けさせてもらうぜ。俺はカードを2枚セット、ターンエンドだ」

「俺のターン、ドロー！俺はモンスターを1枚セット。カードを2枚セットしてターンエンドです」
「オイどーしたwお得意の古代遺跡ははらねーのか？」
「イヤミはいいですから、さっさとドローしてください」

現状

関口達也　　ＬＰ８０００
手札２枚　　エンディミオン１体
フィールド上　　伏
せカード２枚

フィールド魔法　　魔法族の里

小池輝　　ＬＰ８０００
手札３枚
フィールド上　　伏せモンスター１体
せカード２枚　　伏

「俺のターン、ドロー！」
まっ…アイツのデッキのカードは大体割れてるんだがな。恐らく伏せはグレイかウォリアー…後ろに控えてる罠は毒蛇が多分あるだろうよ…惑星汚染ウイルスって可能性も否定できないな。この攻撃でＡカウンターを付けられる可能性は高い。無理にＬＰ削って、敵の手がまだ揃ってないことに賭けるか、それとも万全を期してＡカウンターを付けられるか…う～む…。向こうもアド損は避けたいだろ、ここはＡカウンターで手を打ってやるよ。
「俺はこのままバトルフェイズに移行、クルセイダー・オブ・エンディミオンで伏せモンスターに攻撃！」
「（やっぱモンスター出してこないよね～…惑星汚染ウイルスがあったらアド損だし…かといってここでぶっぱしたら、多分デュアルスパークでウマウマされるんだろーな）伏せモンスターは、エーリアン・ウォリアー。守備力が１０００だから破壊されるよ、その代わりクルセイダー・オブ・エンディミオンにＡカウンターが二つ付くよ」
「りょーかいだ。俺はこれでターンエンドだよ」

まっ…ここでブレイカーを出してバックを荒らすのもありだけど、激流葬喰らったら目も当てられないもんな。ここは最善を取るぜ。
「ターン終了時に罠カード「砂塵の大竜巻」発動！魔法族の里を破壊します」

《砂塵の大竜巻／Ｄｕｓｔ　Ｔｏｒｎａｄｏ》
通常罠
相手フィールド上に存在する魔法・罠カード1枚を選択して破壊する。
その後、自分の手札から魔法または罠カード1枚をセットする事ができる。

「！？…てめぇ…俺が里メタビだからってそのカード直前に積んできたな？」
「さ～て、何のことか分かりませんね」
「チッ…とにかくターンエンドだ」

「俺のターン、ドロー！俺はクルセイダー・オブ・エンディミオンのＡカウンターを2つ取り除いて、エーリアン・リベンジャーを特殊召喚！」

《エーリアン・リベンジャー／Ａｌｉｅｎ　Ｏｖｅｒｌｏｒｄ》
効果モンスター
星６／闇属性／爬虫類族／攻２２００／守１６００
このカードはフィールド上に存在するＡカウンターを2つ取り除き、手札から特殊召喚する事ができる。
1ターンに1度、相手フィールド上に表側表示で存在する全てのモンスターにＡカウンターを1つ置く事ができる。
Ａカウンターが乗ったモンスターは、

「エーリアン」と名のついたモンスターと戦闘する場合、
Aカウンター1つにつき攻撃力と守備力が３００ポイントダウンする。
「エーリアン・リベンジャー」は自分フィールド上に1体しか表側表示で存在できない。

「おーお、めんどくさいモンスターを出しやがるね」
「更に、エーリアン・リベンジャーの効果でクルセイダー・オブ・エンディミオンにAカウンターを一つ乗せるよ」
「おっと、そいつは許可出来んな。速攻魔法カード「デュアルスパーク」発動！クルセイダー・オブ・エンディミオンをリリースし、エーリアン・リベンジャーを破壊して、1枚カードをドローする」
「いいの？フィールドガラ空きになるけど」
「いいよ、ゴルガーでも何でも好きに出すといい。その代わり、無事で済む保障はしないけどな」
「…俺は手札から、魔法カード「光の護封剣」を発動！そしてターンエンド」

《光の護封剣／Ｓｗｏｒｄｓ ｏｆ Ｒｅｖｅａｌｉｎｇ Ｌｉｇｈｔ》
通常魔法
相手フィールド上に存在するモンスターを全て表側表示にする。
このカードは発動後、相手のターンで数えて3ターンの間フィールド上に残り続ける。
このカードがフィールド上に存在する限り、
相手フィールド上に存在するモンスターは攻撃宣言をする事ができない。

現状

関口達也　　ＬＰ８０００
手札４枚
フィールド上　　モンスター　ナシ　　伏せ
カード１枚

小池輝　　ＬＰ８０００
手札２枚
フィールド上　　モンスター　ナシ　　伏せ
カード１枚　光の護封剣１枚

「俺のターン、ドロー！」
光の護封剣か…その内ゴルガーでも出てきやがったらかなり不味いことになるな。ここはさっさと破壊しねえと…。
「俺は手札から、魔導戦士ブレイカーを召喚！」
「カウンター罠カード「神の警告」発動！…そいつは危ないからね」

小池輝　　ＬＰ８０００　→　６０００

「ほ～う、相当警戒してるな」
「こっちも時間が欲しいからね、今光の護封剣が壊されるとキツイんだよ」
まぁいいか…まだこっちには手札がある。堅牢に固めて、隙を待つさ。
「俺は、カードを１枚セットしてターンエンドだ」

「俺のターン…ドロー！（来た…これで形成を逆転してやる）俺は、手札からエーリアンモナイトを召喚！効果で墓地にいるエーリアン・ウォリアーをフィールドに特殊召喚！」

《エーリアンモナイト／Ａｌｉｅｎ　Ａｍｍｏｎｉｔｅ》
チューナー（効果モンスター）
星１／光属性／爬虫類族／攻　５００／守　２００
このカードが召喚に成功した時、自分の墓地に存在する
レベル４以下の「エーリアン」と名のついた
モンスター１体を特殊召喚する事ができる。
この効果で特殊召喚したモンスターはエンドフェイズ時に破壊される。

「そして、この２体でチューニング！シンクロ召喚、宇宙砦ゴルガー！！！」

《宇宙砦ゴルガー／Ｃｏｓｍｉｃ　Ｆｏｒｔｒｅｓｓ　Ｇｏｌ' ｇａｒ》
シンクロ・効果モンスター
星５／光属性／爬虫類族／攻２６００／守１８００
「エーリアンモナイト」＋チューナー以外の「エーリアン」と名のついたモンスター１体以上
１ターンに１度、フィールド上に表側表示で存在する魔法・罠カードを
任意の枚数持ち主の手札に戻し、その枚数分だけＡカウンターをフィールド上に存在するモンスターに置く事ができる。
１ターンに１度、フィールド上に存在するＡカウンターを２つ取り除く事で、
相手フィールド上に存在するカード１枚を破壊する。

「させっかよ、罠カード「奈落の落とし穴」発動！ゴルガーは除外させてもらう！」
「俺は手札から、速攻魔法カード「禁じられた聖槍」を発動！対象

はゴルガー！！」

《禁じられた聖槍／Ｆｏｒｂｉｄｄｅｎ　Ｌａｎｃｅ》
速攻魔法
フィールド上に表側表示で存在するモンスター１体を選択して発動する。
エンドフェイズ時まで、選択したモンスターの攻撃力は８００ポイントダウンし、
このカード以外の魔法・罠カードの効果を受けない。

くっ…面倒なカードを…！！
「俺は、手札から永続魔法カード「古代遺跡コード　Ａ」を発動！
そして、宙砦ゴルガーの効果発動！光の護封剣と古代遺跡コードＡを手札に戻し、ゴルガーにＡカウンターを２つ乗せる。そして、その２つを取り除いて、関口さんの伏せカードを破壊！」

古代遺跡コードＡ／Ｃｏｄｅ　Ａ　Ａｎｃｉｅｎｔ　Ｒｕｉｎｓ》
永続魔法
フィールド上に表側表示で存在する「エーリアン」と名のついたモンスターが破壊される度に、このカードにＡカウンターを１つ置く。
１ターンに１度、フィールド上に存在するＡカウンターを２つ取り除く事で、
自分の墓地に存在する「エーリアン」と名のついたモンスター１体を特殊召喚する。

「っ…伏せカードは次元幽閉だ。」
「そしてバトルフェイズ！宇宙砦ゴルガーで、関口さんにダイレクトアタック！！」

関口達也　　ＬＰ８０００　↓　６２００

「俺は、手札から魔法カード「光の護封剣」と永続魔法カード「古代遺跡コード　Ａ」を発動し、ターンエンド」

エーリアンが回り始めやがった…お得意の使いまわしコンボ…やっぱ効くぜ。ゴルガーはレベル５にしちゃ打点力も高い…しかも護封剣でこっちは攻撃が出来ない…さ～て、どうするかね。

関口達也　　ＬＰ８０００　↓　６２００
手札３枚　　モンスター　ナシ
フィールド上　　伏せカード　ナシ

小池輝　　ＬＰ８０００　↓　６０００
手札０枚　　ゴルガー１体
フィールド上　　伏せカード　ナシ　光の護封剣１枚
古代遺跡コード　Ａ１枚

第十八話　いんでぺんでんすでい　後編

関口達也　　ＬＰ８０００　↓　６２００
　　手札３枚
フィールド上　　モンスター　ナシ　　伏せカード　ナシ

小池輝　　ＬＰ８０００　↓　６０００
　　手札０枚
フィールド上　　ゴルガー１体　　伏せカード　ナシ　光の護封剣１枚
古代遺跡コード　Ａ１枚

「俺のターン、ドロー！」
まずはゴルガーを何とかする所から始めないとな！
「俺は手札から、魔法カード「地砕き」を発動！宇宙砦ゴルガーを破壊するぜ」
「了解、じゃあコード　ＡにＡカウンターが１こ乗るよ」
とは言っても、今の俺は相手に攻撃できない…ブレイカーかサイクロンが欲しい所だぜ。まったく
「俺は、カードを２枚セットしてターンエンドだ」

「俺のターン、ドロー！光の護封剣ターン１経過だよ。本当ならもう少しゴルガーで回したかったんだけどね」
「こっちとしては、デモンズチェーンでもやられるかと思ったんだけどな」

「あっちも引ければもっと効率でたんだけどねぇ～」
まぁそういっても、ゴルガーがまた出てくる可能性は高い、アンモナイトを引けば1発だし、手札が無いから可能性としてはあまりないと思うが、召喚と特殊召喚を組み合わせてシンクロって可能性も…
「俺はこのまま、ターンエンドだよ」
恐らく引いたのは、モンスター…だな。

現状

関口達也　　ＬＰ６２００
手札２枚
フィールド上　　モンスター　ナシ　　伏せカード２枚

小池輝　　ＬＰ６０００
手札１枚
フィールド上　　伏せカード　ナシ　光の護封剣１枚
古代遺跡コード　Ａ１枚　Ａカウンター１つ

「俺のターン、ドロー！」
よし…ここで一つ、勝負を仕掛けるとするか。
「俺は手札から、魔導戦士ブレイカーを召喚！召喚時に乗った魔力カウンターを１つ取り除いて、光の護封剣を破壊するぜ！」
「あ～…よりにもよってそのカード引きますか…」
「お前の日頃の行いが悪いんじゃねえのか？更に、手札から永続魔法カード「一族の結束」を発動！生憎俺のデッキには魔法使い族しかいないんでな…墓地も同じだ。」

《一族の結束／Ｓｏｌｉｄａｒｉｔｙ》
永続魔法
自分の墓地に存在するモンスターの元々の種族が
１種類のみの場合、自分フィールド上に表側表示で存在する
その種族のモンスターの攻撃力は８００ポイントアップする。

「さ～て、バトルフェイズだ。俺は魔導戦士ブレイカーで、お前にダイレクトアタック！」

小池輝　　ＬＰ６０００　↓　３６００

「俺はこのまま、ターンエンドだ」

「俺のターン、ドロー！…俺は、モンスターを１体セット。更に、カードを１枚セットしてターンエンド」

現状

関口達也　　ＬＰ６２００
　手札１枚
フィールド上　　ブレイカー１体　　伏せカード２枚　一族の結束１枚

小池輝　　ＬＰ３６００
　手札０枚
フィールド上　　伏せモンスター１体　　伏せカード１枚

古代遺跡コード　Ａ１枚　Ａカウンター１つ

ここに来て手札を全部伏せて来たな…なんか引いたのか？…コイツを出して、全員でアタックすれば俺の勝ちだが…もし、惑星汚染ウイルスか激流葬だったら俺がヤバイ…ここは…

「俺のターン、ドロー！…俺はこのままバトルフェイズに移行、魔導戦士ブレイカーで伏せモンスターに攻撃！」

「…伏せモンスターはエーリアン・グレイ。守備は８００だから破壊されるよ、その代わりリバース効果で魔導戦士ブレイカーにＡカウンターを一つ乗せる。更にもう一つの効果で、俺はカードを１枚ドロー。そして、エーリアンが破壊されたため、コード　ＡにＡカウンターが乗るよ」

グレイか…だとしたら、効果を発動させるために伏せてて、あのカードは惑星汚染ウイルスじゃないのか？

「俺は、カードを１枚セット。ターンエンドだ」

「俺のターン、ドロー！…俺は手札から、魔法カード「死者蘇生」を発動！対象は墓地の宇宙砦ゴルガー！」

っ…勝負を仕掛けてきやがった！だが、やらせるかよ。

「悪いな、カウンター罠カード「魔宮の賄賂」発動！…あんまり使いたくないが…お前の死者蘇生の効果を無効化する」

《魔宮の賄賂／Ｄａｒｋ　Ｂｒｉｂｅ》
カウンター罠
相手の魔法・罠カードの発動を無効にし破壊する。
相手はデッキからカードを１枚ドローする。

「うわ～…鬼畜、じゃあドローするよ。俺は、カードを２枚セット

してターンエンド」

現状

関口達也　　ＬＰ６２００
　手札１枚
フィールド上　　ブレイカー１体　Ａカウンター１つ
伏せカード２枚　一族の結束１枚

小池輝　　ＬＰ３６００
　手札１枚
フィールド上　　モンスター　ナシ　　伏せカード２枚
古代遺跡コード　Ａ１枚　Ａカウンター２つ

「俺のターン…ドロー！」

相手のモンスターがいない今…惑星汚染ウイルスが使われる可能性は低い…しかも、ブレイカーにＡカウンターが乗ったから破壊されることは無いだろう。だが激流葬の可能性も…だが、相手は着実にＡカウンターを集めてる…賄賂を使っちまった今…対策はあるといっても、ゴルガーの存在は怖い。単体で２６００の攻撃力は、今の魔導戦士ブレイカーを上回っている。ここは少し無茶でも…モンスターを。

「俺は手札から、クルセイダー・オブ・エンディミオンを召喚！」

…よし、通った！これで…

「俺はそのままバトルフェイズに移行するぜ。クルセイダー・オブ・エンディミオンでお前にダイレクトアタック！」

「永続罠カード「グラヴィティ・バインド－超重力の網－」発動！

レベル４以上のモンスターは攻撃することが出来ません！」

《グラヴィティ・バインド－超重力の網－》
永続罠
フィールド上に表側表示で存在する全てのレベル４以上のモンスターは攻撃をする事ができない。

「いや～…その様子じゃデュアルスパークは無いみたいですね。よかった～」
「チッ…ならコレで俺はターンエンドだ」
「では、エンドフェイズ時、速攻魔法カード「トライアングル・エリア」発動！魔導戦士ブレイカーを破壊して、デッキからエーリアン・ソルジャーを特殊召喚します」

《トライアングル・エリア／Ｍｙｓｔｅｒｉｏｕｓ　Ｔｒｉａｎｇｌｅ》
速攻魔法
フィールド上に存在するＡカウンターの乗っているモンスター１体を破壊する。
さらに自分のデッキから「エーリアン」と名のついたレベル４モンスター１体を特殊召喚する事ができる。
この効果で特殊召喚したモンスターはエンドフェイズ時に破壊される。

《エーリアン・ソルジャー／Ａｌｉｅｎ　Ｓｈｏｃｋｔｒｏｏｐｅｒ》
通常モンスター
星４／地属性／爬虫類族／攻１９００／守　８００
謎の生命体、エーリアンの上級戦士。
比較的高い攻撃力を持つが、反面特殊な能力は身につけていない。

「くっ…随分大盤振る舞いに使ってきやがるな…」
「褒め言葉ですね…ではこのままターンエンドでソルジャーは破壊されますね。その代わり、Ａカウンターがコード　Ａに１つ乗ります」
「俺のターン、ドロー！…俺は手札から、エーリアンモナイトを召喚！」
「永続罠カード「スキルドレイン」発動！」
「それは許せないですねー、手札から速攻魔法カード「サイクロン」発動です。対象はスキルドレインで」
「チッ…やってくれる」

関口達也　　ＬＰ６２００　↓　５２００

「じゃあこのままエーリアンモナイトの効果で、墓地にあるエーリアン・ウォリアーを特殊召喚して、チューニングです。シンクロ召喚、宇宙砦ゴルガー！！」
また出てきやがった…厄介なのがな。
「そしてゴルガーの効果で、俺のグラヴィティ・バインドと関口さんの一族の結束を手札に戻して、ゴルガーにＡカウンターを２つ乗せます。更にゴルガーの効果で、自分に乗っているＡカウンターを２つ取り除いて、クルセイダー・オブ・エンディミオンを破壊！」
「…分かった。クルセイダー・オブ・エンディミオンは破壊されるぜ」
「…それじゃあ古代遺跡コード　Ａの効果で、このカードに乗ってるＡカウンターを２こ取り除いて、墓地からエーリアン・リベンジャーを特殊召喚します」
「やれやれ…」
「じゃあ、バトルフェイズ。エーリアン・リベンジャーと、宇宙砦

ゴルガーで関口さんにダイレクトアタック！」

「罠カード「和睦の使者」」発動。このターンの戦闘ダメージは０になる」

《和睦の使者／Ｗａｂｏｋｕ》
通常罠
このカードを発動したターン、相手モンスターから受ける全ての戦闘ダメージは０になる。
このターン自分のモンスターは戦闘では破壊されない。

「…了解です。俺はカードを１枚セットしてこのままターンエンドです」

現状

関口達也　　ＬＰ６２００　↓　５２００
　手札２枚
フィールド上　モンスター　ナシ
　伏せカード　ナシ

小池輝　　ＬＰ３６００
　手札０枚
フィールド上　ゴルガー１体　リベンジャー１体
　伏せカード１枚
古代遺跡コード　Ａ１枚　Ａカウンター１つ

「俺のターン…ドロー！随分好き勝手やってくれるじゃねえか…ア

キラ」
「流石に、メインデッキならともかくサブのデッキには負けたくないですからね。それに、なのはちゃん達と約束しましたから。絶対勝つって」
「…やれやれだ、こっちに来てからど～も決闘に感情移入することが増えた気がするぜ。これもこっちの世界の影響なのかね？」
「でしょうね、俺もそんな感じがします」
「まっ…悪い気分じゃねーがな…アキラ、俺もここで負けるわけには行かないんだ。もう少し踏ん張らせてもらうぜ！」
あの伏せカードはグラヴィティ・バインド…だが、今のドローで対策が出来た。少なくともそのモンスターは地獄に送る！
「俺は手札から、魔法カード「ハリケーン」を発動！フィールド上の魔法・罠カードをすべて持ち主の手札に戻す」

《ハリケーン／Ｇｉａｎｔ　Ｔｒｕｎａｄｅ》
通常魔法
フィールド上に存在する魔法・罠カードを全て持ち主の手札に戻す。

「！？」
「更に、俺は墓地に送られている魔導戦士ブレイカーとクルセイダー・オブ・エンディミオンを除外して、手札からカオス・ソーサラーを特殊召喚するぜ！更に手札から永続魔法カード「一族の結束」を発動！カオス・ソーサラーの攻撃力は３１００…バトルフェイズ、カオス・ソーサラーでゴルガーに攻撃だ！」
「分かりました、ゴルガーは破壊されます」

小池輝　　ＬＰ３６００　↓　３１００

「俺はこのままターンエンドだ」

「俺のターン…ドロー！…俺はエーリアン・リベンジャーの効果で、カオス・ソーサラーにAカウンターを乗せ、手札から永続魔法カード「古代遺跡コード　A」を発動！更にカードを1枚セットしてターンエンドです」

現状

関口達也　　LP5200
手札0枚
フィールド上　　ソーサラー1体Aカウンター1つ　伏せカード　ナシ　一族の結束1枚

小池輝　　LP3100
手札1枚
フィールド上　　リベンジャー1体　伏せカード1枚
古代遺跡コード　A1枚

「俺のターン…ドロー！…中々いい引きだな…俺は手札から速攻魔法「サイクロン」を発動！お前の伏せカードを破壊！！更にカオス・ソーサラーの効果を発動するぜ。対象はエーリアン・リベンジャー」
「うっ…分かりました、伏せカードのグラヴィティ・バインド－超重力の網－は破壊され、エーリアン・リベンジャーは除外されます」
「まっ…俺にもこれ以上のことは出来ないがな…ターンエンドだ」

「俺のターン、ドロー！…俺は、手札からエーリアン・テレパスを召喚！効果で、カオス・ソーサラーに乗っているＡカウンターを１つ取り除いて一族の結束を破壊します！」

《エーリアン・テレパス／Ａｌｉｅｎ　Ｔｅｌｅｐａｔｈ》
効果モンスター
星４／炎属性／爬虫類族／攻１６００／守１０００
相手モンスターに乗っているＡカウンターを１つ取り除く事で、フィールド上の魔法または罠カード１枚を破壊する。
この効果は１ターンに１度しか使用できない。
Ａカウンターが乗ったモンスターは、
「エーリアン」と名のついたモンスターと戦闘する場合、
Ａカウンター１つにつき攻撃力と守備力が３００ポイントダウンする。

「ＯＫ、一族の結束は破壊された」
「俺は、カードを一枚セットしてターンエンドです。」

現状

関口達也	ＬＰ５２００	
手札０枚		
フィールド上	ソーサラー１体	伏せカ
ード　ナシ		
小池輝	ＬＰ３１００	
手札０枚		
フィールド上	テレパス１体	伏せカ

ード1枚
古代遺跡コード　A1枚

「さ～て、決闘も終盤だな…俺のターン、ドロー！俺はカオス・ソーサラーの効果を発動するぜ。対象はエーリアン・テレパスだ」
「（どうする…このままテレパスを除外されるよりは…けど、そうすれば無防備な状態で関口さんのモンスターに殴られる…いや…俺の残りLPは2600、関口さんのデッキのモンスターは、おそらくそれほど攻撃力の高いモンスターはいないはずだ…なら…ここは賭ける！）俺は罠カード「惑星汚染ウイルス」を発動します！エーリアン・テレパスをリリースして、関口さんのフィールド上にいるAカウンターの乗っていないモンスターをすべて破壊！」

惑星汚染ウイルス／Planet Pollutant Virus》
通常罠
自分フィールド上に存在する「エーリアン」と名のついたモンスター1体をリリースして発動する。
相手フィールド上に表側表示で存在する、Aカウンターが乗っていないモンスターを全て破壊する。
相手のターンで数えて3ターンの間に相手が召喚・反転召喚・特殊召喚した
モンスター全てにAカウンターを1つ置く。

「…了解だ、カオス・ソーサラーは破壊される。だが俺は召喚権をまだ使ってないんでな。このモンスターを召喚させてもらうぜ！俺は手札から「お注射天使リリー」を召喚！」

《お注射天使リリー／Injection Fairy Lily》
効果モンスター

星３／地属性／魔法使い族／攻　４００／守１５００
このカードが戦闘を行うダメージ計算時に１度だけ、
２０００ライフポイントを払って発動することができる。
このカードの攻撃力は、そのダメージ計算時のみ３０００ポイントアップする。

「嘘でしょ…！？スキドレ積みのデッキにそれを入れますか！？」
「まっ…なんか遭った時の保険ってな！１枚入れてたのが項を奏したぜ！じゃあ覚悟はいいか？」
「…っ」
「俺のバトルフェイズ！お注射天使リリーでお前にダイレクトアタック！！そして効果を発動、ＬＰ２０００を支払い、攻撃力を３００ポイントアップだ！！！」
「ちくしょーーーー！！！！！」

小池輝　　ＬＰ３１００　→　０

関口達也　（里スキドレメタビ）　　ＶＳ　　小池輝　（エーリアンデッキ）

勝者　　関口達也

第十八話　いんでぺんでんすでい　後編（後書き）

第十八話投稿完了です。

次回は、久しぶりにデュエル無しの回になるかな？

第十九話　貴方の職業は何ですか？　→　決闘者です

こうして、大会は俺の優勝だ。中々いい決闘が出来たし、俺としては大満足だな。
「ふう～…佐天ちゃん、仇は取ったぜ」
「佐天ちゃんって…あの佐天涙子ですよね、アニメに出てくる」
「ん、お前最初に当たっただろ。色々あって、俺は今あの有名な学園都市で暮らしてるんだ。んで、御坂美琴やら白井黒子やらと知り合って、今じゃそこそこ仲良しだぜ」
「なるほど…その辺りは俺と同じなんですね」
「ん…？もしかして、なのはちゃんたちもアニメのキャラクターなのか？」
「え…！？関口さん知らないんですか！？魔法少女リリカルなのは！！」
「あ～…なんか題名ですでにノーサンキューって感じだな。やっぱお前ロリコンか」
「だから違いますって！！」
そういって本気で否定してくるアキラ。だけどさー、こう言うのって否定すればするほど…なぁ？

「まぁとにかく、とりあえずお互いのここの世界に来た経緯を話しましょうか」
「そうだな、それがいい」
「じゃあまずは俺から、といってもなんで俺がこの世界にいるのかは分からないんですけど、何時の間にか来てたし。それで、ここからちょっと行った所に海鳴市っていう街があるんですけど、俺はそこに気づいたらいたんです。」
「気づいたら…か、俺の場合はここだったけどな。気づいたらいた童実野町

ってのは同じだ」
「それで、その辺を最初は彷徨ってたんですけど、そこでなのはちゃん達に出会ったんです」
「出会ったってお前…あんな小さな子に助けを求めたのか？」
まぁ俺も、年下の御坂に助けを求めた訳だが。
「いいえ、寧ろ向こうが俺を探してたみたいですね」
「？…どういうことだ？？」
「いったでしょう、魔法少女リリカルなのはって。なのはちゃん達は魔法少女なんですよ」
「マジかよ…」
その後、俺はアキラにリリカルなのはの世界観。そして魔法の存在などを詳しく聞いた。

「なるほどな…向こうさんからしたら、俺達は次元漂流者な訳か」
「そういうことです。それでなのはちゃん達を通じて、時空管理局の人達に色々と話を聞きました。一応向こうの人は、俺が元の世界に帰れるように手伝ってくれるらしいですけど」
「ふ～む…そいつは俺も会ってみる必要があるかもな。それに魔法ってのにも興味がある」
「今度俺から紹介しますよ、けど魔法を使うにはリンカーコアがないと駄目ですよ？」
「リンカーコア？なんだそりゃ、魔〇〇路見たいなもんか？」
「その表現はどうかと思いますが…まあ間違ってないですよ、要するに適正のある人間しか魔法を使えないんです」
「俺に適正…ねえな絶対。お前はどうなんだよ？」
「さぁ…俺も調べてもらったわけじゃないですからどうとも」
「お前なら真っ先に調べてもらいそうなもんだが…めずらしいな」
「こっち来てから色々急がしして大変だったんですよ！なのはちゃんの家にやっかいにはなれましたけど、店の手伝いとか、大会出て賞

金集めとかで」
「あ～…それ分かるわ。俺も似たり寄ったりだからな。それにしても、俺達がいるんだ…もしかしたら他の奴等もいるかもな」
「他の人って言うと…阿須谷さんとか竹内さんとかですかね？」
「後は荒木とか…いやアイツはいいわ。来てたらロクなことになりそうにねえや、阿須谷や竹内が来てると面白いな…アイツ等ぐらいの決闘者、こっちでも中々いないからな…っとそういえば、お前達は何で今日この大会に？」
「ああ、何でも近々「決闘王国」が開催されるらしいじゃないですか。それで、俺もちょっとデカイ大会にでて、アピールしとこうかと。」
「やっぱ考えることは同じか…」
そんなこんなで、現状の情報交換を終えた俺は。優勝商品等を受け取って、佐天ちゃんと合流することにした。

「で、この子達も決闘者なんですか？」
「ああ、かなりの腕前だぞ。この後暇だって言うんでな、折角だからフリーでもしようかと」
んで、合流完了な訳だ。ちなみに、現在アキラとフェイトちゃん、そしてなのはちゃんも一緒に行動している。
「えっと…佐天さんでしたね、俺はさっきも自己紹介したとおり小池輝、関口さんの後輩です。それで、こっちの子がフェイト・テスタロッサちゃんこっちの子が高町なのはちゃんです」
「なのはって呼んでください！」
「えっと…フェイトです。よろしくお願いします」
「は～い、私は佐天涙子。呼び方は何でもいいよ、苗字でも名前でも、なんならお姉様って呼んでくれてもおっけ～♪」
この二人にも来て貰ったらのは正解だったみたいだな。佐天ちゃんのテンションがすんごいことになってるぞ。

「そういえばアキラ、お前「決闘王国」の情報どれ位知ってるんだ？」

「そうですね…詳しいことはそんなに。ただ近々行われるって言うことと、参加資格は向こうからの招待状…ただ、ちょっと気になる話を聞いたんですよ」

「ん？何だ？？」

「何でも、今回は３ＯＮ３のチーム戦らしいんですよ。だから招待された人物が他に２名、自分のチームメイトの決闘者を選んで参加させれるらしいです」

「なるほど…そういや向こうでもチーム戦の大会が何回か開かれてたな…その影響か？」

「どうでしょう…ただ、もし阿須谷さんや竹内さんがこの世界に来てるとすれば…」

「絶対これに出ようとしてくるだろうな…ＯＫ、何が何でも参加してやろうじゃねえか」

そんなこんなで俺達が闘志を燃やしている中、何やらなのはちゃん達の方が騒がしくなっていた。

「ルイコ…あの…ちょっと恥ずかしいよ」

「え～…イイじゃん！フェイトちゃんの髪、ロングなのにすっごいサラサラなんだもん！…しかも枝毛も無いし…はぁ…羨ましい」

「佐天さんの髪も黒髪ですっごく綺麗だと思いますよ？」

「そうかな…ありがとう、なのはちゃん！うぅ…可愛いなぁ二人とも～」

「ひゃう！？」

「あ～…アレだ、アキラ君。アレはどうするべきだと思う？」

「どうしましょうか…周りにもかなり目立ってますよ」

「ですよね～…あの輪に入る勇気は…流石にねえな」
結論、見守ることにしました。

所変わって、俺達はデュエルスペースに到着した。佐天ちゃんによるフェイトちゃん達への可愛がりが予想以上に長かったため、ここまで来るのにかなり時間が掛かってしまった。
「いや～…なんか色々堪能したっ！」
「元気だなぁ～…佐天ちゃんは」
「えへへ～…それより折角の機会ですし、アキラ君にリベンジしたいです！」
「俺は構わないよ、ローレベルデッキとの交戦経験あんまり無いから丁度いい」
「ふっふっふ…その余裕、すぐに打ち砕いてあげるよ！」
「お～…向こうはやる気満々だねぇ～…さて、俺はどうするかっと…ん？なのはちゃん達は何してるんだい？」
「にゃはは…ちょっとデッキを再構成しようかなって」
「ほほぅ…そういうことなら俺も人肌脱ごうじゃないか、丁度戦ってていい案が何本か挙がってた所だ。フェイトちゃんの次元斬と合わせて、ちょいと大改修してみようか」
「わっ…私のデッキもですか？？」
「うむ、それに見たこと無いカードも入ってたし、色々興味があるんだ。まっ…自分のデッキだし、他の人には見せたくないって言うなら無理にとは言わないけどね」
「いえっ…お願いします！」
「ＯＫ。じゃあなのはちゃんのアーカナイトバスターからだな。ネコシンが生きてる頃ならもっと手早かったんだけど、今は禁止だしな～…でも、どうせ魔力カウンターを使うなら……」
ふっふっふ…マ改造案はいくらでもあるからな……二人を俺色に染めてやるぜ！（メタビ的な意味で）

その後、俺達は面子を変えながら、デッキ構築のアドバイスを出しあったり、フリーデュエルを楽しんだりした。　佐天ちゃん　ＶＳ　アキラの勝負は、勝ち数は引き分けだったらしい。なにやら佐天ちゃんはメインデッキも投入したらしいけど、俺は見ちゃ駄目だと釘を刺されてしまった。

「そうだ、アキラお前に一つ聞きたかったんだが…」
「何ですか？」
「エーリアンさ、こっちの世界じゃ向こうに無かった種類のカードが結構あったよな？それ、そのデッキに入れてないのか？」
中にはかなり強いカードもあった。投入すれば、かなりの戦力アップが図れるだろう。
「まだ色々試してる段階なんで…けど、「決闘王国」には間に合わせますよ」
「そうか…俺も「決闘王国」ではメインのデッキを使うつもりだ…楽しみだな」
「はい、俺も負けませんよ」
「ハッ…言ってろよ」
「お～…何だか男の世界って感じですねぇ～♪」
「佐天ちゃん…ｗ　さて、そろそろいい時間だし俺達は学園都市に帰るとしますか」
「はーい、了解です」
「ってな訳で、じゃあねなのはちゃん、フェイトちゃん！多分近いうちに海鳴市に遊びに行くと思うから、その時はよろしく！」
「分かりました～」
「…待ってます」
「じゃあね～、皆また決闘しようね～！」

そして俺達は3人と分かれ、学園都市へと戻った。
その後、帰ると何故か機嫌の悪い御坂ちゃんが部屋にいて、色々問い詰められたんだが…まっそいつはまた別の機会に話すとしようか。

第十九話　貴方の職業は何ですか？　→　決闘者です（後書き）

第十九話投稿完了です。

ちなみに、決闘王国編にてハルヒ等のキャラを出そうと思っています。

ただ、それまでにまだ書きたい話が結構あるので、もうちょっと先になってしまうかもしれません。

第二十話　タツヤ　～闇に降り立った決闘者～（前書き）

今回は、作者が電波受けて書いた外伝回です。

第二十話　タツヤ　～闇に降り立った決闘者～

この世にデュエルモンスターズがこの世に生まれて数年。このゲームはすでに世界規模で大人気のカードゲームとなりつつあった。人々は挙ってこのカードゲームに手を出し始める。
しかし、そういった所に目を付け、違法な方法で金儲けを行おうとする輩も現れ始める。そんな闇の魔物達が蠢く世界で、ある若者達が、伝説を成し遂げようとしていた。

「（私こと佐天涙子が望んだ物…それは変化だった。それは、すべてをひっくり返すような変化ッ！！）私は手札から、モンスターを…」

「「神の警告」や！それは認めないでぇ～！」

「うっ…（私がなんで、こんな所で決闘をしているのか。それは、ある知り合いが原因だった。
元々素行が悪い知り合いで夜遊びが祟りゴロツキのコイツらに目を付けられ、どうしようも無くなった彼女は、この賭け決闘を持ちかけられ、私にこの決闘を押し付け雲隠れしてしまったのだ）」

「（そしてこの勝負…負ければ私の人生は終わりだ。身包みをはがされた挙句、ソープに暫く突っ込まれるか、最悪タコ部屋の慰みものにされてしまうだろう。だけど…泣きたくなるような手札。…どうしようも無いよ…お願い、誰かこの流れを変えてよっ！誰でもいいから…誰か！！）」

ガチャ…ギィィィィィ…

「…誰や!?」

「…」

「関口さん!?」

「なんだ、アンタの知り合いか?」

「えっ…あ…はい!知り合いのお兄さんで、私が遅くなるようだったら様子を見に来てくれるように頼んでたんです」

「…」

「(小声)関口さん、なんでこんな所に来るんですか?しかもこんな時間に!」

「(小声)いや、コンビニに買い物に行こうと思ったら突然の大雨だぞ?誰だって雨宿りしたくなるだろ!見ろよ、完璧濡れ鼠確定だ。やってらんないぜ……それより、佐天ちゃんこそ何でこんなとこに?」

「(小声)それは…その…」

「(小声)…まぁ深くは詮索しないけどさ、あんまり火遊びは駄目だぜ?」

「（小声）…すみません」

「（小声）まっ…俺が後ろで見といてやるからさ、緊張せずゆっくりいけよ」

「（小声）はい！」

これにより、今まであった気負いが幾許か削がれ巻き返しを開始する。しかし、相手もさるもの佐天のメンタルが回復したと見るや否や、再びプレッシャー掛けていく。
そして、数ターン後。佐天にチャンスが訪れる。

「（来たっ！「魔の試着部屋」！！…コレが通ればかなり有利だよ…けど、相手には伏せが2枚。手堅く行くなら、何かしらの対策が来るまでもう少し待つべきだけど…それまでこっちが持つか分からない…どうすれば……やっぱり無理は出来ないし…ここは保留してハリケーン辺りを待とう…）」

「…死ねば助かるのに」

「…!?関口さん…それどういう意味ですか?」

「いや…ただの独り言さ、聞き流してくれて構わない。ただ、今気配が死んでいた。背中に勝とうという強さが無い」

「…」

「佐天ちゃん、君は今怯えてるだけなんじゃないかい?」

「…ッ！（そうだ…確かに関口さんの言うとおりだ。待ってるだけ

じゃ駄目なんだ…どうせ駄目なら…強く戦って…行く！）　私は、手札から魔法カード「魔の試着部屋」を発動します！！」

「「神の宣告」！」

「え……？」

「あちゃ～…」

「それが切り札だったなぁ～、この決闘ももう終わりや！」

「ちょ…ちょっと待ってください！！今のは何というか…」

「なに甘っちょろいこと言ってんや、ガキ！！」

「あはは…今のは俺がちょっとこの子を唆しちゃったんでね、ここからは代わりに俺が勝負するっていうのはどうですか？」

「！！（関口さん…まさかそのためにさっきのセリフを…！？）」

「ああん！？兄ちゃん、それはいくらなんでも…」

「もちろんタダとは言わない…コイツは仕切りなおしの手打ち金だ」

そういって関口が投げたのは、札束。これにより、相手側が了承。

…後に裏の決闘者達を震撼させる伝説の決闘者。これがその始まり。

この時、関口は席に付く１０時間前に軽い食事を取っただけで、かなりの腹ペコ。俗に言う空腹状態であったという。

「（腹減ったなぁ…はぁ…コンビニまでの道のりが遠いぜ、雨もやまないしな）」

「ほな始めようか。始めはサービスや。兄ちゃんの先攻でいいでぇ～」

そして、そのターン

「悪いね、エクゾディア揃っちまったよ」

「（図書館エクゾ…関口さん…いくらなんでもエグすぎます）」

「チッ…ついてんな兄ちゃん…次や次！！」

「（え～…あそこまでギミックでぶんぶん回されたのに、運の一言で片付けちゃうんだ…）」

ここから関口は怒涛の攻めで、佐天の負けを帳消しにしていく。

「ちっ…今日は付いてないな」

「竜崎さん…念のため、他の決闘者を呼びましょうか？」

「…他の決闘者って矢木のことかいな？…バカヤロウ！こんなチンケな奴等に代理の決闘者なんて呼べるかいな！！このまま続けるでぇ～」

…だが、この時既に関口の空腹は竜崎を遥かに凌駕していた。
…結局、何時もより獰猛な関口に竜崎は嬲られ、１０連敗を記してしまう。

「…このままじゃ、あの女を逃してまう…」

「矢木や…矢木を呼ぶんや！！」

そして、代理の決闘者矢木敬司登場！
この男、その昔グールズにも在籍していた裏では中々の実力を持つ決闘者である。
しかもレベル３　エレクトロマスター。

「お～！矢木！！待ってたでぇ～」

「フフッ…竜崎…なんか苦戦してるんだってなぁ、今コイツの手札が見えちまったから、この決闘には口出しできない。どうする、次からいこうか？」

「そうしてくれっ！」

「なぁ～に…まだ夜は長い…ここから十分巻き返せるさ」

この時、矢木は関口など眼中にない、それも当然のこと。自分は今まで闇の世界である程度戦ってきたという自信がある。
しかし、その見くびりはすぐに改められることになる。
勝負再開、コイントスで関口の先攻となる。

「ひぃー！？」

「エクゾディア、揃ったぜ。お前の負けだ」

「（あはは…この流れ、何時まで続くんだろｗ）」

「（コイツ、中々いい構築してやがる…先攻を取られたらほぼ終わりだな、だが…）」

「なんやて！？もう一戦ワイが戦って、その間見にまわりたい！？」

「ああ…アイツを確実にブチ殺すにはそれが無難だ」

「まぁ…その後勝ってくれるなら問題ないで」

そして、その後の決闘関口のターン。

「俺は手札から、王立魔法図書館を召喚！」

この時、矢木に電流走る！！

「うわっ！？…ちょっと、この人ビリビリいってるんですけど、大丈夫なんですか！？」

「ん？…ああ、矢木のそれは気にせんでええで。何時もの事や。（どうやら、何かコイツを倒す秘策を思いついたみたいやな）」

「はぁ…（多分、この人も御坂さんと同じ、エレクトロマスターなんだろうなぁ～）」

「（そうだ、あの王立魔法図書館…アイツを潰せばいいだけじゃねえか）竜崎、ちょっと俺はデッキ調整してくるからその間頼むぜ」

「ちょ！？…はよ帰って来るんやで！？」

「…」

そして数十分後、矢木が戻ってくる。
その間に、関口は竜崎相手に全勝。あと1度勝利すれば、佐天の負けをすべて帳消しに出来る。

「さ～て、やろうか」

「…ああ」

「（くくっ…来るなら来いっ！俺のデッキはさっき、図書館エクゾのメタカードで満たしておいた。お前に勝ちは無いさ。いい感じにエフェクト・ヴェーラーも来たしな、封殺してやる！）」

「俺のターン、ドロー。俺はライオウを召喚！」

「なッ…なにぃぃぃぃ！？お前のデッキは図書館エクゾのはずだろ！？なんでそんなカードを入れてやがるんだ！？」

「大丈夫か…お前。相手が代わったんだ、俺もデッキを変える事だ

ってまったく問題ないはずだぜ」

「そ…そんな…」

その後、メタカードにより遅くなった矢木に対して、普通のメタビに戻った関口が圧勝。
これで、佐天の負けはすべて帳消しになった。

「終わった…初めの内はどうなることかと思いましたけど…」

「何を言っている?倍プッシュだ。俺の仕切りなおし分で出した札束、それを取り返すまでやる!」

一同「え!?」

第二十話　タツヤ　～闇に降り立った決闘者～（後書き）

第二十話投稿です。

さて、本編を書きましょうか

第二十一話　学園都市は今日も平和なようです（前書き）

今回の話はデュエルまったく関係ないです。

第二十一話　学園都市は今日も平和なようです

さて、今日も俺は気だるく目覚めたわけだが…何か何時もと違う所がある。
それは何か？少し考えて見て俺はその答えにたどり着いた。

「目覚ましが壊れとる…」

時刻はすでにＰＭ１３：００…寝坊ってレベルじゃねーぞ。

「とまぁ、そんな訳でな。目覚ましを買いに出かけたわけだが…ごめんな御坂。一緒に来てもらって」

「別にいいわよ、黒子達はジャッジメントでいないし、佐天さんは他の子達と用事みたいで暇だったから」

ふむ……何だかんだで皆、学生生活を満喫してんだな。まぁ、○ート同然の生活をしている俺から見れば眩しく移るわけだが……いや仕事ならあるか。関口達也　職業　決闘者でよろしく！
そんな訳で、俺は御坂と一緒に近場のデパートに来ていた。この店には色々お世話になってるんだよな～…ウチの家具は殆どここで買い揃えた物だし。

「で、目当ては目覚まし時計だったわよね？とりあえずついて来なさい」

「あいよ～」

しかし、何だかんだで御坂は優しいよな。何時もはツンツンしてることも多いけど、人が困ってる時は優しく手を差し伸べてくれる。最初の時だってそうだったし…さっきもそうだ…

数十分前

「暇だから来たわよ～……ってアンタ…何時にもましてグダってるわね」

「いや～…起きたら何故か昼になっててね。どうやら目覚ましがぶっ壊れてたらしい……それで何かやる気が無くなっちゃって～」

「はぁ…だからって、ここでグダってても仕方ないでしょう。ホラ立ちなさい、とりあえずその壊れた目覚まし時計の代わりを買いに行きましょう」

「ん～…それもそうか。じゃあもう少しのんびりしたら～…行くかぁ～」

「い・ま・す・ぐ！！用意しなさいっ！！！」

「ッ！？イッ…イエスマム！！」

うむ、優しく…ではなかったな。ただ、助かることには代わりない。

「あ、コレとかいいんじゃない？可愛いし！」

そういって御坂はカエルの形をした目覚まし時計を持ってくる。こいつはケ○ッピーか…？いや、何か違う…そもそもコレが可愛いという発想に行き着く過程が俺には到底理解できない。
本音を言えば、ノーサンキューだがここは何かオブラートに包んだ方がいいか。

「う～ん…流石に俺に可愛い系はなぁ～…御坂みたいな女の子ならアリだろうけど、男の俺だとカッコ付かないだろ」

「別に、目覚まし時計なんだからそんなこと気にする必要無いと思うけど……そうね、ならコレとかどう？男らしいといえばこれじゃない？」

御坂が次に出してきた目覚まし時計は暑苦しい男二人が、ボディービルダーよろしくポーズを取った形の目覚まし時計だった。
…御坂は俺を何だと思ってるんだろう？
まぁとりあえず、オブラートに…。

「う～む…微妙に俺の趣味じゃねえな」

「むぅ……じゃあ他には……」

しかし、このまま御坂に探させてるとロクな目覚まし時計が出てこない気がする…。ここは俺も何か探してみるか。
へぇ～…色んな種類があるんだな。シンプルなデザインからなにやら芸術的なデザイン、他にもキャラクター物やら大きいお友達よろしくなデザインな物など様々だ。
ちなみに、俺が前回まで使ってた目覚まし時計は普通のデジタル表記の味気ないもので、向こうの世界では某国民的アニメに出てくる電気ネズミ型目覚まし時計を小学生の時からずっと使っていた。

こっちではどうするかな…前回は味気なかったし、今回は初心に帰って冒険するのもアリだけど。

「あ、これなんかいいんじゃない？」

そんなこんな考えてる内に、御坂が他の物を持ってきた。
その目覚まし時計は、これまた奇抜な物だった。何だこれは……何かのマスコット（？）の様だが、俺は見たことない。しかもコイツ、なんでこんなに爪が長いんだ？ウ○○ァリンとか○ルログに憧れてるのだろうか……しかも血が滴ってるぞ。
しかし、特にピンと来る物が他に無いしな…ここは冒険してコイツにするか。

「ん、面白いね。コイツにしてみるよ」

「でしょー？可愛いわよねコレ」

うん、御坂の趣味には着いていけなさそうなのはよく分かったよ。
俺はとりあえず、その目覚まし時計を購入した。しかしコイツ…寝込みを襲ってきたりしねーよな？

「さって…大分時間余っちまったな。折角だし、どっかブラつく？」

「そうね……じゃあゲーセン行かない？コインも切れてたし」

女の子があんま行きたがる場所だとは思えないが、まぁ俺もゲーセン好きだし丁度いいか。てかコインって…もしかして超電磁砲（レールガン）の弾ですか？

「いいね、早速行くか」

「じゃ、決まりね。折角だし、何か対戦しよっか。アンタ格ゲーとかやるの？」

「まぁ一通りはね、そこまで強いわけじゃないけど、ある程度動けると思うよ」

向こうであった格ゲーと内容が同じならだけどな。

そして俺達はゲーセンに付いた。ある程度見渡した所、ここにおいてある格ゲーも向こうと殆ど一緒らしい。とりあえず出来るのはメ○ブラとギル○ィ、ブ○ブルっと…おっ、北○もあるじゃねーか。前やってみたんだが、ラ○ウを使って、田植え目押し辺りで挫折したんだよなぁ…

「じゃあ早速対戦しましょ、ゲームはアンタが選んでいいわよ」

「そうだね～…じゃあ無難にブ○ブルで」

「いいわよ、ボッコボコにしてあげるんだから！」

――――対戦中――――

「ま…負けた…」

「御坂は○ン使いか…なんと言うか、鉄板所だね」

「ちょ…なんなのよ、今のコンボ!?殆ど１０割コンじゃない!?」

「いや～…ア○クネは烙印を付けれれば行けるけど、それまでが難しいんだよ」

まぁ空中投げが当たれば、付くんだけどな。

「つ…次よ!!次!!今度は私がゲームを選ぶんだから!」

「あいよー」

２回戦目　　ギル○ィ対決

「嘘…張り付いたと思ったらそのままゲームエンドなんて…」

「デッドオンカウンターヒットウマー」

３回戦目　　メ○ブラ対決

「ずっと固め続けるなんて卑怯よ!!」

「そうはいうけど、固める方も方で大変なんだよ?」

４回戦目　　北○対決

「一撃必殺なんて…卑怯だもん（グズッ）」

「セッカコーからテレッテー余裕だもんな、相変わらずバスケは出来ないけど」

「うぅ……（ヒック）」

やべえ調子乗りすぎたな…俺も久しぶりのゲーセンだったからついはしゃいじまった。

「えっと…そう落ち込むなって！メ○ブラは勝ち数五分五分だっただろ？」

「他のは…全部勝てなかった……」

「あ～…一時期友達と色々格ゲーやってたからな～…俺。それにしたってさ、御坂も十分だと思うよ？それにさ、俺みたいな男子校生（年的な意味で）でゲーセンで暴れまわってる奴はいっぱいいるけどさ、御坂みたいな女子中学生でゲームできる子ってそういないと思うぜ？それに、御坂は可愛いから周りが華やかになるしな」

「へっ…！？…かっ…可愛い！？」

「ん？…御坂はかなり可愛いと思うぜ。ホラ見ろよ、周りの奴等大体御坂のこと気にしてるぜ。一人で来てる時とか、結構ナンパとかされるでしょ？」

「っ…」

むっ…地雷だったか？なにやら余計に縮こまっちまった気がするが。

「え～と…だからさ、元気出せって。な？」

「…別に、私は最初から元気…よ。ホラ、次のゲームやるわよ」

「あいよ～、今日はとことん付き合いますぜ」

「つっ…付き合うとかいうなーっ！！」

「へっ…？」

「！？…何でもないわよ」

むぅ…よく分からんが、まぁ元気が出たならいいか。

「そんで次はＥ○ＶＳか…俺コレが一番好きなんだよ♪」

「奇遇ね、私もよ」

「けど、今は対戦中みたいだな…１対１みたいだけど」

「そうね…それにしては少し空気が悪い気がするけど」

「ん～…俺ちょっと反対側見てくるわ」

そう言って俺は反対側の台にいるやつらを確認する。どうやら高校生みたいだけど、数人で台を囲んでいる。なにやらあんまりいい雰囲気じゃねえな。会話を聞いてみるとやれ対戦相手が弱いだの、ここでこの行動ねーわだの、相手を煽りまくっている…向こう側のやつは動きが初心者っぽかったし、コイツら初心者狩りかな……やれやれ。

そうして御坂ちゃんの所に戻ると、何やら御坂が燃えていた。どう

やら向こうの対戦相手が初心者狩りだと気づいたらしい。

「アンタは手を出さないでよね！私一人で十分だから、そしたら対戦しましょ」

そういって颯爽と空いた対戦台に座って乱入する御坂。使う機体は…デス〇ィニーか。

うむ、コイツには何度も苦労したなぁ…向こうはスト〇リの様だ。強機体対決だな…問題はデス〇ィニーがどう上手く接近するかだけど…うん、御坂の動きを見る限り心配はなさそうだ。

「ほ～ぅ…やるじゃないか御坂、コンボも完璧だし唯でさえ紙のスト〇リが酷い事になってるな」

「言ったでしょ！一番好きだって。これでもかなり練習したんだから…こんな奴には負けないわよ」

その言葉通り、御坂は相手を圧倒していた。相手のスト〇リは途中から勝てないと踏んだのか、ガン逃げに走っていたが、御坂は冷静に処理していってるし、こりゃ勝負は見えたな…っと…オイオイ、そいつはマナー違反じゃねえのか？

「っ…二人目……いいわ、上等じゃない」

御坂は更に燃え上がってるようだが、このゲームは1対2じゃ殆ど勝ち目が無いゲームだ。コチラにもコンピューターの機体が付いているが、コストダウン等の関係もあり足を引っ張る形にしかなってない。

一方のスト〇イクが集中的にコンピューターを狙い、それを牽制する御坂をさっきのスト〇リが狙い打つ形か…。

「くっ……こいつら」

御坂のデス〇ィニーが落ちた。このままじゃヤバイな……ということで、このゲームを本来の土俵に戻すとしよう。

「御坂、この喧嘩俺も混ぜろよ」

「！…でも、私一人で…」

「こーゆー卑怯な奴等は俺も嫌いなんでな。なます切りにしてやる」

「ス〇ノオ…確かに使いこなせればトップレベルの強さの機体だけど……アンタ使いこなせるんでしょうね？」

「ハッ…誰に言ってるんだよ。俺の知り合いは、全国レベルでも通用するス〇ノオ使いなんだぜ」

「なっ…それってアンタと全然かんけーないじゃない！！」

「ですよねー。けど、そいつと一緒にス〇ノオ使ってたからな。そこいらの奴等よりは使いこなせると思うぜ」

「…せいぜい足を引っ張らないようにしなさいよ！」

「へいへい…んじゃ行きますか！」

「ええ！！」

さぁ、ゲームスタートだ。まっ…ス〇ノオを使ったのは他に理由が

あるんだけどな。アイツらには、屈辱的な負けをプレゼントするとしよう。

さて、始まってみたがやはり御坂の動きはいい。的確に相手を追い詰めてコンボを決めて行く。俺は少し後ろから、チャクラムで相手を牽制し御坂がコンボを決め始めるともう片方の相手をチャクラムとトライパニッシャーで動きを止め、援護に行かせない様にする。やれやれ…それ＋あんまり前に出ず被弾をしないように立ち回らなきゃならない…牽制と被弾抑え…両方やらなきゃならないのがス○ノオの辛い所だぜ！

開始して少し経過　既に相手のスト○リは1度落ち、スト○イクも体力は半分だ。御坂のデス○ィニーの体力は3分の1ぐらい…ちゃんと半覚狙ってるな。仕掛けるなら今だ！

「御坂、ちょっと前出るぜ。スト○リの牽制頼む！」

「分かったわ、仕事きっちりこなしてきなさい！」

そして俺は、この機体の最大の特徴であり武器のト○ンザムを発動！これから20秒の間…斬って斬って斬りまくる！！速攻で、スト○イクを捉え撃破。その間に、御坂がスト○リを追い詰めてくれたらしい。向こうは覚醒まで使って逃げ回っている。

「流石だな御坂。だが最後は俺が貰うぜ…スト○イクを抑えてくれ」

「なによ～、いい所だけ持ってく気？」

「見てれば分かるさ」

「…分かったわよ、その代わり確実に倒しなさいよ」

さて、お姫様の許可も下りたし行きますか…。
俺は、スト○リに接近し追い立てるが流石そこはスト○リという所か、ふんだんにバーニアを使って逃げる…が、俺にはまだ覚醒があるんでね！
覚醒を使用し、スト○リをト○ンザム格闘で捉え1段…2段と斬っていき…5段目でキャンセル、そこで後格闘を入れる…そうス○ノオの最大のネタワザにしてデスコン、切腹コンだ。
スト○リを撃破…こっちの勝利だ。

「切腹コンって…なるほどね、それは相手も嫌になるわ♪」

「まっ…これで少しはすっきりしたな」

「うん！じゃあ折角だし、このまま協力プレイで行きましょうか」

「あいよ！」

その後、俺達はE○VSでそこそこ連勝しつつゲーセンを後にした。

「いや～…結構楽しんだわね」

「ん、俺も楽しめたよ。今日は付き合ってくれてありがとな」

「っ…！…別にいいわよ、それと…これからも時々、一緒にゲーセン行かない？」

「ああ、行こうか。御坂とならかなり楽しめそうだし」

「…！うん、今度は絶対負けないんだから！！」

っ…その笑顔は反則だろ。御坂…可愛いな。

「っと…珍しい、露天売りだわ。アクセサリーとか売ってるみたい」

「折角だし見てくか、今日付き合ってくれたお礼も込めて、何か欲しいのがあったらプレゼントするよ」

「ホント？…じゃあ折角だし」

そういって御坂はアクセサリーを選び出した。
それにしても、ほんと珍しいな。学園都市でこういう店なんて…

「あ…あのさ…」

俺も適当に眺めていると、御坂が声を掛けてきた。どうやら何か見つかったらしい。

「これ…いいかな？」

そういって差し出してきたのは、ペアのネックレスだ。
しかし…これはどうした事だろう、金色にそのウジャト眼…どう見ても千年アイテムの一種じゃないでしょうか？

「まっ…御坂がそれでいいならいいけどな。んじゃコレくださーい」

そして購入完了。それを御坂に手渡す。

「…片方はアンタが持ってなさいよ、折角だし…」

「ん？いいのか、じゃあコイツは俺が」

片方のネックレスを受け取る。これで俺にも裏の人格が現れたら…
それはそれで面白いかもな。

「うん……さてと、私はそろそろ帰るわ。またね！」

そう言って御坂は駆け足で帰っていった。まったく元気だねぇ～。
しかしまぁ…久しぶりに遊んだな。やっぱゲーセンはいい…。
そんな事を思いながら、俺も帰宅することにした。

第二十一話　学園都市は今日も平和なようです（後書き）

第二十一話投稿完了です。

ゲーセンとかあんまり行かない人。変なネタばっか使ってごめんなさい！

第二十二話　遊びにイクヨ！

「まぁそんな訳で、俺は明日からちょっと海鳴市に行ってくるよ」

どうしてそんな結論に行き着いたか。それは数時間前、アキラからかかって来た電話が始まりだった。

「という訳でですね。管理局の人に関口さんの事を話してみたんですが、是非一度会って話をしてみたいと」

「ふむ、俺としてもそれは願ったり叶ったりだが」

「そう言って貰えると助かります。それでですね、出来るだけ早くこっちに来て欲しいんですよ。出来れば明日とか」

「明日か…まぁ明日から休日だし、その方が色々と都合がいいんだろうが…一応明日は、佐天ちゃんと御坂と一緒に、その辺の店を散策しながら決闘しようって話になってるからな～」

ちなみに、白井ちゃんと初春ちゃんは最近ジャッジメントの仕事が忙しいらしく、誘うことは出来なかった。二人も大変だよな～。

「だったら、お二人も呼べばいいんじゃないですか？こっちにもそれなりに強い決闘者はいますから。なのはちゃんやフェイトちゃんも含めてね」

「でも、管理局の人達と話したりもするんだろ？よく知らないけど、そういう組織って、結構秘密主義だったりするんじゃないか？」

「ああ、その辺は気にしなくてもいいと思いますよ。魔法のことも、管理局のことも別に秘密にしなきゃいけないって程の話じゃないみたいですから」

「なるほど…ＯＫ、じゃあ二人にとりあえず話してみるよ」

「はい、ではまた後で」

てな具合で話が進み、その後に遊びに来た佐天ちゃんにこの話題を振ったのだが

「海鳴市って、なのはちゃん達がいる所ですよね！？私も行きたいです！」

うん、余裕で食いついてきたわけだ。とりあえず佐天ちゃんは参加…っと。

「そういえば、御坂は今日ここに来るのかな？」

「う～ん、どうでしょう。さっき一応連絡してみたんですけど、なんだか取り込み中だったみたいで」

「そっか…んじゃ後で適当に電話かメールでもしてみるかな」

「…」

「…どうかした佐天ちゃん？」

「あの～…ちょっと聞きたい事があるんですけどいいですか？」

「うん、構わないよ」

「最近、関口さんと御坂さんの関係が親密になってきてる気がするんですけど…実際の所どうなんですか？」

「…へっ？…そんな事無いと思うけど…」

「だって、この前も二人でデートしてたとか…白井さんが怒り狂ってましたよ」

「あれは、目覚まし時計が壊れたから一緒に買いに行っただけで…その後ゲーセンで少し遊んだぐらいさ」

「その後から、二人とも…ペアのネックレスを付けてたり……」

「これは…別に……」

「怪しい…」

「だから、別にそんなんじゃないって！」

やれやれ…女の子はどうしてこういう話が好きなのかね？ちなみにこの後、佐天ちゃんの誤解を解くのに数十分かかったとさ。

そういえば、二人を連れて行くとして…その場合、俺が別の世界か

ら来たってこともちゃんと話さないとな。
信じて貰えるだろうか……自信ねえな。まぁ海鳴に行く途中に適当に話しとけばいいか。

「まっ…とりあえず明日のための準備でもしとこうか。1泊する予定だから、着替えとかも容姿とかないとね」

「そうですね…たぶんこっちに置いてる分で足りると思いますけど……ちょっと見てきますね～」

「あいよ～」

さて……それにしても、こっちに着てから随分経つが。結構愛着が出てくるもんだば～…元の世界に帰りたいって気持ちももちろんあるが…もし帰るなら、二度とこっちには戻ってこれないってことになったら……俺はどうするんだろう？
こっちの世界には、向こうの世界になかった物が沢山ある。毎日が新鮮で、飽きることがない。
向こうの世界に戻れば、待ってるのは平和だが、何処か退屈な毎日だろう。学校に行って、帰る途中にカードショップに寄って決闘に明け暮れる毎日…まっ…アレはアレで楽しかったか。
出来れば、こっちとあっちを行き来出来るようになればいいんだけどな。その辺も管理局とやらに聞いて見るか。

そうやって、物思いにふけていると佐天ちゃんが戻ってきた。けど…どうして水着姿なんだ？
俺は何かまたフラグをどっかで立ててたっけ？

「じゃっじゃじゃ～ん。見てくださいよ！関口さん」

「…え～と……かなり似合ってると思うけどさ、なんでいきなり水着？？」

「だって、海鳴って言うぐらいなんですよ？だったら海があるに決まってるじゃないですかぁ～。海水浴ですよ、海水浴！！」

あの～…佐天さん？今はまだ6月ですよ？

「海水浴って時期じゃあないだろう…」

「最近暑いから大丈夫ですって～！」

「まぁいいか…んじゃ俺も水着を一応持ってくかね…」

「それがいいと思います。それに…上手くいけば、御坂さんの水着姿も見れるかも知れませんよ～？」

「水着姿…ねぇ」

なんか、何時の間にか小旅行みたいなノリになってきたな。実際にはそんなもんじゃないと思うが…

ともあれ俺と佐天ちゃんは明日の用意を済ませた。

「お邪魔するわ……」

「御坂さんいらっしゃ～い…って、随分疲れてるみたいですね」

「ちょっと…ね。それより、なんで佐天さんは水着姿なの？？」

「あ～…これはですねぇ…」

「おっ…御坂、いらっしゃい」

「アンタ…もしかして佐天さんに無理やり水着を…！？」

「んな訳ないだろ！？どうしたらそんな状況を想像出るんだよ！！」

「あはは…まぁこの水着は、私の自主的なものなんで気にしないでください」

「（小声）…二人っきりで水着って…それってどうなのよ…」

「ん？なんか言ったか、御坂？」

「！？…何でもないわよ」

？…まあいいか、それに来てくれたのは行幸だ。電話する手間が省けたわけだし。

そのまま俺は、明日の予定について御坂に聞いてみることにした。

「ふ～ん…海鳴市ね…面白そうだし、私も行くわ」

「ＯＫ、じゃあ向こうにも連絡しとくよ」

「じゃあ、御坂さんも水着用意しないとですね！」

「え…？私はいいわよ」

「まあまあ遠慮せずに、折角の機会ですから！水着は寮に置いてるんですか？それとも何なら、今から新しいのを買いに行くっていうのもいいですね！」

「ちょ…ちょっと佐天さん…」

「そんな訳で、関口さん！私達は出かけてきますからっ。また後で！」

「ああ、その間に俺は向こうと連絡取っとくよ。泊まる場所とかの話もあるしな」

そうして佐天ちゃんは御坂を引きずるような形で部屋を飛び出していった。何か今日の佐天ちゃん…何時も以上に元気だな。御坂、疲れてたみたいだけど…大丈夫かな？まぁ、帰ってきたら適当に労ってやろう。

「んな訳で、二人ともそっちに行くことになったぜ」

「了解です」

「しっかし…本当に大丈夫なのか？まったく関係ない奴を連れてってもよ」

「はい、さっき聞いてみたけど大丈夫みたいですよ」

「ならいいがね…っとそういえば泊まる場所の話だけど、本当に3人もやっかいになっていいのか？」

「その辺りもご心配なく、桃子さんも大歓迎だって言ってましたから。他の人達もすごく優しくて、気のいい人達ですよ」

「…そうか、じゃあ向こうさんによろしくお願いしますと伝えといてくれ」

「はーい」

「んじゃ、また明日」

よし、これでOKだな…さて、大体の準備も終わったし…二人が帰ってくる前に夕食でも作っておくか……食材もそれなりにあるし、少し手の込んだ物を作って帰ってきた二人を驚かせてやるとしよう。

余談だが、その後帰ってきた御坂はまるで戦場を駆け抜けてきた兵士の様な顔をしていて、帰ってくるなり部屋に籠って寝てしまったようだ。仕方なく、何時もより大目の食事は二人で美味しくいただきましたとさ。

第二十二話　遊びにイクヨ！（後書き）

第二十二話投稿完了です。

次回は久しぶりにデュエルするよ！…たぶん

第二十三話　れっつぱーにんぐ！

…はっ！？……なんだ今の夢は…よく覚えてないが、何かに追いかけられてたような？
…もしかして、お前の仕業じゃないだろうな？
俺の目線の先には、血を滴らせたクマのような形をした目覚まし時計が、じっとこっちを見つめていた。

ＡＭ５：１０

さて、今日は朝から海鳴市に向かう予定なので何時もより早起きだ。
折角なので、弁当でも作ろうと思った次第である。
ちなみに、佐天ちゃんと御坂は今日一緒に出かけると言う事で、一々寮に帰るのも面倒だからとこっちに泊まっている。まぁ、弁当と朝食を作った後でまだ寝てるようなら適当に起こせばいいだろう。

「んじゃまぁちゃっちゃっと作りますか～…って佐天ちゃん？」

「あ、関口さんおはようございます！随分早起きですね」

いやはや…佐天ちゃんには敵わないな……今日は流石に先に起きたと思ったんだけど。

「佐天ちゃんこそ早いね……今日は先に起きてビックリさせようと思ったんだけど」

「今日は3人でお出かけですからね。折角だからお弁当でも作ろうかなって」

「考えることは同じか…じゃ、張り切って作りますか」

「はい！」

ＡＭ６：３０

「よし…こんなもんか」

「こっちも朝食の準備出来ました～」

「やっぱ二人だと早いな…助かったよ」

「いえいえ、私も料理は得意ですから」

「さて…準備は終わったし、そろそろ御坂を起こした方がよさそうだな」

「ですね…じゃあ、ちょっと起こしに行って来ます」

「お～…頼んだぞ～！」

「お早ぅ～…」

「おう…随分眠そうだな」

「聞いてくださいよ、関口さん。御坂さんってば、さっきまで寝ぼ

けｔ」

「！？…いっ…言わなくていいからっ！！」

「むぐっ…！？」

…気になる。

「…まぁいいか。それより早く朝飯を食べちまおうぜ。早めに向こうに着きたいからな」

「は～い」

「むぅ…」

俺達はそのまま、朝飯を堪能し海鳴市に向かうべく部屋を後にした。

「そうだ…二人とも。ちょいと話しておきたいことがあるんだけどいいか？」

「？…なんですか」

「ツマラナイ話じゃないでしょうね？」

「あ～…どうかな。とりあえずさ、俺…実はこの世界の人間じゃない。別の世界から来た人間みたいなんだわ」

２人共「……は？」

ですよねー、まぁそういう反応になるよね。

「御坂に最初、助けてもらっただろ？どうやらあの時、こっちの世界に飛ばされてきたらしいんだけどな…んで、今から行く海鳴市に俺のもといた世界にいたダチともしかしたら元の世界に戻してくれるかもしれない人達がいるらしいんだ。だから俺は海鳴市に向かってる」

「元いた世界にいた友達って…もしかして小池君のことですか？」

「そういうことだ」

「？」

「まっ…向こうにいけばその辺も説明してくれるだろうが、一応先に説明しとこうと思ってな」

「本当…なの？」

「こんな事で嘘ついたって仕方ないだろ？けど、感謝してるんだぜ。こっちに来て何も分からない状態の時、御坂に会って助けてもらった。あの時は本当に心強かったさ」

「…そう」

「あの時はホント…ありがとな」

「べっ…別にいいわよ…」

「（やっぱり二人とも…いい雰囲気だよねぇ～…）」

「そういえば、前から聞いてみたかったんですけど。関口さんのデッキってメタビが多いですよね？」

「ああ、メインのデッキもメタビに属するデッキかな」

「なんでそんなにメタビに拘るんですか？」

「別に拘ってるわけじゃないんだけどな…俺が大会に勝とうと思ってデッキを作っていった結果がコレだったんだけど。俺のもといた世界では、大会は基本3戦2本先取せいで、サイドデッキていう概念もあったから、大小あれど上に行く様なデッキには、どのデッキにもメタ要素が入ってたからな」

「なるほど～」

「まっ…1発勝負のこっちの世界だと、メタビが少し流行りにくいんだろうけど、1ターンＫＩＬＬでもない限り、有効性はあるぜ」

「ふむふむ…私もメタ要素少し入れてみようかな…」

「ほほぅ。その時は言ってくれ、俺も協力しよう」

「メタビかぁ…私のデッキにはちょっと合わないかな」

「ジェネクス帝にか…っと、そろそろ海鳴市に入るんじゃねえか？」

「見たいですね～。あっ…御坂さん！見てください、海ですよ、海

！！」

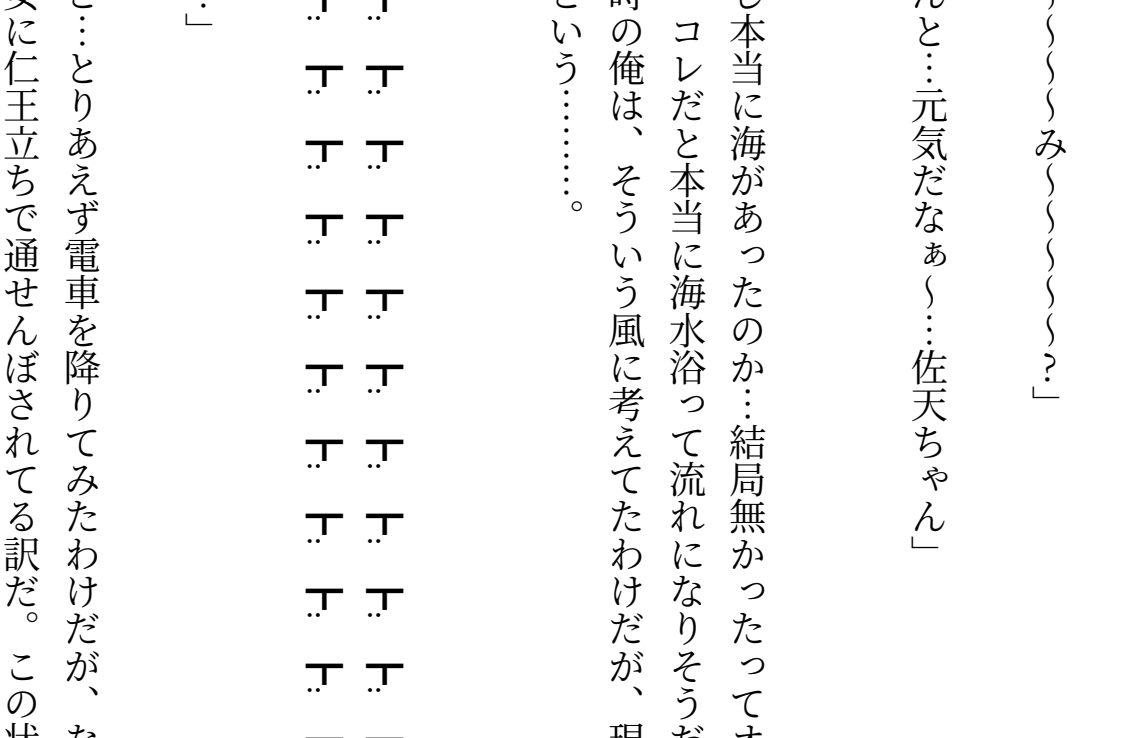
「ほんとだ～…綺麗ね！」

「う～～～み～～～～～？」

「ほんと…元気だなぁ～…佐天ちゃん」

しかし本当に海があったのか…結局無かったってオチを期待してたけど、コレだと本当に海水浴って流れになりそうだ。

この時の俺は、そういう風に考えてたわけだが、現実は斜め上を行ったという……。



「……」

えっと…とりあえず電車を降りてみたわけだが、なんか金髪ロングの少女に仁王立ちで通せんぼされてる訳だ。この状況、どうしたものか。

「（小声）ちょっと、明らかにアンタ睨まれてるけど一体何したのよ！？」

「（小声）まったく覚えがねえよ、第一にここに来たのだって今日がはじめてだぞ！？」

「（小声）あ～…もしかして、なのはちゃんのお友達じゃないですか？迎えに来てくれたとか」

「（小声）友達か…確かにそれはありそうだけど、迎えに来たって空気じゃ絶対ねえよ。見ろよあの覇気！明らかに獲物を狩るトラかなんかだぞ」

「…アンタが関口達也？」

はい、御指名いただきました～。

「そうだけど、お譲ちゃんは俺に用事かい？」

「……ふっふっふ、やっと見つけたわよ！関口達也！！今すぐ、私と決闘しなさい！！！」

「…どうしてこうなった？」

第二十三話　れっつぱーにんぐ！（後書き）

第二十三話投稿完了です。

デュエルは次回ッッッッ！！

第二十四話　ばすたーの恐怖

「えっと…話が見えないんだけど、何で俺と決闘したいんだい？」

「聞いたわよ、アンタなのはとフェイト…それにアキラも倒したらしいじゃない！」

「あ～…まぁそうなるな。つまりアレか…だからアキラ達の代わりに君が俺を倒すって事かな？」

「まぁそれもあるわね……けど、強い奴とは戦ってみたくなるものじゃない？」

おーおー…これはまた将来有望な決闘者さんだな。俺はそういう意気込み、俺も嫌いじゃないぜ。
けど、その前に気になることが…

「とりあえず、決闘を受けるどうこうは置いといて、その後ろにいる子がまるで世界の終わりを見たような顔でオロオロしてるんだが…大丈夫なのかい？」

「…まったくこの子は人見知りが激しいんだから。ちょっとすずか！私達は別に悪い事してるわけじゃないんだから、もっと堂々としなさいよ！！」

「で…でもアリサちゃん。いきなり会った初対面の人に決闘を挑むのはどうかと思うよ？それに、アキラさんからもこの人達を翠屋ま

でちゃんと案内してって頼まれてるし…」

「決闘が終わった後、ちゃんと案内するわよ！だから問題ないでしょ」

この子達が案内人だったのか…アキラ…もう少し人選を考えた方がいいんじゃないか？

「いいじゃない、この子が決闘したいっていってるんだから受けてあげれば」

と御坂は人事だと思って適当なことを言ってくる。まぁ決闘するのは一向に構わないし…話を円滑に進めるためにも、ここは受けておいた方がいいのかな

「う～む…それもそうだな。いいぜ、君の挑戦この関口達也が受けて経つ！」

「まったく…最初から素直に受けてればいいのよ。私はアリサ・バニングス！覚悟しなさいっ！！」

「決闘（デュエル）！！」

「決闘（デュエル）！！」

「いや～…始まっちゃいましたね決闘。私達はどうしましょうか御

坂さん」

「まっ…ゆっくり見物させてもらいましょ。あの子がどんなデッキなのかも気になるしね」

「ですね。あっ…そうだ、貴女もこっちで一緒に観戦しようよ！私は佐天涙子、でこっちの人が…」

「御坂美琴よ、よろしく」

「あっ…はいよろしくお願いします。なのはちゃんから話は聞いてます。とってに元気いっぱいな人だって…あの、私は月村すずかって言います」

「すずかちゃんかぁ～…いい名前だね。それに、う～ん…可愛い！」

「ひゃっ…！？」

「佐天さん、そのなのはちゃんって子と知り合いなの？」

「はい、この前関口さんと大会に出た時に知り合ったんですよ」

「へぇ～…」

関口達也　（植物メタビ（？）デッキ）　ＶＳ　アリサ・バニングス　（ぼすたーデッキ）

「先攻はアンタにあげるわ、かかって来なさい！」

「そいつはどーも、じゃあ俺のターン…ドロー!!俺はモンスターを伏せて、カードを2枚セット。ターンエンドだ」

「私のターン、ドロー!…いい手札ね、最初から蹂躙してあげるわっ!私は手札からフレムベル・ヘルドッグを召喚!」

「罠カード「奈落の落とし穴」発動!そいつは除外だ」

「なっ…ななっ!?…やってくれるじゃない」

「まぁね、そいつは出されると厄介だから」

しっかし分かりやすいなぁ～…アイツがどうやらあのデッキの肝だったらしい。
ってことはフレムベルか?…でもなのはちゃんのデッキがアレだったからな～…。

「私は、カードを1枚セットしてターンエンドよ!」

現状

関口達也	ＬＰ８０００	手札3枚	
フィールド上	伏せモンスター　1体	伏せカード1枚	
アリサ・バニングス	ＬＰ８０００	手札４枚	
フィールド上	モンスター　ナシ	伏せカード1枚	

「俺のターン…ドロー！」

ふむ……こっちは相手の攻撃待ちな訳だが、ドッグ先生に殴られたらロクなこと無いからな……仕方ない、ここは少しでも削りに行こう。

「俺は手札から、キラー・トマトを召喚！更に伏せカードを反転召喚！こっちもキラー・トマトだ」

《キラー・トマト／Ｍｙｓｔｉｃ　Ｔｏｍａｔｏ》
効果モンスター
星４／闇属性／植物族／攻１４００／守１１００
このカードが戦闘によって破壊され墓地へ送られた時、
自分のデッキから攻撃力１５００以下の闇属性モンスター１体を
自分フィールド上に表側攻撃表示で特殊召喚する事ができる。

「そういえば関口さんのあのデッキ、何でキラー・トマトが入ってるんでしょうね？」

「あれ？佐天さん見たこと無いんだっけ。まぁあのデッキはギミック多いからね～」

「むっ…御坂さん知ってるなら教えてくださいよ～」

「多分見てれば、その内出てくるわよ」

「じゃあバトルフェイズだ、キラー・トマト２体でアリサちゃんにダイレクトアタック！！」

「むっ…」

アリサ・バニングス　　ＬＰ８０００　↓　５２００

「俺はこのままターンエンドだ」

「むむっ…このままじゃ絶対終わらないんだからっ！私のターン、ドロー！……ふっ…ふふふ！！これでアンタも終わりよ！！」

むっ、何か引いたみたいだな。俺の勘が正しければ……ヤバイかもな。こっちの伏せがどう生きてくるかだけど。

「どうだろうね、ただ…俺はそう簡単には負けないよ」

「言ってなさいよ、すぐに後悔させてやるんだからっ！私は手札から魔法カード「簡易融合」を発動！カオス・ウィザードを特殊召喚！！」

《簡易融合／Ｉｎｓｔａｎｔ　Ｆｕｓｉｏｎ》
通常魔法
１０００ライフポイントを払って発動する。
レベル５以下の融合モンスター１体を融合召喚扱いとしてエクストラデッキから特殊召喚する。
この効果で特殊召喚したモンスターは攻撃する事ができず、エンドフェイズ時に破壊される。
「簡易融合」は１ターンに１枚しか発動できない。

《カオス・ウィザード／Ｋａｍｉｏｎｗｉｚａｒｄ》

融合モンスター
星４／闇属性／魔法使い族／攻１３００／守１１００
「ホーリー・エルフ」＋「黒魔族のカーテン」

アリサ・バニングス　　ＬＰ５２００　↓　４２００

「なるほどね…そいつを使うってことは、コレは本格的にシンクロのための布石…いや、その伏せカードの存在も考えると…」

「今更考えたって遅いわよ！私は手札から、フレムベル・マジカルを召喚！そして、この２体をチューニング！来なさい、バニングス家の守護龍！シンクロ召喚、スターダスト・ドラゴン！！」

ですよね～……あいつを出されたら俺のデッキじゃ倒せる手が殆ど無い！今の内に下準備をさせてもらうぜ。

《スターダスト・ドラゴン／Ｓｔａｒｄｕｓｔ　Ｄｒａｇｏｎ》
シンクロ・効果モンスター
星８／風属性／ドラゴン族／攻２５００／守２０００
チューナー＋チューナー以外のモンスター１体以上
「フィールド上のカードを破壊する効果」を持つ
魔法・罠・効果モンスターの効果が発動した時、
このカードをリリースする事でその発動を無効にし破壊する。
この効果を適用したターンのエンドフェイズ時、
この効果を発動するためにリリースされ墓地に存在するこのカードを、
自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。

「更に、罠カード「バスター・モード」発動！」

「罠カード「スキルドレイン」発動！」

「そんな罠、このモンスターにはまったく無意味なんだからっ！スターダスト・ドラゴン／バスターをデッキから特殊召喚！！」

《スターダスト・ドラゴン／バスター／Ｓｔａｒｄｕｓｔ　Ｄｒａｇｏｎ／Ａｓｓａｕｌｔ　Ｍｏｄｅ》
効果モンスター
星１０／風属性／ドラゴン族／攻３０００／守２５００
このカードは通常召喚できない。
「バスター・モード」の効果及び
このカードの効果でのみ特殊召喚する事ができる。
魔法・罠・効果モンスターの効果が発動した時、
このカードをリリースする事でその発動を無効にし破壊する。
この効果を適用したターンのエンドフェイズ時、
この効果を発動するためにリリースされ墓地に存在するこのカードを、
自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。
また、フィールド上に存在するこのカードが破壊された時、
自分の墓地に存在する「スターダスト・ドラゴン」１体を特殊召喚する事ができる。

「なっ…何あのカード！？あんなの始めて見たよ！！」

「私も…見たこと無いわ」

「えっと…あのカードはアリサちゃんの家に代々伝わるカードなんです」

「へぇ～…なんだか神のカードみたいだね～」

「でも、どんな効果を持ってるの？」

「スターダスト・ドラゴンは、自身をリリースすることでフィールド上のカードを破壊する効果の魔法・罠・効果モンスターの効果を無効化して破壊するのと、エンドフェイズに墓地から自己再生する効果だよねー」

「大体の効果はスターダスト・ドラゴンと同じです。ただ、フィールドを破壊する効果じゃなくて、単純に魔法・罠・効果モンスターの効果を無効化して破壊できます。あと破壊された時に、墓地からスターダスト・ドラゴンを特殊召喚できます。」

「嘘…それって無敵何じゃないの？攻撃力も３０００あるみたいだし」

「まぁ、普通のやり方じゃ倒せないでしょうね」

「なるほど、アリサちゃんのデッキもバスターデッキだったんだな。バスターの中でもそいつは最強だろう」

「っ！？…このカードの事を知ってるっていうの！？」

「まぁな、だから…突破口があることも知ってるぜ」

「とっ…突破口なんてないわよ！アンタはこのままボオボコにされる運命なんだからっ！」

「さあ…どうかな？」

「うぅ…なら見せてあげるわよ！バニングスの炎を！！バトルフェイズ、スターダスト・ドラゴン／バスターで、キラー・トマトに攻撃！」

「ちっ…キラー・トマトの効果発動…だが…」

「スターダスト・ドラゴン／バスターの効果発動！自身をリリースして、その効果を無効化して破壊するわよ」

関口達也　　ＬＰ８０００　↓　６４００

「私はこのままターンエンド、エンドフェイズにスターダスト・ドラゴン／バスターが私のフィールドに特殊召喚されるわよ」

あ～痛い、痛い……どれくらい痛かったかと言うとね涙が出るくらい痛かった。

まぁ、２体目が出るようなことがあれば、勝ちは殆ど無くなるからな。今の内に…アイツを引けることを祈ろうか。

現状

関口達也　　ＬＰ８０００　↓　６４００

手札３枚

フィールド上　　キラー・トマト　１体　　永続罠　スキルドレイン１枚

アリサ・バニングス　ＬＰ８０００　↓　４２００

手札３枚
フィールド上　スタバ　１体
ド　ナシ

伏せカー

第二十四話　ばすたーの恐怖（後書き）

第二十四話投稿完了です。

アリサのデッキ、色々悩んだのですが結局コレにすることにしました。

ヴォルカニックとかもよかったんですけどね～

第二十五話　ＶＳアリサ・バニングス

現状

関口達也　　ＬＰ８０００　↓　６４００
手札３枚　　キラー・トマト　１体　　永続罠　スキルドレイン１枚
フィールド上

アリサ・バニングス　ＬＰ８０００　↓　４２００
手札３枚　　スタバ　１体　　伏せカード　ナシ
フィールド上

「しかしまぁ…いくらスターダスト・ドラゴン／バスターの能力は凶悪とはいえ、何もカードを伏せ無いって言うのはどうかと思うけどね」

「うるさいわね！そう言う話は、私のモンスターを倒してから言いなさいよ！！」

「はいはい…じゃあそ何時との勝負は、俺のデッキの神獣に任せるとしましょうか」

「神獣…？」

「じゃあ行くぜ！俺のターン…ドロー！……さて、それじゃあ覚悟

はいいか?俺は手札から、神獣王バルバロスを妥協召喚!」

《神獣王バルバロス／Ｂｅａｓｔ　Ｋｉｎｇ　Ｂａｒｂａｒｏｓ》
効果モンスター
星８／地属性／獣戦士族／攻３０００／守１２００
このカードはリリースなしで通常召喚する事ができる。
この方法で通常召喚したこのカードの元々の攻撃力は１９００になる。
また、このカードはモンスター3体をリリースして召喚する事ができる。
この方法で召喚に成功した時、相手フィールド上に存在するカードを全て破壊する。

「攻撃力３０００!?…そんなモンスターを何のリリースも無しで召喚出来るなんて…」

「コイツは本来妥協召喚すれば攻撃力が１９００になるんだけどな…スキドレが発動している今、その効果も無効化されて、攻撃力が３０００に戻る」

「そんな…」

「さぁ、バトルと行こうか…俺はキラー・トマトを守備表示に変更。そしてバトルフェイズ、神獣王バルバロスでスターダスト・ドラゴン／バスターに攻撃!!相打ちを狙うぜ!」

「っ…スターダスト・ドラゴン／バスターの効果発動!墓地に落ちた時、墓地のスターダスト・ドラゴンを特殊召喚するわよ」

「りょーかいだ。俺はカードを1枚伏せてターンエンドだ」

「（フン…なによ、たとえ／バスターが倒されても、またバスター・モードを引けばいいだけの話なんだからっ！）私のターン、ドロー！……まずはそのウザったい。罠から消してあげる！手札から速攻魔法「サイクロン」を発動！対象はスキルドレイン！」

「あらら…もう少し活躍して欲しかったんだがな…いいぜ、スキルドレインは破壊される」

「更に私は、手札からフレムベル・ヘルドッグを召喚！そしてバトルフェイズ、フレムベル・ヘルドッグでキラー・トマトに攻撃！」

《フレムベル・ヘルドッグ／Ｆｌａｍｖｅｌｌ　Ｆｉｒｅｄｏｇ》
効果モンスター
星４／炎属性／獣族／攻１９００／守　２００
このカードが戦闘によって相手モンスターを破壊し墓地へ送った時、自分のデッキから「フレムベル・ヘルドッグ」以外の守備力２００以下の炎属性モンスター１体を自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。

「…りょーかいだ。俺はキラー・トマトの効果発動！デッキから、クリッターを攻撃表示で特殊召喚するぜ」

「フレムベル・ヘルドッグの効果も発動よ！デッキから、フレムベル・マジカルを攻撃表示で特殊召喚するわ！」

《クリッター／Ｓａｎｇａｎ》
効果モンスター
星３／闇属性／悪魔族／攻１０００／守　６００

このカードがフィールド上から墓地へ送られた時、
自分のデッキから攻撃力１５００以下のモンスター１体を手札に加える。

「このまま追撃よ！フレムベル・マジカルで、クリッターに攻撃！そして、スターダスト・ドラゴンでアンタにダイレクトアタック！！」

「あたた…クリッターの効果発動だ。俺はデッキから、ローン・ファイア・ブロッサムを手札に加えるぜ」

関口達也　　ＬＰ６４００　→　３５００

「そして、私はフレムベル・ヘルドッグとフレムベル・マジカルをチューニング！来なさい、シンクロ召喚、レッド・デーモンズ・ドラゴン！！」

《レッド・デーモンズ・ドラゴン／Ｒｅｄ　Ｄｒａｇｏｎ　Ａｒｃｈｆｉｅｎｄ》
シンクロ・効果モンスター
星８／闇属性／ドラゴン族／攻３０００／守２０００
チューナー＋チューナー以外のモンスター１体以上
このカードが相手フィールド上に存在する守備表示モンスターを攻撃した場合、
ダメージ計算後相手フィールド上に存在する守備表示モンスターを全て破壊する。
このカードが自分のエンドフェイズ時に表側表示で存在する場合、
このターン攻撃宣言をしていない自分フィールド上のこのカード以外のモンスターを全て破壊する。

「これまた打点の高いモンスターを…参ったねどうも」

「バスターを出す以外にだって、戦いようはあるのよ。私はこのままターンエンド！」

現状

関口達也　　ＬＰ６４００　↓　３５００　　手札３枚
フィールド上　　モンスター　ナシ　　伏せカード　１枚

アリサ・バニングス　ＬＰ４２００　　手札２枚
フィールド上　　スターダスト１体　レモン１体　　伏せカード　ナシ

「俺のターン…ドロー！俺は手札から、ローン・ファイア・ブロッサムを召喚！そして効果を発動！自身をリリースして、デッキから同じローン・ファイア・ブロッサムを特殊召喚！そしてコイツの効果も発動だ！持ってくるのは…椿姫ティタニアル！！」

「攻撃力２８００…けど、それじゃ私のレッド・デーモンズ・ドラゴンは倒せないわよ？」

「確かにな…まぁそいつは後回しってことさ。俺は手札から魔法カード「トレード・イン」を発動！手札のフェニキシアン・クラスター・アマリリスを墓地に送って２枚カードをドローする！そしてバトルフェイズ、椿姫ティタニアルでスターダスト・ドラゴンを攻撃

！」

「うっ…」

アリサ・バニングス　　ＬＰ４２００　→　３９００

「俺はカードを1枚セットして、ターンエンド時墓地のローン・ファイヤ・ブロッサムを1体除外して、フェニキシアン・クラスター・アマリリスを特殊召喚！これでターンエンドだ」

「うぅ…やってくれるじゃない！！けど、私のレッド・デーモンズ・ドラゴンですぐそいつ等を倒してやるんだからっ！」

「どうかな？こっちは伏せカードが2枚あるぜ」

「私のターン、ドロー！！そんなカード関係ないって教えてあげる！私は手札から、魔法カード「ハリケーン」を発動！フィールド上の魔法・罠カードはすべて手札に戻るわ」

「…！」

「私のバトルフェイズ！レッド・デーモンズ・ドラゴンで、椿姫ティタニアルに攻撃！」

「…」

関口達也　　ＬＰ３５００　→　３３００

「どう？アンタの切り札は墓地に送ってあげたわよ」

「やれやれ…アリサちゃん、そいつはどうかと思うぜ？」

「…どういう意味よ？」

「確かにティタニアルは倒せたかもしれないがな、ハリケーンを使うならそのターンに決める用意が出来てからだ。じゃないとただのその場しのぎにしかならない！」

「！」

「キーカードを使うなら一撃必殺…手本を見せてあげるよ」

現状

関口達也	ＬＰ３５００　→　３３００	手札４枚
フィールド上	アマリリス１体（守備）	伏せカード　ナシ
アリサ・バニングス	ＬＰ４２００　→　３９００	手札２枚
フィールド上	レモン１体	伏せカード　ナシ

「俺のターン…ドロー！！…いいね…引きも俺に味方してくれてるらしい。俺の墓地の闇属性モンスターの数は３体…だからコイツの召喚条件は整った！俺は手札から、ダーク・アームド・ドラゴンを特殊召喚！効果で墓地のクリッターを除外…アリサちゃんのレッド・

デーモンズ・ドラゴンを破壊！」

「なっ…！？」

「俺はフェニキシアン・クラスター・アマリリスを攻撃表示！そしてバトルフェイズ…フェニキシアン・クラスター・アマリリスでアリサちゃんにダイレクトアタック！そして自壊効果で自壊し、アリサちゃんに８００ポイントのダメージを与える！」

「うっ…！」

アリサ・バニングス　　ＬＰ３９００　↓　９００

「これでトドメだ、ダーク・アームド・ドラゴンでアリサちゃんにダイレクトアタック！！」

アリサ・バニングス　　ＬＰ９００　↓　０

関口達也　（植物スキドレバルバダムドデッキ）　ＶＳ　アリサ・バニングス　（スタバデッキ）

勝者　関口達也

「アリサちゃん！！」

さっき、アリサちゃんの後ろで隠れてた子がアリサちゃんに駆け寄っていく。そして当の本人はかなり悔しそうだ。

ふむ…彼女のデッキは、もう少し相手モンスターに対する除去等を増やすと強いと思うんだけどな。

「お疲れ様でした～、いや～いい決闘でしたねっ！」

「まっ…まぁまぁね。」

「ど～も、スタバを出された時はどうしようかと思ったけどね」

「でも、冷静に対処してたじゃないですか！私だったら、出された瞬間にパニクっちゃうかも」

「アイツは無敵なように見えて、その実色々と難しいカードなんだよ。使い手のプレイングにも左右されるしね」

「…あのカード、あのアリサちゃんって子の家に代々伝わるものだってすずかちゃんが言ってたけど、アンタあのカードを持ってる人間と決闘したことがあったの？」

「すずか…？ああ、あの子の事か。まぁな、こっちの世界じゃそうなのかもしれないけど、俺の元いた世界じゃ、スタバデッキは一時期はやってたからな。」

「へぇ～…」

「アリサちゃん…大丈夫？」

「すずか…私の代わりにアンタが仇を取って頂戴…」

「ええ！？…無理だよ…私なんかじゃ」

「大丈夫、すずかならやれるわ…私は信じてる」

「それに、アキラさん達をこれ以上待たせるのも…」

「あ～もう！うじうじ言わない！！このまま負けっぱなしっていうのは癪に障るのよ！！とにかく、次はアンタが出るの！！」

「ええ～！？」

「…なにやら向こうがキナ臭くなってきたな」

「すずかちゃんとも決闘するんですか？」

そいつは無いな。ただでさえあんなちっちゃい子と決闘するのは気が退けるっていうのに、連戦とかマジ勘弁だ。

「…いや、俺はもうパスだ。佐天ちゃんか御坂…あとは頼んだ」

「そういうことなら、私がいきまｓｙ」

「悪いけど、佐天さん…ここは譲ってくれない？」

「ほえ？」

「私、最近決闘あんまりしてなかったのよ…だから久しぶりに…ね？」

「…分かりました」

「ほら、すずか！向こうもやる気みたいじゃない」

「うぅ…分かった。やってみるね」

さて、久しぶりに観戦側に回る気がするな。

御坂の戦い…楽しませてもらおうか！

第二十五話　ＶＳアリサ・バニングス（後書き）

第二十五話投稿完了です。

う～む…すずかのデッキを何にしようか迷います。

吸血鬼デッキとかあったらいいんだけどね～

第二十六話　御坂美琴　ＶＳ　月村すずか　前編

さて、ちゃちゃっとあらすじ。

1．海鳴市に着いた

2．決闘した

3．勝った

4．あとは任せた～　　↑　いまここ

ふう～…あらすじ終了。
とりあえず、後のことは御坂にまる投げして、俺はのんびり観戦と行かせて貰おう。

「…ちょっと」

「ん、なんだいアリサちゃん？」

「あれで勝ったと思わないことね。私のデッキはスターダスト・ドラゴン／バスターが２体並んでこそのデッキなんだからっ…今回はたまたま並ばなかったけど…並んだらアンタなんか一捻りなんだから！！」

「う～む…水を差すようで悪いが、そうでもないぜ？世の中には「超融合」なんておっそろしいカードもあるし、何より今はシューテ

ィング・クェーサ・ドラゴンとか出されるご時世だからな…」

「？…何それ、聞いたこと無い名前ね。どんな効果のカードなの？」

「シンクロモンスター2体以上とシンクロチューナーを1体使って作るレベル12のシンクロモンスターでね。効果はざっとこんな感じだ」

このカードはシンクロ召喚でしか特殊召喚できない。
このカードはこのカードのシンクロ素材としたチューナー以外のモンスターの数まで1度のバトルフェイズ中に攻撃する事ができる。
1ターンに1度、魔法・罠・効果モンスターの効果の発動を無効にし、破壊する事ができる。
このカードがフィールド上から離れた時、
「シューティング・スター・ドラゴン」1体をエクストラデッキから特殊召喚する事ができる。

「とまぁこんな感じだな…攻撃力は4000あるから、かなり厄介だぜ」

「なるほどね…けど、出すのも相当難しいんじゃないの？」

「それがそうでもないんだよ、コイツを出す専用のデッキがあってな…それでやれば、結構ポンポン出てくる。まぁ、主にフォーミュラー・シンクロンとTGハイパー・ライブラリアン2体で作るんだが、コイツラの効果も助けて、上手くいけばハンドを4枚ぐらい補充しながらシューティング・クェーサー・ドラゴンが出せるんだ」

「ふ～ん…色んなデッキがあるのね」

「面白そうですね、そのデッキ。私も何時か戦ってみたいなぁ～」

「まっ…デカイ大会に行けば、もしかしたらいるかもな…っと、そろそろ二人の決闘が始まるみたいだぜ」

御坂美琴　（ジェネクス帝デッキ）　ＶＳ　月村すずか　（？？？）

「えっと…すずかちゃん、とりあえず楽しんで行きましょ」

「はっ…はい、よろしくお願いします」

「とりあえず、すずかちゃんから先攻でいいわよ」

「分かりました、じゃあ私のターン…ドローします」

「そういえば。あのすずかちゃんって子はどういうデッキなんだいアリサちゃん？」

「リチュアよ」

「リチュアって、最近出てきた新しいテーマだよね？そんなに強いの？」

「組み方によるな…もしかして、ガスト型か？」

「そうよ、しかも先攻もらえたみたいだし…これはすずかの勝ちかもね」

「？…どういうこと？？」

「ガスト型に先攻を取られるとマズイのさ…何故なら……」

「私は手札から、速攻魔法カード「手札断殺」を発動します」

《手札断殺／Ｈａｎｄ　Ｄｅｓｔｒｕｃｔｉｏｎ》
速攻魔法
お互いのプレイヤーは手札を2枚墓地へ送り、デッキからカードを2枚ドローする。

「（手札交換…？まぁいいわ、ある意味コレはチャンスだし）私は手札から、黄泉ガエルとジェネクス・コントローラーを墓地に送るわ」

「私は、イビリチュア・ガストクラーケと儀式魔法カード「リチュアの儀水鏡」を墓地に送ります。そして、リチュアの儀水鏡の効果発動！このカードをデッキに戻すことで、イビリチュア・ガストクラーケを手札に加えます」

《リチュアの儀水鏡／Ｇｉｓｈｋｉ　Ｃｅｒｅｍｏｎｉａｌ　Ｍｉｒｒｏｒ》
儀式魔法
「リチュア」と名のついた儀式モンスターの降臨に必要。
手札・自分フィールド上から、儀式召喚するモンスターと同じレベルになるようにモンスターをリリースしなければならない。

また、墓地に存在するこのカードをデッキに戻す事で、
自分の墓地に存在する「リチュア」と名のついた儀式モンスター1体を選択して手札に戻す。

「更に、手札からシャドウ・リチュアを捨てることでデッキからリチュアの儀水鏡を手札に加え、手札からヴィジョン・リチュアを墓地に送ることで、デッキからイビリチュア・ガストクラーケを手札に加えます」

《シャドウ・リチュア／Ｇｉｓｈｋｉ　Ｓｈａｄｏｗ》
効果モンスター
星４／水属性／海竜族／攻１２００／守１０００
水属性の儀式モンスターを特殊召喚する場合、
このカード１枚で儀式召喚のためのリリースとして使用する事ができる。
また、手札からこのカードを捨てる事で、
自分のデッキから「リチュア」と名のついた儀式魔法カード１枚を手札に加える。

《ヴィジョン・リチュア》
効果モンスター
星２／水属性／海竜族／攻　７００／守　５００
水属性の儀式モンスターを特殊召喚する場合、
このカード１枚で儀式召喚のためのリリースとして使用する事ができる。
また、手札からこのカードを捨てる事で、
自分のデッキから「リチュア」と名のついた儀式モンスター１体を手札に加える。

「そして、私は手札からリチュア・アビスを召喚して効果発動。デ

ッキからシャドウ・リチュアを手札に加えます」

《リチュア・アビス／Ｇｉｓｈｋｉ　Ａｂｙｓｓ》
効果モンスター
星２／水属性／魚族／攻　８００／守　５００
このカードが召喚・反転召喚・特殊召喚に成功した時、
自分のデッキから「リチュア・アビス」以外の守備力１０００以下の
「リチュア」と名のついたモンスター１体を手札に加える事ができる。

「あ～…これはヤバイな。初手からほぼ決まったぽいぞ」

「最低でも2枚は持っていかれるわね…」

「むぅ…よく分からないけど、あのリチュアデッキはハンデスに特化したデッキってことだよね？」

「ああ、しかも一度決まればループすることも多い。対策が無い場合は先攻でハンドをすべて落とされることもある」

「うわ～…キッツ～」

「しかも、ガストクラーケの効果は墓地に落とすじゃなくて、デッキに戻すだからな…再利用もし辛いのさ」

「それって…御坂さんのデッキとかなり相性悪くありません？」

「ああ、けど初手に断殺で黄泉ガエルが落とせてるからな。まだマシだろ…それより、来るぜ」

「…（深呼吸）私は、儀式魔法カード「リチュアの儀水鏡」を発動します！手札のイビリチュア・ガストクラーケをコストに、イビリチュア・ガストクラーケを儀式召喚！」

《イビリチュア・ガストクラーケ》
儀式・効果モンスター
星６／水属性／水族／攻２４００／守１０００
「リチュア」と名のついた儀式魔法カードにより降臨。
このカードが儀式召喚に成功した時、
相手の手札をランダムに２枚まで確認し、
その中から１枚を選択して持ち主のデッキに戻す。

「イビリチュア・ガストクラーケの効果発動です。手札を２枚指定しますから、そのカードを見せてください」

「…分かったわ」

「水霊術ー「葵」と邪帝ガイウス…じゃあ邪帝ガイウスをデッキに戻してください」

「ええ…」

「では、墓地のリチュアの儀水鏡の効果で、リチュアの儀水鏡をデッキに戻し、イビリチュア・ガストクラーケを手札に加えます。更に手札からシャドウ・リチュアを捨て、デッキからリチュアの儀水鏡を手札に加えます」

「！？（ヤバイ…もう一度クラーケを出されちゃうじゃない！！）」

「儀式魔法カード「リチュアの儀水鏡」を発動します。フィールドのイビリチュア・ガストクラーケをコストに、イビリチュア・ガストクラーケを儀式召喚。イビリチュア・ガストクラーケの効果発動です。手札を2枚指定しますから、そのカードを見せてください」

「うっ…」

「水霊術ー「葵」とジェネクス・ウンディーネ…じゃあジェネクス・ウンディーネをデッキに戻してください」

「ガイウスにウンディーネか…肝のカードがほぼ落とされたな」

「あの人のデッキはジェネクス帝なんだ…」

「あの人じゃなくて、御坂美琴さんだよ～。そして、私が佐天涙子です。よろしくね、アリサちゃん」

「…よろしく」

「それにしても、御坂さん辛そうですね。アレだけキーカードを落とされたら、かなり厳しいですよ」

「まっ…ドローかあの手札にまだ帝系統が残ってたらワンチャンスあるけどな」

「けど、すずかはその事も十分考えてるはずよ。きっと何かしらの対策は打ってるでしょうね」

「葵か…こりゃ勝負あったか…」

「私は、カードを一枚セット。ターンエンドです」

「（よし、初手からかなり痛かったけど…まだ何とかなる！）私のターン…ドロー！」

「その時、罠カード「水霊術ー「葵」」を発動します！コストは、私のフィールドにいるリチュア・アビスです」

《水霊術ー「葵」／Ｓｐｉｒｉｔｕａｌ　Ｗａｔｅｒ　Ａｒｔ　ー　Ａｏｉ》
通常罠
自分フィールド上に存在する水属性モンスター1体を生け贄に捧げる。
相手の手札を確認し、カードを1枚選択して墓地に送る。

「なっ…！？」

「手札のカードを1枚選ばせて貰います。…私が選ぶのは、これです風帝ライザー」

「（手札の帝が全部やられたっ…）…私は墓地の黄泉ガエルの効果を発動するわ。私のフィールドに守備表示で特殊召喚！私は、カードを1枚セットターンエンドよ」

現状

月村すずか　　ＬＰ８０００　　手札２枚
フィールド上　　クラーケ１体　　伏せカード　ナシ

御坂美琴　　ＬＰ８０００　　手札２枚
フィールド上　　黄泉ガエル１体　　伏せカード１枚

「あの伏せ、御坂の手札を見るに水霊術ー「葵」か。けど、現状を何とかできるカードじゃない」

「このまま、すずかの押せ押せよ♪」

「で…でも、御坂さんのことですからここから何とか巻き返しますよ！」

「う～む…」

正直状況はかなり悪い…葵で手札は殆どバレてるし、キーカードもやられた。幸いなのはクラーケの攻撃力はそれほど高くないことか…御坂、ここが正念場だぜ？

第二十六話　御坂美琴　ＶＳ　月村すずか　前編（後書き）

第二十六話投稿完了です。

とりあえずすずかのデッキはリチュアにしました。最近よく初手で回されてボコボコにされますｗ

ここで、一つ。ハルヒキャラに使って欲しいデッキを募集したいと思います。

コレだっ！　という案がある方は是非！

第二十七話　御坂美琴　ＶＳ　月村すずか　中篇

現状

月村すずか　　ＬＰ８０００　　手札２枚
フィールド上　　クラーケ１体　　伏せカード　ナシ

御坂美琴　　ＬＰ８０００　　手札２枚
フィールド上　　黄泉ガエル１体　　伏せカード１枚

「私のターン…ドローします！」

「そこで罠カード「水霊術－「葵」」を発動するわ。コストはフィールド上の黄泉ガエルよ」

「…分かりました」

「……私が選ぶのはこのカードよ、「サルベージ」」

「サルベージを墓地に送ります。じゃあ、私のメインフェイズ…私は手札からリチュア・ビーストを召喚！」

《リチュア・ビースト》
効果モンスター
星４／水属性／獣族／攻１５００／守１３００
このカードが召喚に成功した時、
自分の墓地に存在するレベル４以下の「リチュア」と名のついたモンスター１体を選択して表側守備表示で特殊召喚する事ができる。

「効果で、墓地のリチュア・アビスを守備表示で特殊召喚します。そしてリチュア・アビスの効果発動…デッキから、シャドウ・リチュアを手札に加えます」

「っ…（儀式コンボが止まらないわ…このままじゃ、何も出来ずに…）」

「これでもう一発か、御坂の手札はすべてバレた上で残り一枚になるな…」

「流石すずかね、私の親友なだけの事はあるわ」

「うぅ…御坂さんに逆転するチャンスはもう無いんでしょうか？」

「そうだな…確かに辛い状況かもしれないが、まだ手はあるさ。今のサルベージが通ってたら詰みだったも知れないが、実際それは通らなかった。このターンで決着がつく事はないし、何よりガストクラーケの攻撃力は２４００だ…帝で十分相打ち出来る」

「！…そっか、がんばれ！御坂さ～ん！！」

けど…リチュアの儀式にも色々厄介なのがいたしな。すずかちゃんもかなり冷静に事を運んでるみたいだし、ここから勝ちを拾うのはキツイ…。

「…（どうしよう…このままイビリチュア・ガストクラーケをもう一度出してもいいけど、次のドローで何か出されて逆転されたら、

手が無くなっちゃうよ…ここは手札を温存した方がいいよね）私は、バトルフェイズに入ります。リチュア・ビーストとイビリチュア・ガストクラーケで御坂さんにダイレクトアタックです！」

「ぐっ…」

御坂美琴　　ＬＰ８０００　→　５１００

「私はこのまま、ターンエンドです」

「私のターン…ドロー！…そして黄泉ガエルの効果を発動よ。私のフィールド上に特殊召喚するわ。更に、私は手札からジェネクス・ウンディーネを召喚！効果でデッキからフィッシュボーグ－ガンナーを墓地に送って、ジェネクス・コントローラーを手札に加えるわよ。」

お～…この土壇場でまたジェネクス・ウンディーネを引いたか。いい引きだ…御坂はまだ諦めてないみたいだな。

「更に、手札で腐ってたもう一枚の黄泉ガエルを墓地に送ってフィッシュボーグ－ガンナーを特殊召喚！行くわよ、黄泉ガエルとフィッシュボーグ－ガンナーをチューニング。シンクロ召喚…フォーミュラ・シンクロン！…そして効果で、カードを１枚ドローするわ」

「…！」

「そして、ジェネクス・ウンディーネとフォーミュラ・シンクロン

をチューニング、戦闘面なら…コイツに敵うモンスターはそういないんだからっ！シンクロ召喚…Ａ・Ｏ・Ｊ　カタストル！！」

《Ａ・Ｏ・Ｊ　カタストル／Ａｌｌｙ　ｏｆ　Ｊｕｓｔｉｃｅ　Ｃａｔａｓｔｏｒ》
シンクロ・効果モンスター
星５／闇属性／機械族／攻２２００／守１２００
チューナー＋チューナー以外のモンスター１体以上
このカードが闇属性以外のモンスターと戦闘を行う場合、
ダメージ計算を行わずそのモンスターを破壊する。

「そのモンスターは…！？」

「そう…このモンスターは闇属性以外のモンスターと戦闘を行った場合、ダメージ計算を行わずそのモンスターを破壊するわ。すずかちゃんのデッキはリチュアデッキ…水属性が大半なんじゃない？」

「っ…」

「じゃあ行くわよ…バトルフェイズ！Ａ・Ｏ・Ｊ　カタストルでイビリチュア・ガストクラーケに攻撃！！」

「…イビリチュア・ガストクラーケが…」

「私はこのまま、ターンエンドよ」

現状

月村すずか　　ＬＰ８０００　　手札２枚
フィールド上　　ビースト１体　アビス１体　（守備）

伏せカード　ナシ

御坂美琴　　ＬＰ８０００　→　５１００　　手札３枚
フィールド上　　カタストル１体
伏せカード　ナシ

「お～！！御坂やったぁ！！」

「むむっ…アレぐらいですずかは倒されたりしないんだからっ！！」

「でも、すずかちゃんのデッキのモンスターは水属性ばっかりなんだよね？今まで出てきたモンスターも全部水属性だし。儀式コンボに特化させてる分、除去カードもあんまり入ってなさそう」

「その内分かるわよ、リチュアの強さはまだまだこんな物じゃないんだから」

「うむ…リチュアは色々厄介だよなぁ～……ディーヴァ混ぜた型とかドゥローレンでグルグルする型とか…嫌な思い出しかないぜ」

「…リチュアデッキとも戦ったことあるんだ…アンタってホント色んなデッキを相手にしたことあるのね」

「まぁ、それだけが取り得だったからな」

更にこっちに来てからは、デュエルモンスターズが俺の命綱になりつつあるからな…コレが無かったら俺は死んでたかもしれん。

「私のターン、ドローします。私は、手札のシャドウ・リチュアを墓地に送ってデッキから儀式魔法カード「リチュアに伝わりし禁断の秘術」を手札に加え、発動します！リリース対象は、私のフィールドのリチュア・アビスと御坂さんのフィールドにいるＡ・Ｏ・Ｊカタストルです…イビリチュア・ガストクラーケを儀式召喚！！」

《リチュアに伝わりし禁断の秘術》
儀式魔法
「リチュア」と名のついた儀式モンスターの降臨に必要。
自分フィールド上及び相手フィールド上から、
儀式召喚するモンスターと同じレベルになるように
表側表示で存在するモンスターをリリースしなければならない。
この効果で儀式召喚したモンスターの攻撃力は半分になる。
このカードを発動するターン、自分はバトルフェイズを行う事ができない。

「なっ…！？私のフィールド上のモンスターをリリースして儀式召喚できるなんて…」

「更に、イビリチュア・ガストクラーケの効果を発動します…いいですか？」

「…ええ」

「…じゃあ、この炎帝テスタロスをデッキに戻してもらいます。リチュアに伝わりし禁断の秘術を使ったターン…私はバトルフェイズを行うことが出来ません。このままターンエンドです」

「（また帝が戻された…けど、墓地に落とされた訳じゃないから、まだ帝をドローできる確立は高いはず…！）私のターン…ドロー！そして墓地の黄泉ガエルをフィールドに特殊召喚！…更にこのカードをリリースして、手札から邪帝ガイウスを召喚！」

《邪帝ガイウス／Ｃａｉｕｓ　ｔｈｅ　Ｓｈａｄｏｗ　Ｍｏｎａｒｃｈ》
効果モンスター
星６／闇属性／悪魔族／攻２４００／守１０００
このカードの生け贄召喚に成功した時、フィールド上に存在するカード１枚を除外する。
除外したカードが闇属性モンスターカードだった場合、相手ライフに１０００ポイントダメージを与える。

「更に、効果発動よ…対象はイビリチュア・ガストクラーケ！それを除外してもらうわ」

「あっ…！？」

「そしてバトルフェイズ…邪帝ガイウスでリチュア・ビーストに攻撃！！」

月村すずか　　ＬＰ８０００　↓　７１００

「私はこのままターンエンドよ！」

現状

月村すずか　　ＬＰ８０００　↓　７１００

手札1枚　　モンスター　ナシ　　伏せ
フィールド上　　カード　ナシ

御坂美琴　　ＬＰ５１００
手札2枚
フィールド上　　ガイウス1体　　伏
せカード　ナシ

場が動いたな…それにしても、今日は御坂のドローがかなり冴えてやがる。
アレだけドロー解決されたらすずかちゃんも辛かろうに…手札も残り一枚だし、ここからどうなるかな。

「すずかー！！がんばれー！！負けるなぁー！！！」

「御坂さんもがんばってくださーい！！！」

そんで、こっちは応援合戦になりつつある…と。やれやれ、二人とも元気が有り余ってるとみえる…その元気をほんのちょっとだけ分けてもらいたいね。

「私のターン…ドローします。私は、魔法カード「浮上」を発動。墓地のリチュア・アビスを守備表示で特殊召喚します。更に、リチュア・アビスの効果でデッキからヴィジョン・リチュアを手札に加えます」

《浮上》

通常魔法
自分の墓地に存在するレベル３以下の
魚族・海竜族・水族モンスター１体を選択して発動する。
選択したモンスターを自分フィールド上に表側守備表示で特殊召喚する。

「私はこのままターンエンドです」

「私のターン、ドロー！黄泉ガエルの効果発動よ、私のフィールド上に守備表示で特殊召喚するわ。更に、手札からカードガンナーを通常召喚！」

《カードガンナー／Ｃａｒｄ　Ｔｒｏｏｐｅｒ》
効果モンスター
星３／地属性／機械族／攻　４００／守　４００
１ターンに１度、自分のデッキの上からカードを３枚まで墓地へ送って発動する。
このカードの攻撃力はエンドフェイズ時まで、
墓地へ送ったカードの枚数×５００ポイントアップする。
また、自分フィールド上に存在するこのカードが破壊され墓地へ送られた時、
自分のデッキからカードを１枚ドローする。

「そして、カードガンナーの効果発動！デッキの上からカードを三枚落とすわ…落ちたカードは　ブラック・ホール　ジェネクス・ウンディーネ　氷帝メビウスの三枚よ。これで、カードガンナーの攻撃力がエンドフェイズまで１５００ポイントアップするわ。そして、バトルフェイズ…カードガンナーでリチュア・アビスを攻撃！そして邪帝ガイウスですずかちゃんにダイレクトアタックよ！」

「うっ…」

月村すずか　　ＬＰ７１００　↓　４７００

「私はこのままターンエンドよ」

現状

月村すずか　　ＬＰ７１００　↓　４７００
　手札１枚
フィールド上　　モンスター　ナシ　　伏せ
カード　ナシ

御坂美琴　　ＬＰ５１００
手札２枚
フィールド上　　ガイウス１体　黄泉ガエル１体　（守備）
　カードガンナー１体　　伏せカード　ナシ

「……」

「…どうしたの、すずかちゃん？」

「あっ…いえ、御坂さんって決闘強いなぁ～って…私、ドキドキしてきました」

「ふふっ…すずかちゃんも十分強いわ。最初、ハンデスされた時はビックリしたわよ。ここまで巻き返せたのも、運がよかったのが大

きいしね。ただ…私が諦めなかったから、私のデッキがそれに応えてくれてるんだって…そう思う」

「…私も、まだ諦めてません。だから…私のデッキも応えてくれるでしょうか？」

「…ええ、きっと」

「御坂さん…私頑張ります！そして、御坂さんを倒します！」

「その意気よ…全力で迎え撃ってあげるわ」

「私のターン…ドローです！…私は、カードを1枚セット。ターンエンドです！」

「私のターン…ドロー！（ここに来て伏せカード…それはちょっと怖いわね。次元幽閉とかの可能性もあるし…少し慎重にいこうかしら）私は、カードガンナーを守備表示にしてバトルフェイズ！邪帝ガイイウスですずかちゃんにダイレクトアタック！！」

「うっ…」

月村すずか　　ＬＰ４１００　↓　１７００

「私はこのままターンエンドよ」

現状

月村すずか　　ＬＰ４７００　↓　１７００
　　手札１枚
フィールド上　　モンスター　ナシ　　伏せ
カード１枚

御坂美琴　　ＬＰ５１００
手札３枚
フィールド上　　ガイウス１体　黄泉ガエル１体　（守備）
　カードガンナー１体　（守備）　伏せカード　ナシ

「私のターン…（ここで何か引けなきゃ負けちゃう…お願い…私に力を貸して！！）」

――――――――ドロー！！――――――――

第二十七話　御坂美琴　ＶＳ　月村すずか　中篇（後書き）

第二十七話投稿完了です。

すずかちゃんはキーカードを引けるのか！？

第二十八話　御坂美琴　ＶＳ　月村すずか　後編

現状

月村すずか　　ＬＰ４７００　↓　１７００
　手札１枚
フィールド上　　モンスター　ナシ　　伏せ
カード１枚

御坂美琴　　ＬＰ５１００
手札３枚
フィールド上　　ガイウス１体　黄泉ガエル１体　（守備）
　カードガンナー１体　（守備）　伏せカード　ナシ

「…」

「…」

さぁ……どうなった！？

「私は、手札から魔法カード「サルベージ」を発動します！」

《サルベージ／Ｓａｌｖａｇｅ》
通常魔法
自分の墓地に存在する攻撃力１５００以下の水属性モンスター２体を手札に加える。

「引いたのね…すずかちゃん！」

「はい…！私はサルベージの効果で、墓地のシャドウ・リチュアとヴィジョン・リチュアを手札に加えて、この2枚を墓地に送り、それぞれリチュアの儀水鏡とイビリチュア・ソウルオーガを手札に加えます！」

「…！（まだ見たこと無いリチュアの儀式モンスター）」

「そして、罠カード「儀水鏡の瞑想術」を発動！手札のリチュアの儀水鏡を見せることで、墓地からリチュアと名のついたモンスターを2体手札に加えます…選択するのは、リチュア・ビーストとシャドウ・リチュアです」

《儀水鏡の瞑想術》
通常罠
手札の儀式魔法カード1枚を相手に見せ、
自分の墓地に存在する「リチュア」と名のついたモンスター2体を選択して発動する。
選択した墓地のモンスターを手札に戻す。

「そして、リチュアの儀水鏡を発動します！手札のヴィジョン・リチュアをリリースして、手札からイビリチュア・ソウルオーガを儀式召喚！」

《イビリチュア・ソウルオーガ／Ｅｖｉｇｉｓｈｋｉ　Ｓｏｕｌ　Ｏｒｇｅ》
儀式・効果モンスター
星８／水属性／水族／攻２８００／守２８００

「リチュア」と名のついた儀式魔法カードにより降臨。
1ターンに1度、手札から「リチュア」と名のついたモンスター1体を捨てる事で、
相手フィールド上に表側表示で存在するカード1枚を選択して持ち主のデッキに戻す。

「出たわね、アレがリチュアの中でも最高のクラスの儀式モンスターよ」

「お～…確かに強そうだね」

「しかも、いい能力だぞ。最初はブリューナクの劣化とも思ったが…デッキに戻すっていうのは地味に辛い」

「ソウルオーガの効果は絶大です…けど、その為にはコストがいるから。墓地のリチュアの儀水鏡の効果で、このカードをデッキに戻して、墓地のイビリチュア・ガストクラーケを手札に加えます。そして、手札からリチュア・ビーストを召喚して効果発動！リチュア・アビスを守備表示で特殊召喚して効果を発動します。デッキから手札に加えるのは…ヴィジョン・リチュア…！そしてシャドウ・リチュアとヴィジョン・リチュアをそれぞれ墓地に送り、デッキからリチュアの儀水鏡とイビリチュア・マインドオーガスを手札に加えます！」

「へぇ～…また見たこと無い儀式モンスターね」

「このカードも強いですよ。でも…その前にバトルフェイズです！私はイビリチュア・ソウルオーガで邪帝ガイウスに攻撃！」

御坂美琴　　ＬＰ５１００　→　４７００

「更に、リチュア・ビーストで黄泉ガエルに攻撃！」

「いいの？…どうせ黄泉ガエルはまた私のスタンバイフェイズに蘇生するわよ？」

「いいえ…もうそんなことはさせません！バトルフェイズを終了…そして私は、リチュアの儀水鏡を発動します。フィールド上のリチュア・ビーストとリチュア・アビスをリリースして、手札からイビリチュア・マインドオーガスを儀式召喚！！」

《イビリチュア・マインドオーガス／Ｅｖｉｇｉｓｈｋｉ　Ｍｉｎｄ　Ａｕｇｕｓ》
儀式・効果モンスター
星６／水属性／水族／攻２５００／守２０００
「リチュア」と名のついた儀式魔法カードにより降臨。
このカードが儀式召喚に成功した時、
お互いの墓地に存在するカードを合計５枚まで選択し、持ち主のデッキに戻す。

「そして、イビリチュア・マインドオーガスの効果発動です！お互いの墓地に存在するカードを５枚まで選んで持ち主のデッキに戻します。私が選ぶのは、御坂さんの墓地にある黄泉ガエル２枚とフィッシュボーグ―ガンナー…そして私の墓地にあるリチュアに伝わりし禁断の秘術とシャドウ・リチュアです！」

「！？…そんな…」

「更に、イビリチュア・ソウルオーガの効果を発動します。手札のイビリチュア・ガストクラーケを墓地に送り、御坂さんのフィールド上のカードガンナーをデッキに戻します！」

「くっ……一気に逆転されちゃったわね」

「私は…この勝負、勝ちたいですからっ！墓地のリチュアの儀水鏡の効果を発動します。このカードをデッキに戻すことで、墓地のイビリチュア・ガストクラーケを手札に加えます。私はこれでターンエンドです」

「よし！よくやったわすずか！！これで相手のフィールドにはモンスターがいなくなった！コストのガストクラーケもあるし、次のターンで決めちゃいなさい！」

「でも、御坂さんにはまだ手札があるし、まだ勝負は分かんないよ」

「だな…けど、次のターンが分岐になるのは確かだ」

御坂が勝つか…すずかちゃんが勝つか…どっちにしても…な。

「…やるわねすずかちゃん、1ターンでまさかここまで切り返してくるなんて…」

「御坂さんのおかげです…御坂の言葉で、私は自分のデッキを信じることが出来ましたから」

「…ふふっ…そっか、じゃあ私もまだ諦めてらんないわねっ！行く

わよ、私のターン!!」

「はいっ!!」

「ドロー…!……やっぱりね、信じてればデッキは何処までも応えてくれるわ。私は、手札のジェネクス・コントローラを墓地に送って、手札から魔法カード「ライトニング・ボルテックス」を発動するわ!」

《ライトニング・ボルテックス／Ｌｉｇｈｔｎｉｎｇ　Ｖｏｒｔｅｘ》
通常魔法
手札を1枚捨てて発動する。
相手フィールド上に表側表示で存在するモンスターを全て破壊する。

「!…私のフィールド上のモンスターが!?」

「更に、手札から魔法カード「死者蘇生」を発動…対象は私の墓地にいる邪帝ガイウスよ…そしてバトルフェイズ!邪帝ガイウスですずかちゃんにダイレクトアタック!!」

「…ここまでですね、けど楽しかったです!」

月村すずか　　ＬＰ１７００　→　０

御坂美琴　（ジェネクス帝デッキ）　ＶＳ　月村すずか　（リチュアデッキ）

勝者　御坂美琴

「お疲れさん、二人とも。いい決闘だったぜ！」

「そうだよ、すずかちゃん御坂さんをあそこまで追い詰めるってすごい！」

「とても小学生とは思えないわよね…アリサちゃんも含めて」

「あ…ありがとうございます」

「まっ…アキラや恭也さんに時々鍛えてもらってるから」

「そっか…アイツも人にものを教えるような年になったのか…」

なんか感慨深いものがあるな。アイツは身内の中でも一番年下だったから、アイツは常に誰かから教えられる立場だったのだ。

「まぁいい、とりあえずアキラ達の所へ案内してもらっていいか？」

「そうね…ちょっと待ってなさい、鮫島！」

「はい…アリサお嬢様」

ちょっと待て、その執事は今何処から現れた！？

「車をここに持ってきなさい、喫茶翠屋に向かうわよ」

「畏まりました…少々お待ちください」

「…アリサの家ってのはアレか？メイドさんや執事が常にいるような家なのか？」

「ん～…そうね、メイドさんは寧ろすずかの家の方じゃないの？ファリンさんとかノエルさんとか」

ああ、そうですか…二人揃ってお嬢様ですか…このブルジョアめっ！そんなこんなで複雑な心境を浮かべていると、佐天ちゃんが同じような顔をして近づいてきた

「分かりますよ、関口さん…御坂といい白井さんといい…学園都市にもお嬢様って多いですから」

「ははっ…」

そんなこんなで待ってると、向こうからデッカイリムジンがやってきた。恐らく、さっきの鮫島さんとやらが運転しているのだろう…俺、リムジンなんて始めてみたよ。

「さ、乗りなさいよ。これで翠屋まで向かうから」

「ははは…何かこういうの緊張しますね」

とは佐天ちゃん談である。他のやつらは、普通に乗り込んでる辺りこういうのが日常茶飯事なんだろうな。

そんなこんなで、俺達一行は翠屋に向かうのであった。

第二十九話　再会、そして新たな出会いなの

「遅いなぁ～…関口さん達」

俺こと、小池輝は翠屋の前で彼是1時間ほど待っている。やっぱりすずかちゃんはともかく、アリサちゃんに案内をお願いしたのは間違いだったかな…恐らく、関口さん達に決闘でも挑んでるんだろう。まぁ、そうだとしてもそろそろ来る頃だ。もう少し粘っていよう。

「関口さん達まだ来てないみたいだね」

「ああ、なのはちゃん。ごめんね、もう少しかかるみたいだ」

「にゃはは…多分アリサちゃんが原因だと思うけど」

「…だよね～、お店の方は大丈夫？」

「うん、お兄ちゃんとお姉ちゃんが手伝ってくれてるから大丈夫。リンディさん達も準備出来たから何時でもＯＫだっていってた」

「そっか…じゃあ本当に後は主賓が来るだけなんだけど…そういえば、フェイトちゃんは？」

「中でお店を手伝ってくれてるよ」

「珍しいね…けど、ウェイトレス姿のフェイトちゃんもきっと可愛いんだろうね」

「うん、すっごく似合ってたよ」

「あ～…すごく見てみたいっ！けど、関口さんがくるまで我慢かな」

そんなこんなで悶えつつ、俺は関口さん達を待っていた。

「ふむ、中々いい街みたいだな」

リムジンにゆられる事少し、俺こと関口達也にもようやく外の景色を楽しむ余裕が出来てきたらしい。

「でしょ～？海もあるし山もある、自然がいっぱいな町なのよ。郊外には温泉もあるしね」

そんな感じで俺の相手をしてくれてるのはアリサちゃん。ちなみに他の三人は、集まってなにやら姦しく話している。

「温泉まであるのか…ここまでくると、ちょっとしたレジャーパークだな」

「そういえば、アンタの住んでた所はどんな所だったのよ？」

「そうだな…今は学園都市だから、自然はあんまり無いな…何ていうか人間の科学のすべてを集めたって感じの街だよ。その前にいた所は…まっ代わり映えのしない平凡な場所だったな」

「平凡？」

「ああ、少し田舎だけど…近くにコンビニもあったし、そこまで不便って訳でもない田舎…特出する所が無いんだよ…あるとしたら、

川が少ないから夏に水不足によくなるぐらいか…あとは……ホタルがいたな」

「ホタル！？…十分いいじゃない。私はまだ見たこと無いのよね～」

「ここまで自然があればどっかにいるんじゃないか？…あっちじゃドブ川みたいな場所にまでいたからな…あんまり珍しいもんじゃなかったけど」

「ドブ川…ホタルって、綺麗な川にしかいない物だと思ってたけど」

「上流はそこそこ綺麗な川なんだけどな。大雨とかで下まで流れてきた奴だと信じたいんだが…」

「けど、ホタルは見てみたいわね。何時か私も連れて行きなさいよ！」

「あ～…そうだな、見せてやりたいのは山々なんだが…」

「知ってる、アンタアキラと同じで別の世界から来たんでしょ？けど、こっちにこれたんだから向こうに行く方法もきっとあるわよ。そうすれば、こっちとあっちで行き来できるようになるじゃない」

「そうだな…もしそうなったら、今度は俺のいた町も案内するよ」

「…まっその時はよろしくね」

「アリサお嬢様…そろそろです」

「分かったわ、もうすぐ着くみたいよ」

とのことだ。少し外を眺めてみると、それらしき喫茶店を見ることが出来た。その店の前に、見覚えのある顔もある。

「よお、アキラ…何だかんだで久しぶりか」

「ええ、関口さんもお変わりなく。こんにちは佐天さん…そして貴女が…」

「御坂美琴よ、今日はよろしくね」

「はい、よろしくお願いします。では一旦店に入りましょうか…中になのはちゃん達もいますし、挨拶を」

「は〜い」

そして、俺達は翠屋の店内へ。すると、初っ端で迎えてくれたのはウェイトレス姿のフェイトちゃんだった。

「いっ…いらしゃいませ！…あっ、タツヤ」

「よぉ、フェイトちゃん。中々似合ってるじゃないか」

「フェイトちゃん！その制服すっごく可愛いね！」

「ルッ…ルイコ！？」

そして、遭遇僅か3秒足らずで佐天ちゃんの餌食になったとさ。

そして、もう二人向こうからやってきた。一人はメガネを掛けた三つあみの女性。一人は全身黒の服で固めた男性で、二人とも俺より年上っぽい。

「君がアキラの友達だね？アキラから話は聞いてるよ」

「…はい、お二人がアキラがお世話になってる高町家の…」

「とりあえず自己紹介。　私は高町家長女の高町美由紀。そしてこっちが、高町家長男さんの高町恭也こと恭ちゃん」

「こんにちは」

う～む…二人ともなのはちゃんには似てないが、かなりの美男美女だ。後ろの美琴も恭也さんに見惚れてるっぽい。

「俺は関口達也です…で、向こうでフェイトちゃんにじゃれ付いてるのが佐天涙子ちゃん、そして後ろにいるのが…」

「みっ…御坂美琴です！！」

「そうか…俺はさっき美由紀から紹介があったとおり、高町恭也だ。今は店の仕事があるから簡単な挨拶しか出来ないけど、夜改めて挨拶さて貰うよ」

「はい、お仕事中に申し訳ありませんでした」

「じゃっ、私達は仕事に戻るからゆっくりしていってね～」

そうしてお二人は仕事に戻っていった。

気のせいかもしれないが、あの二人から少し普通の人とは違う雰囲気を受けたのは気のせいだろうか？

「にゃはは…佐天さん相変わらずですね」

「ん～…なのはちゃんも相変わらず可愛いね！フェイトちゃんといい…なのはちゃんといい…そしてすずかちゃんにアリサちゃん…初春…桃源郷はここにあったよ」

「うぅ…ルイコ、そろそろ放して」

「はは…佐天さん本当に元気ですね」

「ここに来る前、アリサちゃんとすずかちゃんに散々じゃれ付いてたから、もう大丈夫だと思ったんだが…」

「フェイトちゃんのウェイトレス姿で色々抑えられなくなっちゃったんですね。まぁ気持ちは分かりますけど」

「……」

「なっ…なんですか、その蔑んだ目は！？」

「アキラ…帰ったらいい医者を紹介してやるよ」

「ですから～～！！」

「まぁいい、それより例の管理局の話だけど」

「あ…はい、向こうはもう準備できてるみたいですから何時でも転送してもらえますよ」

「転送…そんな技術もあるのか」

「向こうの科学力は、こっちの世界の遥か上です。とりあえず行くのは俺となのはちゃんそれと佐天さんと美琴ちゃんかな」

「フェイトちゃん、アリサちゃん、すずかちゃんは？」

「三人とも、この後翠屋を手伝ってくれるみたいなんですよ。本来なら俺が手伝う所なんですけど」

「そうか…そいつは悪いことしたな」

「では、すぐに向かいますか？」

「いや…その前に、一応二人にも確認とっとくわ」

二人には、まだ管理局の話とかしてないしな。それに、フェイトちゃんも助ける必要がある。

「お～い、佐天ちゃんもその辺にしとけ。フェイトちゃん困ってるだろう」

「…むぅ、分かりました～」

「…ふぅ、ありがとうタツヤ」

「ん、フェイトちゃん仕事頑張ってな」

「うん、じゃあまた後でね」

そうして、フェイトちゃんは仕事に戻っていった。

「さて、佐天ちゃん御坂…電車の中でも話したが、今から俺達を元の世界に戻してくれるかも知れない人達に会いに行く。二人も来るか？」

「はい、元々そのつもりですよ」

「…まっそっちも面白そうだしね」

「了解だ…じゃあアキラ、早速頼む」

「はい、じゃあなのはちゃんエイミィさんに通信を」

「うん、了解」

それから少しして、俺達の身体が光り始めた。どうやらコイツが転送ってやつらしい。

はてさて…向こうにいるのはどんな奴らなのか…。

そんなこんなで転送されてきたわけだが…着いた所は、なにやら船か何かの通路っぽい場所だった。

待っていた少年に連れられて艦長に面会をすることに。

艦長ってことはやっぱり船なのかな？

そうこうしてる内に広い部屋に通されたのだが…これはまた奇天烈

な場所だ…一言で説明するなら…茶会??

「ようこそ、皆さん。私がこの船、アースラの艦長リンディ・ハラオウンです」

第二十九話　再会、そして新たな出会いなの（後書き）

第二十九話投稿完了です

第三十話　魔法？何それ美味しいの？？

「では改めて、私が今貴方達のいるこの時空航行艦アースラの艦長、リンディ・ハラオウンです。そして案内をしてきたこの子が…」

「クロノ・ハラオウンです。よろしく」

「輝君、なのはさん…皆さんをここまで連れてきてくださってありがとうございました」

「いえいえ」

「私は少しお手伝いしただけですから」

ほむ…どうやら、このポニーテルのお姉さんがリンディ・ハラオウン、そして俺達をここまで案内してくれたちびっ子がクロノ・ハラオウンと言うらしい…。しかし同じ苗字ってことは、この人達親子ってことか？う～む…とても1児の母とは思えん。

「本日は、お招きありがとうございます。俺の名前は関口達也です。そして…この二人は…」

「御坂美琴です」

「佐天涙子で～す！」

「いえ…お越しいただくよう頼んだのはこちらですから。皆さんのことは輝君からある程度聞いてます。早速ですが、関口君…貴方がこっちに来た時の話を聞かせてもらえるかしら？」

「ええ、分かりました」

まぁそういっても、話す事はそう多くないんだけどな…。
とりあえず俺は、気づいたら童実野町にいた事。そしてその後どうしたかを掻い摘んで説明した。

「てな感じですかね…そんで今は学園都市で、彼女達と楽しく暮らしてますよ」

「なるほど…やはり輝君と同じで理由は分からないんですね……次元断層に迷い込んだならば、気づかない内にってことは無いでしょうし…考えられるのは、誰かが人為的に君達をコチラの世界に飛ばしたという線かしら。」

「人為的に…ねぇ。俺達のいた世界にそんなことできるやつがいるとも思えないですけど…」

「それは、貴方達が気づいてなかっただけかもしれませんよ?」

「まぁ…確かに」

「ともかく、私達は貴方達がいた世界を目下捜索中です。ですが…まだ発見にはいたっていません」

「すいません、ご面倒をお掛けして」

「いえ、コレが私達の仕事ですから。さて…私達だけが質問攻めと

言うのも不公平ですし、何か聞きたいことはあるかしら？」

「はいはーい！さっき言ってた、じくうこうこうかんってなんなんですか？」

おっ…そいつは俺も気になってたとこだ。佐天ちゃんナイス！

「そうですね…分かりやすく説明すると、この世に数多に存在する、世界と世界を渡る船と言った所かしら。この世界と関口君達が元いた世界があるように、この世にはまだまだ沢山の世界が存在するの。私達もその世界の一つからやってきた…この時空航行艦を使ってね」

「うわ～…なんかスケールでっかいですね～」

「私は何だか、話を聞いた今でも実感湧かないけどね」

「数多の世界ねぇ…んじゃ俺達がいた世界はまだ見つかってない所を見るに相当田舎なんだろうな……っとそだ、一応俺からも質問なんだが、アンタ等が使う魔法について教えてくれ。アキラから一応説明を受けてるけど、イマイチ分かりづらかったんでな」

「そうですね…私達の使う魔法と言うのは、ファンタジーの世界なんかで出てくる万能の力とは少し違います…いうなれば、科学の延長線上と言った所ね。貴方達が科学の力で物を運んだり、作ったりしてるように、私達の世界では、この魔法技術で世界が成り立っているといっても過言ではないの」

「なるほどな…そういう所では、学園都市とにた所があるな」

その後、俺達はリンディさんから魔法についてのレクチャーを受け

た。
おかげで、現実感があまり無かった魔法とやらも、少しは理解する気になれた。

「へぇ～…でも面白いですね、もし私に魔力資質があったら私も魔法が使えるようになるのかな～？」

「なんでしたら、今度佐天さんの魔力適正を検査して見ましょうか？」

「え、いいんですか！？」

「ええ、機材なんかの許可を取るのに少し時間が掛かるけど、問題ないわ」

「おーおー…佐天ちゃん完璧に食いついてるなぁ…」

まぁ、向こうじゃレベル０って言われて相当落ち込んでたみたいだからな…こういう話に飛びつきたくなる気持ちも分かるけどさ。

「けど、魔法の力って…なんだか得体が知れなくてちょっと怖いわ…」

「ん…まぁ御坂はすでに超能力で思いっきり開花してるもんな…魔法と超能力はやっぱあいしれないところがあるのか？」

「そんなんじゃないけど…」

「…？」

「そうだ、その時関口君達も一緒に検査してみたらどうかしら？」

おおぅ！？話がこっちに飛び火してきたがった！！

「ん～…そうですね、俺も少し気になってたし…」

「私は…遠慮しときます」

ふむ、アキラは乗り気か。そして御坂は拒否と…まっ検査がどんなもんか不安ってのもあるんだろうよ。

さて、俺は正直どっちでもいいんだが…どうするかね。

「え～…御坂さんやらないんですか～！？…だったら関口だけでも一緒に受けましょうよ！折角の機会なんですし！！」

「う～む…まぁいいか、減るもんじゃなさそうだし」

「はい、けってーい！」

やれやれ…このことが後に変な方向に走らなきゃいいんだけど…。

「さて…と、話はコレぐらいでいいかしら…クロノ、皆さんをお送りしてあげなさい」

「はい…艦長。じゃあ僕に着いて来てください」

「は～い、じゃあリンディさん！今度よろしくお願いしますね！！」

「今日はありがとうございました」

「ではまたいずれ…」

「はい、それでは皆さん御機嫌よう」

「そういえば、君…クロノ君って言ったね？」

「ええ、何か？」

「いや…対した事じゃないんだが、君もデュエルモンスターズをやるのかなって思ってね。アキラから聞いてるかもしれないけど、俺達が決闘者なんだ」

「…はい、こっちの世界に来て始めました」

「ふむ…そうか、ならいずれ君とも決闘してみたいね」

「機会があれば…ですね」

「ああ、楽しみにしてるよ」

それにしてもこの子…というか、こっちの世界のちびっ子はどうしてこんなに大人びてるんだろう……俺がコレぐらいのガキだった頃なんて、遊び盛り、イタズラ盛りだった気がするけど。

「そうだ、クロノ君って何歳なの？？」

っと…すかさず佐天ちゃんがコミュニケーションを取りに出た。こういうことに関して、彼女の右に出るものはいないな。

「１４歳です」

「ええ！？…私より年上！？」

「マジか…てっきり、なのはちゃん達と同年代ぐらいかと」

「ですよね…私も最初聞いたときはビックリしました」

「…まぁよく言われますよ」

「あ…あはは…ごめん！君付けで呼んじゃったりして」

「気にしないで、皆さんとはこれからも色々と会う事になるでしょうし、よければ親しくしてもらえると幸いですから」

「うん、じゃあ私のことも涙子でいいよ。よろしくねクロノ君！」

「はい、こちらこそ。さて、ではここから皆さんを海鳴市に転送します。転送先はなのはの家でいいかい？」

「あ、うん。大丈夫！」

「了解した…では皆さん。またいずれ」

「ああ、また来るぜ…」

そうして俺達は光に包まれ、気づいた時にはなのはちゃんの家の前に立っていた。

「よ～し、皆揃ったわね？じゃあ、関口くんと御坂ちゃん佐天ちゃんの歓迎会…スタート！！皆、よく来てくれたわね。桃子さん感激ｗ」

あの後、なのはちゃんに招かれて家に入ると、高町さんの家族は総出で俺達を歓迎してくれた。
ちなみに、今開始の挨拶をくれたのが、高町桃子さん。なのはちゃんのお母さんだ。

「今日は皆泊まっていくんだろう？ゆっくりして行ってくれ」

そしてコチラが、なのはちゃんのお父さんの高町士郎さん。
う～む。この人からも、恭也さん達から感じた妙な雰囲気を感じるな。

「ねえねえ、学園都市の話を聞かせてよ！私、向こうに行った事ないから気になってるんだ～」

「オイ、美由紀。あんまり質問攻めにするなよ？」

「あはは、そうですね～やっぱり外と違って科学の最先端！って感じですよ～。超能力に関しては、私は才能無いんで、御坂さんに見せてもらった方が早いんですけど…」

「！…御坂ちゃん超能力を使えるの？」

「ほぅ…そいつは興味ぶかいな」

「え…え～と、そんな大した物じゃないですけど…私の能力はエレ

クトロマスターって言って、電気を操ることです」

そう言って、少しビリビリしてみせる御坂。それを見た高町家の皆様はご満悦のようだ。

学園都市の外だと、やっぱ超能力って言うのはあんまり見ないものらしいな。

「すごいです…フェイトちゃんみたい…しかもデバイスも無しに…」

「御坂は学園都市の中でも三番目にすごい超能力者だからな…こんなのはまだ序の口だよ」

「ちょ…ちょっと!?」

「いいじゃないですか、御坂さん。皆さん楽しんでくれてるみたいですし」

「佐…佐天さんまで…」

それにしても、アキラの言ってた通り本当にいい人達だな。皆で騒ぐのも面白いけど、こういう団欒ってのもいいもんだ…。

そんなこんなで皆で盛り上がった騒ぎも終わり、皆が寝静まった後…俺は一人外に出た。

理由はよく分からない…唯、何かに飢えている。そんな気分だった。

すると、どうやら先客がいたらしい。

「アキラか…どうしたんだ、こんな夜中に」

「…どうも中々寝付けなくて。関口さんこそどうしたんですか？」

「俺も似たようなもんだよ……なあ、アキラ。多分今のお前の感情と俺の今の感情は一緒だ」

「…やっぱりそうですか、どうしてなんでしょうね？この前の時はそんなことなかったのに…」

「さぁな…けど、なんとなく分かることもある。お前となら…全力で戦える」

「この前みたいには行きませんよ、俺も全力で行きますから」

「ああ、お前とならコイツを使うのにも気概は無い。いくぜアキラ…」

そうだ…今唯、全力で決闘したい……そんな気分だ。

第三十話　魔法？何それ美味しいの？？（後書き）

第三十話投稿完了です。

ちなみに、高町さん家の決闘者はなのはちゃんと恭也君です。

第三十一話　決闘者覚醒中？

朝…俺はどうやら布団の中にいるのか？何時の間に俺は布団に入ったんだろう…。
上を見上げれば見慣れない天井…ここは何処だろう？考えること数分、ようやく自分は今海鳴市の高町さん家にごやっかいになってことを思い出した。

「う～む…朝はそんなに弱い方じゃないはずなんだが……いや、それよりも…」

段々と頭がクリアになってきて、色んなことを思い出してきた。そうだ、俺は確か昨日の夜…アキラと決闘して…。
昨日のアレは、一体なんだったんだろう？夜中、突発的に起こった妙な衝動…確かにこっちに来てから、決闘関連の話題や決闘になると多少感情の起伏が激しくなるような感覚はあった。
けど、昨日のアレはそんなものの比じゃなかった……。俺は一体どうしてしまったんだろう。

「…こっちの世界に来た影響なのか、もしくは別の何かが原因なのか…どちらにせよあまりいい傾向とは思えないよな」

そうやって考え込んでいると、ドアが控えめにノックされた。反射的に俺は返事をし、ノックをした人物であるなのはちゃんが部屋に入ってくる。

「おはようございます関口さん。昨日はよく眠れましたか？」

「ん、そこそこね」

「お母さんが、朝食の準備出来たって言ってましたから、皆で朝ごはん食べましょう」

「りょーかい、すぐに行くから先に行っててくれ」

「はーい」

そして、元気よくなのはちゃんは部屋を出て行った。

さて…俺もさっさと着替えて行くか。

そんなこんなで、着替えを済まし2階の使わせてもらった部屋から1階のリビングに向かっていると、庭の一角にある道場から、何やら声が聞こえた。っていうか、昨日はそんなに気にしてなかったけど何でこの家の敷地には道場なんかあるんだろう？なにより、普通の一戸建てにしちゃこの土地は随分広いな…。

「ふむ…ちょっと興味もあるし、覗いてみるか」

そして、俺が道場を覗いて見ると中には恭也さんと美由紀さん、そして士郎さんがいた。

どうやら剣術の稽古をしてるようだが、何やら並々ならぬ真剣さから、異質な空気を感じる。

そこで俺は気づいた、昨日この3人から感じた妙な気配に…そう、この気配は武芸を極限近くまで極めた者…そういう者達が放つ気配だ。

「ん？…やぁ、関口君おはよう」

どうやら、覗いてるのがバレたらしい。士郎さんが声を掛けてくる。

「おはようございます。すいません、勝手に覗いちゃって」

「いやいや、こちらこそごめんな。朝っぱらから少しうるさかっただろう？」

「そんなことは…こういうのは慣れてますから」

「？…もしかして、関口君も何か武道を？」

「いえ、俺はそういうのは苦手なんですけど…その……ウチの親父が…」

そう、俺がそういう気配に敏感なのは理由がある。かく言う俺の親父がそういった類の人間だったのだ。

なんでも、学生の時に部活か何かではまったのが切欠で、そういう道に走ったらしい。見た目はごく普通な感じなのだが、キレた時のそれはもはやオーガか何かである。一度俺が反抗期の頃、親父に喧嘩を吹っかけたことがあったのだが、気づいたら投げられてた。何が起こったのかさっぱり俺にはわからなかったが、あれは催眠術とか当身投げとかそんなモンじゃ断じてない。もっと恐ろしいものの片鱗を味わった気がした。

それからと言うもの、親父に喧嘩を吹っかけることも無くなり、平和が訪れたように見えたのだがそんなことは無かったぜ。親父が酒を飲んで酔っ払うたびに、俺はボコボコにされてきたのである。

「わっ…関口君どうしたの!？何か涙ぐんでるよ？？」

美由紀さんに声を掛けられ、俺は何時の間にか昔の不条理を思い出

して、涙ぐんでると言うことに気づいた。

「キニシナイデクダサイ、チョットムカシヲオモイダシチャッテ」

「あ～…そう。深くは聞かないけど、なんだか大変だったみたいだね～」

美由紀さん…その優しさ、痛み入ります。

さて、ちょっとしたアクシデントもあったが、皆一緒に朝食を終えた俺達。

ちなみに、恭也さん達はまた道場へ。なのはちゃんと御坂、佐天ちゃんと桃子さんは向こうでなにやら盛り上がっている。

そして俺は、今アキラと面と向かい合ってるわけだ。

「関口さん…昨日の夜のこと、覚えてますか？」

「おぼろげだけどな…決闘したってとこまでは何とか」

「ん～…やっぱり。俺も記憶があいまいなんですよね…」

「でも、あの感覚は…お前も覚えてるんだろ？」

「ええ」

「一体何なんだろうな……こっちに来てから、やっぱり何かおかしい。お前は、こっちに来てからアレ以外に何か変わったことあったか？」

「変わったことですか？…前も話したとおり、決闘なんかしてる時に前より熱が入りやすくなった気はしますけど…あっそうだ。変わったことと言ったら、一昨日変わったカードを手に入れましたよ」

「変わったカード？」

「はい一昨日、一人でカードを買いに行った時にパックに入ってたんですけど…向こうじゃ全然見たこと無いカードで」

「ふ～ん…けど、こっちの世界だけのカードは、今に始まったことじゃねえだろ？フェイトちゃんとかも持ってたし」

「…まぁ見てもらった方が早いですよね。このカードなんですけど…」

そしてアキラは、一枚のカードを出してきた。ふむ…確かにコイツは珍しい、って言うかこいつは…。

「これ、ただのエラーカードなんじゃねえのか？ウルトラレアみたいだけど何も書いてねえし」

「やっぱりそうですかね～…俺も最初はそう思ったんですけど、こっちの世界のウルトラレアってかなりの価値らしいじゃないですか。それに、何か普通のエラーカードとは雰囲気が違う気がするんですよ…。それでなんか気になっちゃって…」

「それはただの気にしすぎだと思うがな…ん？そういえば、俺もこっちに来てからウルトラレアを一枚当てたな」

「ホントですか？見せてくださいよ～」

「まぁいいけど…俺のはちゃんとしたカードだったぜ…えっと確か……ああ、コレだ」

俺もアキラにあのカードを見せた。

「なるほど…これですか。名前は…汝　命ヲソノ手ニ…？何か変な名前ですね。しかも何にも能力の無いバニラモンスターですか」

？おかしいな、前見たときは何か効果があったと思ったが。まあ勘違いって事もあるか…

「どちらにせよ、俺のデッキにはまず入らないカードだけどな」

「そうですか？見たところ光属性ですし、ワンチャンあるかもしれませんよ？」

「ねえよ！」

「ですよね～…けどこのカードの絵…何処と無く、美琴ちゃんに似てませんか？」

「…言われてみれば…確かに」

「そういった意味でも、デッキの嫁として入れてみてはw」

「アホか、俺はそういうネタに走る気はねえよ」

やるなら全力全開、デッキに余分なんか作るつもりは無いね。しかし、別にこのカード達には何も関係はなさそうだな。

「まぁ、何か被害が出てるわけでもないし…当分は様子見するしかないか…」

「ですね…ウダウダ考えても仕方ありません」

「だな、んじゃ気晴らしに外にでも繰り出すか。ここの決闘者がどんな感じかも見てみたいしな」

「じゃあ、俺が案内しますよ」

「いいねぇ～、御坂達も向こうで盛り上がってるみたいだし、久しぶりにお前と二人で遊ぶのもいいか」

「了解です」

そうと決まれば、膳は急げだ。俺達は、アキラのよく行っているカードショップを見て回ることにした。

「最近の環境はどんな感じなんだ？」

「そうですね～…やっぱビートタイプのデッキが多い気がします。代行とか、ＢＦとかあの辺りは普通じゃ滅多に見かけないですね」

「その辺りは向こうと全然違うよな…けど、こっちの方が色んなデッキの奴がいて面白いってのはある」

「向こうじゃ大会上位のデッキなんて殆ど同じでしたからね～…。そういえば、最近知り合った子で中々強い子がいますよ」

「ほぅ…どんなデッキだ？」

「ドラゴンデッキですね…レダメ型の。黄金櫃が制限解除になりましたから、未来融合も手札に持ってきやすいみたいです」

「面白そうだな…是非決闘してみたい」

「多分よくデュエルスペースにいますからちょっと覗いてみましょうか？」

「そうしよう」

と言うわけで、少し寄り道。デュエルスペースを覗いたのだが…お目当ての子は確かにそこにいた。
どうやら決闘中みたいだな。

「私は…このままターンエンドです」

アキラの言ってた子は、恐らくこの子だろう…年は１０代前半といった所か…黒髪セミロングの可愛らしい子だ。けどその顔は、苦悶の表情で歪んでいる。
どうやら決闘で負けかけてるみたいだな、あきらの話じゃこの子も相当強いって話だけど…それを追い詰めてるってことは相手も相当強いんだろう。
相手側の人物は黒いコートとフードを着ていて、姿はよく分からないが背格好を見るに恐らく男だな。

「おやおや…いいんですかぁ～？このままターンエンドすれば君の負けですよ？」

「うぅ…」

「やれやれ…相当強いって聞いてたんですが、どうやら見込み違いだったようです。さっさと終わらせましょう。私のターン…スクラップ・ドラゴンで貴女にダイレクトアタック！！」

「…」

黒髪の少女　　ＬＰ０

「はい、おしまい。私の勝ちです、弱者は弱者らしく…その辺に這い蹲っててくださいね」

「オイアキラ…あれもお前の知り合いか？」

「いえ…俺も見たこと無い奴です」

「そうか…なら遠慮はいらねえなぁ…」

そう言って俺は、その黒服の前に躍り出た。

「オイにーちゃん！結構強いみたいじゃないか…俺とも遊んでいけよ」

「…！？お前は…」

「…？」

「…いえ、何でもありませんよ」

そうは言うが、明らかに相手は動揺しているようだ。まてよ?そういえば…

「…その声…すンごく聞いたことあるような…?」

「きっ…気のせいでしょう!!私はこの後用事があるので…この辺で…」

そそくさと逃げようとする黒服。俺はそいつの腕をしっかり掴んだ。

「オイオイ…そんなツレナイこと言うなよ~…決闘者なら強い奴と決闘するのが生きがいだろ?」

「…きっと君も後悔すると思いますよ?」

「はっ…させてみろよ」

さぁ、決闘しようぜ!

第三十一話　決闘者覚醒中？（後書き）

第三十一話投稿完了。

三人目のオリキャラ登場です。

第三十二話　ヒャッハー！決闘だぁ！！

「おやおや…聞き分けの無い人ですねぇ～」

どうやら向こうさんも観念したらしい。決闘ディスクを構え、俺と対峙する。

「さて、とりあえず名乗っとくわ…俺の名前は関口達也…できればアンタもそのフード取っ払って名乗って欲しいもんだがな」

「…っそうですねぇ～…わけあってこのフードは取れませんが、ハセヲ…とでも名乗っておきましょうか」

ハセヲ…ねぇ……なんかコイツの正体が段々見えてきたぞ。けどここはつっこむべきなのか…生暖かくスルーするべきなのか…。

「まぁいい…とにかく行くぜ…」

「やれやれ…」

「決闘（デュエル）！！」

「決闘（デュエル）！！」

関口達也　（Ｄフォーマーデッキ）　ＶＳ　ハセヲ　（？？？）

「さて、先攻後攻はどうなさいますか？」

「公平にコイントスかな…裏か表か…どっちがいい？」

「では表で」

「ＯＫ…結果は表、お前が先攻かな？」

「分かりました、私のターン…ドロー。モンスターを１体セットしカードを１枚セット…ターンエンドです」

モンスター１体セットカード１枚セット…か。どんなデッキなのかよくわかんねえが、最初から全力で行って切り返されるのはマズイ…ここは様子見だ。

「俺のターン…ドロー！俺はモンスターを１体セット、カードを１枚セット…ターンエンドだ」

「おやおや…攻撃してこないんですか？」

「相手の出方が分からない以上…突っ込むのは愚作だからな」

「その余裕が…命取りになるかも知れませんねぇ～」

現状

ハセヲ　　ＬＰ８０００　　手札４枚

フィールド上　　伏せモンスター　１体　　伏せカード　１枚

関口達也　　ＬＰ８０００　　手札４枚
フィールド上　　伏せモンスター　１体　　伏せカード　１枚

「私のターン…ドロー！おやおや…これはこれは…」

「どうした？」

「いえ、貴方の今日の運勢は大凶みたいですねぇ～…私は手札からD・スコープンを召喚！効果で更に手札からD・ラジオンを特殊召喚！」

！…Dフォーマー…いや、可笑しくは無いな…コイツが俺の想像通りなら…。

「そして、伏せモンスターをリバース…このカードはD・ボードンです」

《D・ボードン／Ｍｏｒｐｈｔｒｏｎｉｃ　Ｂｏａｒｄｅｎ》
効果モンスター
星３／地属性／機械族／攻　５００／守１８００
このカードはこのカードの表示形式によって以下の効果を得る。
●攻撃表示：このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、自分フィールド上に表側表示で存在する「D（ディフォーマー）」と名のついたモンスターは相手プレイヤーに直接攻撃する事ができる。
●守備表示：このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、自分フィールド上に表側表示で存在するこのカード以外の「D（ディフォーマー）」と名のついたモンスターは戦闘では破壊されない。

「…ちっ」

「では、ざっくり行かせて貰いましょう。バトルフェイズ…まずはD・ボードンで貴方にダイレクトアタック！」

「させるか！罠カード「聖なるバリアーミラーフォースー」発動！」

「甘いですねぇ～。永続罠カード「王宮のお触れ」発動です！」

《王宮のお触れ／Ｒｏｙａｌ　Ｄｅｃｒｅｅ》
永続罠
このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、
このカード以外のフィールド上の罠カードの効果を無効にする。

「くっ！？」

「ではそのまま…D・ボードンでダイレクトアタック！」

「……やってくれるっ！」

関口達也　　ＬＰ８０００　→　６７００

「更に、Dスコープンとダイレクトアタックです！」

関口達也　　ＬＰ６７００　→　３３００

「どうしましたか？まだ決闘は始まったばかりだと言うのに、随分とボロボロですねぇ～」

「いやいや…そうでもないさ。この攻撃で俺を殺しきれなかったのがお前の落ち度…ワンチャンスでこの状況をひっくり返してやるよ」

「期待してます。では私はD・スコープンとD・ラジオンをチューニング…シンクロ召喚、パワー・ツール・ドラゴン！！」

《パワー・ツール・ドラゴン／Ｐｏｗｅｒ　Ｔｏｏｌ　Ｄｒａｇｏｎ》
シンクロ・効果モンスター
星7／地属性／機械族／攻２３００／守２５００
チューナー＋チューナー以外のモンスター1体以上
1ターンに1度、自分のメインフェイズ時に発動する事ができる。
自分のデッキから装備魔法カードを3枚選択し、
相手はその中からランダムに1枚選択する。
相手が選択したカード1枚を自分の手札に加え、
残りのカードをデッキに戻してシャッフルする。
また、装備魔法カードを装備したこのカードが破壊される場合、
代わりにこのカードに装備された装備魔法カード1枚を墓地へ送る事ができる。

「更に、パワー・ツール・ドラゴンの効果発動です。デッキから、3枚の装備カード…まぁ全部団結の力なんですが、選びますか？」

「いいさ、1枚持っていけよ」

「分かりました。ではこの装備魔法カード「団結の力」をパワー・ツール・ドラゴン装備しますね」

《団結力／Ｕｎｉｔｅｄ　Ｗｅ　Ｓｔａｎｄ》
装備魔法

装備モンスターの攻撃力・守備力は、自分フィールド上に表側表示で存在する
モンスター1体につき８００ポイントアップする。

「これで私はターンエンドです」

アイツのDフォーマー…恐らくボードン１ＫＩＬＬ型だな。だが、それならなおさら今の一撃で俺を倒しておかなきゃいけなかった筈…。

「俺のターン…ドロー！」

王宮のお触れがある分、こっちも恐れるものは何もない！存分に行くだけだ。

「俺は、手札のD・ラジオンを墓地に送り、手札の魔法カード「ワン・フォー・ワン」を発動するぜ！」

《ワン・フォー・ワン／Ｏｎｅ　ｆｏｒ　Ｏｎｅ》
通常魔法
手札からモンスター1体を墓地へ送って発動する。
手札またはデッキからレベル1モンスター1体を
自分フィールド上に特殊召喚する。

「対象は、デッキのD・モバホンだ」

「おやおや…珍しい、同タイプのデッキですか」

「……俺はD・モバホンの効果を発動！出た目は…「4」だな。そ

の分デッキトップをめくり…その中からレベル4以下のDフォーマー…D・モバホンを特殊召喚…倍プッシュだ」

「その様子では、手札に機械複製術はないみたいですねぇ～」

「さて・・・どうかな？2体目のD・モバホンの効果発動…出た目は「6」…特殊召喚するD・フォーマーは…D・スコープン！コイツを特殊召喚する。更にコイツの効果で、手札からD・ラジカッセンを特殊召喚！」

「あらら…これはいけませんねぇ」

「覚悟はいいか？…俺はフィールド上のモンスターをすべてチューニング！！コイツは喰らうといてーぜ！シンクロ召喚…氷結界の龍トリシューラ！！！」

「ほんとに…いけませんねぇ」

「なぁ…このトリシューラを使ってお前をボコるっていうのも…なんか因縁があっていいな」

「？…どういうことでしょう」

「忘れたとは言わせねぇぞ…コイツはお前から譲り受けたカードだ…そろそろ正体現せよ…ハセヲ君？……いや」

「あーっ！キエナイキコエナイ！！」

「…なんで正体隠そうとすんのかは知らねえけどさ…その役作りと関係してんのか？」

「はっ…!?…うるさいですねぇ…それよりなんで貴方こそここにいるんですか?」

「ん~…気づいたらいた。お前もそんな感じじゃないのか?…てかお前認めたな」

「…っ」

「はぁ…まぁ詳しい話は後で聞くからさ。今は決闘の続きだ」

「…そうですね、そのクソ忌々しいツラを絶望に歪めさせた後で、お話と行きましょうか」

やれやれ…なんか調子狂うな。

「トリシューラの効果発動…俺が選ぶのは…墓地のD・ラジオン…手札はコレ…フィールドは……パワー・ツール・ドラゴンかな」

「分かりました。手札のカードはD・リモコンです」

「バトルフェイズ…トリシューラでD・ボードンに攻撃!」

ハセヲ　　LP8000　↓　5800

「俺はカードを1枚セット…ターンエンドだ」

現状

ハセヲ　　LP8000　↓　5800

手札２枚
フィールド上
触れ　１枚

関口達也
　手札１枚
フィールド上
１枚

モンスター　ナシ

ＬＰ８０００　↓　３３００

トリシューラ　１枚

永続罠王宮のお

伏せカード

第三十二話　ヒャッハー！決闘だぁ！！（後書き）

第三十二話投稿完了です。

この試合…もしサイバー・ドラゴンをどっちかが出したらすごいことになるかもｗ

第三十三話　D　VS　D

現状

ハセヲ　　ＬＰ８０００　↓　５８００
手札２枚　　モンスター　ナシ　　永続罠王宮のお
フィールド上　　触れ　１枚

関口達也　　ＬＰ８０００　↓　３３００
手札１枚　　トリシューラ　１枚　　伏せカード
フィールド上　　１枚

一応、流れは俺が掴んだかな？おかげさまで手札は殆ど使っちまったが…。
それにしても、気づかない内に大分ギャラリーが増えたな。
ふと周りを見渡すと、何時の間にか俺達のいるデュエルスペースの周りには人だかりが出来ていた。
さっきコイツと決闘していた女の子も、アキラと一緒にこちらを見ている。
ふむ…元気そうで何よりだ。

「やれやれ…痛いですねぇ～。何度喰らっても思いますが、そのカードの能力は酷いと思いますよ」

そんなことを何やらハセヲ（仮）君が向こうで呟いてる。口で言うわりに全然堪えてなさそうだ。

「まぁとりあえず、私のターン…ドロー！私はモンスターを1体セットしてターンエンドです」

モンスターセット…コレが場繋ぎで伏せたのか、リバース目的で伏せたのかによって、話は変わってくる。
もし、リバースセットなら、ライコウなんかでトリシューラが除去られる可能性も…元々Ｄフォーマーはジャンクボックスみたいな蘇生カードにも恵まれてる。ライコウの効果で、再びラジオンやラジカッセンが落ちて、ダイレクトを決められたらマズイ…。

「俺のターン…ドロー！」

今…トリシューラが俺の生命線だ。コイツがやられたら、手札の少ない俺には切り替えしが難しい。なにより、シンクロキャンセルを引いた時、トリシューラがいなけりゃ意味がない。ここはどうするか…。

「おやおや…長考ですか？私も忙しい見なので早くして欲しいものですね」

チッ…急かしやがって。ここは…様子見だ。

「俺はこのままターンエンドだ」

現状

ハセヲ　　ＬＰ５８００　　手札２枚
フィールド上　　伏せモンスター　１体　　永続罠王

宮のお触れ　1枚

関口達也　　ＬＰ３３００　　手札２枚
フィールド上　　トリシューラ　1枚　　伏せカード
1枚

「私のターン…ドロー！ふふふ…どうやら君はこの伏せを恐れてくれているようですからねぇ～。こちらも時間稼ぎが出来て助かります」

言ってろよ…いずれその余裕をすべて剥ぎ取ってやる。

「私はこのままターンエンドです」

「俺のターン…ドロー！」

くっ…まだシンクロキャンセルを引けないか、これじゃまだ動けない。

確かにハセヲ君の言うとおり、このままじゃジリ貧…向こうも手札が増えちまう。けど、相手のターンでリバースしなかったってことは、あのカードはライコウみたいな除去カードじゃねえのか？ならばここは攻撃を……いやっそれは駄目だ。

ここで殴るぐらいならさっき殴るべきだった。焦って自分のプレイングを見失ったら本末転倒。

あれを向こうがリバースしなかったってことは、俺に攻撃して欲しかったからか、時間稼ぎ用のカードかだ。もしくは、まだ向こうの手札にモンスターが無く、ライコウを棒立ちさせてライフに攻撃を

喰らいたくないか…そして、万に一つも危険があるのなら…今は攻めるべきじゃない。
ここは地道に…堅牢に！

「俺はこのまま、ターンエンドだ」

現状

ハセヲ　　ＬＰ５８００　　手札３枚
フィールド上　　伏せモンスター　１体
宮のお触れ　１枚　　永続罠王

関口達也　　ＬＰ３３００　　手札３枚
フィールド上　　トリシューラ　１枚　　伏せカード
１枚

「私のターン…ドロー！（ふむ…やはり仕掛けてきませんね。揺さぶりを掛けてみましたが、どうやら意味がなかったようです。流石…という所。ならば、根競べと行きましょう…この上、殴ってくることは無いでしょうが、もし殴ってくれれば…）私は、モンスターを１体セット。更に手札のカードを３枚セットしてターンエンドです」

「フッ…」

「？…何が可笑しいのですか」

「いや～…ハセヲ君。それは露骨過ぎるだろう？」

「…っ」

「俺のターン…ドロー！」

ドローもいい感じだ…仕掛けるぜ。

「俺は手札から魔法カード「D・スピードユニット」を発動！手札の「D・パッチン」をデッキに戻し、そっちがさっきからずっと伏せてたモンスターを破壊するぜ。そして俺はカードを1枚ドローする」

《D・スピードユニット／Morphtronic Accelerator》
通常魔法
自分の手札から「D（ディフォーマー）」と名のついたモンスター1体をデッキに戻す。フィールド上のカード1枚を破壊し、自分のデッキからカードを1枚ドローする。

「くっ…ライトロード・ハンター　ライコウがやられましたか…」

「更に俺は、手札から魔法カード「ハリケーン」を発動！」

「っ…！」

「読めてんだよ…モンスターを伏せた後の、大量セット…それの答えは一つだけだ。俺は手札のカードを2枚セット…そしてバトルフェイズ！氷結界の龍トリシューラで伏せモンスターに攻撃！！」

「…伏せモンスターはメタモルポッド…リバース効果が発動します

よ」

《メタモルポット／Ｍｏｒｐｈｉｎｇ　Ｊａｒ》
効果モンスター
星２／地属性／岩石族／攻　７００／守　６００
リバース：お互いの手札を全て捨てる。
その後、お互いはそれぞれ自分のデッキからカードを５枚ドローする。

「おかげさまで手札が潤ったぜ…礼を言う」

「（流石に彼の言うとおり露骨過ぎましたか。王宮のお触れをはじめ…貴重な魔法・罠を失ってしまいました…ですが…それでもまだ手札は５枚…！）」

「俺はこのままターンエンドだ」

ハセヲ　　ＬＰ５８００　　手札５枚
フィールド上　　モンスター　ナシ　　伏せカード　ナシ

関口達也　　ＬＰ３３００　　手札５枚
フィールド上　　トリシューラ　１枚　　伏せカード　２枚

「私のターン…ドロー！…まずはその邪魔なモンスターに消えていただきましょう。私は手札から、魔法カード「Ｄ・スピードユニット」を発動！手札のＤ・ラジオンをデッキに戻し、氷結界の龍トリシューラを破壊…カードを１枚ドローします」

「っ…」

「さぁ…覚悟はいいですかぁ？更に、手札からD・スコープンを墓地に送り、装備魔法カード「D・D・R」を発動！対象は除外されているD・ラジオン…特殊召喚して、D・ラジオンに装備！そしてD・ラジカッセンを召喚！バトルフェイズ…」

「させるか！罠カード「威嚇する咆哮」発動！バトルフェイズを中断させる」

《威嚇する咆哮／Ｔｈｒｅａｔｅｎｉｎｇ　Ｒｏａｒ》
通常罠
このターン相手は攻撃宣言をする事ができない。

「悪あがきですねぇ…まぁそれも次で終わりです。私はカードを2枚セット…ターンエンドですよ（ふふ…この2枚の伏せは、ミラーフォースと王宮のお触れ…何か来ても次は対処できる…私の勝ちです）」

次はねえさ…これで終わらせる！

「俺のターン…ドロー！…俺は手札からD・モバホンを召喚！そして効果発動だ。出た目は…「5」！その分デッキの上をめくり、その中からレベル4以下のD…D・リモコンを特殊召喚する！そして俺は手札から、貪欲な壺を発動…対象は、墓地にあるD・モバホン2体…D・スコープン、D・ラジカッセン、そして氷結界の龍トリシューラ…これらをすべてデッキとエクストラデッキに戻し…カードを2枚ドロー！」

「おやおや…流石にそこまで手札を補充されると、怖い怖い…」

「何時までその余裕面見せてられるかな?俺は手札から魔法カード、「機械複製術」を発動!対象はD・モバホン…コイツをデッキから2体特殊召喚!そして、効果を使ったD・モバホンとD・リモコンをチューニング!きやがれ…シンクロ召喚アームズ・エイド!!」

《アームズ・エイド／Ａｒｍｏｒｙ　Ａｒｍ》
シンクロ・効果モンスター
星４／光属性／機械族／攻１８００／守１２００
チューナー＋チューナー以外のモンスター１体以上
１ターンに１度、自分のメインフェイズ時に装備カード扱いとしてモンスターに装備、
または装備を解除して表側攻撃表示で特殊召喚する事ができる。
この効果で装備カード扱いになっている場合のみ、
装備モンスターの攻撃力は１０００ポイントアップする。
装備モンスターが戦闘によってモンスターを破壊し墓地へ送った時、
破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを相手ライフに与える。

「そいつは…まさか!?」

「そうだよなぁ…こいつを出した時、そんな危機感を持つ奴はいないんだが…この状況…そして他ならぬお前なら…この危険性…分かるよなぁ～?じゃあ倍プッシュだ…2体目のD・モバホンの効果発動…出た目はは「1」か…Dもナシ…まぁたまにはこういうこともある…気にしない気にしない。じゃあ気を取り直して3体目の効果発動だ!出た目は…「6」!!そしてその中から俺は…D・スコープンを特殊召喚!更に、効果発動!手札からD・ラジオンを特殊召喚…そして、D・モバホン…D・スコープン…D・ラジオンでチューニング!シンクロ召喚…ギガンテック・ファイター!!」

「やはり…あのコンボをやるつもりですね…」

「そういうこった！俺はアームズ・エイドの効果発動！お前のD・ラジカッセンにコイツを装備！そしてバトルフェイズ…ギガンテック・ファイターでD・ラジカッセンに攻撃！！」

「かかりましたね！罠カード「聖なるバリアーミラーフォースー」発動！」

「見えてんだよ！！罠カード「トラップ・スタン」発動！！」

「なっ…！？」

「バトル続行だぜ…D・ラジカッセンの攻撃力は３０００それに対して、ギガンテック・ファイターの攻撃力は２８００…ギガンテック・ファイターは返り討ちにある…だが」

「アームズ・エイドの効果で…私は倒されたギガンテック・ファイターの攻撃力分のダメージを受ける」

関口達也　ＬＰ３３００　↓　３１００
ハセヲ　ＬＰ５８００　↓　３０００

「そうだ…そして、ギガンテック・ファイターは自身の効果で蘇生…バトル続行だ！ギガンテック・ファイターでD・ラジカッセンに攻撃！！」

関口達也　ＬＰ３１００　↓　２９００
ハセヲ　ＬＰ３０００　↓　２００

「これでトドメだ…ギガンテック・ファイターでD・ラジカッセンに攻撃！」

「……ふっ…あらら……負けちゃいました」

関口達也　　ＬＰ２９００　↓　２７００
ハセヲ　　ＬＰ２００　↓　０

勝者　関口達也

その瞬間、周りから歓声が巻き起こる！と同時に、俺の周りに人だかりが出来た。

「Dフォーマーってすごいんですね！」

「どういう構成なんですか！？」

「あの、是非僕と決闘を！！」

そんなこんなで質問攻めにされる。それを何とかいなしながら、ハセヲの方を見ると、なにやら逃げようとしてるではないか。
あの野労…俺はすぐにアキラに指示を出す。

「オイ、アキラ！あの野労をとっ捕まえろ！！逃がしたら死刑だぞ！！」

「うえ！？…いきなりそんな」

そういいながらも、逃げるハセヲを追いかけ始めるアキラ。アイツは足が速いから、まぁ何とかしてくれるだろう。
俺も、なんとかここから抜け出して、アイツを追わないと…。そう思ってると、目の前に先ほどのドラゴンデッキの少女がいた。

「あの…さっきの試合、すごかったです！…私とも是非決闘してくださいっ！」

明らかに真剣な眼差しで決闘を申し込む少女…、スマンアキラ。一人でガンバレ。

第三十三話　D　VS　D（後書き）

第三十三話目投稿完了です。

第三十四話　竹の子狩り

アキラサイド

さて俺事小池輝は、関口達也さんの命を受け、目下目の前の男を追いかけている。
しかし、この人は本当に誰なんだろう？関口さんの決闘中の素振りでは、この人のことを知っているようだったが、生憎会話の内容までは周りの歓声などにより聞き取れなかった。
関口さんの知り合いだとして、考えられるのは学園都市での知り合いか、向こうの世界の知り合いのどっちかだろう。そして、向こう側の知り合いなら俺も知ってる可能性がある…あるのだが…

「全身黒尽くめだし…声はなんか聞いたことある気がするけど、あんな口調の人は知らないよ」

となれば、学園都市の知り合いか。だとしたら、目の前の人物は超能力者という可能性もある。最悪の事も考えて、応援を用意しておいた方がいいだろう。
俺は、携帯を取り出しすぐに電話を掛けた。

「あ、フェイトちゃん？ちょっとお願いがあるんだけど…。うん、ちょっと手伝って欲しいことがあるんだ。今すぐこっちに来れないかな？…うん、場所は商店街近く…お願いします」

よし、これで最悪の場合の保険はかけた。後は…何とかしてあの人物に追いつく！

「ぬおぉぉぉ！！！いい加減…諦めろォォ！！！」

そのまま全力疾走すること数分。向こうもこのままでは逃げ切れないと踏んだのかとある路地裏で、立ち止まってコチラと対峙してきた。

「やれやれ…しつこいですねぇ！これ以上私には構わないで欲しいのですが」

「はぁ…はぁ…こっちは命が掛かってんだよ！…おとなしく…捕まれ！」

「…ちょっと、見ない間に随分な口聞くようになったじゃねえか」

「…？」

「…！（どうやら彼は、まだ私の正体に気づいてないようですね）いえ、何でもありません。しかし、このまま追いかけっこと言うのも不毛でしょう」

「そう思うなら……そっちが諦めろ」

「おやおや…このままでは何時まで経っても話が平行線だ……いいでしょう、なら言い方を替えます。ここで生ゴミになりたくなかったら、とっとと尻尾を巻いて帰ってください」

！？…やっぱりコイツ、何かしらの能力者なのか！？

「どうしたんですか～？震えてますよ」

…ともかく、何とか時間を稼がないと。時間を稼げれば、あとはこ

っちのものだ。

達也サイド

恐らく、アキラがハセヲ君を追いかけているであろう時。
俺は、こっちに来てから最大ともいえるかもしれないピンチに立たされていた。

現状

黒髪の少女　　ＬＰ８０００　　手札３枚
フィールド上　　Ｆ・Ｇ・Ｄ１体　レダメ１体　マテリアルドラゴン　１体　伏せカード　無し

関口達也　　ＬＰ３０００　　手札４枚
フィールド上　　モンスター　無し
伏せカード　１枚

…正直無理じゃね？

アキラサイド

未だに、向こうから手を出してくる様子は無い。あの強気な発言は、ただのハッタリだったのか、もしくは他に理由が…？

「はぁ…本当に強情ですねぇ～…仕方ありません」

そう呟いて、黒フードの男がコチラに近づいてきた。遂に力付くってことだろう…喧嘩に自信は無いけど…やってやるしか！

俺が覚悟を決めて、立ち向かおうと思った瞬間、黒フードの男の身体に、いくつもの光の輪が絡みつき、黒フードの男を拘束した。

「なっ…これは反則でしょう！？」

黒フードの男は、必死に逃れようともがいているが、あの拘束はそう簡単に解けるものじゃない。とりあえずはコレで一安心だ。

「はぁ……ありがと、フェイトちゃん。助かった」

俺が後ろを振り向くと、バリアジャケットに身を包んだフェイトちゃんがコチラに歩いてきた。

言うまでもなく、今あの男を拘束している光の輪はフェイトちゃんの魔法によるものである。確か名前はリングバインド…だったかな？

「とりあえず…襲われてたみたいだったから拘束したけど、アキラ…この人は？」

「ん～…多分、関口さんの知り合い？」

「え！？…じゃあバインド解いた方が…」

「まっ…まった！！バインドを解いちゃ駄目とりあえず状況を説明するから、待って」

「…うん」

そして、俺はフェイトちゃんに状況を説明することにした。

「そっか…じゃあこの人をタツヤの所まで連れて行かなきゃいけないんだね」

「そういうこと、とりあえずこの人の正体も確かめておこうか…と言うわけで、そのフード取っ払って顔を見せてもらいますよ」

「お…お待ちなさい！コレを取れば、君は後悔することになると思いますよ！！」

俺がフードに手をかけた瞬間、男が暴れ始めた。素顔に何か重大な秘密でもあるんだろうか？
だけど、それはそれで興味あると言うか…。

「とりあえず観念してくださいね～」

そう言って俺は男のフードを取った。

「…やりやがった」

「あ…貴方は！？」

そこにあった顔。それは俺にとって衝撃的な人物だった。

達也サイド

「…俺は、Ｄ・ラジカッセンで君にダイレクトアタック！更にダメ

ージステップ時に速攻魔法「リミッター解除」発動！ラジカッセンの攻撃力は倍になる…」

「嘘…」

「これで…俺の勝ちだ！！」

勝った…胡散臭くだけど勝ったぞー！！

どれぐらい胡散臭いかと言うと、勝つまでの過程をすっ飛ばして勝ったという結果だけが残ってるぐらいだからしょーがない。

「まさか、あの状態から逆転されるとは思いませんでした…けど、いい勝負をありがとうございます！」

そういって対戦相手の子は、律儀にペコリとお辞儀をしてきた。

今回はアイツを追うために時間が無かったから、色々とすっ飛ばしちゃったけど、次の機会にはゆっくりと決闘したいもんだ。

「コチラこそ、どうもありがとう。俺も楽しかったよ」

俺も挨拶を返し、何とか話を切り上げようとしていると、向こうからアキラの姿が見えた。

後ろには何やら妙な光の輪に簀巻き状態で拘束されたハセヲ君もいる…アレ？しかもフェイトちゃんまでいるぞ？？

「関口さん…あの…とりあえず捕まえましたけど…その…」

何やらしどろもどろになっているアキラ…ああ、コイツ正体に気づいてなかったのか。恐らく啖呵でも切った後で正体に気づいて、気まずい状態と見た。

「いいさ、その辺は後で聞こう…フェイトちゃんがいることも含めてな…今はとりあえず…」

そう言って、俺はハセヲ君と対峙する。

「さて、事情を聞かせて貰おうか…ハセヲ君…いや、竹内！！」

その後、俺達は立ち話もなんだと言うことで、近くの喫茶店に入ったのだが…。

「っ…ヒャハハハハハハハハハハハハ！！お前…馬鹿ですかぁー！？」

俺は絶賛大爆笑中だった。理由は言うまでも無い、目の前にいる人物竹内康弘の所為である。

「テメェ…ぶっ殺す！！」

「せ…関口さん！あんまり大声で笑うのは…竹内さんも落ち着いて！！」

「あわわ……」

さっきまでのキャラ作りを忘れて、素に戻ってる竹内。何とか場を収めようと試行錯誤しているアキラ、そしてどうしていいのか分からずあたふたしているフェイトちゃん。

やれやれ…とりあえず笑うだけ笑ったし、状況を整理してみよう。

まずここに来て、竹内に俺達が聞いたのは何故正体を隠したのか、そして何故逃げたのかだ。
俺達は向こうでの知り合いだし、同じように飛ばされてきた仲間なのだから、そんなことはする必要ないのである。

「やれやれ…こうなっては仕方ありませんね、話しましょう」

そして竹内の口から出た言葉は「異世界デビュー」である。
竹内のこっちに来てから経緯と行動は俺達と殆ど同じだったが、たった一つだけ違う所があった。
それは、誰とも関わらなかったということだ。
俺は御坂達、科学サイド。アキラはなのはちゃん達魔法サイドと知り合い、行動を共にしてきたわけだが、竹内はこっちに来てから、そういった人間に関わることをせず、まずは自分一人でこの世界を色々見て回っていたらしい。
そうして、竹内は知ったわけだ…この世界が元いた世界ではなくまったく違う世界だということ、そしてここは向こうの世界には無いファンタジーやメルヘンがその辺にいくらでも転がっている所だということを。
そして竹内は結論を出した、これが現実な訳がない、おそらくコレは夢なのだと。そして夢ならば、色々はっちゃけなきゃ損であると。
そう考えた竹内が行き着いたのが、今のキャラ作りらしい。言うならばゲームでいうとこのロールプレイと言う奴である。
そしてキャラ作りも固まり、少し遊んでみようと各地のデュエルスペースに足を運んでいた時、偶然俺達と遭遇したわけだ。
竹内は思ったことだろう、なんでアイツらがここにいるのかと、ここは俺の夢の世界ではなかったのかと。いくら悩んでも答えは出ない。ただ一つはっきりしていることがある。
それは、このまま正体がバレれば笑い者にされるのは明白である。

ここは、他人のふりを決め込んで、後々普通にコンタクトを取ればいいと。

「んで…色々立ち回った挙句ッ…正体がバレて…今に至ると…クックック…」

やばい、また思い出したら笑いがこみ上げてきた。てか何だよこのロール、中二病ですか??

「チッ…こーなるの分かってたから、正体バレたくなかったんだよ」

そう言って苛立たしげに机を叩く竹内。そんな竹内の肩に手を置き、俺はこう言った。

「大丈夫、僕らはハセヲのロールを否定しないよ！」

「死ね☆」

遂に始まる大喧嘩、竹内は遠慮なく殴りかかってくる。それに俺は応戦し、いよいよ持って騒ぎが大きくなってくる

「あ～…二人ともいい加減にしてくださいよ～」

そう呟くも、もう自分に出来ることは無いと悟っているアキラ。その後ろで、何時の間にかレオタードのようなコスチュームに着替えたフェイトちゃんが何か唱えていた。そして次の瞬間。

「なっ！？」

「ちょ…またかよ、ふざけんな！？」

光の輪のようなもので拘束される俺達二人。どうやらこれをやったのはフェイトちゃんのようだ。
心なしか、表情から怒りが感じられる気がする。

「…二人とも、お店でさわいじゃ駄目だよ？」

2人共「…はい」

「それで、竹内お前はこれからどうするつもりなんだ？」

「そうですねぇ～…まだ見てない場所もおおいですし、当分は色々な場所を見て回ろうかと。ここが現実と聞けばなおさら…ね。それと、出来ればコチラではハセヲと呼んでほしいですね」

そんな感じで飄々と応える竹内もといハセヲ。っていうか、友バレしてもこのロールは辞めるつもりはないらしい。

「そうか…まっ連絡先は交換したし、何かあったら伝えるよ」

「ええ、よろしくお願いします。それでは私はこの辺で…アキラ、そしてそこのお嬢さんもお元気で」

挨拶を交わし、ハセヲは店を出て行った。もう少し話したいことはあったが、アイツにも色々とやりたいことがあるのだろう。

「それにしてもごめんね、フェイトちゃん。なんか妙な話に巻きこんで、アキラが使えない所為でさ」

「なっ…それは酷くないですか関口さん！！」

「大丈夫、私が好きでやったことだから」

「フォロープリーズ」

「それならいいけど…っとそろそろいい時間だな。皆の所に帰ろうぜ」

「はい、桃子さんが色々とお菓子を作ってましたから、今行けば食べられると思います」

「おおぅ…職人の手作りか…胸が熱くなるな。急ぐとしよう」

「はい！」

「アレ…なんで俺空気？」

そんな悲しみを背負いつつあるアキラをスルーし、俺達は高町家へと帰ることにした。

第三十五話　リベンジ（前書き）

今回の話は、美琴メインの話です。

第三十五話　リベンジ

「で、私のデッキを粗方見せた訳だけど…正直に答えて欲しいんだけどさ、私のデッキどう思う？」

「ん～…いい感じに纏まってると思いますよ」

「私もそう思います、手札が常に維持できるのはやっぱりいいですよね」

「うん…私もそう思う。ただ、メタタイプのデッキに当たると少し辛そうだけど」

現在、私達はなのはちゃんの部屋で色々な話をしていた最中だ。ちなみに、ここにいるのは佐天さんとなのはちゃんそしてフェイトちゃん。そこで、私は自分のデッキの構成に現在悩んでいると言うことを打ち明け、皆に意見をもらっている所である。

「あ～…確かに、王宮の弾圧とか張られるとキツイですよね…あとスキルドレインとか」

「そうなのよ…アイツのデッキ…思いっきりスキルドレインとか入ってるし…毎回アレでやられるのよね…」

「アイツって…達也さんのことですか？」

と、なのはちゃんが聞いてくる。そういえば、なのはちゃん達はアイツと決闘したことあるのだろうか？スキルドレインが入ってるのを知っていると言うことは、多分やったことあるんだろうけど。

「ええ…そうよ。アイツのデッキとは何度か勝負したけど…未だに一回も勝ててないのよね」

「ジェネクス帝と植物スキドレはある意味相性最悪ですからね…スキドレもそうですけど、ティタニアルでも能力止められちゃいますし」

うぅ…悔しいが、佐天さんの言うとおりだ。私のデッキは、相手に行動を妨害されることにとことん弱い。アイツに勝つには、そこを何とかするしかないだろう。

「そういえば、達也さんって色んなデッキを持ってるんでしたね。私と決闘した時は、魔法使いデッキでした」

「なんでも、今は5つデッキがあるらしいよ」

「私が見たことあるのは、植物スキドレとDフォーマー、あとは里メタビですね～」

「残り二つはどんなデッキなのかしら…」

「ん～…やっぱりメタビじゃないですか?関口さんメタビ大好きですし」

「にゃはは…そういえば、あの魔法使いデッキ…里メタビも名前どおり思いっきりメタビでしたね」

「あんまり流行ってない種類だけど、確かに使われると、有効性がよく分かるね」

「でも、フェイトちゃんのデッキもアレから少しメタビっぽくなったんだよね？」

「うっ…うん…タツヤが色々教えてくれて、私のデッキのコンセプトを壊さずに、相手をメタれるカードを幾つか教えてくれたんだ」

「へぇ～…そういえば、フェイトちゃんとなのはちゃんのデッキはどんなデッキなの？」

「私は、次元斬で…」

「私はアーカナイトバスターです」

バ…バスター？
聞いたことない名前だけど、どんなデッキなのかしら。…って少し話がズレて来てるわね。
話を元に戻さないと。

「それでね、何とか私はアイツにギャフンと言わせてやりたいのよ。何かいい案とかないかな？」

「いい案…ですか」

「そうだね…ジェネクス帝の場合、やっぱり自分の行動を妨害されないように、相手の妨害を止めるカード…魔宮の賄賂やトラップスタンを入れてみたらどうかな？」

「そうね…結構それいいかも！」

黄泉ガエルとの住み分けが難しいかもしれないけど、王宮のお触れを入れるよりはよっぽど堅実的ね。

「けど、魔宮の賄賂って相手にドローさせるのが結構辛いですよね～。普通に見たらかなりアド損ですし」

「私はアリだと思います。たとえアドを与えることになったとしても、そのままその場で押し切ることが出来れば問題ないですよね」

「あはは…なのはちゃんって結構考えが過激だね……」

「私のデッキは、一気に押していくデッキじゃないから、やっぱりトラップ・スタンの方がいいかな」

「そうだ！御坂さんのデッキにも入れられそうないいメタカードありますよ！」

そういって、佐天さんは一枚のカードを出してきた。

「このカード……確かにコレなら、私のデッキに入れても邪魔になりそうにないわね」

「はい、もしよかったら使ってみてください」

「でも、いいの？これって結構高いカードなんじゃ…」

「大丈夫ですよ、このカードまだ予備結構持ってますし。その代わり、今度御坂さんが面白いカードを見つけたら、私にも教えてくださいね」

「うん！りょーかい」

「御坂さん、このカードもどうですか？」

「私は、このカードがオススメだよ？」

「あっ…確かにこのカードも面白いわね」

そんな感じで、皆で私のデッキに入れるカードについて話していると、携帯の着信音が鳴った。

「あっ…アキラからだ。ゴメンちょっと待ってて」

そういって、電話に出て話をするフェイトちゃん。

話自体はすぐ終わったみたいだけど、心無しかフェイトちゃんの顔が少し真剣な顔つきになった気がする。

「ちょっと、アキラが用事あるみたい」

「アキラ君って確かさっきアイツと一緒に出かけて行ったわよね」

「あ～…なんか男二人でカードショップ巡りの旅に出るとかなんとか行ってましたね」

「うん…なんかトラブルがあったみたい。とりあえず、私も行ってくる」

「そうなんだ…じゃあ私達もついｔ…」

「大丈夫、皆はここでゆっくりしてて」

そう言って部屋を出て行くフェイトちゃん。一人で大丈夫かしら。

「やっぱり私達も行ったほうがいいんじゃない？」

「フェイトちゃんがいれば大丈夫だと思いますよ。それに…」

「？」

「にゃははは…なんでもないです」

「まぁとりあえず、私達は関口さん達が帰ってくる前に、御坂さんのデッキの大改修を完了させちゃいましょう！それで、帰ってきたらさっそくリベンジですよ！！」

「私も出来る限りお手伝いします！」

「…うん、二人ともよろしくね！」

そして、私達はデッキ強化に取り掛かった。

次こそは、絶対勝ってやるんだから！！

「うぃーっす。ただいま～…っと」

「いや～…色々大変でしたね～」

「凄く…個性的な人だったね」

あれから、一時間ほど経っただろうか？
玄関の方から声が響いてきた。どうやら3人が帰ってきたらしい。

「グットタイミングですね…御坂さん、心の準備は大丈夫ですか？」

「…だっ…大丈夫…よ」

うぅ…なんかどんどん緊張してきたし！ここまで皆に手伝ってもらったのに、負けちゃったらどうしよう…。
そんな私の不安さが伝わったのか、なのはちゃんが私の手を握ってこう言った。

「大丈夫ですよ、美琴さん。アレだけ頑張って皆で考えたんですから、絶対達也さんにだって勝てます！」

「そうですよ、関口さんをばっばーんと倒しちゃってください！」

「二人とも…うん、頑張ってみる！」

「さぁ、行きましょう！！」

私達は、そのまま関口達也達の元へ向かった。

「なるほど…リベンジ戦ね。俺は別に構わないぞ」

そんな感じであっさりと了承されたこのリベンジ戦は、現在高町家庭先で繰り広げられようとしていた。

「先攻はコインで決めるわよ、アンタは表と裏…どっちがいいのよ？」

「そうだな…んじゃ裏で頼むわ」

「了解よ…コインは表…私が先攻ね」

「あいよ…それじゃあ始めるか…」

「決闘（デュエル）」

「決闘（デュエル）」

第三十六話　ＶＳ関口達也　前編（前書き）

今回も前回に引き続き、美琴視点でお話を進めていきます。

第三十六話　ＶＳ関口達也　前編

関口達也　（植物スキドレバルバダムド）　ＶＳ　御坂美琴　（ガエルジェネクス帝）

「私のターン…ドロー！」

うん、手札はいい感じね。下準備はある程度できそうだわ。

「私は、手札からジェネクス・ウンディーネを召喚！効果で、デッキから黄泉ガエルを墓地に送って、ジェネクス・コントローラーを手札に加えるわよ」

「ん、了解だ…相変わらずいい動きだねぇ～」

「私はこのままターンエンドよ！」

「ＯＫ、じゃあ俺のターン…ドロー！！俺は、手札からローン・ファイア・ブロッサムを召喚！さっそく効果を使わせてもらうぜ！」

っ…いきなり出す気ね、ティタニアルを

「デッキから特殊召喚するのは同じローン・ファイア・ブロッサムだ…そしてコイツの効果も発動！こい…椿姫ティタニアル！！」

「来たわね…天敵！！」

「んじゃ、このままプチっと蹂躙させてもらうぜ！バトルフェイズ…椿姫ティタニアルでジェネクス・ウンディーネに攻撃！」

「うっ…ったいわね！！けど…」

御坂美琴　　ＬＰ８０００　↓　６４００

「私はダメージを受けた瞬間、手札からトラゴエディアを特殊召喚！」

《トラゴエディア／Ｔｒａｇｏｅｄｉａ》
効果モンスター
星１０／闇属性／悪魔族／攻　　？／守　　？
自分が戦闘ダメージを受けた時、
このカードを手札から特殊召喚する事ができる。
このカードの攻撃力・守備力は自分の手札の枚数×６００ポイントアップする。
１ターンに１度、手札のモンスター１体を墓地へ送る事で、
そのモンスターと同じレベルの相手フィールド上に表側表示で存在する
モンスター１体を選択してコントロールを得る。
また、１ターンに１度、自分の墓地に存在するモンスター１体を選択し、
このカードのレベルをエンドフェイズ時まで、選択したモンスターと同じレベルにする事ができる。

「っ！？…御坂の手札は今５枚…攻撃力３０００ってことか」

「どう？…少しは驚いたかしら？」

「…まぁな、けどそいつ一匹で俺のデッキを何とかできるとは思わないことだ。俺は、カードを1枚セット。ターンエンドだぜ」

現状

御坂美琴　　ＬＰ８０００　↓　６４００
手札５枚
フィールド上　　トラゴエディア　１体

関口達也　　ＬＰ８０００　　手札４枚
フィールド上　　ティタニアル　１体　　伏せカード　１枚

「私のターン…ドロー！そして、墓地の黄泉ガエルの効果を発動するわ。私のフィールドに、守備表示で特殊召喚！」

「了解だ。しかし手札６枚とはね…次に帝でも出されたら、俺は結構ヤバイかもな」

「口ではそんなこと言ってるわりに、顔は余裕綽々って感じだけど？」

「フッ…そいつは買い被りってやつさ」

「…まぁいいわ、お望みどおり帝を出してあげる……私は、フィールド上の黄泉ガエルをリリースして、手札から炎帝テスタロスを召喚！」

《炎帝テスタロス／Ｔｈｅｓｔａｌｏｓ　ｔｈｅ　Ｆｉｒｅｓｔｏｒｍ　Ｍｏｎａｒｃｈ》
効果モンスター
星６／炎属性／炎族／攻２４００／守１０００
このカードがアドバンス召喚に成功した時、
相手の手札をランダムに１枚捨てる。
捨てたカードがモンスターカードだった場合、
そのモンスターのレベル×１００ポイントダメージを相手ライフに与える。

「ハンデスか…いいぜ、くれてやるよ。その代わり、全部持って行かせて貰う…罠カード「激流葬」発動！」

「！？…分かったわ、フィールドのモンスターは全滅ね。じゃあテスタロスの効果を発動、このカードを墓地に送ってもらうわ」

「了解だ。落とされたカードはギガプラント…俺は６００ポイントのダメージを受ける」

関口達也　　ＬＰ８０００　↓　７４００

「私は、手札のフィッシュ・ボーグ－ガンナーを墓地に送って、手札から鬼ガエルを守備表示で特殊召喚！更に効果発動。私のデッキから、粋カエルを墓地に送るわ」

《鬼ガエル／Ｓｗａｐ　Ｆｒｏｇ》
効果モンスター
星２／水属性／水族／攻１０００／守　５００
このカードは手札の水属性モンスター１体を捨てて、
手札から特殊召喚する事ができる。

このカードが召喚・反転召喚・特殊召喚に成功した時、
自分のデッキ・フィールド上から水族・水属性・レベル2以下の
モンスター1体を選択して墓地へ送る事ができる。
1ターンに1度、自分フィールド上に存在するモンスター1体を手
札に戻す事で、
このターン通常召喚に加えて1度だけ、
自分は「鬼ガエル」以外の「ガエル」と名のついた
モンスター1体を召喚する事ができる。

「ほぅ…新しいガエルを追加したんだな」

なのはちゃんに薦められて、色々とガエルの種類を増やした甲斐があったわね。前より格段に墓地肥やしの手段が増えたし、何よりシンクロや特殊召喚の幅が増えたわ。

「コイツの効果は結構強いわよ！私はカードを1枚セット。ターンエンドよ」

「俺のターン、ドロー！！…やれやれ、手札の数が心もとないね。ここは、少しでもアドを考えていかねえとな…俺は、手札のフェニキシアン・クラスター・アマリリスを墓地に送って、手札から魔法カード「トレード・イン」を発動！デッキからカードを2枚ドローする」

来たっ…アイツの常套手段……。手札を交換しつつ、墓地にアマリリスを落とす。アイツはかなり厄介だわ……。

「さて…ここからどうするかだが…バカ正直に殴ってもいい事なさそうだしな。俺は、カードを2枚セット。そして、エンドフェイズ

時、墓地のギガプラントを除外することで、フェニキシアン・クラスター・アマリリスを守備表示で特殊召喚…ターンエンドだ」

現状

御坂美琴　　ＬＰ６４００　　手札２枚
フィールド上　　鬼ガエル　（守備）　１体
伏せカード　１枚

関口達也　　ＬＰ８０００　↓　７４００　　手札２枚
フィールド上　　アマリリス　（守備）　１体
伏せカード　２枚

「私のターン…ドロー！」

ドローしたのは…氷帝メビウス！けど、アイツの伏せは２枚…絶対スキルドレインがあるわ。
帝の能力を無効化させて、後々上級モンスターで蹂躙する……アイツのよくやる手だもの。ここは我慢ね。

「私は、このままターンエンドよ！」

「俺のターン…ドロー！（あの様子だと、こっちにスキルドレインがあることを警戒してるな。いい読みだ…さて、こっちも御坂の伏せを読んだ上で行動しないとな……態々黄泉ガエルの特殊召喚を止めてまで伏せてるんだから考えられるのは、モンスター除去系の罠

カード…もしくは召喚時に発動の奈落や警告かもな…どちらにせよ、早めに使わせておくに越したことはない。今激流葬をされたとしても、実質アマリリスはまだ蘇生可能だから、被害はそうでないしな。逆に除去系の次元幽閉なんかでもキツイが、まずはモンスターを出して、そいつに殴らせてから考えればいい）俺は、手札からキラー・トマトを召喚！更に、フェニキシアン・クラスター・アマリリスを攻撃表示に変更！バトルフェイズ、キラー・トマトで鬼ガエルに攻撃！」

かかった！！

「罠カード「邪神の大災害」発動！フィールド上の魔法・罠カードをすべて破壊するわ！」

《邪神の大災害／Ｍａｌｅｖｏｌｅｎｔ　Ｃａｔａｓｔｒｏｐｈｅ》
通常罠
相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。
フィールド上に存在する魔法・罠カードを全て破壊する。

「なっ！？…邪神の大災害だと！？」

「流石のアンタでも、このカードは予想できなかったかしら？…でも、結構アンタに有効な手だと思わない？」

流石、フェイトちゃんが対アンタ用に考えてたお勧めカードの一つね。効果覿面じゃない♪

「…了解だ、伏せてたスキルドレインと、次元幽閉は破壊される。だが、バトル続行だぜ…俺はフェニキシアン・クラスター・アマリリスで御坂にダイレクトアタック！更に、自壊効果で御坂に８００

ポイントのライフダメージを与える」

「うっ…」

御坂美琴　　ＬＰ６４００　↓　３４００

「（ライフは削ったが、アド損が大きすぎる…これ以上バックが立てれないのが辛いな）俺はエンドフェイズ時、墓地のローン・ファイア・ブロッサムを除外することで、フェニキシアン・クラスター・アマリリスを守備表示で特殊召喚。ターンエンドだ」

現状

御坂美琴　　ＬＰ６４００　↓　３４００
　手札３枚
フィールド上　　モンスター　無し
　伏せカード　無し

関口達也　　ＬＰ７４００
　手札２枚
フィールド上　　アマリリス　（守備）　１体
　伏せカード　無し

コレはチャンスね。伏せが無い今…警戒するものは何も無い！

「私のターン…ドロー！そして黄泉ガエルの効果発動。私のフィールド上に守備表示で特殊召喚するわ。更に、黄泉ガエルをリリースして手札から邪帝ガイウスを召喚！効果発動よ！」

「…ＯＫだ、さてどっちを選ぶ？」

悩ましいわね…キラー・トマトを除外すれば、１０００ポイントのライフダメージを与えられるし、リクルーターとしての効果も発動できなくできる。けど、アマリリスをこのまま放置してたら、じわじわ８００ポイントのダメージを受け続けることに……。もうライフも少ないし、これ以上のライフダメージは減らしたい…ならここは…！

「対象は、フェニキシアン・クラスター・アマリリスよ！」

「分かった、フェニキシアン・クラスター・アマリリスは除外される」

「私は、カードを１枚セットしてターンエンドよ」

「俺のターン、ドロー！（アマリリスを取ったか…いい判断だ、もしアマリリスが残れば、このまま自爆特攻で押し切れたからな。これで手札は３枚…トドメを刺すまでには後一手欲しい所か。ならここは耐えよう…まだライフの余裕はあるし、キラー・トマトからクリッターに派生できれば尚いい）俺はキラー・トマトを守備表示にしてターンエンドだ」

さっきに引き続いて伏せ無しでターンエンド…このチャンス、逃す手は無いわね。上手くいけば次のターンで……。

現状

御坂美琴　　ＬＰ３４００

手札２枚
フィールド上　ガイウス　１体
伏せカード　１枚

関口達也　ＬＰ７４００
手札３枚
フィールド上　キラー・トマト（守備）　１体
伏せカード　無し

第三十七話　ＶＳ関口達也　後編

現状

御坂美琴　　ＬＰ３４００
　手札２枚
フィールド上　　ガイウス　１体
　伏せカード　１枚

関口達也　　ＬＰ７４００
　手札３枚
フィールド上　　キラー・トマト（守備）　１体
　伏せカード　無し

「私のターン…ドロー！そしてこの瞬間、速攻魔法カード「エネミーコントローラー」を発動するわ。私のフィールド上にいる邪帝ガイウスをリリースすることで、アンタのキラー・トマトのコントロールを得る！…そして、私の魔法・罠ゾーンにカードが無くなったことで黄泉ガエルの効果を発動！私のフィールド上に特殊召喚するわ」

《エネミーコントローラー／Ｅｎｅｍｙ　Ｃｏｎｔｒｏｌｌｅｒ》
速攻魔法
次の効果から１つを選択して発動する。
●相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター１体の表示形式を変更する。
●自分フィールド上に存在するモンスター１体をリリースして発動する。

このターンのエンドフェイズ時まで、相手フィールド上に表側表示で存在する
モンスター1体のコントロールを得る。

「…！（俺のモンスターを奪った…リリースに使うつもりか、それとも…）」

「行くわよ…私は手札のグローアップ・バルブを墓地に送って、フィッシュボーグ－ガンナーを特殊召喚！更に、グローアップ・バルブの効果を発動。デッキトップのカード…サイクロンを墓地に送って、フィールド上に特殊召喚…そして、キラー・トマトとグローアップ・バルブでチューニング！来なさい…シンクロ召喚、ＴＧ　ハイパー・ライブラリアン！！」

「（ってことは…この後フォーミュラを出して2枚ドローか。うらやましい限りだ）」

「まだまだ行くわよ！更に、黄泉ガエルとフィッシュボーグ－ガンナーをチューニング！！シンクロ召喚、フォーミュラ・シンクロン！形式は守備表示よ。フォーミュラ・シンクロンとＴＧ　ハイパー・ライブラリアンの効果で、合計2枚ドロー！」

「2体のシンクロモンスターを出して、手札は4枚に増えたか…なるほどいい手だ（しかしこの流れ…あのデッキを思い出すな…もしかしたらは御坂とこのデッキなら、あのカードを使いこなせるかも）」

「フン…このぐらい当然よ！バトルフェイズ、ＴＧ　ハイパーライブラリアンでアンタにダイレクトアタックよ！」

「…やれやれ（本当は保険にとっておきたかったんだがな…そういうことをされちゃ出さざる負えないだろ）」

関口達也　　ＬＰ７４００　↓　５０００

「俺はＬＰに戦闘ダメージを受けた瞬間、手札の冥府の使者ゴーズの効果を発動するぜ！俺のフィールドにゴーズとカイエントークンが特殊召喚される。２体とも守備表示だ」

《冥府の使者ゴーズ／Ｇｏｒｚ　ｔｈｅ　Ｅｍｉｓｓａｒｙ　ｏｆ　Ｄａｒｋｎｅｓｓ》
効果モンスター
星７／闇属性／悪魔族／攻２７００／守２５００
自分フィールド上にカードが存在しない場合、
相手がコントロールするカードによってダメージを受けた時、
このカードを手札から特殊召喚する事ができる。
この方法で特殊召喚に成功した時、受けたダメージの種類により以下の効果を発動する。
●戦闘ダメージの場合、自分フィールド上に「冥府の使者カイエントークン」
（天使族・光・星７・攻／守？）を１体特殊召喚する。
このトークンの攻撃力・守備力は、この時受けた戦闘ダメージと同じ数値になる。
●カードの効果によるダメージの場合、
受けたダメージと同じダメージを相手ライフに与える。

「っ…面倒なカードを出してくれるじゃない。けど無駄よ、私はメインフェイズにフィールド上のモンスターをすべてチューニング、来なさい…ブラック・ローズ・ドラゴン！！効果ですべてを破壊するのよ！！」

「！！…やれやれ、痛い痛い。しかしまぁ…アレだ、次のターンまで残すよりはこっちの方が断然いい…」

「私は、カードを1枚セット…ターンエンドよ」

「俺のターン…ドロー！（向こうが動くには黄泉ガエルギミックが欲しいはず…だとすれば、あのカードはこのターンに使えそうなカードなはずだ。加えて御坂のＬＰは少なくなってきてる…あのカードは術中八苦モンスター除去と見ていいだろう…今度こそ奈落か、だとすれば上級はあまり出したくない。かと言って、低級モンスターなら、あるいはここは見逃してくるかもしれないが、それでで凌いだとしても、次のターン粋カエルから風帝でも出されてドローロックされたら目も当てられない。ここでサイクロン辺りが引けたら文句無かったんだが…ぼやいても仕方ないな。カードは温存したい所だけど、ここは…）」

アイツの手札は4枚…たぶん、既に攻める手はずはある程度整ってるでしょうね…。それでも攻めてこないって事は、私の伏せカードをかなり警戒してるって事。
悩むなら好きなだけ悩めばいいわ…でも私は、その予想の上を行ってみせる！！

「俺は手札からキラー・トマトを召喚！」

「っ…！」

「その様子じゃ、召喚に対して何も無いみたいだな…なら、そのままバトルフェイズだ。キラー・トマトで御坂にダイレクトアタック

！！」

「うっ…」

まだ…まだよ！まだＬＰは残ってるんだからっ！

御坂美琴　　ＬＰ３４００　↓　２０００

「俺は、カードを１枚セット…ターンエンドだ」

現状

御坂美琴　　ＬＰ３４００　↓　２０００
　手札３枚
フィールド上　モンスター　無し
　伏せカード　１枚

関口達也　　ＬＰ７４００　↓　５０００
　手札１枚
フィールド上　キラー・トマト　１体
　伏せカード　１枚

「私のターン…ドロー！」

ここに来て低級モンスター…よりにもよってキラー・トマトだなんて。

風帝ライザーか邪帝ガイウスがあれば問題なかったけど…今無いものを強請ったって仕方ないわ。リクルート効果で変なモンスターを呼ばれても嫌だし、ここは様子見ね。

「私は、モンスターを1体セット…このままターンエンドよ」

「俺のターン…ドロー！どうやら手札にめぼしい帝はいないみたいだな…なら恐れることは無い。バトルフェイズ、キラー・トマトで伏せモンスターに攻撃！」

「っ…伏せモンスターはジェネクス・コントローラーよ。守備力は１２００…このまま破壊されるわ」

「俺はこのまま、ターンエンドだ」

現状

御坂美琴　　ＬＰ２０００
　手札３枚
フィールド上　　モンスター　無し
　伏せカード　１枚

関口達也　　ＬＰ５０００
　手札２枚
フィールド上　　キラー・トマト　１体
　伏せカード　１枚

ここで、邪帝か風帝を引ければ…、この勝負の流れは、完全に私に傾くはず！！

「私のターン…」

来て…いいカード…お願いっ！

「ドロー…！私は墓地の、ブラック・ローズ・ドラゴン　フォーミュラ・シンクロン　邪帝ガイウス　トラゴエディア　ジェネクス・ウンディーネを選択して、手札から魔法カード「貪欲な壺」を発動！この5枚のカードをそれぞれエクストラデッキとデッキに戻して、カードを2枚ドローするわ！」

「ここに来てドローカードか…せめていいカードを引かないことを祈ってるよ」

「どうやらそうも行かないみたいよ?私は、墓地の鬼ガエルを除外することで、墓地にいる粋カエルの効果を発動!私のフィールド上に守備表示で特殊召喚するわ」

《粋カエル／Ｒｏｎｉｎｔｏａｄｉｎ》
効果モンスター
星２／水属性／水族／攻　１００／守２０００
このカードのカード名は、
フィールド上に表側表示で存在する限り「デスガエル」として扱う。
また、自分の墓地に存在する「ガエル」と名のついた
モンスター1体をゲームから除外する事で、
墓地に存在するこのカードを自分フィールド上に特殊召喚する。
このカードはシンクロ素材とする事はできない。

「（帝を引いたか…だがっ！）」

「そして私は粋カエルをリリース…風帝ライザーを召喚！」

「させねえよ…カウンター罠カード「ポリノシス」発動…キラー・トマトをリリースすることで、風帝ライザーの召喚を無効にして破壊する！」

「…帝を出すことまで全部読んだ上でキラー・トマトを出したのね」

「まっ…そういうこったな」

「やるじゃないっ…私はこのまま、ターンエンドよ」

「俺のターン…ドロー！！…さて、この勝負…そろそろ幕引きとさせてもらおうか…俺の墓地にある闇属性モンスターの数は3体…このカードを使わせてもらう！俺は手札から、ダーク・アームド・ドラゴンを特殊召喚！」

「させないっ…！罠カード「奈落の落とし穴」を発動。ダーク・アームド・ドラゴンを破壊して、除外するわ！」

「…！やっぱり奈落の落とし穴だったか…了解だ、ダーク・アームド・ドラゴンは墓地に送られる。だが…本命はこっちだぜ！俺は手札からポルノシスを墓地に送って、装備魔法カード「Ｄ・Ｄ・Ｒ」を発動！対象は除外されているギガプラントだ」

《ギガプラント／Ｇｉｇａｐｌａｎｔ》
デュアルモンスター
星６／地属性／植物族／攻２４００／守１２００
このカードは墓地またはフィールド上に表側表示で存在する場合、通常モンスターとして扱う。
フィールド上に表側表示で存在するこのカードを通常召喚扱いとし

て再度召喚する事で、
このカードは効果モンスター扱いとなり以下の効果を得る。
●自分の手札または墓地に存在する昆虫族または植物族モンスター1体を特殊召喚する。
この効果は1ターンに1度しか使用できない。

「ギガプラントの攻撃力は２４００…御坂、コイツのダイレクトアタックが通れば俺の勝ちだ！俺はバトルフェイズ、ギガプラントで御坂にダイレクトアタック！！」

「まだよっ！私は手札からバトルフェーダを守備表示で特殊召喚して効果発動！このバトルフェイズっを強制終了させるわ」

《バトルフェーダー／Ｂａｔｔｌｅ　Ｆａｄｅｒ》
効果モンスター
星１／闇属性／悪魔族／攻　　０／守　　０
相手モンスターの直接攻撃宣言時に発動する事ができる。
このカードを手札から特殊召喚し、バトルフェイズを終了する。
この効果で特殊召喚したこのカードは、
フィールド上から離れた場合ゲームから除外される。

「っ…だが、帝対策は取らせてもらうぜ。俺はギガプラントをデュアル宣言だ…再度召喚することで、ギガプラントの効果が使えるようになる！」

「それもさせないっ！私は手札から、エフェクト・ヴェーラーを墓地に送ることで効果発動！ギガプラントの効果を、このターンの間無効化するわ！」

《エフェクト・ヴェーラー／Ｅｆｆｅｃｔ　Ｖｅｉｌｅｒ》

チューナー（効果モンスター）
星１／光属性／魔法使い族／攻　　０／守　　０
このカードを手札から墓地へ送り、
相手フィールド上に表側表示で存在する
効果モンスター１体を選択して発動する。
選択した相手モンスターの効果をエンドフェイズ時まで無効にする。
この効果は相手のメインフェイズ時のみ発動する事ができる。

佐天さんから貰ったこのカード…やっぱり強い。相手のターン中に効果を止めるが出来るのもそうだけど、何よりレベル１のチューナーって所がいいわね。

「チッ…ティタニアルは出せなかったか…俺はこのままターンエンドだ」

現状

御坂美琴　　ＬＰ２０００
　手札２枚
フィールド上　　フェーダ　（守備）　１体
　伏せカード　無し

関口達也　　ＬＰ５０００
　手札０枚
フィールド上　　ギガプラント１体
　伏せカード　無し

これでアイツの手札は無くなった。あとはこのまま押し切ればいいっ。

「私のターン、ドロー！私は墓地の黄泉ガエルの効果を発動するわ、私のフィールドに守備表示で特殊召喚！更に、私は手札から魔法カード「死者蘇生」を発動。対象は私の墓地にいるＴＧ　ハイパーライブラリアンよ。フィールドに特殊召喚！そして、手札の氷帝メビウスを墓地に送ってフィッシュボーグ－ガンナーを特殊召喚！黄泉ガエルとチューニングして、シンクロ召喚…フォーミュラ・シンクロン！ＴＧの効果と合わせて、カードを２枚ドローするわ」

「っ…」

「更に、手札からジェネクス・ウンディーネを召喚！効果で、デッキの黄泉ガエルを墓地に送ってジェネクス・コントローラーを手札に加えるわ。そして、ジェネクス・ウンディーネとバトルフェーダ…フォーミュラ・シンクロンをチューニング…効果で特殊召喚されたバトルフェーダを除外して、シンクロ召喚氷結界の龍ブリューナク！！更にＴＧの効果でカードを１枚ドロー！！」

「御坂も持ってたんだな、氷結界の龍を…」

「ええ、手に入れるのにかなり苦労したんだけどね。じゃあ、ブリューナクの効果発動よ。手札のジェネクス・コントローラーを墓地に送って、ギガプラントをアンタの手札に戻すわ」

「…了解だ」

「じゃあバトルフェイズ…２体のモンスターでアンタにダイレクトアタック！！」

「ぐっ…」

関口達也　　ＬＰ５０００　↓　３００

「私はこのまま、ターンエンドよ」

「俺のターン…ドロー！…まだだ…まだ諦めない！俺は手札から、永続魔法カード「増草剤」を発動。墓地にいる椿姫ティタニアルを特殊召喚！そしてバトルフェイズ…ティタニアルでブリューナクに攻撃！」

「…流石に、そう簡単にはやられてくれないわね」

御坂美琴　　ＬＰ２０００　↓　１５００

「俺はこのまま、ターンエンドだ」

現状

御坂美琴　　ＬＰ２０００　↓　１５００
　手札３枚
フィールド上　　ライブラリアン　１体
　伏せカード　無し

関口達也　　ＬＰ５０００　↓　３００
　手札１枚
フィールド上　　ティタニアル１体
　伏せカード　無し
永続魔法　増草剤　１枚

「私のターン…ドロー！私は墓地の黄泉ガエルの効果を発動するわ。
私のフィールド上に特殊召喚！そして、黄泉ガエルをリリースして
手札から邪帝ガイウスを召喚！そして効果発動よ…対象は、自身…
邪帝ガイウス！」

「……ティタニアルの効果を発動だ。このカードをリリースして、
邪帝ガイウスの効果を無効化する。同時に増草剤も破壊される」

「……行くわよ、バトルフェイズ！！」

「…ああ、こい！」

「ＴＧ　ハイパー・ライブラリアンで、アンタ…関口達也にダイレ
クトアタック！！」

「……俺の、負けだ」

関口達也　（植物スキドレバルバダムド）　ＶＳ　御坂美琴　（ジ
ェネクスガエル帝）

勝者　　御坂美琴

第三十八話　負けたけど、ぜんぜん悔しくなんてないんだからねっ！（前書き）

今回から再び、関口君視点になります。

第三十八話　負けたけど、ぜんぜん悔しくなんてないんだからねっ！

負けた…一方通行の時みたいに中途半端じゃなく、今度こそ完膚なきまでに。
俺はその感覚をゆっくりかみ締めつつ、目の前の御坂に対して笑顔でこう言った。

「やるじゃないか、御坂。いい決闘だったぜ」

「っ…／／／まぁね…けど、皆のアドバイスを貰ってだから、私だけの勝利じゃないけど」

「そうだな…でも、たとえそうだとしても、そのデッキを使って俺に勝ったのは紛れも無いお前自身だよ、御坂美琴」

「…ありがと」

御坂はそう言うと、そっぽを向いてしまった。むむっ…機嫌を損ねたか？女心ってのはよく分からん。
しかしまぁ、我ながら見事に負けたものだ。何時もなら、結構悔しいはずなんだけどな…あんまりそんな気分ではない。なんだろうな…この気持ち。

「けど、これでやっとアンタから1勝出来たわね。見てなさい、これから今までの負け分をすぐに帳消しにしてやるんだからっ！」

ああ…そうか、なんとなく分かった気がする。俺はきっと、御坂の成長が嬉しいんだ。御坂の決闘者としての成長が、そして何時か…アキラや竹内みたいな、俺が渾身で挑むべきライバルに成長するで

あろう事が…。
なら…俺が次に言わなきゃいけないセリフは決まっている。

「……次は」

「？…何？」

「次は、俺のメインデッキで相手をしてやる。覚悟しとけ」

そう言って俺は、不敵に笑って見せた。

「…！！…上等よ、返り撃ちにしてやるんだからっ！」

うん、いい気構えだ。もっとも…そう来てもらわなきゃ俺も困るがな。
そうだ…、そんな未来のライバルに向けて…一つ梃入れでもしとくかな。今の御坂なら、きっと使いこなすだろう。

「そうだ…お前に渡したいカードがあるんだ。受け取ってくれるか？」

そう言って俺は、2枚のシンクロカードを御坂に差し出した。

「これって…見たこと無いカードだけど、強そうね。けどいいの？かなり高そうだけど？？」

「問題ない、俺はまだ持ってるしな。それに、このカードはきっと…御坂のデッキを支える柱の一つになると思うぜ」

「…分かった。受け取るわ…大切にする。」

「ん、受け取って貰えて何よりだ…っとそういえば、皆がやけに静かだな」

そうして俺は、縁側の方を見る。
すると、皆は未だ縁側でなにやら固まっていた。

「はあ～…なんか私、途中から完璧にこの決闘に見入っちゃいました」

「うん…俺もだ」

「でも、本当に達也さんに勝っちゃうなんて…」

「私も負けてられない…」

どうやら皆は声を出すのも忘れて、決闘に見入っていたらしい。
まっ…俺もこんなにワクワクした決闘久しぶりだし、なんとなく気持ちは分かるな。

「お疲れさんです、関口さん」

アキラが、声を掛けてくる。なのはちゃん達は、御坂の方に行ってる様だ。

「おう…しかし負けるとはな…予想外だ」

「ですね～…先を越されちゃいました」

「…アキラ、お前は今まで何回も俺に勝ったことあるだろ？」

「そういっても、総合的に見れば俺が負け越してると思いますけどね。なんにせよ、御坂さんは中々の決闘者みたいですね」

「…ああ、俺のライバルの一人だからな」

「俺も、その内決闘してみたいです」

「とはいえ…今回はこれまでかな……もうそろそろ帰らないと、電車が無くなりそうだ」

「そういえばもうそんな時間ですか…」

「そういうこった、俺達はそろそろ学園都市に帰るぜ…また遊びに来るよ」

「ええ…待ってますよ。その時は、メインデッキを出してもらいます」

「…ああ、オーイ!!佐天ちゃん～御坂～!そろそろ帰るぜ」

そうして俺達は、高町家の皆さんにも挨拶を済ませ海鳴市を後にした。

「いや～…楽しかったですね、海鳴市!」

「だな…いい所だった」

「また来たいわね…」

「ですね～、例の魔力測定の件もありますし、また早い内に来ることになるかもしれないです」

ん、そういえばそんな話もあったな。魔法かぁ～…もし使えるようになるならどんなものがいいか。

腕から炎を出したり、空を自由に飛んでみたり…色々やってみたいことはあるよなぁ～。

まぁ、俺にそんな才能があるとは到底思えないわけだが。

「まっ…俺は魔法よりこっちだけどな…」

そう言って、自分のデッキを眺める。コイツがなきゃ…俺が俺でなくなっちまうって言っても、過言じゃないからな。そういう意味で…俺がこの世界に来たのは、ある意味運命だったのかもしれない……。

「ん～…でもでも、やっぱりそういう力への憧れってあるじゃないですかぁ～」

「まぁ…な」

「でも、もしかしたら何か副作用とかもあるかもしれないわよ？強大な力を手に入れるには、それなりの代価が必要…ってね」

「うわぁ～…御坂さんが言うと説得力ありますね…」

「でも、そういうことがあるなら事前にリンディさん達が教えてくれるだろうさ。そんなに悪い人達じゃなさそうだったしな」

「う～ん…」

「まっ…今の所はそうきにすることでもないだろ。やばそうなら後々からでも断ることは出来るしな」

「そうね…」

そう呟き、御坂は窓の景色を眺めていた。魔法と超能力…まぁどう考えても対極に位置する二つだからな。そう納得も出来ないだろうさ。

「っと…そういえば、初春ちゃん達にお土産何か買ったほうがよかったかな？？」

2人共「あ……」

う～む…こりゃ戻ってからも何か起こる気がする。

第三十九話　じゃっじめんとですのー？

さて、そんなこんなで俺達は、学園都市に帰ってきたわけなのだが…何故だろう？久しぶりの我が家（？）に帰ってきたというのにちっとも落ち着かない。

…いや、今の発言には語弊があるな。理由はよく分かってる、今も現在進行形で俺の事を睨み続けてる風紀委員（ジャッジメント）殿こと、白井黒子ちゃんが原因だ。

俺達が帰ってきてからすでに1時間ほど経つのだが、帰ってくると部屋の中にはすでに黒子ちゃんが居たのである。

そこで俺は、軽く声を掛けたのだが帰ってきたのは言葉ではなく殺意だった。そして今に至るのである。

やれやれ…俺が何をしたっていうんだ？自分が海鳴市に行けなかった事を拗ねてるのか？…いや、ちゃんと誘ったし、風紀委員の仕事で行けないと言ったのは黒子ちゃんだ。

だとすると、他の理由か…やはりお土産を買ってこなかったのが致命的だったか。次に行くときがあれば絶対買ってくるとしよう。

しかし、このままギスギスした空気ってのも色々とマズイ。何とか仲直りを図りたいものだが…。

ちなみに御坂と佐天ちゃんは二人でなにやらデッキ調整をしているようだ。もしかしたら、この空気を感じて巻き込まれないようにあえてスルーしているような気もするが…考えすぎかな。

ともあれ、俺が声を掛けるしかあるまい。

「え～と…黒子ちゃん？」

「…何か御用でしょうか？」

「と…とりあえず…さ、何を怒ってるのかは知らないけどとりあえ

ずS」

「…白々しいですわね」

「…はい？」

「関口さん…私、貴方が出かけるとは聞いておりましたけど…お姉様が一緒とは聞いてませんでしたわ」

「あ～…え～…そうだっけ？？」

「惚けないでくださいまし！！」

「！？…はい！！」

「お姉さまと旅行…しかも1泊…貴方…お姉様に何か如何わしい事をしたのではありませんか？」

そういえば、御坂がここに泊まる時は絶対黒子ちゃんも泊まっていくよな。つまり、自分の目の届かない所で、御坂と一緒に居たから色々と疑ってると…おいおいちょっと待て。

「いやいやいや！？泊まったっていったって俺の知り合いがお世話になってる家だし！何より佐天ちゃんも一緒だったから！！」

「つまり…佐天さんとその友人も交えて乱k」

「はいアウトー！！！それ以上の発言は許さないよ」

「失礼…少し下品な物言いでしたわね。ですが…本当にそういった

ことはなかったのですか？」

「無かったよ、神と女王陛下に誓ってね」

「…分かりました。信じることにしますわ」

やれやれ…一応誤解は解けたらしいな。
その後、皆と夕食を取って少しデュエルした後、３人は其々の寮に帰っていった。
何だかんだで、一人の夜っていうのは久しぶりだな…まっ…たまにはこんな静かな夜ってのもいいか。
特に他にやることも無し、今日は少し早めに寝るとしよう。

達也サイド

そして次の日　　俺起床。
さて、今日はどうしようかな？
何時ものように、適当な大会に出て見るか…それとも街をブラつくか…そういやゲーセンにも行きたいな。確かＥ〇ＶＳでデス〇イズが参戦してたよな…出て１時間ぐらいでバグが発見されたとか聞いたけど…デス〇イズは大好きだし、持ちキャラにしておきたい。

「よし、今日は大会はナシ。久しぶりにめい一杯ゲーセンでＥ〇ＶＳをするか！」

我ながらなんて駄目人間発言…。まぁ１日ぐらいはこういう日があってもいいだろう。
そして俺は、軽く朝食を済ませゲーセンに足を運んだ。

ゲーセンに到着。さっそくE○VSの台を見てみると、平日の朝っぱらだというのにかなりの人が居た。
しかも学生ばかり…いや、ここは学園都市だし当然といえば…当然か。
今日は1ラインでシャフル戦みたいだな…丁度いい、このシャッフル戦でデス○イズの練習をさせてもらうとしよう。俺は、早速台が空くのを見計らってデス○イズで参戦した。

使って見た感想としては、良くも悪くも格闘機ってとこだな…２５００機体だから、もう少し射撃武装を充実させて欲しかった所だが、エンドレスワルツ仕様のカスタムなのでバスター○ールドが無いのが痛いよなぁ～…。
だが、格闘自体は悪くない…BD格闘もそこそこ伸びるし、これと横格を主体に相方と一緒に前に出れれば、そこそこ仕事は出来ると見た！
それからデス○イズを使うこと数時間。昼飯を食べることも忘れ、このゲームに没頭していた俺は、そこそこデス○イズを使えるようになってきた。
まぁ、程度の低い初心者狩りぐらいなら2体1でもやれるかな…格闘のカット耐性がそこそこ高いし、クロークもあるから、2体に狙われても上手くやれば逃げ切れる。

「っと…この試合も何とか勝利…！？」

途端、向こうの台から明らかな台バンする音が聞こえた。ありゃりゃ…なんだDQNか？
今の試合、相方だった奴は俺の隣にいたから、向こう側にいるのは負けた二人組みのはず。もしかしたらお互いにイチャモンでもつけ

てリアルガ〇ダムファイトに発展してんじゃないだろうな…？
とりあえず覗いてみるか…。
そんなのこんなで覗いて見ると、案の定ＤＱＮらしき学生が、もう一人に絡んでいた。
どうやら一方的な試合内容のようだ。このままではあの絡まれてる学生はリアルぶっきさっれかねない。
あまつさえそこから、拾われてリアルサイドワインダーでバウンドさせられてループされた日には、あの学生のライフはゼロである。
まぁ、そんなことできる人間がいるとも思えないが、ここは学園都市である、ワンチャンそんな技術を体得した学生がいても不思議ではない。
まぁだからと言って、俺が何か出来るわけでもないのだが…その内店員が来て仲裁するだろうさ。
俺はそのまま、自分の台に戻ってプレイを続けた。その後、台バンの音は聞こえなくなったので、きっと店員が何とかしたのだろう。

「さて…結構やったし、そろそろ帰るかなぁ～」

デス〇イズも大分使えるようになったし、今度御坂を誘って固定台でもやって見るか！
そんなことを考えながら、店から出ようとしていると、さっきのＤＱＮ学生を見かけた。しかも先ほどまでは居なかった取り巻きを従えて。
何かする気なのかと観察していると、前方に先ほど絡まれていた学生がいた。丁度店から出る所だ。
それを追うように、ＤＱＮ学生達も外に出て行った。
あ～…これは完璧あれですね…恐らくあのＤＱＮ達は、さっきの学生を捕まえてウサ晴らしなりカツアゲなりをする気なのだろう。
う～む…これは警察でも呼ぶべきか？いや…ここではアンチスキル

か風紀委員(ジャッジメント)か…しかし、現場を見たわけでもないし…現場を押さえるにしても、赤の他人のためにそこまでやる義理はねぇよな～…。だがしかし、ここで見捨てるのも夢見が悪い気がする。どうしたものか…。

「やれやれ…仕方が無い。ここは一つ…」

俺は、何時も決闘用に使ってるコインを取り出し、高くコイントスした。

黒子サイド

「なんでしょう…モヤモヤが晴れませんの」

それもこれも、あの部屋にお姉様を泊まらせるのも許すまじことだといいますのに…何も無かったとは言ってましたけど、最近お姉様と野蛮人の関係が親密になって来ている気もしますし…この事が切欠で二人の関係が更に深まったら……。

そんな事を考えていると、インカムから初春の声が響いてきましたわ。

「白井さ～ん、パトロールの方はどんな感じですか～？」

「…今の所、問題ナシですわ」

ともあれ、今は風紀委員(ジャッジメント)の仕事中。気持ちを切り替えませんと。

「そうですか、今日は何事も無く終わりそうですね。じゃあ、残りのルートを巡回したらさっさと帰ってきてくださいね～、以上通信終了」

そして、インカムからの声は途絶える。言われるまでもありませんわ、さっさと切り上げてあの二人の関係をぶち壊すための作戦を練りませんと…。

そう思い、残りのルートをパトロールしていると、何やら口論の声が聞こえてきた。

「やれやれ…チンピラの喧嘩でしょうか？」

なんにせよ、見過ごす訳には行きませんわね。

そうして私は、その声がする方向へ空間移動（テレポート）した。

第四十話　どうやら俺はお人よしだったようです

黒子サイド

「おいおい…ど~してくれるんだよ?てめぇが地雷だった所為で俺は１００円損しちまったんだけど~」

「そんな…僕だってちゃんと頑張りましたよ。それにたかだかゲームで負けたぐらいでそんな…」

「ああん?うっせーよ!地雷が喋るなっ!!」

「がはっ!?」

「んで、コイツどうすんのよ?」

「そーだな、とりあえず慰謝料に有り金全部巻き上げて、どっかに吊るすか」

現場に到着ですの。どうやら喧嘩と言うよりはカツアゲか何かの一種のようですわね。大人しそうな学生を路地裏に連れ込んでカツアゲ……どう考えても不良で間違いないですわね。
まぁどちらにせよ、これ以上の暴挙は見過ごせませんわ。

「風紀委員(ジャッジメント)ですの!暴行罪の現行犯で貴方達を拘束します」

「あ?なんだ譲ちゃん…そんなちんちくりんな形で風紀委員(ジャッジメント)かよw」

「それとももしかして、俺達と遊んで欲しいのかなぁ～？」

やれやれですわ…どうしてこういう類の連中は、こう頭が悪いのでしょうか？相手を見た目で判断するのは、死亡フラグと相場が決まってるでしょうに。相手の数は４人…早々にケリを付けましょうか。

まずは、軽口を叩きながら近寄って来た男に触れて、能力を使用。

相手を逆さまに転移させて転ばる。

状況を理解できずに混乱している相手を他所に、畳み掛ける。自分を転移させて、二人目の男の頭上に転移、そのままドロップキックをかます。

さらに、太股に忍ばせてある鉄矢を転移させて３人目をアスファルトの壁に縫い付ける。もちろん狙ったのは、男の服やズボンのみである。

「これで、残ったのは貴方一人ですわ。さっさと降参した方が身のためですのよ？」

「っ…うるせぇ！！少しでも動いてみろ！！コイツをぶっ殺してやる！！」

「あぐっ！？」

そう言って残った男は、隠し持っていたナイフを掴んでいた学生の首に押し当てた。

「人質と言うわけですの？なんとも格好の悪いことですわね。そんな卑怯な手を使った所で、逃げ切れる物ではありませんのよ？」

「黙れよっ！！能力をひけらかして、蹂躙するお前等能力者の方がよっぽど卑怯だろうーが！」

「…何かと思えば、負け犬の遠吠えですのね。能力を手に入れた者達だって、それなりの苦労があってこその結果ですのよ」

「っ…」

「分かったらこんな馬鹿な真似は止めてさっさとお縄についてくださいまし」

「今更後に引けるかよ…それとも、コイツごと俺を倒すかぁ？善良な一般市民様を巻き込んでまで職務を全うされますか、風紀委員様(ジャッジメント)よぉ～！！」

「ひぃ！？…た…助けて！！」

「…っ」

「へっ…そうだよなぁ～、そんなこと出来る訳ねえよなぁ～！」

「ですが、貴方もそのまま人質を連れて逃げ回ることは不可能でしょうに」

「だからここで提案だよ。どうだ？ここは能力無しで決着を付けねえか？」

「…一応、その方法を聞きましょうか」

「簡単だよ、決闘で勝負をつける…これなら才能云々でケリが着く可能性は少ねぇしな。お前が勝ったら、コイツを開放して俺は大人しく捕まってやるよ。その代わり俺が勝ったら…そうだな、てめぇ

に俺達の奴隷にでもなってもらおうか」

「…いいでしょう、その勝負…乗りましたわ」

「ケケケ…後悔すんなよ…」

「決闘（デュエル）！！」

「決闘（デュエル）！！」

達也サイド

「やれやれ…なにやってんだか…俺」

結局俺は、さっきの不良達の後を追うことにした。…したのだが、目下奴等を見失ってしまっている。

「確かこっちの方に向かってたと思ったんだけど…」

それに不良のことだ、人通りの多い場所では事は起こさないはずだ。やるなら路地裏辺りと相場が決まっている。

そんなこんなで近場の路地裏を探し回っていたのだが、何やら人の声が聞こえてきた。恐らくビンゴだろう。

さっそく俺は、声のする方へ歩いていった。

とりあえず、不良に絡まれるのはノーサンキューだからな。まずは状況を確認…っと。

そんな感じで、隠れて様子を見ている俺だが、どうやらさっきの不

良で間違いないようだ。横にはさっき絡まれていた学生が縛られて拘束されている。
そして、そいつに相対してるのは…黒子ちゃん！？
どうやら二人は決闘しているようだけど…なにがあったんだ？よくよく周りを観察してみれば、さっき不良の取り巻きをしてた奴が、その辺に転がってたり、壁に縫い付けられていたりしている。
まぁ恐らく、あいつ等をのしたのは黒子ちゃんだろうけど…だとしたら、残ったアイツがこのままじゃ勝てないと踏んで、あの学生を人質に取りこの決闘を挑んだってとこかな。

「ケケケ…どうしたよ風紀委員（ジャッジメント）さんよぉ～手も足も出てねえぜ！」

「…まだ勝負はこれからですわっ！」

現状

不良　　ＬＰ８０００　　手札３枚
フィールド上　　エアトス　２体　　伏せカード２枚
　永続魔法　次元の裂け目

白井黒子　　ＬＰ３０００　　手札３枚
フィールド上　　伏せモンスター　１体　　伏せカード１枚

相手は次元エアトスか…こりゃ黒子ちゃんのライトロードには相性最悪だな。次元の裂け目が出ている限り、ライトロードの墓地肥やし効果も使いづらい。

「俺のターン…ドロー！！俺は手札から、神獣王バルバロスを召喚！更に永続罠カード「スキルドレイン」を発動だ！」

「私も永続罠カード「王宮のお触れ」を発動ですわ！スキルドレインの効果を無効ですの！」

不良　　ＬＰ８０００　↓　７０００

「ちっ…じゃあそのまま攻撃だ！バトルフェイズ、神獣王バルバロスで伏せカードに攻撃！」

「伏せモンスターリバースですのっ！モンスターはライトロード・ハンター　ライコウ…破壊されますが、効果を発動！」

「させねぇよ、速攻魔法カード「禁じられた聖杯」を発動！ライトロード・ハンター　ライコウの効果を無効化するぜ」

《禁じられた聖杯／Ｆｏｒｂｉｄｄｅｎ　Ｃｈａｌｉｃｅ》
速攻魔法
フィールド上に表側表示で存在するモンスター１体を選択して発動する。
エンドフェイズ時まで、選択したモンスターの攻撃力は４００ポイントアップし、効果は無効化される。

「なっ・・・！？」

「ヒャハハハハ！！このままバトル続行だ…ガーディアン・エアトス２体の攻撃が通れば…てめぇのＬＰは０だなぁ～…何か対策はあるのか～？」

「…っ」

「ガーディアン・エアトス２体で、てめぇにダイレクトアタック！

！」

白井黒子　　ＬＰ３０００　→　０

「私の…負けですわ」

「なっ…ふざけんなよお前！！お前が負けちまったら俺はどうなるんだよ！？」

「くっくっく…最初はどうなることかと思ったが、いい奴隷も手に入ったし、やっぱ人生よくできてんだなぁ～」

「っ…私のことは好きにして頂いて結構ですわ。その代わり、その人は解放してくださいまし」

「あ？馬鹿かてめぇは…大切な人質を手放すわけないだろーが！それに奴隷の分際でご主人様に意見してんじゃねーよ！！」

「うぐっ…」

「さ～て…とりあえずは奴隷に主従関係って奴を教えてやんねえとな…精々可愛がってやるぜ」

「お～い兄ちゃん。その辺にしといてくれねえかな？」

これ以上は流石に見てらんねえ。気づいたら俺は、その場に飛び出していた。

「関口…さん？なんでこんな所に」

「？なんだてめぇ…」

「その子の身内だよ。俺の身内に手は出させねえ」

「はっ…だったらどうすんだ？」

「簡単な話さ…さっきお前決闘してたよな？…なら俺とも戦え」

「ふっ…てめぇが俺に勝ったら、このガキを返せってことかぁ～？」

「ついでにそこの学生もな」

「じゃあ、俺が勝ったらてめぇはどうしてくれるんだ？」

「その時はどうにでもするがいいさ。有り金巻き上げるでも、サンドバックにするでも…な」

「待ってくださいな！関口さん、そんな安請け合いしてもし負けたら…」

「心配ねえよ、俺は負けないさ」

そう言って俺は、黒子ちゃんに微笑みかけた。まっこんな奴に負ける気なんて毛頭ねえのは真実だしな。

「いい度胸じゃねぇか…いいぜその勝負受けた！」

「じゃあ行くか…」

「決闘（デュエル）！！」

「決闘（デュエル）！！」

第四十一話　ゆにこん！

関口達也　（ゆにこん！デッキ）　ＶＳ　そこいらの不良　（次元エアトスデッキ）

「じゃあ先攻後攻はコイントスで決めようか…裏と表どっちがいい？」

「裏だ！」

「ＯＫ…結果は表、俺の先攻だな」

「チッ…」

「じゃあいくぜ…俺のターン、ドロー！！」

相手は次元か…俺の手持ちのデッキはドイツもコイツも除外に結構弱いんだよなぁ～。無論、このデッキとて例外ではない。ただ、他のデッキに比べて対処が少しし易い程度である。
初手はまぁそこそこってとこか…これなら次のターンに次元の裂け目を張られても問題無い。１ターン目は待ちになるが、次のターンでこの不良君にこのデッキの恐ろしさを教えることが出来るだろう。

「俺は、モンスターを1体セット。更に、伏せカードを2枚セットしてターンエンドだ！」

「フン…そんな伏せ、俺のデッキには関係ないんだよぉ！！俺のターン…ドロー！！俺は、手札から永続魔法カード「次元の裂け目」を発動！！」

《次元の裂け目／Ｄｉｍｅｎｓｉｏｎａｌ　Ｆｉｓｓｕｒｅ》
永続魔法
墓地へ送られるモンスターは墓地へは行かずゲームから除外される。

「更に、手札からガーディアン・エアトスを特殊召喚！！…どうだ？初手からこんな上級モンスターを出されたら手も足もでねえだろ？」

《ガーディアン・エアトス／Ｇｕａｒｄｉａｎ　Ｅａｔｏｓ》
効果モンスター
星８／風属性／天使族／攻２５００／守２０００
自分の墓地にモンスターカードが存在しない場合、
このカードは手札から特殊召喚する事ができる。
このカードに装備された装備魔法カード１枚を墓地へ送る事で、
相手の墓地に存在するモンスターを３枚まで選択し、ゲームから除外する。
この効果でゲームから除外したモンスター１体につき、
エンドフェイズ時までこのカードの攻撃力は５００ポイントアップする。

「はっ…たかだか攻撃力２５００のモンスターを出したぐらいで何を威張ってるんだ？今の環境じゃ、昔ほどじゃないが…その程度のモンスターワンチャンで死ぬぜ？」

ワンチャン初手でシンクロモンスター５体出されるとかよりはよっぽどこの状況の方がマシだしな。

「てめぇ…」

「それより、さっさと攻撃したらどうだ?まっ…伏せが怖いんなら逃げてもいいんだぜ?」

「…ならお望みどおり攻撃してやるよ!!バトルフェイズ、ガーディアン・エアトスで伏せモンスターに攻撃!!」

「残念♪伏せモンスターリバース…マイン・モールだ。このカードは1ターンに1度だけ戦闘では破壊されないぜ」

《マイン・モール／Ｍｉｎｅ　Ｍｏｌｅ》
効果モンスター
星3／地属性／獣族／攻１０００／守１２００
このカードは1ターンに1度だけ戦闘では破壊されない。
このカードが獣族モンスターのシンクロ召喚の素材として墓地へ送られた場合、
自分のデッキからカードを1枚ドローする。
このカードが相手のカードの効果によって
フィールド上から離れた場合、ゲームから除外される。

「っ…めんどくせぇ…。俺はカードを2枚セットしてターンエンドだ!」

「じゃあエンドフェイズ時に俺は罠カード「砂塵の大竜巻」を発動する。次元の裂け目を破壊して、更にカードを1枚セットするぜ」

「!…次元の裂け目が」

「これで、邪魔なカードは無くなったな」

悪いけど、そのカードがあると俺のデッキには致命的なんでね。
なんとしても破壊させてもらう。

現状

関口達也　　ＬＰ８０００　　手札２枚
フィールド上　　マインモール　（守備）１体　　伏せカード２枚

不良　　ＬＰ８０００　　手札２枚
フィールド上　　エアトス　１体　　伏せカード２枚

「俺のターン…ドロー！」

さて…準備は整った。アイツの手札は残り２枚…既に封殺範囲内だ。
ここからは油断も慢心も無く、ただ相手の行動を封じ続けよう。

「俺は手札から魔轟神獣チャワを召喚！更に、マイン・モールとチューニングだ。シンクロ召喚…魔轟神獣ユニコール！！」

「ヒャハハハハ！！させねえよ、罠カード「奈落の落とし穴」発動！！どんなモンスターか知らねえが、除去れば問題ねえ！」

「くっくっく…」

「なっ…なんだよ!?さっさとそいつを除外しやがれ!!」

「いやいや…焦るなよ。今のお前の手札は2枚だよな?俺の手札も2枚…同じ数だ。これにより、ユニコールの永続効果が発動する。相手が発動した魔法・罠・効果モンスターの効果は無効化され破壊されるんだよ」

《魔轟神獣ユニコール／Ｔｈｅ　Ｆａｂｌｅｄ　Ｕｎｉｃｏｒｅ》
シンクロ・効果モンスター
星４／光属性／獣族／攻２３００／守１０００
「魔轟神」と名のついたチューナー＋チューナー以外のモンスター
1体以上
自分の手札の枚数と相手の手札の枚数が同じ場合、
相手が発動した魔法・罠・効果モンスターの効果を無効にし破壊する。

「そして、マイン・モールの効果で俺はカードを1枚ドローする。良かったな、これで俺の手札がお前の手札と枚数が同じじゃなくなったため、ユニコールの永続効果は消える…まぁ、カードを伏せるなりなんなりして手札調整すれば問題ないがな」

「ぐっ…（畜生…なんて効果だ。だが、俺のガーディアン・エアトスの方が攻撃力は上!相手はまだ動けないはず）」

「さて…バトルフェイズだ…俺はこのまま魔轟神獣ユニコールでガーディアン・エアトスに攻撃!」

「!?（攻撃してきただと…まさか、アイツの属性は光……!オネストを使うつもりか!?だが、今はアイツの手札と俺の手札の数が

違う…こっちも罠を使えるってことじゃねーか）…俺は罠カード「次元幽閉」を発動！」

「掛かったな…罠カード「サンダー・ブレイク」を発動！手札から魔轟神獣ガナシアを墓地に送り、ガーディアン・エアトスを破壊！！そして、手札の枚数がお前と同じになったことにより、ユニコールの効果でお前の次元幽閉の効果は無効化され破壊される！」

《サンダー・ブレイク／Ｒａｉｇｅｋｉ　Ｂｒｅａｋ》
通常罠
手札を１枚捨て、フィールド上に存在するカード１枚を選択して発動する。
選択したカードを破壊する。

「なんだと！？」

「更に、魔轟神獣ガナシアの効果発動。手札から墓地へ捨てられた時、攻撃力を２００ポイントアップして俺のフィールド上に特殊召喚される」

《魔轟神獣ガナシア／Ｔｈｅ　Ｆａｂｌｅｄ　Ｇａｎａｓｈｉａ》
果モンスター
星３／光属性／獣族／攻１６００／守１０００
このカードが手札から墓地へ捨てられた時、
このカードを自分フィールド上に特殊召喚する。
この効果で特殊召喚したこのカードの攻撃力は２００ポイントアップし、
フィールド上から離れた場合ゲームから除外される。

「さあ、バトル続行だ…魔轟神獣ユニコールと魔轟神獣ガナシアで

お前にダイレクトアタック！」

不良　　ＬＰ８０００　→　３９００

「てめぇ……」

「どうした？このままじゃ良いとこ無しで終わっちまうぜ？俺はこのままターンエンドだ」

「……俺のターン、ドロー！俺はカードを1枚セットして、神獣王バルバロスを召喚！」

ここでバルバロスか…そして、手札を伏せたことで手札を減らして俺に手札を合わせにくくさせたってとこか？だとしたら、あの最後の手札……成る程ね。

「俺はこのままバトルフェイズ！神獣王バルバロスで魔轟神獣ユニコールに攻撃！！（へっ…俺の最後の手札は禁じられた聖杯！これでバルバロスの攻撃力は３４００まで跳ね上がる。手札もあの野朗とは2枚差になるし、これであのモンスターを倒せば、まだいける）」

「…俺は罠カード「砂塵の大竜巻」を発動！そしてそれにチェーンして手札からＤ・Ｄ・クロウを墓地に送って効果を発動！Ｄ・Ｄ・クロウの効果でお前の墓地にある次元幽閉を除外し、砂塵の大竜巻の効果でお前のその伏せたカードを破壊して、手札からカードを一枚伏せる」

《Ｄ．Ｄ．クロウ／Ｄ．Ｄ．　Ｃｒｏｗ》

効果モンスター
星１／闇属性／鳥獣族／攻　１００／守　１００
このカードを手札から墓地へ捨てて発動する。
相手の墓地に存在するカード１枚を選択し、ゲームから除外する。
この効果は相手ターンでも発動する事ができる。

「…俺の伏せカードは、マクロコスモスだ」

「そして、これで俺の手札は０枚…さぁ攻撃を続けな、その手札のカードを使うとしても、そうすればダメステだろうがなんだろうが関係なしに効果を無効化させてもらうがな」

「……俺の負けだ」

不良　サレンダー

関口達也　（ゆにこん！デッキ）　ＶＳ　そこいらの不良　（次元エアトスデッキ）

勝者　関口達也

第四十二話　主人公のデッキがあまりにも主人公らしくない件について

「うっし俺の勝ちだ。じゃあ約束どおり、黒子ちゃんとその学生を解放してもらうぜ」

「チッ…」

不良は、しぶしぶと二人を解放した。

ふむ、もうちょっと揉めるかと思ったけど意外に素直だな。とりあえず、黒子ちゃんに声掛けとくか。

「はろ～、黒子ちゃん。無事かい？」

「…一応、お礼は言っておきますの。ありがとうございました」

「ん、気にすんなって。こっちも中々楽しませてもらったしな。さてっと…とりあえずお前……そこいらで転がってる仲間連れてさっさといきなよ」

「…！」

「なっ…！？何を勝手な！？」

「まぁまぁ…別に誰か死んだ訳でもないし、これぐらいの事なら大目に見とこうぜ。それにアイツラも少しは懲りただろうさ、リアルバトルでも決闘でもボコボコにやられちまったんだからな」

そうして不良達を一瞥する。気絶していた仲間達も起きてきたようだが、戦意は特に感じられない。放って置いても大丈夫そうだ。

「……」

しかし、黒子ちゃんは未だ納得してないご様子だ。やれやれ…仕事熱心なのは結構だが、もうちょっと融通が利くようになったほうがいいと思うぜ

「あ…あの～」

「ん…？」

気づくと、人質になっていた学生が声を掛けてきた。そういやコイツのことすっかり忘れてたな。

「ああ、君か。とりあえずお前もさっさと帰った方がいいぜ、今度から絡まれないように気をつけなよ」

「はぁ…では、ありがとございました」

そう言って学生君は去っていった。

「さて、ほら俺達も行こうぜ黒子ちゃん。こんなとこに居たって仕方ないしな」

「で…ですがっ！」

「まぁまぁ…」

そういって俺は、黒子ちゃんを引っ張りながら路地裏を後にした。

「…はぁ…」

「どした黒子ちゃん？落ち込んでんのか」

「いえ…そういう訳では…ですが、あのような輩に負けてしまった自分が情けないのですわ」

「そう気にすることでも無いと思うぜ。次元とライロじゃ相性が悪すぎる、昔ライロが全盛期だった頃も、そのライロをメタれるデッキとして酒天ネクロが流行ったぐらいだからな」

まぁ俺の場合はその時、意気揚々とアマリリスバーンを組んでライロ食べてたけど。

「そんなことは言い訳になりませんの。私はお姉様の露払いとしてももっと強くなりませんと」

負けたくない…か、いいねぇ～そういう考えは。実に俺寄りな考え方だ。

そして、そういう考え方の奴には出来るだけ手を貸したくなっちまうんだよなぁ～。

「ふむ…おーけー分かった。黒子ちゃんこの後時間空いてるか？」

「？…一応まだ仕事中ですので、支部に帰った後でしたら大丈夫ですけど」

「そうか…じゃあ待ってるから、後で家に来てくれるか？」

「はぁ…分かりました」

そして、その場で黒子ちゃんとは一旦別れた。
さて、ライトロード改造案…どうやっても勝ちたいんなら別デッキを勧めるのも手だけど、ライロはやりようによっては今の環境でもなんとか頑張れる…今はこのテーマを底上げする方向で…。

そして、あれから1時間ほど経った。こっちはマンションに戻ってきて、すでに準備は万端。何時でもこい！
そうしていると、インターフォンが鳴った。どうやら来たらしいね。
俺はすぐ玄関へ行きお客を出迎えた。

「お邪魔しますわ」

「うん、いらっしゃい黒子ちゃん。待ってたぜ」

とりあえず、リビングへと通す。

「それで、何の用ですの？」

「ん？決まってるだろ、黒子ちゃんのデッキをもっと強くするために、色々アイデア出し合おうぜ」

「…そのお気持ちは嬉しいですが、私は別ｎ」

「はいはい…まぁ騙されたと思ってデッキを見せてみなよ。損はさせないと思うぜ？」

「…」

そうして黒子ちゃんは少し考え込んだ後、デッキを見せてくれた。
なるほどね…構成としては悪くない…がやはりライトロードの色が強すぎるな。少しその辺を削って他のカードを入れればもっと強くなるだろう。

「とりあえず、ジェインとガロス…そしてケルビムを1枚ずつにして、その枠に他のカードを積んで見るとか。候補はカードガンナーとかD・D・クロウとかな」

「なるほど…ですが、それだとジャッジメント・ドラグーンを出しにくくなるのではないのですか？」

「カードガンナーを積めば墓地肥やしも加速するからそうでもないさ。それに、今はルール改定でジャッジメントが少し使いにくくなっちまったからな。他の手でも戦える構成にしといた方が良い。ダムドとかカオス・ソーサラーも十分採用圏内だな。死者転生も入ってるし、墓地に落ちても回収手段があるからな。後は…やっぱ光の召集は外すべきだと思う。王宮のお触れも入ってるし、この案を受けるなら、光以外のカードがかなり増えちまうからな」

「…確かに、一理ありますわね」

「まっ…参考にするかどうかは黒子ちゃんに任せるよ。それと、別案としてライロ以外のテーマを混ぜるっていう手もある。結構結果を残してる奴で言えば、デブリとかだな。戦ってみて強いと思った奴ならライロBFなんかも結構強かったぜ」

「いえ…私はライトロードで行きたいので、それは…」

「…そっか、了解だ」

俺に出せる案はコレ位かな、あとは黒子ちゃん次第だ。

「さて、俺は夕食の準備でもするかな。黒子ちゃんも夕食食べていくだろ？」

「…お願いしますわ」

「あいよ～、んじゃ用意してくるから、その間ゆっくりしててよ」

そういって俺はリビングを後にして、夕食の準備を始めた。

その後、黒子ちゃんは何やら悩みながらもデッキの改良を進めていたらしい。丁度一息ついたらしい所を見計らって、夕食を運び食事をすることとした。

「しかまぁ、黒子ちゃんと二人でご飯食べるのって、何だかんだで初めてじゃないか？」

「…言われてみれば、そうですわね」

「黒子ちゃんが来る時は、大抵一緒に御坂がいるからな～。でも、たまにはこういうのもいいかもな」

「……」

あまり会話は続かなかったけど、これはこれで良い時間だったと思う。

その後、黒子ちゃんは寮に戻り、俺も早々に寝ることとした。

「そういや、あれから結構色々な大会に出てみたが…少しは向こうさんにアピールできてんのかな？」

まっ…深く考えても仕方ないか。なる様にきっとなるさ…そうして俺は眠りについた。

第四十三話　番外　魔法使いになってみよう！

…あれ？…俺確か布団で寝てたはずなんだけど……。ふと時計を見ると、既に正午近く…どういうこった？余りにも暑すぎて白昼夢でも見ていたのだろうか？確かに最近むちゃくちゃ暑いけどさ。

「やっぱクーラーを設置するべきだな…今日にでも買おう…」

俺がそう決心していると、携帯が鳴った。一体誰からだろう？とりあえず出てみることにした。

「はい…もしもｓ」

「あぁ～…そのショボくれた声は間違いなく達也君ですねぇ～。元気してますか～？」

「…タケか…何の用だ？」

「駄目ですよ～、ここではハセヲって呼んでくれる様頼んだでしょう？それで用なんですけど、私今学園都市に遊びに来てるんですよ。だから、少し会いませんか？」

…は？コイツ今おかしいこと言わなかったか。

ここ学園都市は、かなりセキュリティの厳しい場所だ。一般人が旅行感覚でポンとこれるような場所じゃないはずなんだが。俺だって、御坂の力添えが無かったら絶対ここに住めてないし。

「会うのは別に構わねぇけどさ…お前、どうやって学園都市に来たんだよ？」

「どうやってって…正面から堂々と来ましたが？」

「お前、こっちの世界の戸籍とか無いのによくセキリュリティ通過できたな」

「ははは…何を言ってるんですか達也君…そんな物で私を止められるわけ無いでしょう」

「…はっ？」

「？…おかしいですか？？」

うん、凄くおかしい。主にコイツの頭がだと思うけど。

「ともかく、折角なんですから会いましょうよ達也君」

「…分かったよ、んで場所は何処だ？何ならコッチのマンションに来るか？」

「いえいえ、それは色々と不味いので、私の指定した場所に来てください。詳しくはメールで送りますので」

「あいよ～、んじゃまた後で」

「はい、お待ちしてます」

数分後、待ち合わせ場所についてのメールが来た。とりあえず向かうとしようか。

そして、待ち合わせの場所に到着。アイツが指定して来た場所は、なんの変哲も無い公園だった。
それにしても暑い…どうせなら喫茶店辺りを待ち合わせ場所にしてくれればいいのに…てかアイツまだ居ないし。

「いや～…すいません。待たせちゃいましたか？」

数分後、ハセヲ君がヘラヘラしながらやってきた。電話越しにも感じたが、なにやら何時もよりテンションが高いように感じる。

「…別にいいけどよ。んじゃどっかのカードショップにでも行くか？」

「いえ、その前に達也君に見せたいものがあるんですよ～」

「見せたいもの？…何だよ、さっさとみｓ」

「クンッ！！」

それは、一瞬の出来事だった。
だけど俺には、何があったのか理解でなかった。理解できたのは俺の身体が地面に叩きつけられた後、まるで隕石が落ちたかのように陥没した周りと、至近距離で爆弾の爆発に巻き込まれたようにボロボロな俺の身体…そして目の前で何事も無かったかのように立っているハセヲ。そして一言…

「いかん、火力の調整を誤った」

ナッパ……こい…ドラ…てかその前に…

「どうしてこうなった!?」

……気づけば俺のは布団の上、今の時間はＡＭ７：００ほど。なんだ…夢かよ……嫌な夢だったな。
とりあえず起き上がり、自分の身体に異変が無いか確認する。

「大分汗はかいてるみたいだが、特に以上無し…何処かがコゲてる訳でもない」

アレは夢…だったんだよな?随分リアルな夢だったが…いや、内容は確かにハチャメチャだったか。
コッチに来てからアニメやラノベのキャラと友達になったり、決闘者として生計を立てたりと不思議なことのオンパレードだったからな…多分疲れてたんだろう。

「うむ…そうに決まってる!よし、気分を変えて、今日も一日がんばｒ…ヒィ!?」

突然鳴り始めた携帯。つい反射的に悲鳴を漏らす俺。
もしかして、さっきのは正夢って奴だったのか!?

「…どうしよう…一応出た方がいいよな?」

恐る恐る携帯を確認する…と、そこに写っていた名前は意外な人物からだった。

「それにしても、随分いきなりでしたね～。電話貰った時はビックリしました」

「まぁ俺も電話を受けたのは今朝だったしな」

現在の状況整理、俺は現在佐天ちゃんと一緒に電車に乗って、海鳴市を目指して移動中だ。
理由は、今朝あった一本の連絡が原因である。

「アキラ…？なんだよ脅かしやがって…とりあえず出るか…もしもし？」

「あ、達也さんですか？朝早くからすみません！」

「問題ねえよ、もう起きてたしな。それで何の用だ？」

「それがですね～、前話した魔力素質の検査準備整ったらしいんですよ。で、出来れば今日にでもこっちに来て欲しいんですけど」

「随分急な話だな…」

「すみません…けど、機材の予約とかの都合上仕方なかったらしくて…」

ふむ、まぁ向こうさんにも色々と都合があるんだろうし、無料でやってもらえる立場からしたら何もいえないか。

「まぁとりあえず了解した。佐天ちゃんにも連絡取って見るから、

行ける様なら後でまた連絡する」

「お願いしますね～では！」

魔法か…そういえばそんな話もあったっけ…俺はそんなに乗り気じゃないけど……待てよ？魔法か…。

もし、さっきの夢が正夢だったとしたら…近日中に俺は黒コゲにされるってことだ。元の世界じゃこんな発想も無かっただろうが、こっちの世界には魔法だってあるんだ…アレが正夢じゃないとは言い切れない。

「もしそうだとしたら…魔法の力を手に入れておけばある程度対策を打てるか？」

…アリだな。

そんな訳で、佐天ちゃんを誘った所問題ないとのことだったので現在に至るってとこだ。

「でも、関口さんあんまり乗り気じゃなかったのに、よく来る気になりましたねー？」

「まっ…佐天ちゃん一人じゃ退屈だろうしね…それに……」

「それに？」

「いや…なんでもない」

ある意味俺の命が掛かってるからな。行かないわけにはゆくまいて。

そして、程なくして海鳴市に到着…今回は駅前に既にアキラとフェイトちゃんが迎えに来てくれており、そのままアースラに転送してもらう手筈なのだが…。

「やぁ、達也君随分遅かったですねぇ～…待ちくたびれました」

「なんでこうなった!?」

第四十四話　番外　魔法使いになってみよう！　その2

そこには、アキラとフェイトちゃんの他に、俺が魔法の力を手に入れようと決心した原因（？）であるハセヲ君こと竹内康弘がいた。てか、何でお前がここにいる！？色んな世界を見て回るんじゃなかったのか？？

「おやおや、その様子ではなんで私がここにいるのかわからないと言った所ですか達也君？」

「ああ、まさにその通りだ。何でお前がここに居る？」

「そうですねぇ～…簡単に言うと面白そうだったからでしょうか？忘れてもらっては困りますよ「私はどこにでもいるし、どこにもいません」」

…うん、そんな設定がお前にあったなんて今始めて聞いたね。てか間違いねえ…コイツはここで［ピーー］すべきだな。いろんな意味で。

「あはは…すみません達也さん。達也さんがこっちに来るようならメールしろって、たk…ハセヲさんに言われてたんで、俺が知らせたんです」

「…まぁそんなことだろうと思ったけどな…もしかして、コイツも魔力適正を調べるのか？」

「面白そうですし、私は受けるつもりですが何か？」

「マジかよ……」

「あ～…えっと、関口さん…この人は…??」

「ああ、そういや話してなかったな。こいつはアキラと同じ向こうの世界で俺の知り合いだったたｋ」

俺が説明する間も無く、ハセヲは佐天ちゃんの下に歩み寄り自己紹介をしていた。

「こんにちは、私は達也君の友達でハセヲといいます。今後ともよろしくお願いしますね」

「あ…はい、私は佐天涙子って言います。こちらこそよろしくお願いしますね～」

「やれやれ…さて、とりあえずアイツの所為で挨拶が遅れちまったな。おっすアキラ…それにフェイトちゃん。元気してたか?」

「ほんと、今更ですね～」

「元気してたよ。タツヤも元気そうで何よりだ」

「えへへ～…フェイトちゃ～ん会いたかったよ!」

「っ!!ルイコ…苦しいよ…」

何時ものように、フェイトちゃんに抱きつく佐天ちゃん…この流れもなんか慣れて来たな。

「さて達也君達も来た事ですし、早速時空航行艦とやらに連れて行ってくださいよ。私はまだ見たこと無いですから、結構楽しみなんですよね～」

「そういやお前、魔法についてどれ位知ってるんだ？」

「そうですね～…多分達也君とそう変わらないと思いますよ。私もアキラからざっと聞いただけですから」

「ふ～ん…まぁ他に接点ねえもんな。当然か…」

とりあえず祈っとくか。コイツに素質が無いことを…。

そうして俺達は、時空航行艦アースラへと転送され魔法適正を検査することとなった。

検査自体は簡単な物で、医務室みたいな場所で身体検査の延長戦上みたいなことの繰り返しだったから楽ではあったのだが、俺と佐天ちゃんとハセヲ…そしてついでにアキラも検査することとなり、そこそこ時間が掛かった。

「ふぅ…とりあえず終わったな」

「ですね～…少し緊張しました」

「でも楽しみですねぇ～…私達にどんな能力があるのか」

「ははっ…素質が無いって可能性の方が大きいのわかってます？」

そしてその検査も終わり、俺達はアースラ内の食堂で休憩してるわ

けだ。
するとそこに、クロノとフェイトちゃんが飲み物を持ってきてくれた。

「皆さんお疲れ様です。今取ったデータを元に、集計を開始してますから、数十分で結果が出ると思いますよ」

「詳しい結果はまだだけど…とりあえず、皆最低限の魔力資質とリンカーコアは確認されたみたいだよ」

「ってことは…一応俺達全員魔法を使えるようになるってことか」

「ほんと!?やったぁ!!」

「俺に魔法…」

「面白くなってきましたねぇ～」

早くも俺の願いは打ち砕かれたがな。

「ただ、素質の大小あれどある程度の訓練を受けてもらわなければ魔法を使うことは出来ないと思います。まぁ他に必要なデバイス等は希望があれば僕達で何とかしますが」

訓練ねぇ～…あんまりめんどくさいのはノーサンキューなんだが…。

そして、数十分後。データの集計が終わったらしく、俺達はさっきの医務室に通された。

「は～い、皆揃ってるね？私はエイミィ・リミエッタっていいます。とりあえずデータの集計が終わったから一人ずつ発表していくね～」

一同「はーい」

「えっと…まずは佐天ちゃん。う～ん…佐天ちゃんは結構平均的な成績かな総魔力量はＡで結構いい感じだね。空間制御適正はＣ－で少し低めだけど…他の資質もＢとＣが多いね…総合Ｂランク。そして魔力変換資質が風の適正が出てるね」

「はぁ…その魔力変換資質って何なんですか？」

「そうだね～…魔法で例えば火なんかを起こそうとすると、そのために変換プロセスを踏まなきゃいけないんだけど、この魔力変換資質がある人は、そのプロセスを無視して結果を出せるんだ」

「へぇ～…じゃあ私は、風を出すことが得意ってことかな？」

「ちょっと違うけど、大体そんな考え方でいいと思うよ。次にアキラ君は…あちゃ～…あんまり結果が芳しくないね…総魔力量がＣ－で圧縮効率Ｅ…他の項目も大体ＣからＥの間ぐらいで…あ、でも空間制御適正はＡだね。総合Ｃランク」

「ははは…まぁなんとなく予想はしてましたけど…はぁ」

「まぁまぁ、そう落ち込まないで！これからの鍛え方次第でカバーできるかもよ？総魔力量の少なさも、今ではカートリッジシステムとかである程度補えるしね」

「…がんばります」

「さてと…次にハセヲ君だけど…これは凄いね。総魔力量ＡＡＡ…なのはちゃん達といい勝負だよ！」

「ほぅ…」

「飛行適正はＣで低めだけど、空間制御適正はＡＡ＋圧縮効率Ｓ…それに魔力制御能力がＡＡＡ…他の資質も大体ＡからＢだね…総合ＡＡランク。それに未だに解析データが複雑でよく分からないけど…何らかのレアスキル持ちの可能性大…うん、ちょっと訓練するだけで君は凄い魔導師になれるよ」

「それは嬉しいですねぇ～…出来るなら、今すぐにでも訓練を始めたい所です」

「う～ん…訓練はとりあえずデバイス等を用意してからの方がいいかな…けど、この資質を見るに、君はベルカ式の魔法が向いてるかも」

「ほぅ…聞いた話によれば、広域戦より、単体戦を得意とした魔法体系でしたか？」

「そう、さっそく本部に問い合わせて、君向きのベルカ式アームドデバイスが無いか調べてあげるよ。もし合うのが無くても、知り合いの技師に頼んで専用デバイスを作るってことも出来るし」

「それは願ったり叶ったりですが…よろしいのですか？」

「ははは…もし、魔法をある程度体得したら私達の仕事をちょっち手伝ってもらうことになるかもしれないけどね～♪」

「なるほど…ギブ&テイクってことですね…いいでしょう」

「さて…最後に達也君のデータなんだけど…はっきりいってメチャクチャだね。いい意味でも悪い意味でも…とりあえず、総魔力量S十…皆の中でもダントツだね～…なのはちゃん達よりもすごいよ」

「！…マジか！？」

「空間制御適正もAAAで凄く高い…けど他がねぇ～…大体の項目がE以下…いいものでもBに行けばいいほう…かな」

「…それって…結局俺は才能あるのか？無いのか？？」

「う～ん…総合C－ランク。普通に見れば才能が無い方に分類されるかな…けど、一部の数値がかなり高いから、もしかしたら化ける可能性があるかも！…それに、達也君もハセヲ君と同じでレアスキル持ちの可能性があるよ」

「でもダントツで高いのは総魔力量だけですよねぇ～…言うなれば魔力タンク。おお、良かったじゃないですか達也君！精神〇マ〇ドで期〇を覚えれば、〇Pタンクとして需要大ですよ」

「てめぇ…殺す」

「まぁまぁ…落ち着いて！魔法の事でしたら僕がある程度教えますから、1ヶ月ぐらいみっちり訓練すれば大分変わってくるかもしれませんよ」

そう言って一触即発状態の俺達の間に割って入ってくるクロノ。

なお、佐天ちゃんは「じゃあ私はフェイトちゃんに教えてもらお～っと♪」
と言いつつフェイトちゃんに抱きついていた。

「まぁ、とりあえずは皆に合いそうなデバイスを探すことからかな。それと、これから頻繁に訓練するようなら、達也君達がいる学園都市にも転送ポートを作った方がいいね。アキラ君はなのはちゃんと一緒に暮らしてるから問題ないとして…問題はハセヲ君かな」

「ああ、それなら問題ありませんよ。私は当分海鳴市に滞在するつもりですから」

「そっか、じゃあ大丈夫だね。じゃあ学園都市の方の問題だけど…」

「場所がどこでもいいって言うなら、俺のマンションなら何とかなるかな。場所とかかなり取る様ならキツイけど」

「基本はこっちの機材等で行うから場所は取らないよ。座標データを入力すればおっけ～。こっちに来る時は、専用の通信デバイスを私とくからそれで連絡してくれれば何時でも転送するよ」

「おーらいだ、それでいこう」

そんなこんなで、魔法使いとしての第一歩を俺達は踏み出した。

第四十五話　番外　魔法使いになってみよう！　その3

あれから、一週間ほど過ぎた。この一週間、俺達はデバイスの到着が待ち遠しいのもありすでに訓練を開始していた。
大体は座学の部分が多いが、最近は簡単な魔力の流し方などの実践的な訓練も増えてきた。ちなみに、訓練の成績は
ハセヲ＞＞＞＞佐天ちゃん＞＞＞越えられない壁＞＞＞アキラ＞＞俺
と言った具合か。俺とアキラが如何なく才能の無さを発揮している形となっている。
そして今日…ついに俺達のデバイス候補が届く。

「よ～し、皆集まってるね！今日は、前から報告していた通り皆に合いそうなデバイスを用意してきたよ。感じとしては、ハセヲ君にはベルカ式用のアームドデバイス。佐天ちゃんはミッド式用のストレージデバイスまたはインテリジェントデバイスがオススメかな～。ただ、インテリジェントデバイスは扱いが難しいから、最初はストレージデバイスの方がオススメだね」

そんな感じで着々と説明を続けて行くエイミィさん。ちなみに俺とアキラの名前が出てこないのは、未だにどちらの魔法にも適正を示していないため、どちらの魔法が向いてるのかさっぱり分からないゆえである。

「まぁとりあえず、色々見繕って見ましょうか」

そう言って、並べてあるアームドデバイスを品定めするハセヲ。どうでもいいが、アームドデバイスってのは随分物騒な形をしてる奴

が多いな。

「おや…これは……」

ハセヲは数あるアームドデバイスから、チェーンのような形をした物を手に取る。待機状態なのか、随分と小さいが、先端の部分は蛇のような顔になっている。…ていうかアレだ…この形…どう見てもアイツのD技…。

「えっと…それはアームドデバイス「ウロボロス」だね。通常形態の形から、中距離戦に特化したデバイスみたいなんだけど、色々と謎が多いみたい…元々は古代ベルカの遺跡で発掘された物で、扱いきれる人が一人もいなかったから、一時期はロストロギア指定も受けてたんだけど、暴走する危険性も見なれなかった為今では管理局にデバイスとして登録されてるみたい…。相当扱いが難しいデバイスだから、あんまりオススメは出来ないよ」

「…面白いですね、コレにしましょう」

「ええ!?ハセヲ君、私の話ちゃんと聞いてた!?」

「ええ、ですが…コレは私と気が合いそうなので♪」

俺は嫌な予感しかしないがな!

「あ、ねえねえエイミイさん。このデバイスって何なんですか?」

今度は佐天ちゃんが目ぼしいデバイスを見つけたらしい、見た感じただのカードにしか見えないけど。

「えっと…それはストレージデバイス「疾風の杖バルムンク」だね。風系統の魔法の回路やシステムが充実してるから、確かに佐天ちゃんにはピッタリかも」

「へぇ〜…いいですね。私コレにします！」

二人ともトントン拍子に決まっていくな…逆に落ちこぼれの俺達は未だ決めかねてるわけだが。

「どれもピンと来る奴がねえな…」

「ですね〜…どうしましょう？」

「う〜ん…そうだねぇ〜…とりあえず今は、汎用性能のストレージデバイスを使って本格的な魔法の練習をしてみたら？専用デバイスは、ある程度魔法が使えるようになってからってことで」

その後、俺達二人はその案を受諾。本局魔導師の中で普及率の高いらしいストレージデバイスを受け取った。

ちなみに、後で知った話だが専用デバイスというのはかなりお高いらしい。佐天ちゃんのバルムンクも、現時点の管理局の技術と機能を注ぎ込んだ最新型であり普通の魔導師では絶対持てない様な代物とか…。

そんなもんポンポン渡してくれるなんて、どんだけお人よし何だか。

さて、そんなこんなでアースラ内部にある訓練場で本格的な訓練が始まったわけだが、既にハセヲ君は一人でエリート街道驀進中。接近系の魔法について興味があるらしく、フェイトちゃんに色々と聞いている。

そして残った俺達3人は、クロノ教官の監修の元、訓練を開始している。

「とりあえず、まずはデバイスのセットアップ…それとバリアジャケットの装着から始めましょうか。皆さんには、ある程度の魔力の発生のさせ方、流し方を教えてきましたが…今回はその持っているデバイスに魔力を流す感じでセットアップと唱えてください。それと、頭の中で、自分のバリアジャケットのイメージを。セットアップが成功すれば、デバイスが貴方達のイメージを元にバリアジャケットを生成してくれます」

「ふむふむ…分かりましたぁ！じゃあまずは私から行きますね！」

「うむ…俺達の中じゃ一番才能あるもんな」

「がんばってください佐天さん！」

「よ～し…行きます！バルムンク…セーットアップ！！」

その呪文と同時に、カードの形をしていたバルムンクが杖状に変化。更に佐天ちゃんの格好が、いつもの普段着からアニメチックな衣装にはや代わりする。

「え～っと…とりあえず成功ですね？」

「みたいだな…しかしその格好…」

「っ！？…い～じゃないですかっ！折角魔法使いになるんだったら、こういう格好じゃないと盛り上がりませんよ！！」

そんなもんかね～？

「まぁいいや、じゃあ次は俺がやってみるよ…え～っと、セットアップ！！」

……変化ナシ。コイツは一体どういうことだ！？

「う～ん…どうやらちゃんとデバイスに魔力が通ってないみたいですね。何度か練習してみましょう」

「…イエッサー」

その後、アキラも一度でセットアップとバリアジャケットの装着を終わらせ、残された俺は焦るばかりである。

「ちくしょう…なんで俺だけ成功しねえんだよ！？」

「落ち着いて、魔法を扱うのにはイメージが大切なんです」

「そうはいってもな…イメージ…イメージ…よし！セットアップ！！！」

何度目かの挑戦。その瞬間、カード状態だったデバイスが変化を起こしライ○ル形態へ。そして俺の姿も変化し、顔の上半分にレッドアイザー、口元にパーフェクターを装着。ボディには赤を主体としたアーマー、そして全身を水色を主体としたスーツで包まれる。そして最後に、腰の部分にベルトが付き、ライ○ル化したデバイスが収められる。

「関口さん…これってセットアップじゃなくてセタｔ」

「真空地獄車！！」

アキラが何か言いそうになった所を口封じで車輪上に地面に頭を叩きつけた後空中高く放り投げて黙らせる。しかし身体が軽い…パワーが溢れてくる…これがマーキュ〇ーパワーという奴か。

「…ってええ！？関口さん、いきなりなんてことを！？アキラ君大丈夫！？」

あ、アキラが落ちてきた。結構高くまで飛んでたみたいだな。
その後、この状態はいくらなんでもマズいので何回かやり直し、普通のデバイス形態とバリアジャケットになりましたとさ。

第四十六話　番外　魔法使いになってみよう！　その４

「いってぇ…ホント何するんですか関口さん！」

「わりぃわりぃ…けど、バリアジャケットの強度ってやつはすげえな……普通の人間じゃあれを喰らったら絶対死んでるぜ」

「…ですね、おかげ様で打撲程度ですみました」

防護服とかと違って、重さも殆ど感じないし、これはかなり便利なもんだ。

「まぁ、皆さん成功したことですし、次の段階に進みましょうか」

「はーい、次の訓練はどんなのかな？」

「そうですね…じゃあ次は魔力弾の生成でも…」

そんなこんなで、俺達の訓練は進んでいった。しかし、ここまで自分に才能が無いとは思わなかったね。大抵の訓練は、佐天ちゃんなら1時間。アキラでも3時間ぐらい練習すれば物にするのだが、俺に関しては1日やり続けても上達しないときもある。

最初の頃は

「誰にだって得意不得意はありますからね、でも大切なのは一度覚えたことを忘れないことです。そうやって一つずつ覚えていけば、関口さんだって立派な魔導師になれると思いますよ」

などと言って励ましてくれてたクロノだったが、最近は俺に目を合

わせようとしない。
正直心が痛い。

「はぁ～…どうしたもんかな」

ちなみに、佐天ちゃんは初級の最後ぐらいの魔法である、飛行魔法を先ほど体得したらしい。アキラもこの様子じゃ今日中になんとかなりそうだな。
そしてハセヲは…

「ヒャーッハッハッハッハーッ！気持ちいーだろぉー！？」

「そんな…！？」

既に模擬戦でフェイトちゃんから勝ち星を拾えるほどの立派なアーク〇ミニー使いになりましたとさ。

「っと…おやおや、つい調子に乗ってしまいましたね…ですが私の勝ちです。大丈夫ですか、フェイトさん？」

「うん…けどすごいね。誰も使いこなせなかったデバイスって聞いてたけど、完全に使いこなしてるみたいだ」

「そうですか？コレでもまだ、これの力をすべて出し尽くしたわけではないのですが…」

って言うか、アイツのバリアジャケットの形…黒の帽子に黒のコート……色々とツッコまざるおえない。

「おや、達也君。君の方は、訓練順調ですか？」

「てめぇと違ってこっちとら才能がねぇんでな。昨日とそう変わってねえよ」

「ふむ…そうですか。私としては、早く達也君達とも模擬戦をしてみたいんですが…」

「とーぶん先になるだろうな…せめて、飛行魔法をマスターしないことには戦闘にならん」

「私にはそういった類の魔法は必要ないんですけどねぇ～」

「…言ってろ」

そんなこんな話していると、向こうが少し騒がしくなってきた。どうやらアキラが飛行魔法を成功させたらしい。
いよいよ持って置いてきぼり確定だな。

あれから更に2週間ほど経った。
佐天ちゃんはあれからメキメキ腕を上げていき、もう既に模擬戦もこなせる位の能力は持っているだろう。
と言うわけで、今日俺達の模擬戦が組まれる事になった。俺とアキラはまだその粋に達してるとは到底思えないのだが、佐天ちゃんのついでと言うことらしい。補足すると、相手はハセヲである。
ちなみに、俺は今日、やっと飛行魔法を使えるようになった。

「え～っと…今日はよろしくお願いします！」

「コチラこそ、後戦闘中は私…少しテンションが高くなりますが、

あんまり気にしないでくださいね」

「あはは…」

「二人とも、準備はいいですね？では、模擬戦…始め！」

「行くよ…バルムンク！障壁展開！！」

早速佐天ちゃんが動いたな。ある程度の高度を取り、周囲に風の障壁を展開させてからの中距離砲撃が、今の佐天ちゃんの基本戦術だ。しかもあの展開させた障壁は、普通の防御魔法とは違い、荒れ狂う風を凝縮した物のため、触れればかなりのダメージを負う。バリアブレイクなどで突破される可能性が低いのも強みだ。
対するハセヲだが、今の所は動く様子は無い。

「（ハセヲさん動く様子ないなぁ…なら、こっちからドンドン仕掛けちゃって大丈夫かな）よ～し、いっちゃえ！！」

佐天ちゃんは魔力弾を４つ形成…そしてそれらをハセヲに向かって放った。
それに対し、ハセヲは…

「ほぅ…中々速いですね…だが…甘え！！」

ハセヲは、自分のデバイス「ウロボロス」を操り、４つの魔力弾を瞬時に撃墜した。
見た目は鎖のような形状だが、魔力を帯びているためか、通常では考えられないような動きをする。

「うわっ！？…たった一撃で！？けど、そのデバイスでもこの障壁

は突破出来ませんよ」

「それはどうでしょう…佐天さん、貴女は中々魔導師として成長しているようですが、まだまだ経験が足りませんね。足元をごらんなさい」

「へ？…うわっ！？なにコレ」

佐天ちゃんの足元には緑色の魔法陣ようなものがあった。
多分、チェックだな。

「クッ…遊んでやんよ！…どうよ、癖になんだろぉー！？」

ハセヲが指を鳴らすと同時に、その魔方陣から無数のウロボロスが現れ、佐天ちゃんに絡みつく。

「へ…蛇！？…何これぇ～！？」

早くも半狂乱しかけてる佐天ちゃん。魔法の制御どころではなさそうだ。
まぁ、いきなり大量の蛇が絡み付いてきたら普通の女の子じゃ耐えられないよな。

「おっと…ギブアップするなら今ですよ？…これでも折れないようなら、私もそれなりの技をぶちこまなきゃいけなくなりますからねぇ～」

「うぅ…ギブアップですぅ～…」

ハ○マ　ＷＩＮ

俺の頭の中で、そんな単語が響いた。

「うわ～…ハセヲさん圧倒的じゃないですか？」

「そうだな…俺達が出て行ったら、きっと惜しげもなくアストラ○ヒートで一撃決められるぞ」

「…？それってどういう…」

「…そういやお前、カード以外はあんまりやってなかったな。スマン…今の発言は忘れてくれ」

「さて…次はお二人の内…どちらが相手してくれるんですか？」

「じゃ…じゃあ俺が…」

出て行こうとしたアキラを遮る。

「いや、俺が行こう…恐らく、今のアイツに多少なりとも一矢報いれるのは俺だろうからな」

「で…でも、関口さんは今日やっと飛行魔法を使えるようになったばかりじゃ…」

「まっ…みてろって」

そして、俺がハセヲと模擬戦をすることと相成った。

あいつの攻撃は大体分かった…なんとまぁ……。

「オリジナリティのないことで…一応言っとくが、俺にさっきみたいな不意打ちが効くとは思ってないよな？」

「ええ、勿論ですよ。それにするつもりもありません…今までの相手は、フェイトちゃんや佐天ちゃんと女の子でしたからね～…やっと本気でボコれる相手が出てきて嬉しいですよ」

「っ…言ってろ…じゃあ行くぜ！！」

―１０分後―

そこには、無残にボコられた俺の姿が！

「ですよね～…」

うん、やっぱ無理！

「まだまだ終わりじゃねーぞ！少しは楽しませろよぉタツヤァ！！！」

「無茶言うな！！こっちは空飛ぶので精一杯だっての！！」

飛んでくるウロボロスを間一髪避ける。ちなみに捕まったら終わりだ。

そこから、引き寄せられるか奴自身がウロボロスを引き寄せ近づき、何か技を仕掛けてくるだろう。

奴に勝つには、接近戦でアイツに勝つか、アイツの攻撃が届かない長遠距離からの砲撃ぐらいしか手は無い。

どちらにせよ、今の俺には無理な話だが…。いや諦めちゃ話にならんな。用は魔法はイメージが大事なんだ…アイツに勝てるイメージ

…想像の中でもアイツに勝てれば…それが……。

「って…しまった!?」

考えてる内に、何時の間にかウロボロスが俺の足に絡み付いていた。
そのまま凄い勢いで、ハセヲが俺の所まで近づいてくる。

「死ねや雑魚が!崩天刃!!!」

ガードする暇も無い。大きく踏み込んできたハセヲが体をひねりつつ、ドス黒い魔力をまとった蹴り上げをくり出し、俺は蹴り上げられた。すかさずハセヲはウロボロスで俺を掴み、そのままはるか遠くの壁へ叩きつける。

「関口さん!!」

「あ～…今のはマズイでしょ」

騒然とする観客人。その中でなんとか立ち上がる。

「……」

「おや、まだ立てますか…」

そして、響いてきたのは一つの言葉…それを素直に口にする。

「Ｉ　ａｍ　ｔｈｅ　ｂｏｎｅ　ｏｆ　ｍｙ　ｍａｇｎｅｔｉｃ　ｆｏｒｃｅ　．《――体は磁力でできている。》」

「…?達也君…一体何を!?」

お前がそういう土台で戦おうって言うなら、俺も付き合おうじゃないか。

「Ｓｔｅｅｌ　ｉｓ　ｍｙ　ｂｏｄｙ，　ａｎｄ　ｏｉｌ　ｉｓ　ｍｙ　ｂｌｏｏｄ．《血潮はオイルで　心は鉄。》」

俺が出来た唯一のイメージ。

「Ｉ　ｈａｖｅ　ｃｒｅａｔｅｄ　ｏｖｅｒ　ａ　ｔｈｏｕｓａｎｄ　ｗｉｎｓ．《幾たびの乱入を超えて不敗。》」

それをお前に叩き込んでやる。

「Ｕｎｋｎｏｗｎ　ｔｏ　ｍｉｓｔａｋｅ．《ただの一度のミスもなく、》」

そう…イメージするのは、常に最強の自分。

「Ｎｏｒ　ｋｎｏｗｎ　ｔｏ　ａｎｔｉｃｉｐａｔｅ．《ただの一度も読まれない。》」

何度倒されても立ち上がり。

「Ｈａｖｅ　ｗｉｔｈｓｔｏｏｄ　ｐａｉｎ　ｔｏ　ｃｒｅａｔｅ　ｍａｎｙ　ｃｈａｎｃｅｓ．《彼の者は常に孤独、ギリガの丘でレバーを回す。》」

その限りなく少ない一時のチャンスを拾い。

「Ｙｅｔ，ｔｈｏｓｅ　ｈａｎｄｓ　ｗｉｌｌ　ｔｈｒｏｗ　ｅｖｅｒｙ　ｃｈａｒａｃｔｅｒｓ．《故にキャラ差に意味はなく。》」

自分を勝利へと導く！！

「Ｓｏ　ａｓ　Ｉ　ｐｒａｙ，ｕｎｌｉｍｉｔｅｄ　ｍａｇｎｅｔｉｃ　ｆｏｒｃｅ．《その体は、きっと磁力でできていた。》」

さぁ、始めようか！！

「ｕｎｌｉｍｉｔｅｄ　ｍａｇｎｅｔｉｃ　ｆｏｒｃｅ．！」

呪文を唱え終わると同時に、場の空気が変わった。それに伴い、俺の姿も変化する。赤みがかった肌に、重厚感のある様々なアーマー。そして、両腕には特にデカイ、ナックルのような武装が追加されている。

「なるほど…達也君…君は本当に楽しませてくれますね」

「まっ…ここから第二ラウンド開始ってとこかな…」

そして、黒と赤…二つの光は、ぶつかった！

第四十七話　番外　そして伝説へ―

「えっと…いきなりのことで何が何だか分からないんだけど…」

「安心してください、佐天さん。俺もさっぱり分かりません」

この二人を置き去りにしつつ、戦いは激しさを増して行く。

「この姿…これがどういうことか分かってるよなぁ？ハセヲちゃんよぉ！」

ハセヲを煽りながら俺が取る行動はすべて接近攻撃。当然だ、俺に遠距離魔法の才能なんかこれっぽっちもない。ただし、この接近攻撃はただの攻撃ではないのだが。

「やれやれ、真っ向から向かうのは少々厄介です」

そう言いながら俺の攻撃をすべて避けている所から、恐らく奴も気づいていることだろう。

ぶっちゃけイメージでここまで再現できるとは思わなかったけど、今の俺の特性は磁力を操ること。

そして、アイツを倒すにはまず攻撃を当ててアイツに磁力を付けなければならない。

「はっ…さっきまでの威勢はどうしたのかな？」

ともあれ、このまま素直に攻撃を喰らってくれる様子は無い。仕方ないな…とっておきを撃つか。

「ぬぉぉぉ！！スパークボルト！！！」

「！？」

両手に集めた磁力を球状にし、そのままハセヲに向かって射出する。
これが、今の俺に出来る唯一の遠距離技だ。
ハセヲはとっさの事に動揺したのか、攻撃を避けきれず、防御魔法でガードする。
だが、それでいい…磁力は確かに付いた！

「これで終いだ！」

俺が右腕を掲げると同時に、ハセヲが凄い勢いでコチラに吸い寄せられてくる。さあ来い！このまま吸い寄せられてきたお前を投げて、地面に叩きつけてやる！

「あらら…いけませんね……なーんて言うと思ったか？」

「何！？」

「はっ…てめぇのやろうとしてることは割れてんだよ…だがなぁ…その戦術には穴があるぜぇ…何故なら、てめぇにはアイツみたいな無敵判定も吸い込み判定も無いだろーがっ！派手に飛べやっ！！蛇翼崩天刃！！！」

そーでした。そんなこんなで浅はかな俺は、飛んで来たハセヲに逆に一撃を入れられ、空高く舞い上がった。

「あ～…関口さん飛んでっちゃいましたね…あ、落ちてきた」

ヒャッハー！　イタイデスヨー！

「そだね～…しかもそのまま拾われて攻撃続行…。今気づいたけど、この訓練場…船の中のはずなのに、随分天井が高いよね」

ソコデス！シッ！！センコンメイラク！！！ヒヒヒヒ！ナケ！ワメケ！コイヌチャンヨォ！

「だね～…やっぱ魔法とかでなんとかしてるのかな？？…今度は蛇がイッパイ…あんなに噛み付かれて関口さん大丈夫かなぁ～？」

アオニソマルマデー　アストラルフィニッシュ！！

俺死んだ。

その後、ボロ切れの様になった俺はすぐさま医務室へ。その様をマジマジと見ていたアキラは、ハセヲに模擬戦を挑む事無く通常訓練に戻ったらしい。

「……はっ！？…ここは！？」

辺りを見回す…どうやら俺の部屋のようだ。何だ…今までのは全部夢か…オドカシヤガッテ。

「しっかし妙にリアルな夢だったな……ハセヲのはっちゃぶりとか……」

ともかく顔でも洗ってさっぱりしよう。あんな夢…速く忘れてしまうべきだ。
そうして俺が洗面所に向かおうとしていると、玄関のドアが勢いよく開いた。

「おっはようございま～す！関口さん！！今日も訓練がんばりましょー！！」

「…え？」

第四十八話　達也君がアップを始めた様です

ＰＭ１８：００　　学園都市内　某ゲーセンにて

「やべぇ…ク○ンタ楽しすぎる」

「高高度ダウンにカット耐性高め…何よこのＢＤ格闘…チートじゃないの！？」

「ソードビットもあるから、多少無理して突っ込んでもいいし…ＢＳ装備時の格闘は伸びが驚異的だな」

現在、俺と御坂はゲーセンにてＥ○ＶＳで新規参戦したク○ンタの性能を確かめている最中である。
元々は俺一人で行く予定だったが、前日に御坂の方から一緒に行こうと誘われたためこうなった次第である。
して、そのク○ンタの性能は中々興味深い物だった。一緒に参入した感情を処理出来ないゴミとはえらい違いである。やっぱり戦車の方が新規機体と思いたいよな…え？前から居たって？？　気のせいじゃないか？

「格闘よりの機体だからＢＲは性能低めだけど、十分牽制には使えるレベルだし、Ｎサブは一発当たるだけでよろけ判定な上にリロードが早い。ＢＳ装備も格闘ダメアップと機動力アップで、この機体の利点を更に強くできるな」

「けど、反面クアンタムバースト後はね～…格闘出来なくなるっていうのは痛すぎるでしょ」

「だな…それで放置されて、相方を一斉に片追いされたら目も当てられない。使いどころをよく考えないとな」

「…で、アンタはこの機体使っていくの？」

「そうだな…練習する価値はあると思うぜ。御坂は？」

「私はパスかな…デ○ティニーを煮詰めた方が強くなれそうだし」

「ほぅ…何なら今から勝負するか？」

「勝負って…私は構わないけど、アンタは何の機体使うのよ？」

「無論、このク○ンタだよ」

「…随分と舐めてくれるじゃない、今日使い始めた機体で私のデ○ティニーを倒すつもり？」

「結構いい勝負できると思うけどな…こいつは、格闘よりの機体相手だとかなり厄介だと思うぜ」

「いいわ…ボコボコにしてあげるっ！！」

その後、俺達はＥ○ＶＳをめいいっぱい楽しんで店を後にした。
結果　　１０戦中　６回勝利
ギリギリだったが俺の勝ちだ。

ＰＭ２０：３０　　帰宅中

「…」

う〜む…隣で、御坂が分かりやすく落ち込んでいる。どうやらさっきの敗北がよほど堪えたらしい。

「まっ…接近戦はソードビットの関係上こっちが有利だからな。多少無理できる分、こっちが上手く動けただけさ。それに、今日出た新機体ってことで御坂も動きを読みづらい所があっただろ」

「…でも、中距離戦だったらこっちが圧倒的に有利だし」

「そこはあれだ、立ち回りだよ。積極的に前に出て、中距離戦を徹底的に拒否したからな」

「やっぱり…アンタの方が一枚上手ってことじゃない」

「いやいや…思いっきり接戦だったぞ。次に同じことしたら、俺は勝てる自信は無いね」

「…」

御坂がジト目でこっちを見てくる。こいつは疑いの眼差しか？しかし言ったことは全部事実だしなぁ〜…実際、勝利した回数は最初の方が多く、後半は勝ちをかなり拾いづらかった。御坂がしっかり学習して、ある程度の対策を打ってきた証拠である。所見殺しの部分がもう使えない以上…次にやれば、おそらく3　7ぐらいで俺が負けるだろう…このまま何も練習しなければの話だけどな。

「…アンタはさ…どうしたら私はもっと強くなれると思う？」

「ん？…そうだな…しいて言うなら、残像ダッシュはもうちょっと左右前後に散らして使ってもいいかもな。御坂の場合、一方方向に向けて移動してる場合が多い。あとは、要所要所のコンボ選択は完璧だからその分立ち回り面を見直して強化してみるといいと思う」

「…そっか、分かった。実践してみる」

「まっ…御坂は今でも十分強いと思うがな。２ＯＮ２じゃ、今の所こっちで一番信頼できる相方だぜ」

「っ……そう」

その後、少し顔が赤かった御坂にそのことを聞いてみると、いきなり電撃を浴びせられた挙句、捨て台詞を浴びせられ、御坂は帰って行った。

俺が何したし？

「っと…はぁ…今日も色々ありましたねぇ～…っと」

家に帰宅。今日は誰も泊まる予定は無いし、俺一人である。

とりあえず届いていた郵便物を確認…すると、一枚の封筒が目に入った。

「…ついに来たか。随分待たせてくれたじゃないか」

それは、ずっと待っていたものからの招待。どうやら主催者は、あのペガサス・Ｊ・クロフォードのようだ。ご丁寧に名前が書いてあ

る。
けど、アイツって確か千年眼（ミレニアムアイ）を取られて……ああ、そういやあっちでは生きてるんだっけ？
まぁいい…どちらにせよ、この招待…ありがたく受けさせてもらおう。

「いいねぇ…楽しくなってきた！」

早速、デッキの調整でもするか…それにこれほどデカイ大会だ……遂にあのデッキを使う時が来ましたよ…っと。
あ…そうだ、それよりもまず…

「三人チーム…残り二人のメンバーどうしよ？」

第四十九話　とりあえずチーム作ろうぜ！

ＰＭ１８：００　　達也自宅

俺の手には、３種のカード。

王国　王国への船出　王の右手の栄光

そして俺の周りには、何時もの仲間達。

「まっ…そういう訳で、皆に集まってもらったわけだ。俺と一緒に、決闘王国に参加しないか？」

今、この場には俺意外に　御坂　白井ちゃん　佐天ちゃん　初春ちゃんがいる。俺はこの子達の中から残りのチームメンバーを選ぼうと思ってるわけだ。

この学園都市で、俺が仲間として信用できるのはこの子達だけだからな。

アキラ達をチームに呼ぶと言うのも手の一つだけど、アイツ等なら自分の力で招待されるだろうし、何より戦いたい！こんな大舞台で…アイツ等と！！

「決闘王国ねぇ～…確かに楽しそうだし、私としては出てみたいけど」

「お姉様が出るのでしたら、私も是非！」

「うぅ…私はまだそんなに強くないですから…流石にこんな大きな

大会は…」

ふむ…御坂と白井ちゃんは乗り気みたいだな。対して初春ちゃんは流石に臆してるっぽい。まぁ遊戯王始めてまだ日が浅いみたいだし、無理強いできないか。

「で、佐天ちゃんはどうだ？」

「…あっ…えっと私ですか？？…あはは…私はちょっと……」

なんと…意外な反応だな。佐天ちゃんの腕からも性格からも、乗ってくると思ってたんだが…。

「そっか…まぁ無理にとは言わないけど」

「やっぱり、白井さんと御坂さんが妥当じゃないですか？」

「そうですね…2人とも決闘凄く強いですし」

御坂と白井ちゃんか…ガエル帝とライロなら戦力としても申し分無いし、二人共やる気だ。
そうするか…

「OK…じゃあ2人ともよろしく頼むぜ！」

「任せなさい！アンタ達は何もしなくていいわよ…私が全部勝って終わらせてやるわ！」

「お姉様…チーム戦は勝ち抜き方式じゃありませんのよ？」

そんな訳で、そう苦労することなくチームを結成することに成功した。
チーム名は特に無い…絶賛募集中！　（切実）

その後、皆はここで少し騒いだ後夕食を食べて各々の寮へ帰っていった。
俺は食器の片づけをしつつ、先ほどのことを思い出していた。

「それしても、佐天ちゃんの様子…何かおかしかった気がするな。何かあったのか……少し聞いてみればよかったか…」

「それは些かヤボな話じゃないですかね～。女の子には、他人に秘密にしておきたいことの一つや二つはあるものでしょう」

「まぁ中1ってのは色々複雑な年頃だもんn…！？」

咄嗟に後ろを振り返る。するとそこには、ハセヲがにこやかな笑みを浮かべつつこちらを見ていた。

「ちょっ…何でお前がいるんだ！？そもそも何時からそこにいた！？」

「来たのはついさっきですよ～。いくらインターホンを押せども、ドアを叩いても出てこないものですから…勝手に上がらせてもらいましたけどね」

むっ…そいつは気づかなかったな。つい物思いに耽りつつ、ボーッとしすぎたか…。

「だが、だとしてもコイツは立派な犯罪だろう…不法侵入の現行犯

だ」

「まぁまぁ…私と達也君の仲じゃないですか！」

「…ッ…で、お前が来たってことは何か用なんだろ？さっさと話せよ」

「またまた…察しは付いてるんでしょう？」

そう言ってハセヲは、ポケットから3枚のカードを取り出した。
王国　王国の船出　王の右手の栄光
俺に来た招待状に同封されていたカードと同じもの…間違いない。
コイツも招待されたってことだろう。

「達也君の所にも届いてるんじゃないかと思いましてね～…どうですか？」

「…お前の想像どうりさ俺にも来たよ。で、それがどうしたって言うんだ？俺をチームに誘うつもりか？」

「まさか…私は達也君と戦いたい……。同じチームでは戦うことは出来ないでしょう？」

「そういうと思ったよ…」

「フフフ…どうせなら決勝で会いたいものですねぇ～」

そう言って、ハセヲは心底愉快そうに笑う。

「それはいいが、お前チームはどうするんだよ？」

「ご心配なく…既にあてはありますから。そういう達也君はどうですか？」

「俺も何とか決まったよ…後は本番を待つだけさ」

「そうですか、何よりです…っとそうそう、アキラの方にも招待状が来たそうですよ」

「だろうな…アイツの腕なら当然さ」

恐らくチームメイトはなのはちゃん達かな？あれから少し経つけど…どれだけ強くなってるか楽しみだな。

「さて、とりあえず達也君の所に招待が届いてるかも確認したことですし…そろそろ本題に入りましょうか」

「そうしてくれ、もう遅いから手短にな」

「でた単刀直入に…決闘しましょう達也君！」

「…はっ？」

「ですから、決闘をしましょう」

「…随分突然だが、どうしてさ？どっちも決闘王国に出るんだ…それなら向こうで思う存分やればいいじゃないか」

「いえいえ…そういう訳には行かないんですよ…この前は負けてしまいましたからねぇ…決闘王国で思う存分戦うには・・・ここで１

勝1敗にしておかないと」

「…はっ、2敗付けられて吠え面かくのはお前だぞ?」

「出来るものなら……じゃあ達也君、この決闘…受けてもらえますね?」

「ああ・・・いいぜ!じゃあ始めよう…」

「決闘(デュエル)!!」

「決闘(デュエル)!!」

第五十話　ＶＳハセヲ　その２　前編

「さ～て…この前はＤ勝負だった。そして、決闘王国ではお互いメインデッキを使うだろう…」

「ですね…と言う事は、ここで使うデッキは……」

「久々だな…この勝負も！」

「ええ…精々楽しませてくださいね」

関口達也　（ゆにこん！デッキ）　ＶＳ　ハセヲ　（？？？デッキ）

「とりあえず先攻を決めるとするか…何時もの様にコイントスで決めるか？」

そう言って俺はポケットからコインを取り出す。

「いえ、ここはサイコロで決めましょう…お互いが振って、より少ない数が出た方が先攻と言うのは？」

そう言って、ポケットからサイコロを取り出すハセヲ…だがしかし、俺の直感が危険だと判断。

「ちょっと待て…てめぇ、その握りこんだ手を開いてよく見せてみろ！」

俺の指摘に、渋々と手を開くハセヲ。その中にはもう一つのサイコロ！しかもその面のすべては「1」！！ピンピンピンピンピン！！！

「おやおや…よく気づきましたね…」

「イカサマやってまで先攻が欲しいかよ……ペナルティで俺からの先攻で行かせてもらうｚ」

「ちょっと待ってください…関口君がさっき使おうとしたコイン…まだ握ってますよね？見せていただけますか？？」

「…」

仕方なく俺は、握りこんでいたコインを見せる。その両面は同じ絵柄…このコインには、表しかないのだ。

「やれやれ…考えることは同じですか。よくそれで、人のことを非難できましたね」

「うっせぇ…仕方がねえからじゃんけんで決めるぞ…」

「分かりました…それでは」

「じゃん」

「けん」

「ぽん！！」

俺　グー　　ハセヲ　チョキ

先攻は俺！

「じゃあ容赦なく先攻で行かせて貰うぜ…ドロー！」

ゆにこんの極意は先手必勝…猫が健在だった頃はもう少し楽だったんだがな…。とりあえず、手札補充のあてを付けつつ…敵の攻撃を掻い潜り、ユニコールを出す…コレに限る。

初手でシンクロするのも手の内の一つだけど、それだと6枚スタートの相手の手札に合わせれない可能性が高い…。何より、アイツはこのデッキのことをかなり知っている…下手に動いたら完封されちまう…堅実に…先攻の利点を生かして行こう。

「俺は、モンスターを1体セット…そして伏せカードを1枚セットしてターンエンドだ！」

「私のターン…ドローです！（伏せモンスターですか…恐らくはクリッターかマイン・モールと言った所でしょう。伏せカードはサンダーブレイクか砂塵…私の伏せカードを射抜いてくる可能性が高いですね…。私の今の手札では、そう動けません…ここは、下手に動かず最小限の犠牲で済ますといたしましょう…最悪の場合でも、保険がありますしね）私は、モンスターを1体セット！ターンエンドです」

現状

関口達也　　ＬＰ８０００　　手札４枚
フィールド上　　伏せモンスター　１体　　伏せカード１枚

ハセヲ　　ＬＰ８０００　　手札５枚
フィールド上　　伏せモンスター　１体　　伏せカード
ナシ

「俺のターン…ドロー！」

伏せ1枚でターンエンドか…完璧ユニコールを警戒されてるな。ここで何か伏せてくれれば、砂塵でそれを抜きつつ手札を合わせて行こうと思ったんだが…。あの伏せは何だ?恐らくリバース関係のカードって事は無いだろう…あいつなら俺の伏せモンスターがマイン・モールだってことも可能性の一つとして考慮してるだろうし、その場合俺がこのままチューナーを出してユニコールをシンクロ召喚すれば、手札を合わせつつリバースモンスターを破壊していける。そこまで考えているのなら、絶対リバースはありえない…かといって、ただの壁って訳でもないだろう…だとすれば、あのカードの正体は大体読める。

「ここはあえてお前の考えに乗ってやるよ…俺は手札から、魔轟神チャワを召喚!そして、伏せモンスターを反転召喚!伏せモンスターはマイン・モールだ…そしてこの2体でシンクロ召喚、来い…魔轟神獣ユニコール!!!更に、マイン・モールの効果でカードを1枚ドロー！」

「これで私と関口君の手札は同じ数…ユニコールの効果が発動しますね」

「ああ…そしてバトルフェイズ…ユニコールでお前の伏せカードに攻撃!!」

「私の伏せカードは、魔轟神クシャノです。守備力は８００…対してユニコールの攻撃力は２３００。私の魔轟神クシャノは破壊されますね」

《魔轟神クシャノ／Ｆａｂｌｅｄ　Ｋｕｓｈａｎｏ》
チューナー（効果モンスター）
星３／光属性／悪魔族／攻１１００／守　８００
手札から「魔轟神クシャノ」以外の「魔轟神」と名のついたモンスター１体を墓地へ捨てて発動する。
自分の墓地に存在するこのカードを手札に加える。

「チッ…やっぱりそいつか」

どうする？…ここでカードを伏せるのはいいが、アイツと手札が離れちまう…かと言って、あいつのデッキは純粋魔轟神…魔轟神の展開力なら、１ターンで相手の首を取るのに事足りる。だとすれば…カードをやはり伏せるべきか？

「…」

「さて、達也君。ここからどう動きますか？」

クシャノが墓地にいる以上…次のターン動かれる可能性が高い。クシャノ自体は、Ｄ．Ｄ．クロウがあれば対処できるが…今手持ちに無いカードの事を考えても仕方ない。
ここは、動かれるのは仕方ない…その動いた所をユニコールと除去カードを上手く使いつつ出鼻を挫く…それしかないな。

「俺はカードを１枚セット…ターンエンドだ！」

「私のターン…ドロー！ふふっ…これで私の手札は６枚…対する関口君の手札は４枚。今の所はユニコールの効果に怯えなくてもよさそうです。私は、手札から魔轟神ガナシアを墓地に送り魔轟神クシャノの効果を発動します！魔轟神クシャノを手札に加える。そして、魔轟神獣ガナシアは自信の効果により、攻撃力を２００ポイントアップして、私のフィールドに特殊召喚！」

っ…まだだ…今はまだ、動く訳には行かない！

「更に、私は手札より魔轟神グリムロを墓地に送る事で、デッキからグリムロ以外の魔轟神と名の付くモンスターを１体手札に加えます……私が選ぶのはこのカード…魔轟神獣ケルベラル！」

《魔轟神グリムロ／Ｆａｂｌｅｄ　Ｇｒｉｍｒｏ》
効果モンスター
星４／光属性／悪魔族／攻１７００／守１０００
自分フィールド上に「魔轟神」と名のついたモンスターが表側表示で存在する場合、
手札からこのカードを墓地へ送る事で自分のデッキから「魔轟神グリムロ」以外の
「魔轟神」と名のついたモンスター１体を手札に加える事ができる。

「ですが…このカードの登場は後です。今は目の前のゴミを片付けないとねぇ…私は手札から魔轟神クシャノを召喚！そして魔轟神獣ガナシアとチューニング…来なさい！シンクロ召喚、氷結界の龍ブリューナク！！」

ブリューナク…コイツは捨て置けないな

「調子に乗るなっ！罠カード「サンダー・ブレイク」発動！手札から魔轟神獣ガナシアを墓地に送り、氷結界の龍ブリューナクを破壊！更に、ガナシアを攻撃力２００ポイントアップして特殊召喚！」

「おやおや…酷いですねぇ～。ブリューナクは墓地に送られ、チューニングに使ったガナシアも自身の効果で除外されます。けど、ここでそのカードを使って良かったんですかねぇ？」

言ってろ…ここでブリューナクの効果を使われたら俺は終わりだからな。相手に伏せが無い以上…砂塵を使えない俺は手札を合わせれるカードが少ない。最悪、あいつに手札を3枚切られてカードを全部戻されたらこのターンで決めきられる可能性もある。

「やれやれ…切り札を倒された以上、私にこれ以上できることはありませんね。ターンエンドです」

現状

関口達也　　ＬＰ８０００　　手札３枚
フィールド上　　モンスター　ユニコール　１体　ガナシア１体　　伏せカード　１枚

ハセヲ　　ＬＰ８０００　　手札５枚
フィールド上　　伏せモンスター　ナシ
伏せカード　ナシ

第五十一話　ＶＳハセヲ　その２　中篇

現状

関口達也　　ＬＰ８０００　　手札３枚
フィールド上　　モンスター　ユニコール　１体　ガナシア
１体　　伏せカード　１枚

ハセヲ　　ＬＰ８０００　　手札５枚
フィールド上　　伏せモンスター　ナシ
伏せカード　ナシ

「俺のターン…ドロー！」

ノーガード…ここは攻撃を喰らうよりも、手札消費を抑えたいって事か？
だが、このターンで俺が仕掛ければ一気にが削れる。最悪ここでケリが付く可能性があることぐらいコイツも分かってるはず。
となれば…手札にゴーズか何かがあるのか？俺がこのターンで決めるためにこれ以上手札を消費すれば、手札差の問題でゴーズを出された場合対処できない…だが、今のまま攻撃すれば手札差は１枚…アイツがゴーズを出せばその場で効果を無効化できる。
ならば…っ！

「俺はこのままバトルフェイズ！魔轟神獣ガナシアと魔轟神獣ユニコールでお前にダイレクトアタック！！」

「グッ…」

ハセヲ　　ＬＰ８０００　→　３９００

「はっ…随分ヌルゲーだなおい！このまま一方的に終わっちまうんじゃねえのか！？」

「こんな物…ただの必要経費ですよ。君を確実に倒すためのね…！」

「口だけじゃいくらでも言えるよな…俺はこのままターンエンドだ！」

「私のターン…ドロー！（さてさて、これ以上のダメージは流石に受けれませんね。となれば、こののターンにあのユニコールを倒す必要があります。ここは、一番効果的な方法で行きましょう）私は、墓地の魔轟神クシャノの効果を発動！手札にある魔轟神獣ケルベラルを墓地に捨てることで、このカードを手札に加えます。更に、魔轟神獣ケルベラルの効果発動！自分のフィールド上に特殊召喚！」

《魔轟神獣ケルベラル／Ｔｈｅ　Ｆａｂｌｅｄ　Ｃｅｒｂｕｒｒｅｌ》
チューナー（効果モンスター）
星２／光属性／獣族／攻１０００／守　４００
このカードが手札から墓地へ捨てられた時、
このカードを自分フィールド上に特殊召喚する。

「そして、手札から魔轟神獣ガナシアを召喚！ケルベラルとチューニングします。シンクロ召喚ＴＧハイパー・ライブラリアン」

「そいつでユニコールを殴り殺す算段か…けど、俺には伏せカード

があるぜ？」

「ご心配なく…私の予測では、そのカードはモンスター除去の類では無いでしょうから。ではバトルフェイズ…ＴＧハイパー・ライブラリアンで魔轟神獣ユニコールを攻撃！！」

「っ……」

関口達也　　ＬＰ８０００　↓　７９００

「やはり違ったようですね。私はこれでターンエンドです」

現状

関口達也　　ＬＰ８０００　↓　７９００
　手札４枚
フィールド上　モンスター　ガナシア　１体　　伏せ
カード　１枚

ハセヲ　　ＬＰ８０００　↓　３９００
　手札５枚
フィールド上　モンスター　ライブラリアン　１体　伏せ
カード　ナシ

「俺のターン…ドロー！」

ちっ…ハイパー・ライブラリアンだと！？
これで手札を合わせるのが更に難しくなった。この状況を打開する

にはシンクロするのが手っ取り早いが、そうすればアイツがドローすることになる。
除去るしかないか…。いや、ここは押し切ろう！手札のことは…一時保留だ。

「俺は手札から、魔轟神クシャノを召喚！そしてガナシアとチューニング…来たれ！シンクロ召喚。大地の騎士ガイアナイト！！」

《大地の騎士ガイアナイト／Ｇａｉａ　Ｋｎｉｇｈｔ，ｔｈｅ　Ｆｏｒｃｅ　ｏｆ　Ｅａｒｔｈ》
シンクロモンスター
星６／地属性／戦士族／攻２６００／守　８００
チューナー＋チューナー以外のモンスター１体以上

「コレはまた珍しいモンスタが出ましたね…ゴヨウが生きてる頃はまず見られないモンスターでしたが。とりあえず、ＴＧ　ハイパー・ライブラリアンの効果でカードを１枚ドローさせてもらいます」

「ガナシアは効果で除外される……さっさとブチ殺させてもらうぜ…バトルフェイズ！大地の騎士ガイアナイトでＴＧ　ハイパー・ライブラリアンに攻撃！」

「…」

ハセヲ　　ＬＰ３９００　→　３７００

「クッ…ヒャヒャヒャヒャヒャ！！！！」

「どうした…遂におかしくなっちまったのか？」

「いやいやぁ…俺にダメージを与えてくれてありがとうよ達也クゥン！！俺は手札から、トラゴエディアを特殊召喚するぜ！！」

《トラゴエディア／Ｔｒａｇｏｅｄｉａ》
効果モンスター
星１０／闇属性／悪魔族／攻　　？／守　　？
自分が戦闘ダメージを受けた時、
このカードを手札から特殊召喚する事ができる。
このカードの攻撃力・守備力は自分の手札の枚数×６００ポイントアップする。
１ターンに１度、手札のモンスター１体を墓地へ送る事で、
そのモンスターと同じレベルの相手フィールド上に表側表示で存在する
モンスター１体を選択してコントロールを得る。
また、１ターンに１度、自分の墓地に存在するモンスター１体を選択し、
このカードのレベルをエンドフェイズ時まで、選択したモンスターと同じレベルにする事ができる。

「！？」

「コイツの攻撃力は手札の数×６００で決定される…俺の手札は今５枚…攻撃力は３０００！！圧倒的だなぁ～オイ！！」

「…バトルフェイズは終了だ。メインフェイズ２に移行するぜ。俺は墓地の魔轟神クシャノの効果を発動…手札の魔轟神獣ケルベラルを墓地に捨て、このカードを手札に加える。更に、ケルベラルの効果で自身をフィールド上に特殊召喚。大地の騎士ガイアナイトとチューニングするぜ…」

「ほぅ…」

「シンクロ召喚、魔轟神ヴァルキュルス！！」

《魔轟神ヴァルキュルス／Ｆａｂｌｅｄ　Ｖａｌｋｙｒｕｓ》
シンクロ・効果モンスター
星８／光属性／悪魔族／攻２９００／守１７００
「魔轟神」と名のついたチューナー＋チューナー以外のモンスター
１体以上
手札から悪魔族モンスター１体を捨てて発動する。
自分のデッキからカードを１枚ドローする。
この効果は１ターンに１度しか使用できない。

「早速効果を使うぜ…ヴァルキュルスの効果で手札の魔轟神クシャノを墓地に送ってカードを１枚ドローする！…俺は、手札から魔轟神グリムロの効果を発動…このカードを墓地に送ることで、デッキから魔轟神獣ケルベラルを手札に加える。更に墓地のクシャノの効果を発動…ケルベラルを手札から墓地に送捨てることで、このカードを手札に加える。そして、ケルベラルは自身の能力でフィールド上に特殊召喚される…」

「これでレベル１０…ああ…成る程なァ～…あのモンスターを出すつもりですかァ～？」

「ああ、お前がコイツを殺したいなら好きにすると良い…その代わり、少しばかり厄介なことになるだろうがなっ！俺はヴァルキュルスとケルベラルをチューニング…シンクロ召喚、魔轟神レヴュアタン！！」

《魔轟神レヴュアタン／Ｆａｂｌｅｄ　Ｌｅｖｉａｔｈａｎ》
シンクロ・効果モンスター
星１０／光属性／悪魔族／攻３０００／守２０００
「魔轟神」と名のついたチューナー＋チューナー以外のモンスター
１体以上
フィールド上に存在するこのカードが破壊され墓地へ送られた時、
自分の墓地に存在する「魔轟神」と名のついた
モンスターを3体まで選択して発動する事ができる。
選択したモンスターを手札に加える。

「さて…俺はこのままターンエンドだ」

「クックック…私のターンですか…しかし、確かにそのモンスターは厄介ですねぇ。ブリューナクが生きていれば話は簡単だったのですが…（このままコイツを倒せば、向こうの思うツボですね…かと言ってカードを伏せれば、あの伏せカードで除去される可能性が高い上に、トラゴエディアの攻撃力が下がってしまう。ここはドローに期待したい所ですが…）私のターン、ドロー！！…おやこれは良いカードを引きましたね。私は魔法カード「貪欲な壺」を発動します。墓地にある、魔轟神獣ガナシア　魔轟神獣ケルベラル　氷結界の龍ブリューナク　ＴＧ　ハイパー・ライブラリアン　そして魔轟神グリムロをデッキとエクストラデッキに戻し…カードを2枚ドローします」

「っ！…これで手札は7枚。トラゴエディアの攻撃力は４２００か…」

「まっ…すぐに攻撃力は下がってしまいますけどね。私は手札から速攻魔法「サイクロン」を発動します。その伏せカードを破壊しま

すね」

「…伏せカードは砂塵の大竜巻だ。破壊される」

「おお怖い怖い♪…では、私はカードを1枚伏せてターンエンドとさせてもらいます」

現状

関口達也　　ＬＰ７９００　　手札４枚
フィールド上　　モンスター　レヴュアタン　１体　　伏せカード　ナシ

ハセヲ　　ＬＰ３９００　→　３７００　　手札５枚
フィールド上　　モンスター　トラゴエディア　１体　　伏せカード　１枚

「殴ってこねえのか？」

「私も馬鹿じゃありませんからね。流石に3枚もアドを取られては勝負に支障が出ます」

「そうかよ…俺のターン…ドロー！」

クソッ…流石に乗ってこねえか。かと言って、俺から殴るのも愚公だな…あれが次元幽閉とかだったら絶体絶命だ。

「俺は、カードを1枚セット…ターンエンドだ」

「私のターン…ドロー！ここは、一気に決めさせていただきましょうか。まずは、魔轟神クシャノを召喚！更に、手札の魔轟神グリムロを墓地に捨て効果発動。デッキから持ってくるのは、魔轟神クルス！そして、罠カード「サンダー・ブレイク」を発動！魔轟神クルスを墓地に送り、達也君の魔轟神レヴュアタンを破壊させてもらいます！」

《魔轟神クルス／Ｆａｂｌｅｄ　Ｋｒｕｓ》
効果モンスター
星２／光属性／悪魔族／攻１０００／守８００
このカードが手札から墓地へ捨てられた時、自分の墓地に存在するこのカード以外の
レベル４以下の「魔轟神」と名のついたモンスター1体を特殊召喚する。

「掛かったなっ！！永続罠カード「リビングデットの呼び声」を発動！対象は魔轟神獣ユニコールだっ！！」

「なるほど…抜け目が無いですね。今お互いの手札の数は４枚ッ！！」

「そういうこった。ユニコールの効果で、サンダー・ブレイクとクルスの効果は無効化されるぜ！！」

「クックック…このまま終われば…の話ですがね！私は手札から、エフェクト・ヴェーラーを墓地に送り、達也君の魔轟神レヴュアタ

ンを指定して効果を発動します。そのモンスターの効果を無効化します。本来なら無駄な行動ですが……手札の数が外れてしまいましたねぇ？」

「クッ…」

「その様子では、もう対処できるカードは無いようですね。では、サンダー・ブレイクの効果で魔轟神レヴュアタンを破壊！！そして魔轟神クルスの効果を発動…対象は魔轟神グリムロ！私のフィールドに特殊召喚します」

「レヴュアタンの効果発動だ…コイツが墓地に送られた時、墓地から魔轟神と名の付くモンスターを3体まで手札に加えることが出来る…俺が選ぶのは、グリムロ…そしてケルベラル2体を手札に加えるぜ」

まさかあんな方法で無理やり抜けてくるとは…。このままグリムロとクシャノでシンクロする気か。レベル7…いや待て、まさかアイツ…。

「フフフ…焦ってるのがバレバレですねぇ～…ですがもう遅い。私は魔轟神グリムロと魔轟神クシャノをチューニング…クックック…天頂に輝く死の星よ！地上に舞い降り生者を裁け！シンクロ召喚！降臨せよ！天刑王　ブラック・ハイランダー！！！」

《天刑王ブラック・ハイランダー／Ｄａｒｋ　Ｈｉｇｈｌａｎｄｅｒ》
シンクロ・効果モンスター
星７／闇属性／悪魔族／攻２８００／守２３００
悪魔族チューナー＋チューナー以外の悪魔族モンスター1体以上

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、
お互いにシンクロ召喚をする事ができない。
１ターンに１度、装備カードを装備した相手モンスター１体を選択して発動する事ができる。
選択したモンスターに装備された装備カードを全て破壊し、
破壊した数×４００ポイントダメージを相手ライフに与える。

「……やって…くれるじゃねぇか」

このモンスターは不味過ぎる。魔轟神デッキの切り札にして最大の毒！自軍に光臨すれば、これ以上に頼れる友は無く、敵に回せばこれ以上厄介なものは無い。

「さて…状況も変わった事ですし、一気に仕掛けますよ…バトルフェイズハイランダーでユニコールに攻撃！」

「っ！」

関口達也　　ＬＰ７９００　↓　７４００

「更に、トラゴエディアで達也君にダイレクトアタック！！」

関口達也　　ＬＰ７４００　↓　５６００

「くそっ…」

「どうしたんですか？一方的に蹂躙してくれるんでしょう？期待してるんですから、早くお願いしますね。私はこのままターンエンドです」

現状

関口達也　　ＬＰ７９００　↓　５６００
手札７枚　　モンスター　ナシ
フィールド上　　伏せカード　ナシ

ハセヲ　　ＬＰ３７００　　手
札３枚
フィールド上　　モンスター　トラゴエディア　１体　ハイラ
ンダー　１体　　伏せカード　ナシ

第五十二話　ＶＳハセヲ　その２　後編

現状

関口達也　　ＬＰ７９００　→　５６００
手札７枚
フィールド上　　モンスター　ナシ
伏せカード　ナシ

ハセヲ　　ＬＰ３７００　　手札３枚
フィールド上　　モンスター　トラゴエディア　１体　ハイランダー　１体
伏せカード　ナシ

チッ…手札はあるのに対策を打てないとはな…我ながら涙が出る話だ。
何か除去カード…頼む！

「俺のターン…ドロー！！」

来たカードは…ダメだ。このカードじゃハイランダーを倒すことは出来ない。

「俺はカードを１枚セット…更にモンスターを１体伏せてターンエンドだ」

「フフフ…遂に手詰まりですか達也君？」

「…言ってろ」

「では、私のターン…ドローです！（おや？…このカードはまた…）私はこのままバトルフェイズに移行！トラゴエディアで伏せモンスターに攻撃！！」

「っ…伏せモンスターは魔轟神クシャノだ…守備力は８００…破壊される」

「更に、天刑王　ブラック・ハイランダーで達也君にダイレクトアタック！！」

関口達也　　ＬＰ５６００　↓　２８００

「後１撃で達也君の首に手が届きますね…私はこのままターンエンドです」

現状

関口達也　　ＬＰ５６００　↓　２８００
　手札６枚
フィールド上　　モンスター　ナシ
　　伏せカード　１枚

ハセヲ　　ＬＰ３７００　　手札４枚
フィールド上　　モンスター　トラゴエディア　１体　ハイランダー　１体　伏せカード　ナシ

「俺のターン…」

何とかこのターンでハイランダーを倒さねえと…。
除去カードかあのカード……頼む！来てくれ！！

「ドロー！！！……」

「…（達也君の気配が変わった…どうやら、何か引いたみたいですね）」

「へっ…やっぱ信じる物は救われるってね！俺は手札から魔法カード「死者蘇生」を発動するぜ！対象は墓地にいる魔轟神獣ユニコール！！」

「フッ…何を出すかと思えば。ユニコールではハイランダーの攻撃力を超えることは出来ませんよ？」

「そいつはどうかな？まっ…バトルの前に俺は手札のグリムロの効果を使わせてもらうがな。デッキから持ってくる魔轟神は…こいつだ！魔轟神獣ノズチ！！」

「（あのカードはチャワなどと同じ魔轟神の効果を円滑に使いつつ特殊召喚するモンスター…あれを手札に持ってくるということは、本気でこのターンにハイランダーを倒すつもりなのでしょうね）」

「さあ行くぜ…バトルフェイズ！魔轟神獣ユニコールで天刑王　ブラック・ハイランダーに攻撃！」

「愚かな…返り討ちにして差し上げます！迎え撃ちなさい、ハイランダー！！」

「悪いが、勝つのは俺だ！俺はダメージステップ時に罠カード「幻獣の角」を魔轟神獣ユニコールに装備！これにより魔轟神獣ユニコールの攻撃力は８００ポイントアップする！！」

《幻獣の角／Ｈｏｒｎ　ｏｆ　ｔｈｅ　Ｐｈａｎｔｏｍ　Ｂｅａｓｔ》
通常罠
発動後このカードは攻撃力８００ポイントアップの装備カードとなり、
自分フィールド上に存在する獣族・獣戦士族モンスター１体に装備する。
装備モンスターが戦闘によって相手モンスターを破壊し
墓地へ送った時、自分のデッキからカードを１枚ドローする。

「…！成る程、そのカードの存在は失念していましたね」

「バトル続行だ。ユニコールの攻撃力は３１００…ハイランダーを撃破…更に幻獣の角の効果でカードを１枚ドロー！」

ハセヲ　　ＬＰ３７００　↓　３４００

さて…一応モンスターを倒すことには成功したが、手札調整用のカードが殆ど無いな。
だが、次のターンでノズチからモンスターを大量展開してブチ殺す。
ここを凌げば…俺の勝ちだ。

「俺はカードを１枚セット…ターンエンドだ」

「いやはや…本当に達也君は私を楽しませてくれますねぇ～」

「はっ…随分余裕じゃねえか。ユニコールも出て、ロックがまた範囲内だぜ？」

「ええ、ですが…君の手札の殆どがシンクロ用のカードで埋め尽くされているのではないですか？ゆえに、急激な手札差を詰められないと判断してますが」

「さあ…どうだろうな？」

「まっそれが虚勢であれ何であれ…私はこのターンで達也君の希望を打ち砕いて差し上げますよ。私のターン…ドロー！！」

さぁ…どう来る！？

「では…終焉を達也君…貴方に！私は、手札の魔轟神グリムロの効果を発動！墓地に送ることで、デッキから魔轟神獣チャワを手札に加えます」

っ…手札を合わせる為のカードが無い。ここは見てることしか出来ないか…。

「更に、手札から魔轟神クルスを墓地に送ることで、手札から魔轟神獣ノズチを特殊召喚！更に、ノズチの効果で手札から魔轟神獣チャワを特殊召喚。そして、最後に魔轟神クルスの効果で墓地の魔轟神クシャノを特殊召喚！！」

《魔轟神獣ノズチ／Ｔｈｅ　Ｆａｂｌｅｄ　Ｎｏｚｏｏｃｈｅｅ》
効果モンスター
星２／光属性／獣族／攻１２００／守　８００
自分のメインフェイズ時に発動する事ができる。
手札から「魔轟神」と名のついたモンスター１体を捨て、
このカードを手札から特殊召喚する。
この効果で特殊召喚に成功した時、
手札からレベル２以下の「魔轟神」と名の付いた
モンスター１体を特殊召喚する事ができる。

「モンスターの大量召喚…本気でこのターンで決める気だな？」

「それが魔轟神の真骨頂だからなぁ～！！さぁ行くぜ…まずはトラゴエディアの効果発動。墓地にある魔轟神グリムロを指定して、トラゴエディアのレベルをグリムロと同じにする！そして魔轟神獣チャワとチューニング…シンクロ召喚、ＴＧ　ハイパー・ライブラリアン！！」

「っ…罠カード「奈落の落とし穴」発動！！！」

「却下だ…手札から速攻魔法カード「禁じられた聖槍」を発動…対象はＴＧ　ハイパー・ライブラリアンだ」

「くそっ…」

「更に、俺は残った手札１枚を伏せ…魔轟神獣ノズチと魔轟神クシャノをチューニング…行くぜ、シンクロ召喚、魔轟神レイジオン！！」

《魔轟神レイジオン／Ｆａｂｌｅｄ　Ｒａｇｉｎ》

シンクロ・効果モンスター
星５／光属性／悪魔族／攻２３００／守１８００
「魔轟神」と名のついたチューナー＋チューナー以外のモンスター
１体以上
自分の手札が１枚以下の場合、このカードがシンクロ召喚に成功した時、
自分の手札が２枚になるまでデッキからカードをドローする事ができる。

「コイツの効果で、俺は手札を２枚になるようにドロー！！更に、ＴＧ　ハイパー・ライブラリアンの効果でカードを１枚ドロー！！まだまだ行くぜぇ…てめぇに絶望を見せてやる！！俺は墓地の魔轟神クシャノの効果を発動…手札の魔轟神ルリーを墓地に送り、魔轟神クシャノを手札に加える。そして魔轟神ルリーの効果発動、フィールド上に特殊召喚！」

《魔轟神ルリー／Ｆａｂｌｅｄ　Ｌｕｒｒｉｅ》
効果モンスター
星１／光属性／悪魔族／攻　２００／守　４００
このカードが手札から墓地へ捨てられた時、
このカードを自分フィールド上に特殊召喚する。

「そしてコイツがお前を地獄に送る狼煙だ…魔法カード「死者蘇生」を発動！対象は墓地の魔轟神獣チャワ！更に魔轟神ルリーとチューニング…こい！シンクロ召喚、フォーミュラ・シンクロン！！ＴＧの効果と合わせ、カードを２枚ドロー！！…さて達也、覚悟はいいか？」

「…やれよ、さっさとな」

「おーけだ、ヒャハハハハハ！！塵にしてやるよっ！！俺はフィールド上のモンスターをすべてチューニング…集いし星が1つになるとき、新たな絆が未来を照らす！　光さす道となれ！　リミットオーバー・アクセルシンクロ！　進化の光　シューティング・クェーサー・ドラゴン！！！」

《シューティング・クェーサー・ドラゴン／Ｓｈｏｏｔｉｎｇ　Ｑｕｅｓａｒ　Ｄｒａｇｏｎ》
シンクロ・効果モンスター
星１２／光属性／ドラゴン族／攻４０００／守４０００
シンクロモンスターのチューナー1体＋チューナー以外のシンクロモンスター2体以上
このカードはシンクロ召喚でしか特殊召喚できない。
このカードはこのカードのシンクロ素材としたチューナー以外のモンスターの数まで1度のバトルフェイズ中に攻撃する事ができる。
1ターンに1度、魔法・罠・効果モンスターの効果の発動を無効にし、破壊する事ができる。
このカードがフィールド上から離れた時、
「シューティング・スター・ドラゴン」1体をエクストラデッキから特殊召喚する事ができる。

「さぁ小便はすませたか？　神様にお祈りは？　部屋のスミでガタガタふるえて命ごいをする心の準備はＯＫ？バトルフェイズ…シューティング・クェーサー・ドラゴンで魔轟神獣ユニコールに攻撃！天地創造撃　ザ・クリエーションバースト！」

「ぐっ…」

関口達也　　ＬＰ２８００　→　１９００

「更にクェーサーはシンクロ召喚に使ったチューナー以外のモンスターの数だけ1度のバトルフェイズ中に攻撃することが出来る！！トドメの…2連打ァ！！！！」

「俺の…負けだ」

関口達也　　ＬＰ１９００　→　０

勝者　　ハセヲ

「フフッ…宣言どおり、1勝1敗に持ち込ませていただきました。これで思う存分決闘王国で決着を付けられますね」

そう言って満足そうに笑みを浮かべるハセヲ。
どうでもいいが、コイツのキャラ作り…興奮すると解けるのな。

「まっ…その方が楽しみが増えていいかもな。どうせ本戦で勝つのは俺だ」

「それはどうでしょうか?今の私のジェムは…あの時よりかなり強化されました。達也君がこちらに来て、闇を喰えるようになったようにね。…既にエスクリダオは手に入れたんでしょう?」

「耳が早いな…まさかこっちで闇のＥ・ＨＥＲＯ枠が出てるとは思わなかったが…おかげで、大分強化が図れたよ」

「まっ…私のジェムには通用しませんがね。決闘王国を楽しみにし

ていてください…その時は、私のダイヤが君を打ち滅ぼすでしょう…では」

ったく…やりたい放題やった挙句、好き放題言ってさっさと帰りやがった。あの野朗…今日の借りは忘れねぇぞ。

「さて…今日は疲れたな。とりあえずネットで情報集めでもしてさっさと寝るか…」

そんなこんなで俺の色々あった1日は終わった。この後、更新された禁止・制限改定を見て悶絶する俺であったが…まぁそれは次回にまた語ると言うことで――――

第五十二話　ＶＳハセヲ　その２　後編（後書き）

まさかの開闢が制限ですか…。
昔のやつ、残ってるといいなぁ…

第五十三話　新たな時代の波に翻弄されるようです

そして次の日

場所　　関口達也のマンション

「まぁ、そんなこんなで皆に集まってもらったわけだが…」

「なにやら、昨日とまったく同じ流れですわね」

「またチームの話か何か？まさか今になって、他のメンバーにするとかじゃないでしょうね！？」

そう言いつつ凄い剣幕で迫ってくる御坂。いやはや…この問題は、ある意味お前に一番重要なことなんだからもっと落ち着いて欲しいもんだね。

「まぁまぁ、御坂さん…それで関口さん。今日は一体何の用なんですか？」

見かねて助け舟を出してくれた佐天ちゃんのおかげで、何とか話がそれずに済みそうだ。

そのまま俺は、本題を切り出す。

「そのことなんだが…コイツを見てくれ、どう思う？」

そう言って俺が取り出したのは、１枚コピー用紙だった。中にはデュエルモンスターズのカード名がいくつか書いてある。

「すごく…コピー用紙ですわね。それで、これに乗ってるカード達が何か？」

「『何か？』とは嬉しいことを言ってくれるじゃないか黒子ちゃん。皆はこのカード達を見て何か思うところはないか？」

「…私のデッキのメインカードも結構乗ってるわね」

「う～ん…そうですねぇ～。結構幅広いジャンルのカード達ですけど…あっ！これってもしかして…！！」

どうやら佐天ちゃんは察しが付いたようだ。
とりあえずネタ晴らしと行こうか。

「コイツは、今回からの禁止・制限ルールに引っかかったカード達さ。上から新禁止　新制限　準制限　新無制限だ」

・新禁止
《ハリケーン》
《王宮の弾圧》
《メンタルマスター》
《フィッシュボーグ－ガンナー》

・新制限
《カオス・ソルジャー　－開闢の使者－》
《大嵐》
《真六武衆－シエン》
《紫炎の狼煙》

《貪欲な壷》
《ＴＧ　ハイパー・ライブラリアン》
《デブリ・ドラゴン》
《ローンファイア・ブロッサム》
《フォーミュラ・シンクロン》
《原初の種》

・準制限
《マインドクラッシュ》
《リビングデッドの呼び声》
《召喚僧サモンプリースト》
《氷結界の虎王ドゥローレン》
《デステニー・ドロー》
《光の護封剣》
《トラゴエディア》
《ネクロ・ガードナー》

・新無制限
《裁きの龍》
《サイクロン》
《魂を削る死霊》
《オーバーロード・フュージョン》
《巨大化》
《グラヴィティ・バインド－超重力の網－》
《ゴッドバードアタック》

「う…嘘！？フィッシュボーグ－ガンナーが禁止！？」

ガックリ項垂れる御坂。まぁアイツは悪いことし過ぎたよな～。

「…き……き…」

「き?…どうしたんですか、白井さん?」

「キマシタワーー!!!!!!!!!!!これはライロ復活の狼煙ですの!!」

そして御坂とは打って変わって、超ハイテンションな白井ちゃん。
その横では、初春ちゃんが何事かと寄り添っている。まぁそりゃそうか…今回の禁止・制限は、結構ライトロード強化に力を入れてる。まさか裁きが無制限になるなんてな。
そうして二人を見守っていると、佐天ちゃんが俺に声をかけてきた。

「カオス・ソルジャー　一開闢の使者一…このカード私は見たこと無いですけど、かなり強かったんですよね?」

「ああ…結構昔の話だから、佐天ちゃんが知らないのも無理ないが…当時はこれとカオス・エンペラーの所為で相当な暗黒時代に突入してたな」

「そんなカードがよく戻ってきましたね…」

「本当にね…俺もコイツが戻ってくるとは思わなかった。まっ…俺は初期からやってたんで、普通に持ってるから問題無いけど」

「…うわっ…ずるいですよ!!私にも1枚ください」

「別にいいよ。結構余ってるし」

「なっ…随分あっさりですね。もしかして…交換条件に、私にあん

なことやこんなことを要求してくるとか！？」

「いやいや、無いから。俺一人で何枚も独占したって仕方ないしな…俺が使う分以外は布教するのも悪くないさ」

「…分かりました、じゃああありがたく貰っておきますね♪」

「そうしてくれ」

しかし、今回の改訂は驚きっぱなしだな。ジャンドの影響だろうが、出張セットの片割れのローン・ファイヤ・ブロッサムが制限…要らないところで飛び火だぜ。

植物も流石にこれ以上はキツイかな…アマリリスを出すギミック…他のを考えた方がいいかもしれん。

久しぶりにライロギミックで新デッキに改修してみるのも悪くないかな…最近作ってるデッキはメタ系ばっかだったし…ここいらで別ジャンルを攻めるのも…。

っと…考察は後回しだな。今は御坂をフォローしてやるのが先か。

「おい御坂、そう落ち込むなって。確かにシンクロギミックが抜けてきついだろうけどさ、帝は無事なんだし、まだまだ行けるって！」

「うぅ…けど、回りが悪くなるのは避けられないじゃない」

「まぁ…な。けど、マインドクラッシュが準制限だぜ?葵が難なく入る御坂のデッキなら、かなり使えると思うけどな」

「それはまぁ…確かに」

「そういう方面で、色々考えて調整していこうぜ。俺もできることは手伝うからさ」

「……期待してるわよ」

「？…声が小さくて聞こえなかったけど、何か言ったか？？」

「／／／／っさいわね！何でも無いんだから…」

？…まぁ元気になったみたいだし、よしとするか。
白井ちゃんの方は、寧ろやる気上がってるみたいだしケアの必要は無いだろう。
二人とも、俺の大事な相棒だからな。がんばってもらわねーと…

「それにしても開闢か…今回の決闘王国は荒れる気がするねぇ～…」

この俺の不安…気のせいならいいけどな。

第五十四話　カード難民達の動向

環境の変化　それは大小あれど、人々に少なからずを変化を与えるものである。
それが、デュエルモンスターズの環境変化ともなれば俺達決闘者（デュエリスト）にとっては死活問題だ。
毎年2回新たな禁止・制限発表が近づいてくると、眉唾レベルの情報から信憑性のありそうな話まで、様々な情報が飛び交い始める。
そして、公式による正式な発表が行われてからその新改訂が採用されるまでの期間…
決闘者達は荒れ狂う。

達也サイド

「情報が上がってから1週間近く…すでにかなり荒れてるな」

「まっ…毎度のことですけどねぇ～。ブラック・ホールや死者蘇生が帰ってきた時もこんな感じだったじゃないですか」

そんな会話をしつつ、俺こと関口達也と全身黒尽くめの怪しい男ハセヲは世話しなく走り回る決闘者達を眺めていた。
俺達は、こういった奴等を哀愁と同情を込めて「カード難民」と呼んでいる。

ここは、学園都市内にあるとあるカードショップ。
新改訂の情報も出て環境はどう変化してるのか気になり、ちょっと

顔を出してみたのだが、どう言う訳か道中にコイツとパッタリ会った。
もしかして、コイツウチの近くで何時も張り込んでるのか……？
まぁ…それは置いといて、新制限として帰ってきた「カオス・ソルジャー　－開闢の使者－」のカードは向こうの世界でも今になっちゃそこそこのレアカードだろうが、こっちでは輪をかけて酷いらしい。
さっき店頭で1枚だけ並んでるのを見たが、普通のカードの値段よりケタが3つほど？でいた。
こんなの学生が買えるわきゃねーだろ。
そんな事を思っていると、隣に居たハセヲが何の躊躇いも無く現金をポット出して開闢を買っていた。
おかしいな…コイツは普通に持ってたはずだが…すると案の定、回りの人間がゾロゾロと集まってきて、やれアンティ決闘をしようだの、トレしてくれだの言い始めた。
そいつ等を退かすのに軽く数十分。こちらに出す意思がないとようやく皆理解したらしく、また他の獲物を探して周囲を歩き始めている。

「やれやれとんだとばっちりだぜ。それにしても、向こうでも流石に土下座してまで譲ってもらおうって奴まではいなかったとおもったんだがな。こっちの奴等は本当に決闘に命懸けてるのな…」

「そんな世界の住人に…今では私達もなってるんですけどねぇ」

「…まあ…な」

「それより達也君…この改訂後、デッキの環境はどうなると思いますか？」

「そうだな…やっぱ代行天使が強いんじゃないか？ＴＧ絡ませたタイプや暗黒界も怖そうだが…代行天使はその中でも群を抜いてると思う。改定後に伸びてくるのは…まぁやっぱり順当にライロかな。グラビティ・バインドが無制限になったからロックタイプも出てくるかもしれないけど、環境的に伏せタイプは辛くなる気がするからどうだろうな…」

「ふむ…なるほど。私としては、鳥剣が来ると思うのですが…そう思って、すでにデッキを組みつつあります」

鳥剣か…確かに相手にするの厄介なんだよなあの類は。
主にチャリオッツ的な意味で。

「まぁ、実際になってみないとどうとも言えないがな。六武辺りはこの制限でどんな感じなのか使ったことないからイマイチピンとこないし……」

「痛手になったのは間違いないのでは？狼煙などの制限は純粋にツライと思いますよ」

「だろうけど、案外まだ息してるかもしれないだろ？」

「確かに…まぁ、そこは使い手達の組み方次第でしょうね」

「そーいうこと」

そんなこんなで会話しつつ周囲の状況を眺めていたのだが、ふとデュエルスペースの一角で決闘している１団が目に付いた。
どうやら聞こえてくる会話から察するに、新改訂後のデッキ構築で

決闘をしてるらしい。

「…アイツ等、面白そうだな」

「奇遇ですね…私もそう思っていた所です」

「フッ…じゃあ早速行きますか！」

それから数時間後――

「いや～…結構堪能したな。新改訂対旧改訂ってのも中々面白いもんだ」

「確かに…ですが、改めて大嵐の恐ろしさを痛感しました。あの頃スタロが流行る訳です」

「だな、ハリケーンの時は何だかんだでそのターンを防いじまえばどうにでもなるって感じだから使いどころを考えるカードだけど、大嵐は撃てる時に撃っとけって感じなカードだし、通った時のリターンがデカイ」

「ですが…やはり開闢を持っている決闘者はいませんでしたね」

「あの店にも1枚しかなかったしあの値段だったからな…あの店は学園都市の中でも1番デカイ店だ。そこでもああってことは、相当出回ってないんだろうよ」

「向こうでは、ゴールドパック等の再販がありましたから、恐らく

２０１２に再録されるでしょうが……こっちでは望み薄ですか。これは、その内暴動でも起こるんじゃないですか？」

「流石にそれは無い…と思いたいなぁ。ああ…何か制限復帰後に死者蘇生の亜版使ってた時の事を思い出すな」

「そういえば、使ってましたねぇ～…いやはや懐かしい」

「…随分シレっと言いやがるな。お前の見た瞬間の一言は「殺してでも奪い取る」だったと記憶してるが？」

「そんな昔のことは忘れました」

「へいへい…都合のいい頭だことで…」

そういえば、禁止になるちょっと前にファイル１冊分近くに亜版死者蘇生を集めて、見せびらかしてる奴とかいたなぁ～…その後禁止になって、価値が大分落ちた後アイツはどうしたのだろう？

「首でも吊ってなきゃいいけどなぁ…あの頃はまさか戻るとは誰も思ってなかったし、自棄になって薪…とか」

「…？一体何の話ですか？」

「いや、なんでもない。気にするな」

まぁ流石に暴動とかは起きないと思うけど、持ってる奴等は色々と集られるだろうな。トレを申し込んでくる程度なら可愛いもんだが、最悪無理やり奪おうって考えの奴も結構いそうだ。
グールズ（笑）見たいなのがまだ居ないとも限らないしな。

「さて、結構楽しめたしちょっと疲れたから俺はそろそろ帰るかな…お前はどうするんだ？」

「そうですねぇ～…私はもう少しこの辺をブラついていきますよ」

「そっか…じゃあまたな。次に会うときは、恐らく敵同士だろうよ」

「ええ…その時は悔いの無いよう…お互い全力で」

「ああ…」

そうして俺達は別れ、俺は帰路についた。

ハセヲサイド

「さて…達也君も去ったことですし、ゴミ掃除と行きましょうか……」

そう呟いた後、私は人気の無い路地裏へと足を運んわけですが…少し待つと、案の定４，５人のガラの悪そうな連中がゾロゾロと。まさかこんなに簡単に釣れてくれるとはねぇ…

「おい兄ちゃん…さっきあの店で開闢を買ってたよなぁ～？」

ええ…買いましたとも。君達見たいなゴミが釣れればと思ってね。

「それをこっちに譲ってもらおうか？ついでにお小遣いもくれると嬉しいんだけどなぁ～」

「そうですね、いいでしょう。君達が決闘で私に勝てれば…の話ですがね」

「上等だっ！ボコってやんよ！！」

やれやれ…品の無い事ですねぇ～…まぁ精々…楽しませてくださいよ！！

数十分後

「嘘…だろ。俺のモンスター達がが何も出来ずに…」

「ククククク…オイどーしたよぉ！？さっきまでの威勢の良さはどーしたぁ！？これじゃあ全然楽しめねぇだろーがよぉ！！」

「くそ……」

「何だよ…もう手詰まりってか。やっぱチンピラ程度じゃこの程度だな…はっ興ざめだぜ。トドメだ…ジェムナイト・マディラでダイレクトアタック！！」

「うわぁぁぁ！？」

チンピラ　　ＬＰ０

「さ～て…俺の勝ちだぜ？俺は金とカードをアンティに出してたんだ…てめぇは何を俺に差し出すんだ？」

「うっ…」

「なんだよ…何もねーのかよ…シケてんなぁ……じゃあいいや、てめぇは少し壁のシミにでもなってなっ！」

そのまま俺は、チンピラの首を掴み、思いっきり壁に叩きつける。
チンピラはその衝撃で口から泡を吹いてたが、すぐに動かなくなった。恐らく気絶したのだろう…まったくもって、最後まで退屈させてくれる。
周りに居た他のチンピラ共は、いきなりのことに動転したのか、未だに棒立ちしている。

「何だ、もう動かなくなっちまったのか…やっぱゴミじゃ暇つぶしにもなんねぇな。まぁいい、んで…次はどいつが俺と遊んでくれるんだ？」

こんなんじゃ、決闘王国の前座にもなりはしないだろうが…これ以上は待ちきれない。
精々コイツ等には俺の暇を潰す為の玩具になって貰うとしよう。

達也サイド

「さ～て、ただいま～っと」

「遅いっ！！」

「！？」

俺が家に帰るといきなり、そんな声に出迎えられた。
どうやら御坂の様だが、今日来るって言ってたかな？

「え～っと…今日はどうしたのさ？確か今日は来るとは言ってなかったと思ったけど？」

「…っ…ちょっと暇だったから、寄ってみただけよ。それより、何処行ってたの？」

「ちょっとカードショップにね…新改訂の影響が気になって」

「ふ～ん…まぁいいわ。それじゃあ今からゲーセンに行くわよ？」

「……はっ？」

「はっ？じゃ無いわよ！メッ○ーラが解禁されたのよ。さっさとやりに行かないと！！！」

「あ～…え～と、別の日じゃ駄目か？明日とかさ。今日は疲れたからあんまりもう外にｈ」

「っさい！とにかく準備しなさい！！」

「…はぁ…やれやれだ」

どうやら俺が休めるのは、当分先らしい。

第五十四話　カード難民達の動向（後書き）

地元近くでのカードショップにて開闢の値段
平均　５０００円～

本当に高くなっちゃいましたねぇ～

第五十五話　王国への船出

時間　　？？？

場所　　インダストリアル・イリュージョン社　会長室

そこには、二人の人物がいた。
一人は、会長席に座っている人物ペガサス・Ｊ・クロフォード。
もう一人は客席に座っている人物。見た目は１０代後半ぐらいで右腕に宝石のついたアーマーを付けているのが特徴的な男。

「いよいよ始まりマスネ。この大イベントが…私は実に楽しみデース」

「そいつは何よりだ…俺も少しは協力した甲斐があるよ」

「ユーには感謝していますよ…。ユーの齎してくれた情報…異世界の決闘者達の話は実に興味深い…。すでにそれらしき者達に招待状を送りましタ」

「お礼はいいさ。俺もお前のお陰で助かってるのも事実だ…お前のお陰で予定よりも早くアイツ等の顔も拝めそうだしな。それより、例の件…進展はどうだ？」

「そちらの方はあまり芳しくありませんネ。何分情報が少なすぎるのデース。ですが…我々も最善を尽くさせてもらいますヨ」

「…分かった、引き続き頼む。」

「では、始めましょう。我々の目的のためにネ」

「ああ…どんなに困難だって俺は諦めない…勇気ある限りッ！！」

同時刻

場所　港　　――王国への船出――

関口サイド

「遂に来たわね…この船に乗れば、後は王国まで一直線よ。私達の戦いが…始まるわ」

「…ああ、そうだな」

「どうしたんですの関口さん？先ほどから元気が無いように見受けられますが？？」

「いや…別に」

今日は遂に大会当日。俺達にとっては待ちに待った日である。
俺と御坂、そして白井ちゃんは大会に出るべく、この港で王国への船に今まさに乗り込もうとしているのだが…だがしかし、白井ちゃんが指摘したように俺のテンションは低い　何故か！？

船旅だからさっ！！

関口達也　スキル　乗り物酔い（重度）

飛行機も大概だが、船は一番駄目だなぁ～…あの波に揺られる感じがもう…ｏｒｚ
しかしまぁ、折角ここまで来たんだ。俺も腹を括るしかあるまい。

「それにしても、随分大きな船ですわね…一体何人の決闘者が参加するのでしょうか？」

俺達の目の前には、とてつもなくデカイクルーズ客船が浮かんでいた。
そういえば、デカイ船だと船の揺れは殆ど感じないとか聞くよな…
これならワンチャンあるんじゃね？

「話を聞く限りは全国から優秀な決闘者が集まってるらしいし、数百組はいるんじゃないの？今回はチーム戦だし、人数だけ数えたら千人近くいるかもね」

「その中から予選を経て、数組から数十組のチームを選別…そこから本戦ってとこだろうな。細かいルールは向こうについてから発表されるらしいけど、長い戦いになると思うぜ」

「…フン。分かってるわよ、けど…それぐらいの方が燃えるじゃない♪」

「じゃあ関口さん、お姉様…行きますわよ」

「オウ！」

「…ああ」

そして俺達は、船へと乗り込んだ。

そして出港してから数分後――――

俺は限界を迎えようとしていた。

「うっ…どうせなら…泳いで行かせてくれりゃいいんだ……俺泳ぎ…とk…ぐっ」

「ちょ…ちょっと！アンタ大丈夫！？」

「関口さん…もしかして船が苦手ですの？」

「へっ…自慢じゃない…が、俺は…悪い時には車に乗って数分でダウンするほどの…乗り物酔い体質だ」

「あ～…筋金入りって事ね」

「ともかく、まだ先は長いみたいですし私達に宛がわれた部屋もあるようですから、関口さんはそちらで先に休まれてはいかがですか？」

「そう…だな。悪いがそうさせてもらう…ぜ」

「（ニヤリ）」

意味ありげな白井ちゃんの笑みが少し気になったが、それ以上に俺の身体はもう限界だった。

そして俺は、なけなしの体力を振り絞って部屋にたどり着き…そのままベットに崩れ落ちた。

関口達也　　ダウン　　再起　　たぶん可能。

御坂サイド

「やれやれ…まさかアイツにあんな弱点があったなんてね～」

「そうですわね♪（フフーン…これはイイチャンスですわ。最初はお邪魔蟲付きで憂鬱でしたが…これでお姉様と二人っきり…）」

「…黒子、アンタ随分テンション高いわね？」

「へっ！？…そっ…それはそうですわ！だってあの有名な決闘王国ですのよ！それに参加できるなんて、テンションを下げろと言う方が無理と言うものでは？」

「まぁね～……」

私も昨日は中々寝付けなかったし…。

「それはそうと、お姉様。折角の船旅ですし、デッキに出てみませんか？」

「ん～…私としては、船の中の施設も見て回りたいんだけど…なんか色々あるみたいじゃない」

「まぁまぁ…そちらは後で一緒に見て回りましょう。今は黒子にお付き合いくださいな」

「…そうね、少し潮風にあたるのも悪くないかもね」

「（ヨッシャー！！）」

移動

クルーズ船　　デッキ

デッキには、既に何人かの決闘者が集まっていた。皆、景色を楽しんだり仲間達との会話を楽しんだりしている。

「わぁ…いい眺めね。天気も快晴だし、一面海っていうのも中々新鮮ね」

「そうですわね～♪」

「ほら、黒子もこっちに来なさいよ～！潮風が気持ちいいわよ」

「ええ、今参りますわ（フフフ…絶好のチャーンス！このままお姉

様に……）」

「…？」

ふと、デッキの一角を見ると数人の男女が固まって何かを言い争っていた。女４人に男２人…もしかして、ナンパ？

だとしたら、助けた方がいいわよね…

「おっねえさま～♪（黒子の愛…受け止めてくださいですのー！って何故そこで移動を！？ふべっ）」

「遂に…遂に来たわねっ！ここから、私達の活躍が始まるのよ！！」

「……」

「あのぉ～…あんまり騒いだら他の人に迷惑なんじゃ…」

「無駄ですよ、ああなったアイツはそう簡単には止まらないでしょう」

「まぁ…室内でない分、ここなら多少騒いでも皆様ある程度は大目に見てくれるでしょう」

「それに、気持ちがはやるのも分かるよ。僕も早く決闘したくて仕方が無い」

「やれやれ…」

「ちょっと、あんた達なにやってるのよ？」

そんな感じで私は彼女達に声をかけてみた。
女子の方は、元気そうなカチューシャを付けている人と周りに我関さずと言った感じで本を読んでいる大人しそうな人。頭を抱えて呆れている様な表情のポニーテールな人。そして一人おどおどしている、ロングヘアーの人。
最後の人を見るならば、ナンパされてきょどっているようにも見えなくも無いわね。
そして男子の方は、明らかにヤサ男っぽい奴と変な笑みを浮かべてる変な奴。
こっちは典型的ね…明らかにナンパ男って感じだわ。全員私より年上っぽいけど…まっ何とかなるでしょ。

「え～と…僕達に何か御用でしょうか？」

すると、ヤサ男の方が声を掛けて来た。

「用っていうか…アンタ達ナｎ」

私が次の言葉を言おうとすると、もう一人の男が身を乗り出してきた。

「ちょ…君ってもしかして、御坂美琴！？超電磁砲のっ！」

「なっ…なんでアンタ私の名前を！？」

しかも能力名まで…コイツ何者なのよ！？

第五十六話　ようこそＳＯＳ団へ！

？？？

今思えば、僕の「それ」は運命だったんだと思う。

僕の日常は、存外捨てたものではなかった。
中学三年…普通なら高校受験等でてんやわんやになる所だが、僕の通う学校は中高一貫でそういった不安は皆無だったし、クラスの奴等ともそこそこ仲が良かった。
試しに入ってみた生徒会も、新鮮なことが多く楽しめることが多い。
そして、学校が終わった後特に気の合う友人達と、カードゲームなどをして遊ぶ。
今思っても、とても充実していたように思う。
だが何故だろう…何かが違う…そんな気がしていた。
理由はよく分からない…だけどそんな気持ちが日に日に大きくなっていったのも事実だ。
僕はこの世界からズレている…。きっと僕が住むべき世界はここでは無いのだ。
そして、こう思うのだ。
いつぱ別の世界の住人達が、ズレた僕を助けるべく…僕を導いてくれるのだと。

そして僕は「ここ」に来た。

美琴サイド

「あっ…」

私の名前を言い当てた男は、しまったといった表情を浮かべ黙り込んだ。
黙り込んだって言うことは、何か疾しいことがあるのかしら？もしかして、コイツも学園都市の関係者？

「？…荒木、この子と知り合いなの？？」

私たちの会話を聞いて、カチューシャを付けた人も会話に入ってくる。

「あ～…いや、僕は名前を知ってる程度だけど…」

「嘘言いなさいっ！私の能力名まで完璧に言い当ててたじゃない…ずっと黙ってるようなら、その超電磁砲（レールガン）を喰らってみる？」

そう言って私は、体から少し電気を発して見せた。もちろんただの脅しだ。こんな所で超電磁砲（レールガン）なんてぶっ放すつもりは無い。
しかし、顔を青くしている男を差し置いて他にアプローチしてくる人物がいた。さっきのカチューシャの人だ。

「何何！？今のってもしかして電気！？何かトリックがあるの？？それとも、貴女もしかして本物の超能力者！？」

「え…ええ！？…まぁ、一応そういうことね」

「そういえば聞いたことがありますね、何でも東京都の約３分の１に相当する面積に、外部から学生を募り、能力開発というものをカリキュラムに加え、学生達のそういった能力を開発する都市があるとか…確か名前は学園都市でしたか？」

怒涛の質問攻めに、私が少し狼狽していると、すかさずさっきのヤサ男が補足っぽいことを言ってきた。
まぁ、このまま質問攻めにされるよりはよさそうだし、ここは乗っておきましょう。

「そうよ、それで私はその学園都市の生徒って訳。さぁ私はそっちの質問に答えたんだから、次はそっちの番…」

「フフン…成る程ね、つまり私達の正体が知りたいってわけね？」

「…はっ？」

「いいわ…教えてあげる！私達は――――――」

いやいや…私はその荒木とか言う奴がなんで私の事を知ってたのか知りたいだけだっての！！
その後私は、この人からＳＯＳ団とか言う団の説明と武勇伝を永遠と聞かされることとなった。

「そういえば自己紹介がまだだったわね。私は涼宮ハルヒ！ＳＯＳ団の団長よ！！」

そんな感じで、何時の間にか自己紹介タイムとなっていた。相変わらず、このハルヒさんは私の話しを聞いてくれない。

「それで、こっちが副団長の古泉君！」

「古泉樹です。よろしくお願いしますね」

随分爽やかな笑顔だけど、何か引っかかるわね。何て言うか…腹の底では何か妙なことを考えてそうって言うか……少し用心しておいた方がよさそうね。

「あっちで縮こまってるのが、ＳＯＳ団マスコット件お茶組係のみくるちゃん！」

「あ…あの…朝比奈みくる…です」

こっちは対照的に、どこまでも人畜無害って感じね。何か見てるこっちが可哀想になってくるわ。

「こっちがＳＯＳ団とって必要不可欠な無口キャラの有希！」

「…長門有希」

この人は…よく分からないけど、すごい威圧感が…もしかしてこの人も能力者…？

「で、アレが万年平団員のキョンよ」

「…キョンだ。呼び方はキョンでもキョン子でも好きに呼んでくれ。本名については、色々と察してくれると助かる」

あ～…この人がこの中で一番常識人っぽいわね。名前は置いとくとして。

「最後に、コイツが最近入ってきた新人の荒木よ！」

「荒木昌二だ…よろしく」

んで、コイツが何故か私のことを知ってた不審者…っと。
まぁ、その辺は後々問い詰めるとして、それにしてもまた私変な勘違いしちゃったみたいね…この人達普通に知り合いだったんだ。
今後は気をつける様にしないとね…それに一応私も自己紹介しときますか。

「私は、さっきコイツが言ってたとおり御坂美琴です…よろしくね。それで、皆さんここにいるって事は決闘王国に行く決闘者ってことですよね？」

「まぁ…そういうことになるな。ハルヒが勝手に決めて、お…私達を無理やり引っ張ってきたとも言うが…」

「なによバカキョン！こんな面白そうな企画…出ない手は無いでしょ！！」

「…やれやれ」

何やら、向こうにも色々と複雑な事情があるみたいね。

「それより美琴ちゃん！」

「え…はい？」

「美琴ちゃんって、本物の超能力者なのよね！？もっと他のことも出来るの？？何ならＳＯＳ団の特別団員にならない！？」

「え…ええ！？」

あ～うぅ…何で私勧誘されてるのよ！？
私、ちょっとこの人苦手かも…。

「オイハルヒ、あんまり人様の迷惑になる様なことは…」

「別に…ただちょっと勧誘してるだけじゃない！無理強いしてる訳でも無いし…コレぐらい問題ないでしょ」

「どう見ても御坂は困ってると思うぞ？」

「あはは…」

「むぅ…分かったわよ」

やれやれ…これで一段落付きそうね。

「…！そうだわ、美琴ちゃん貴女も決闘者なのよね？」

「ええ」

「なら、私達の中の一人とデュエルしなさいっ！それで私達が勝ったら、美琴ちゃんはＳＯＳ団の特別団員…美琴ちゃんが勝ったらその負けた奴を今日１日好きにしていいわ」

ええ！？何かまた話がややこしくなってるんですけど！？

「オイオイ…いきなり話を飛躍させすぎだろ」

「美琴ちゃん…まさかこの勝負、逃げるとは言わないわよね？」

「…ッ！」

「やれやれ…御坂、コイツの言うことは気にしなくていいぞ」

「…分かってるわよ」

私は決闘者なんだから…答えは決まってるわ

「そこまで言われて…逃げる訳無いじゃない！いいわ、その勝負受けてやろうじゃないっ！」

「…ちょ！？」

「そうこなくっちゃ♪確か船内の施設にデュエルスペースがあったわよね」

「ええ、先ほど船内の見取り図で確認しました」

「流石古泉君！じゃあ早速行きましょう！！」

移動中

船内デュエルスペース

そして、私たちはこの場所にやってきた。決闘者を集めている船だけあって、このデュエルスペースはかなり広い。すでに何組かの決闘者がデュエルをしていた。

「それで、私の相手は誰なのかしら？」

「そうね…ここは新人の荒木！美琴ちゃんに私達の実力を見せてあげなさい！」

「…やはり僕か。どう見てもかませです本当にありがとうｇ」

「ブツブツ言ってないでさっさと行きなさい！！」

ふ～ん…相手はアイツか…これで勝てば、後で色々と問い詰める手間が省けそうね。

「おーけ…じゃあ始めるわよ！」

「了解。せいぜいあがくとしよう」

「決闘（デュエル）！！」

「決闘（デュエル）！！」

第五十六話　ようこそＳＯＳ団へ！（後書き）

ちなみに、黒子はまだデッキのフェンスに激突したまま気絶中。
美琴に完璧に忘れられちゃってます。

第五十七話　御坂美琴　ＶＳ　荒木昌二　前編

美琴サイド

「じゃあ、先攻後攻を決めましょうか。何か希望の方法がある？」

「いいえ、僕はのんびりと後攻で攻める方が好きなので先攻はどうぞ」

「…ふ～んまぁいいわ、じゃあ私の先攻……ドロー！！」

さてと…どう動いたものかしら？今回の改訂で、大分デッキが変わったから今の内にならしておかないと…。

まぁ最初にやることはそんなに変わらないんだけどね。

「私は、手札から魔法カード「強欲で謙虚な壺」を発動！デッキトップからカードを3枚めくり…その中からジェネクス・ウンディーネを手札に加え、残りをデッキに戻しシャッフルするわよ」

「…いいカードだ」

「さらに、ジェネクス・ウンディーネを手札から召喚！効果を発動するわ。デッキからジェネクス・コントローラーを手札に加えて、更にデッキから黄泉ガエルを墓地に落とす！そして私は、カードを1枚セットしてターンエンドよ」

「僕のターン…ドロー！…僕はカードを2枚セットしてターンエン

ドだ」

「…？」

攻めてこない…手札事故？？それとも伏せ始動のデッキなのかしら？でも「大嵐」が復活した今の環境だと、２伏せは結構危険のはずよね。

私が１枚伏せてるって言っても、次のターンで私が伏せカードを発動して使ってくる可能性も考えてるはず…となると、何か対策カードも一緒に伏せてるのかしら？まあいいわ、それならそれで…

「私は、伏せカードの速攻魔法「サイクロン」を発動！アンタの伏せカードを１枚破壊させてもらうわ」

「…！…破壊されたのは「盗賊の七つ道具」だ。じゃあ改めて、ターンエンド」

現状

御坂美琴	ＬＰ８０００	
手札５枚		
フィールド上	ウンディーネ　１体	伏せ
カード　無し		
荒木昌二	ＬＰ８０００	
手札４枚		
フィールド上	モンスター　無し	伏せ
カード　１枚		

「どうやら、御坂さんのデッキはジェネクス軸のデッキのようですね…だとすれば、手札を温存しつつ、堅実に戦える中々厄介なデッキでしょう」

「だろーな…黄泉ガエルを落とした所を見ると帝か」

「対する荒木君は、モンスターを出さずカードを伏せてターンエンド…恐らくはキーモンスターを待っているのでしょうね」

「2伏せって事はそれ以外の仕込みは上々だろうし、次のターンでどうなるかが勝負だな」

「はてさて…どちらが勝つことになるやら…」

「私のターン…ドロー！そしてスタンバイフェイズ、墓地の黄泉ガエルの効果を発動！私のフィールド上に守備表示で特殊召喚するわよ」

とりあえず、氷帝とかがあればベストだったんだけど…無い物強請りしても仕方ないか。向こうもまだ動く気配は無いし…ここは様子見かな。

「私はこのままバトルフェイズに移行…ジェネクス・ウンディーネでアンタにダイレクトアタックよ！」

「…りょーかい」

荒木昌二　　ＬＰ８０００　↓　６８００

まっ…コレぐらいのモンスターに一々罠は使ってくれないわよね。

「私はこのままターンエンドよ」

「僕のターン…ドロー！……僕は更にカードを１枚セット、ターンエンドだ」

「なっ…！？また何もせずにターンエンドですって！？アンタ本当にやる気あんの？」

「失敬な…僕は最初から真面目にやってるよ。ほら、次は君のターンだ」

「っ…分かってるわよ！！」

現状

御坂美琴　　ＬＰ８０００

手札６枚

フィールド上　　ウンディーネ　１体　黄泉ガエル　１体

伏せカード　無し

荒木昌二　　ＬＰ８０００　↓　６８００

手札４枚

フィールド上　　モンスター　無し　　伏せカード　２枚

なんなのよ一体…伏せカードばっかりで何も攻めてこないじゃないっ！

もしかして、こっちの上級モンスターを待ってる…？

「私のターン…ドロー！…っ！」

これは……いいわ。アイツが何を考えてるのか、ここで見せてもらおうじゃない！

「私は、フィールド上の黄泉ガエルをリリースして炎帝テスタロスを召喚！効果を発動するわ。アンタの手札…1枚ランダムに捨てさせてもらうわよ！！」

《炎帝テスタロス／Ｔｈｅｓｔａｌｏｓ　ｔｈｅ　Ｆｉｒｅｓｔｏｒｍ　Ｍｏｎａｒｃｈ》

効果モンスター

星６／炎属性／炎族／攻２４００／守１０００

このカードがアドバンス召喚に成功した時、

相手の手札をランダムに1枚捨てる。

捨てたカードがモンスターカードだった場合、

そのモンスターのレベル×１００ポイントダメージを相手ライフに与える。

「…っ！」

始めて顔を顰めたわね…コレは結構効果的みたい。

「私の選ぶカードはコレよ…そのカードを墓地に送ってもらうわ」

「…墓地に捨てられたのは、ＢＦ－疾風のゲイルだ」

「！…Ｂ…Ｆ…？……第一位と同じ！？」

「…？とりあえず、炎帝の効果で、僕のＬＰは削られるね」

荒木昌二　　ＬＰ６８００　→　６５００

「……」

「どうしたんだ？まだそっちのターンでしょ？？」

「…！…そっ…そうね。私はこのままバトルフェイズに移行…」

落ち着きなさい私…。コイツがＢＦ使いだからって、アイツみたいに強いとは限らない！

「私は、ジェネクス・ウンディーネと炎帝テスタロスでアンタにダイレクトアタック！！」

「どーぞ…両方喰らうよ」

「なっ…！？」

荒木昌二　　ＬＰ６５００　→　２９００

「…どういうつもりよ？…これで、後１回この２体の攻撃が通ったらアンタの負けよ？」

「そーだね。まぁ負けるつもりは無いけど」

「っ…！！」

「…コレぐらいの差ワンチャンさ。すぐに覆る」

「…私はこのままターンエンドよ」

「ちょっと荒木！？ボコボコじゃないっ！！しっかりしなさいよ、負けたら罰ゲームだからねっ！！」

「落ち着けよハルヒ。アイツだって馬鹿じゃないんだ、ここからしっかり巻き返してくるさ」

「確かに…彼の決闘者としての実力は、涼宮さんも知っての通りでしょう？」

「…分かってるわよ、そのぐらい…ただ、あんまりにも不甲斐ないからちょっと喝を入れただけじゃない」

「…やれやれ。…っと長門？珍しいな、お前が誰かの決闘に興味持つのは」

「…ユニーク」

「…そうだな、多分ここから面白くなるだろうさ…」

現状

御坂美琴　　ＬＰ８０００
手札６枚
フィールド上　　ウンディーネ　１体　テスタロス　１体
伏せカード　無し

荒木昌二　　ＬＰ６８００　↓　２９００
手札３枚
フィールド上　　モンスター　無し　　伏せ
カード　２枚

第五十八話　御坂美琴　ＶＳ　荒木昌二　中篇

現状

御坂美琴　　ＬＰ８０００
手札６枚
フィールド上　　ウンディーネ　１体　テスタロス　１体
伏せカード　無し

荒木昌二　　ＬＰ６８００　↓　２９００
手札３枚
フィールド上　　モンスター　無し
伏せカード　２枚

「さて、じゃあ僕のターン…ドロー！」

「っ！」

流石にこのターンは何か仕掛けてくるでしょうね…。
最悪、私のフィールドのモンスターは全部やられるかもしれないけど、まだ手札も十分にあるし…問題ないわ。

「メインフェイズ…僕は、手札からＢＦ―鉄鎖のフェーンを召喚！」

《ＢＦ－鉄鎖のフェーン／Ｂｌａｃｋｗｉｎｇ　－　Ｆａｎｅｔｈｅ　Ｓｔｅｅｌ　Ｃｈａｉｎ》
効果モンスター
星２／闇属性／鳥獣族／攻　５００／守　８００

このカードは相手プレイヤーに直接攻撃する事ができる。
このカードが直接攻撃によって相手ライフに戦闘ダメージを与えた時、
相手フィールド上に攻撃表示で存在するモンスター1体を守備表示にする。

見たこと無いタイプのＢＦ!?けど、攻撃力５００程度ならまだ…

「更に、僕は手札からＢＦ－黒槍のブラストを特殊召喚!」

《ＢＦ－黒槍のブラスト／Ｂｌａｃｋｗｉｎｇ － Ｂｏｒａ ｔｈｅ Ｓｐｅａｒ》
効果モンスター
星４／闇属性／鳥獣族／攻１７００／守 ８００
自分フィールド上に「ＢＦ－黒槍のブラスト」以外の「ＢＦ」と名のついたモンスターが存在する場合、
このカードは手札から特殊召喚する事ができる。
このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、
その守備力を攻撃力が超えていれば、
その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。

２体目のＢＦモンスター…コイツは見たことあるカードね。
確か効果は、自分のフィールド上にブラスト以外のＢＦモンスターがいれば特殊召喚できるのと、貫通能力だったはず。

「特に罠はないみたいだな。じゃあこのままバトルフェイズ…フェーンの効果を発動、コイツは相手プレイヤーに直接攻撃することが出来る!」

「…！」

「よってフェーンで君に直接攻撃…更に攻撃宣言時、永続罠カード「追い剥ぎゴブリン」を発動！」

《追い剥ぎゴブリン／Ｒｏｂｂｉｎ' Ｇｏｂｌｉｎ》
永続罠
自分フィールド上に存在するモンスターが相手ライフに戦闘ダメージを与えた時、相手の手札をランダムに1枚捨てる。

！？…相手にダメージを与えるたびに、ハンデス効果が発動する永続トラップ！！…アイツ、これを狙ってたのね。けど、1枚ぐらいなら…

「更にチェーンでもう1枚「追い剥ぎゴブリン」を発動」

「なっ…！？」

「…何も無いようなら、このまま攻撃を続けさせてもらおう。そして、君の手札をランダムに2枚捨てさせてもらう」

「…何も無いわ。選びなさいよ」

御坂美琴　　ＬＰ８０００　→　７５００

「じゃあこの2枚を捨ててもらう」

「…墓地に捨てられたのは、邪帝ガイウスとＡ・ジェネクス・バードマンよ」

「ＯＫ、更にフェーンの効果発動だ。フェーンが直接攻撃に成功した時、相手フィールド上のモンスターを1体守備表示にする。守備表示にするのは、炎帝テスタロス！」

「…っ！」

これは…不味いわね。このままテスタロスにブラストで攻撃されたら…

「そしてバトル続行だ。ブラストで、テスタロスに攻撃！」

「ぐっ…」

御坂美琴　　ＬＰ７５００　↓　６８００

「更に、2枚の「追い剥ぎゴブリン」の効果を発動…君の手札を2枚捨てさせてもらう」

「…分かったわ」

捨てられたカードは、ブラック・ホールとジェネクス・コントローラー。

それにしても、まさか1ターンでこっちの主力を倒しつつ手札を４枚奪ってくるなんて…。

「…言っただろ？」

「…！」

「こんなの「ワンチャン」だってさ」

「…コレぐらいで調子に乗ってるんじゃないわよ！まだデュエルは始まったばかりなんだからっ！」

「…それもそうだ。じゃあ僕はカードを1枚セット、ターンエンドだよ」

現状

御坂美琴　　ＬＰ８０００　↓　６８００
　　手札２枚
フィールド上　　ウンディーネ　１体　　伏せカード　無し

荒木昌二　　ＬＰ２９００
　　手札１枚
フィールド上　　フェーン　１体　ブラスト　１体　伏せカード　１枚　永続罠　追い剥ぎゴブリン　２枚

「私のターン…ドロー！そして、スタンバイフェイズに墓地から黄泉ガエルを守備表示で特殊召喚するわ」

「ブラストの前では壁にもならないけどね」

「…見てなさい、すぐにその余裕を消し去ってやるんだから！」

けど、手札に帝がいない以上…あんまり動けないのよね。

だからと言って、このまま放置してもただ手札を奪われるだけだし…ここは……。

「私は、手札からグローアップ・バルブを召喚！そして、黄泉ガエルとチューニング…シンクロ召喚、フォーミュラ・シンクロン！そしてフォーミュラ・シンクロンの効果でカードを1枚ドロー！」

「…そいつには、色々と煮え湯を飲まされた事が多かったね。今回の制限でめっきり見なくなったけど」

「更に、ジェネクス・ウンディーネとフォーミュラ・シンクロンをチューニング！シンクロ召喚、ＴＧ　ハイパー・ライブラリアン！！。そしてこのままバトルフェイズよ、私はハイパー・ライブラリアンで、ＢＦ―鉄鎖のフェーンに攻撃！！」

「…了解」

荒木昌二　　ＬＰ２９００　→　１０００

「今度こそ、後一撃ね…私はカードを2枚伏せてターンエンドよ！」

「待った、エンドフェイズに罠カード「ゴッドバードアタック」を発動させてもらう。ＢＦ―黒槍のブラストをリリースして、今伏せた2枚のカードを破壊させてもらう」

「…！「奈落の落とし穴」と「月の書」が……」

「そして、ターンエンドを宣言したね。じゃあ僕のターンだ」

「僕のターン…ドロー！僕は、手札からＢＦ－極北のブリザードを召喚！更に、効果で墓地からＢＦ－黒槍のブラストを守備表示で特殊召喚！」

《ＢＦ－極北のブリザード／Ｂｌａｃｋｗｉｎｇ　－　Ｂｌｉｚｚａｒｄ　ｔｈｅ　Ｆａｒ　Ｎｏｒｔｈ》
チューナー（効果モンスター）
星２／闇属性／鳥獣族／攻１３００／守　　０
このカードは特殊召喚できない。
このカードが召喚に成功した時、自分の墓地に存在するレベル４以下の「ＢＦ」と名のついたモンスター１体を表側守備表示で特殊召喚する事ができる。

「そしてこの２体でチューニング…シンクロ召喚、大地の騎士ガイアナイト！」

「その時、ライブラリアンの効果が発動するわ！カードを１枚ドロー！！」

「りょーかい…じゃあバトルフェイズだ。僕は、大地の騎士ガイアナイトでＴＧ　ハイパー・ライブラリアンに攻撃！」

「うっ…」

御坂美琴　　ＬＰ６８００　→　６６００

「これで形成逆転だ。僕のフィールドには上級モンスターが１体。君に挽回できるかな？カードを１枚セットしてターンエンド！」

現状

御坂美琴　　ＬＰ６８００　↓　６６００
手札２枚
フィールド上　　モンスター　無し　　伏せカード　無し

荒木昌二　　ＬＰ２９００　↓　１０００
手札０枚
フィールド上　　ガイアナイト　１体　　伏せカード　１枚　永続罠　追い剥ぎゴブリン　２枚

第五十九話　御坂美琴　ＶＳ　荒木昌二　後編

現状

御坂美琴　　ＬＰ６８００　↓　６６００
　　手札２枚　　伏せカード　無し
フィールド上　　モンスター　無し

荒木昌二　　ＬＰ２９００　↓　１０００
　　手札０枚
フィールド上　　ガイアナイト　１体　　伏せカード　１枚　永続罠　追い剥ぎゴブリン　２枚

「荒木が盛り返した…な」

「まっ…ここまでは彼の予定調和でしょう。相手にペースを掴ませたかのように見せかけて、後半に引っくり返す…彼の良く使う手です。…ですが」

「…彼は相手の攻めを許しすぎた。まだこの勝負、どちらに転ぶかわからない」

「な～に言ってるのよ！！荒木には絶対勝ってもらわなきゃ困るわ。ほら、みくるちゃんも荒木が喜ぶように応援なさい！！」

「は…はい！！」

確かに結構盛りかれちゃったわね。手札にあった除去カードもさっき全部破壊されちゃったし…けど、私のデッキは帝がメインよ！今は手札にまだ無いけど…引ければ……！

「私のターン…ドロー……！」

「その様子だと、帝は引けなかった系？」

「…っさいわね！私はスタンバイフェイズ、墓地から黄泉ガエルを守備表示で特殊召喚！」

「どーぞ、別に止めるつもりは無いよ」

「…私はモンスターを1体伏せて、カードを1枚セットしてターンエンドよ」

「OK、僕のターン…ドロー！（あの様子じゃ、今の手札に打開するカードは無い…っと。あの伏せカードは、ハンデスを恐れて伏せたものか…それとも除去カードか…どちらにせよ、僕のやることは変わらないけどね）僕は手札から、BF－黒槍のブラストを召喚！そしてバトルフェイズ…ブラストで、黄泉ガエルに攻撃！」

「っ…」

御坂美琴　　LP6600　→　5000

「更に「追い剥ぎゴブリン」の効果発動…その最後の手札、捨てて

もらおうか」

「…分かったわ。手札のカードはゾンビキャリアよ」

「うげっ…めんどくさ。まぁいいや、じゃあガイアナイトで伏せモンスターを攻撃！」

「…伏せてたのは粋カエルよ。戦闘破壊されて墓地に送られるわ」

「まためんどくさい物を……僕はこのままターンエンドだ」

現状

御坂美琴　　ＬＰ６６００　→　５０００
　　手札１枚
フィールド上　　モンスター　無し
伏せカード　１枚

荒木昌二　　ＬＰ１０００
　　手札０枚
フィールド上　　ガイアナイト　１体　ブラスト　１体
伏せカード　１枚　永続罠　追い剥ぎゴブリン　２枚

「さ～て…アンタのお陰で仕込みは上場…まさかハンデスしてまで私に協力してくれるとは思って無かったわ」

「言ってくれるね～…けどいいの？伏せカードがある以上黄泉ガエ

ルの効果は使えないよ」

「それはどうかしら？…私のターン…ドロー！！…私は、墓地の粋カエルの効果発動！黄泉ガエルを除外して…私のフィールド上に守備表示で特殊召喚！更に、伏せカードオープン！魔法カード「死者蘇生」を発動！対象は、墓地の邪帝ガイウス！」

「（モンスターを2体特殊召喚？墓地にゾンビキャリアもあるし…手札が残り1枚。シンクロでも狙う気かな？…いや……それなら粋カエルを出した意味が……もしかしたら！？）僕は伏せカード「ゴッドバードアタック」を発動！ブラストをリリースし、君の場のモンスター2体を破壊する！」

「っ……いい判断じゃない」

「いや～…ちょっと気になってね。チューナーも無しに2体特殊召喚って事は、最悪2体リリースで変な物出されても困るしね」

「…私はこのまま、ターンエンドよ」

「僕のターン…ドロー！　（ドローは月の書か…さ～て…そろそろ向こうも手詰まりになってきたでしょ。僕もこれ以上モンスターは増やせないけど、ダメージならガイアで十分だし最悪風帝とか出されても1ターンなら耐えれるね）じゃあバトルフェイズ…大地の騎士ガイアナイトでダイレクトアタック！！」

「うっ…」

御坂美琴　　ＬＰ５０００　↓　２４００

「やっとその首に手が届いたね…後1撃。その前にハンデス効果を発動させてもらうよ」

「悪いけど…その前にコイツの効果を発動させてもらうわ。手札からトラゴエディアを特殊召喚！」

「あ～…ターンプレイヤー優先で、追い剥ぎ効果にチェーンできるのか。りょーかい…けどその手札じゃ、あんまり意味無いだろうけどね。もう1枚の手札も墓地に送ってもらう」

「ええ…もう一枚の手札は、光と闇の龍（ライトアダドクネ※ラゴン）よ」

「やっぱりね…じゃあ、僕はカードを1枚伏せてターンエンドだ」

現状

御坂美琴　　ＬＰ５０００　↓　２４００
　　手札０枚
フィールド上　　モンスター　トラゴエディア　１体
　　伏せカード　無し

荒木昌二　　ＬＰ１０００
　　手札０枚
フィールド上　　ガイアナイト　１体
　伏せカード　１枚　永続罠　追い剥ぎゴブリン　２枚

さて…現状を確認しましょうか。　墓地に有効利用出来そうなカード　　ゾンビキャリアのみ

手札　　現状では使えない。使えるとしたら、ゾンビキャリアのコストとして、デッキトップに持って行く事ぐらいだろう。

場　　トラゴエディアが1体　次のドローカードを使うにしろなんにせよ、攻撃力は0になるでしょうね…

伏せカードは無い

結局…やっぱりこのドローにすべて賭けるしかないわね。けど、不安はまったく無い。何時だって私は信じてるから…私のデッキを…カード達を！

「さ～て…終わらせるわよ！！私のターン……ドロー！！」

「（さあ…どうなる！？）」

「……悪いわね、やっぱりこの勝負…私の勝ちよ！」

「っ！？」

「私は、トラゴエディアをリリース…邪帝ガイウスを特殊召喚！！」

「…よりにもよってソイツかよ」

「邪帝ガイウスの効果発動…フィールド上のカードを1枚除外し、そのカードが闇属性なら相手ＬＰに１０００のダメージを与える…効果の対象は邪帝ガイウス！そしてアンタにＬＰダメージを与えるわ！！」

「…りょーかい」

荒木昌二　　ＬＰ０

勝者　　御坂美琴

第六十話　番外　その頃関口達也は――

これは、御坂美琴と荒木昌二が白熱するデュエルをしている最中の出来事である。

場所　　???

時間　　ＰＭ１１：００

「話は聞かせてもらった、地球は滅亡する」

俺こと関口達也は、電話の相手竹内康弘に言い放った。

「安心しろ。世の中の預言者、推論者の話を統合すれば、地球はもう１００回以上滅亡してるよ」

「ですよね～…けど、無茶苦茶だなぁ～…そりゃ。もしそれが本当なら、ジェムナイト始まったなんてレベルじゃねーぞ」

「実際のとこ、俺も信用してるわけじゃないけどな。ソースは無いけどそういう話がでてるってだけの話」

「だろーけどさ、話半分だとしてもそれは…」

「言いたくなる気持ちは分かる。俺もビビったし」

俺達が何に驚いているのか　　それは、竹内が持ちこんだとある情報――――

今回の新ターミナルで出てくる、新しいジェムナイトの情報が流れて来たと言うのだ。

ちなみに、その情報のジェムナイトのスペックは以下の通りである。

ジェムナイト・サニクス
☆４／地／炎族／攻１８００／守１０００
デュアル●手札からジェムナイト捨ててジェムナイトフュージョンサーチ

廃石融合
通常罠
平行世界融合のジェムナイト版

ジェムナイト・ジルコニア
☆８／地／岩石族／攻３０００／守２５００
融合召喚に成功した時カード２枚墓地に送る

「まぁ１００歩譲って上の２枚を許すよ、でも何だよ最後のは！？」

攻撃力３０００とか…。

種族が岩石族ってことは、融合に必要な素体も岩石族だろう。あのジェムナイト使いがずっと欲しがっていた岩石融合体だ。

挙句この効果。ジェムナイトはその特性上、神の警告などで融合召喚などを止められてもまったく痛くないというメリットがある。その上でこの効果はありえない。

「俺としては、岩石の融合体だけで良かったんだけどな～…攻撃力も精々２５００行けばいいくらいで、効果もそんなに期待してなかった。ただ、岩石族の有効活用が出来ればそれで良かったんだ」

「…で、実際の所どれぐらいの信憑性なんだ？」

「高くても２０％だな、ソース無いし。時期的にはそろそろ情報出てもおかしくないから、その期待値を加味した上でも、それ以上はねーよ」

２０％ねぇ～…まぁこれを低いと見るべきか、高いと見るべきか…一応もしもの事を考えて、対策とかを考えておいた方がいいかもしれないな。

「…そうか、まったく妙な爆弾叩きつけやがって…これじゃ安眠できねーよ」

「いやいや、それが目的だからｗｗ」

「てめぇ…明日覚悟しろよ？」

「へいへい、精々情報が出るまで頭抱えてろよ。んじゃ、また明日な～」

…電話終了。

結論　　アイツ○なす。

それから数日後――――

学校が終わって、俺は何時ものように行き付けのカードショップに足を運んだ。

「うぃーっす店長。今日もおじゃましまーす」

「はい、いらっしゃい関口君」

この人は、このカードショップの店長　神崎士郎さんで、俺達がこのカードショップに通い続ける理由の一つだ。
とても気さくな人で、俺達の話にもよく乗ってくれる。そして本人もさまざまなカードゲームをやっていて、その腕も中々の物だ。
ちなみに補足しておくが、この人とミラーワールドは何の関係も無い。
その割に、店のレジの上やショーケースの中などに、某カードケースやガイアメモリ等が飾ってあるのは、ツッコミ待ちなのだろうか？

「いや～…やっぱここが一番落ち着きますね。今日って何かカードゲームの大会ありましたっけ？」

「Ｌｙ○ｅｅの大会が一応１８：００からあるよ」

「…ほぅ、一応優勝プロモを聞きましょうか」

「渚　〇夏」

「！？」

「まぁ、俺も参加する予定だけどね」

「…ですよね～……取る気満々じゃないですかヤダー」

「今度宙単組もうと思ってるから、ちょっと欲しいんだよね」

「その発言からは愛が感じられませんな…千〇も不憫よのぅ…」

そんな感じで何時もの様に店長との会話を楽しんでいた俺だが、さっきから思っていた疑問を口にする…というより、そろそろスルーも限界なので、ツッコませてもらおう。

「…で、店長…あの馬鹿共は何やってるんですか？…新手のかちこみ？」

そう言って俺が視線を向ける先には、何やら人だかりが出来ていた。正確には、人だかりの中に二人の人物がいて睨みあっているのだが…一方はその手に何やらファンタジスタな物握り締め、今にももう一人に飛び掛らんとしていて、何人かが押さえ込んでいる。もう一人はそいつをやれやれといった感じであしらっているようだ。というか二人とも知りあいだし、ガスタの使い方に定評のある隣クラスの池上君とおなじみの竹内君じゃあーりませんか。

「…説明しようか」

そう言って店長は、数分前の出来事を語りだした。

今から数分前

「……」

「こんちは～」

「はい、竹内君いらっしゃい」

「…あ～…やっぱ池上落ち込んでますね」

「まぁ、最近ガスタが混迷してると思った矢先にこれだから…ねぇ？」

「しゃーねーな。ちょっと元気付けてきますわ」

「ほどほどにねー」

「よお、池上」

「…竹内か、何か様か？」

「いや～、悪いね！ウチのエメメさんがそっちの枠食っちゃって（笑）」

「――――――――――――（声になら無い叫び）」

「とまぁこんな感じ」

店長に説明を受け、大体状況を理解できた。竹内も相変わらず身内の煽りに容赦ねえな。

そういえば、今日がターミナルの発売日だったな。情報は数日前から出てたけど、実際に当てて見なければ分からないと挑んで、玉砕したのだろう。

池上君…南無。

「なるほどね～…まぁそれなら放って置いても問題なさそうですね。んじゃ俺もターミナル回させてもらいましょうか」

今回はラヴァルバル・チェイン等のエクシーズが強いため、一応手に入れておきたいからな。

「それなんだけど…実はもう売切れちゃったんだよね」

……え？

そんな馬鹿な!?なんで今回に限って…他の店で買うか?…いや、何時もはターミナルの売れ行きが良くないここで売り切れなんだ。他は絶望的だろう。

「じゃ……じゃあ次の入荷は……」

「実は今回のターミナル、再販しないらしいんだよね」

突きつけられた絶望。
その場に突っ伏す俺　　そしてその俺の型を叩く手が!
振り返ると、そこには竹内がいた。そして一言――――

「ざまぁｗｗｗ」

「ううっ……タケェ……いつか絶対……」

関口達也　　現在部屋で睡眠中　　悪夢にうなされている模様

第六十一話　フラグタッター

美琴サイド

「悪いわね、私の勝ちよ」

「そうだね…僕の負けだ」

かくして決闘は終了した。両者はお互いの健闘を称えあうため歩み寄り、そして手を伸ばして――――

「うりゃー！！！！！」

突然の飛び蹴りにより、彼こと荒木昌二は飛んでいった。かなり良い角度で頭部に足がめり込んでたけど大丈夫かしら？
そして、飛び蹴りをかました当人こと涼宮ハルヒさんは、そのまま荒木に掴みかかった。

「こら荒木！！何でアンタ負けんのよ！？」

「も…もうしわｋ」

「言い訳は聞きたくないわ。いい？私達ＳＯＳ団に敗北主義者は必要無いのよっ！！ちゃんと分かってんの！？」

必死に釈明している荒木だが、どうやら涼宮さんは聞く耳持たずのようだ。流石にこれ以上は不味いと踏んだのか、他の人達も集まってきた。

「あわわ…それ以上やると荒木君が大変な事に…」

「その辺にしとけよハルヒ、決闘だって勝負事なんだから、常に勝ち続けるなんて無理だろ」

「…なによ、バカキョン！アンタも敗北主義者なわけ？」

「ともかく落ち着け。周りの目もあるんだから、あんまり騒ぎを起こすなっての」

「そうですね…ここであまり騒いでいると、最悪締め出されてしまうかもしれません」

「…分かったわよ。荒木、罰は後でキッチリ用意しておくから覚悟しなさい！」

「い…いえっさー」

あ～…中々話しかけづらいわね。
でも荒木にはまだ色々と聞いたいことがあるし、なんとかタイミングを見つけて……

「あっ…あの～…」

「…！美琴ちゃん、悔しいけど私達の負けよ。コイツは好きにしていいわ。簀巻きにして海に捨てるなり、奴隷市に売り払うなり貴女の自由よ」

そう言って涼宮さんは荒木をこっちに寄越して来た。

「けど私は、貴女をＳＯＳ団に入れることは諦めてないからねっ！次に会った時は覚悟してなさい。ほら行くわよ皆」

そう言って涼宮さん率いるＳＯＳ団の皆は引き上げていった。何故か、キョンさんが去り際にこちらを気にしていたようだが、恐らく荒木の事が心配だったのだろう。
そして全員がいなくなったのを確認し、ぐったりとしている荒木に話しかけた。

「さてと…じゃあ色々と喋ってもらいましょうか」

荒木サイド

さ～て、色々と面倒なことになって来ましたよっと。

ここでもし本当のことを言ったとしても、信じてもらえるかは微妙だよな。何より僕が異世界人ってことは、極力内密にする様古泉達に言われてる。
となれば、何とか誤魔化すしかないのだけど…
そこで問題だ。この状況をどう誤魔化すか？

３択―一つだけ選びなさい

答え？ハンサムの荒木は突如最高の言い訳を思いつく
答え？仲間がきて助けてくれる
答え？言い逃れできない。現実は非常である。

僕がマルを付けたいのは？だが期待は出来ない……
先ほど別れたハルヒ達があと数秒の間にここに都合よく現れてアメリカンヒーローのようにジャジャーンと登場して『待ってました！』と間一髪助けてくれるってわけにはいかないだろう。
やはりここで勝つるには？しかないッッッ！！

しかし現実は非常である、何も思い浮かばない。

「何よ…まだだんまりなわけ？言っとくけど私、そんなに気が長い方じゃないわよっ！」

そうこう考えてる内に、向こうのボルテージはいい感じに上がってきたようだ。
コレはもう無理っぽい。

答え？―　答え？　答え？

僕がそう諦めて、彼女の電撃に身を任せようと思った瞬間、思わぬところから助け舟が出た。

「あ～…確かお前、学園都市に友達がいるとか言ってたよな？御坂の事も、そいつから聞いたのを覚えてただけなんだろ？」

まさかの答え？　まさにグットタイミングとしか言いようの無いタイミングで仲間（キョン子）の登場である。僕のことが心配で戻ってきてくれたのだろうか？

「学園都市に友達…？」

コレはチャンスだ。向こうも少し落ち着いて、こっちの話を聞いてくれそうだし、この嘘を上手く地固めしよう。

「そ……そうだった！確か君ってかなり有名な能力者なんだよね？なんでも学園都市の中でも７人しかいないＬＥＶＥＬ５のうちの一人だとか…って僕の友達が色々と話してたから、僕も君の噂やらは少し知ってたんだ」

「…ふ～ん」

うっ…なんかあんまり信じてもらえてないかも…？

「名前は…？」

「へっ？」

「そいつの名前…アンタの友達だって言うそいつの名前は？」

「あ…え～っと……竹内！そう、竹内っていう名前だ」

ヤバイ…咄嗟に元の世界の知り合いの名前を出してしまった。でも、結構ありふれた名前だし…なんとかなるかな？

恐る恐る御坂の顔色を伺ってみると、何とも複雑そうな顔をしていた。

「竹内…？……なんか何処かで聞いたことあるような……まぁいいわ。とりあえずはそういうことにしといてあげる」

「それはどうも」

「さてと…それじゃあ私はそろそろ行こうかしら。そういえばあの子も置いてきたままだし…」

「…？まぁ、次に会うのは決闘王国でだろうけど…今度は負けない

よ」

「言ってなさいよ…また返り討ちにしてやるんだからっ！　じゃあね」

そう言って、御坂美琴は去っていった。何とか助かったようだ。
そして、彼女が見えなくなるのを確認してから、キョン子が声をかけてきた。

「やれやれ…お前だけじゃ心配だから戻ってきたけど……正解だったみたいだな」

「迷惑を掛けた…僕に力が足りないばっかりに……」

「…しかし、何でお前メインのデッキで勝負しなかったんだ？」

「そんなの決まってるじゃないか…これから先、彼女と僕達は敵同士になる。自分の手の内を明かすのは得策じゃない」

「敵…ねぇ。そもそも、私達も向こうもそこまで勝ち抜くとは限らんだろう。お互い決闘王国で再会する前に他の奴にやられる可能性の方が高いんじゃないか？」

少し呆れた表情で言い返してくるキョン子。
それに僕は、不敵な笑みをしつつ言った。

「確かに…彼女が勝ち残ってくるかどうかは分からない。けど僕達は違うさ、なんたって……僕がいるんだからね」

「…そうかい。ほんと……お前は決闘のことになると強気になるよな……普段はヘタレの癖に」

願わくば、本戦で彼女に借りを返せることを…切に願おう。

美琴サイド

場所　　船内通路

「はぁ……何か散々だったわ」

まぁ、そこそこ面白い決闘が出来たし…いい暇つぶしにはなったけど。このレベルの決闘者がウヨウヨいるんなら、本戦もかなり楽しめそうだわ。

「さて…とそろそろ部屋に戻ろうかしら……？そういえば、何か忘れてる気がするけど……まっ…どうせ大した事じゃないわよね～♪」

場所　　デッキ

「……おねえ……さま」

白井黒子　　放置続行

第六十二話　新たな出会いを求めて

決闘王国へ向けての船出が始まって1日目

その頃関口は――――

「……（げっそり）」

虫の息であった。船旅が始まってから、彼はこの部屋から出ることすら出来ていない。

まさか、王国に着く前にここまでこの俺が追い詰められるとは……

恐るべし決闘王国。

話を聞く所によると、王国に着くまであと2日ほどかかるらしい。

それまで俺の命が持つかどうかは不明だが。

「まったく…こんなんじゃ先が思いやられるわね」

そう言って呆れている御坂。しかしなんだかんだでずっと看病してくれているのだから、やっぱり御坂は根が優しいんだよな。

「ほら、酔い止めの薬。結構効くみたいだから試してみなさいよ」

「…悪いな。かなり迷惑かけちゃってさ」

「そう思うんなら、早く良くなりなさいよ」

「船から下りれば、速攻で治ると思うんだけどな……いっそのこと泳いで行った方がなんぼかマシだ」

これでも昔から泳ぎは得意だからな。１０ｋｍ遠泳ぐらいなら何度か経験がある。

「アンタねぇ……ここから目的地までどれだけ距離があると思ってるのよ？精々泳ぎ着かれて浮かんでる途中に魚の餌になるのが関の山ね」

「……むぅ」

しかし他に方法が無いのだ。船ほどとは言わないが、飛行機も大の苦手である。どちらも出来れば乗りたく無い代物である以上、残るのは己が肉体のみであろう。

しかしまぁ…どうしてもどちらかに乗らなきゃいけないと言うなら、いっそ飛行機の方が良かったな。

あっちはまだ、乗ってる場合の時間が短い場合が多い。

「まっ…後二日、精々頑張りなさい」

「分かってるさ。…っとそういえば、白井ちゃんはどうしたんだ？今日はまだ顔を見て無いけど」

「あ～……あの子は色々あって、今は部屋でダウンしてるわ。昨日は部屋に帰ってくるのもかなり遅かったし、はしゃいで船の中を回って疲れたんじゃないの？」

「なるほど……ね。御坂はどうだったんだ？昨日、船の中をある程度見て回ってたんだろ？」

「ん～…そうね、面白そうな決闘者は何人か居たわよ。本戦が楽しみね」

「…そうか……じゃあ、本戦の前に俺も少しどんな奴等がいるのか見て回るか」

そう言って俺はベットから起き上がる。

「ちょっと!?大丈夫なの??」

「何とかね…御坂が用意してくれた薬が効いたみたいだ。少し動くぐらいなら問題ない」

相変わらず気分は少し悪いがな。だがしかし昨日から何も食べて無

いし、いざとなっても悲惨なことにはならないだろう。

「まっ…そんな訳で俺は、少し船の中を見て回ってくるよ。御坂はどうする？」

「そうね……じゃあ私は、黒子の様子でも見てくるわ」

「りょーかい……んじゃまた後で！」

「ええ、あんまり無理はしないようにしなさいよ」

場所　　船内デュエルスペース

さて…やっぱり最初に来るべき場所はここだよなぁ～この船の中にある船内デュエルスペース。

しかし、ここは本当に船の中か？それにしてはあまりにも広すぎる気が……。

そして周りを見渡せば、既に何十人もの決闘者達がデュエルをしていた。俺もその中に混ぜてもらうとしますか！

「え～…面白そうな奴等は…っと……ん？」

そうして勝負している決闘者を眺めていること数分。何やら揉めている二人が目に入った。

一人は少々ワイルドな格好が目立つ男で、もう一人は長いポニーテールの女の子だ。背格好からして、二人とも中学生か高校生ぐらいだろうか？何やら男の方が、女の子に難癖を付けている様だ。だがしかし女の子の方に怯えた様子はなく、寧ろ男の態度に呆れてるような感じだ。

「ふ～ん…何か面白そうだな。ちょっと見てみるか……」

俺はその二人の様子を少し近くで観察することにした。

「オイ、ネーチャン！人にぶつかって置いてそのまま済まそうゆーんか！？」

「そのままって…普通に謝っただろう？まだ他に何かしろって言うのか？？」

「とーぜんや！ホレみい！！ネーチャンがぶつかってきた所為で、ワイのレアカードが曲がってもーたわ！！」

そう言って男の方は、先端が少し曲がったカードを出してきた。なんか当たり屋見たいな台詞だな。

「？…私の所為って……ちょっとぶつかっただけだろう？ソレが曲がったのは私の所為だとは、到底思えないわけだが」

「うるさい！とにかく責任は取ってもらうでぇ～…まずは今持ってるネーチャンのレアカードをありったけ貰うで」

「…随分横暴な奴だな。私にそこまでする義務は無い」

「なんやて！？人が優しくゆーてやったら付け上がりやがって！！何ならこっちは力付くでもええで！？」

「やれやれ……その時はまず間違いなく咎められるのはお前だろうさ。被害者と加害者の立場が逆転だな」

「ぐっ……」

「…もういいか？まぁぶつかったのは悪かったさ。今度からきをt」

「なっ……なら決闘で勝負やっ！！！」

「…はっ？」

「ワイとネーチャン…二人で決闘して勝負を付けるってのはどうや？それにただ決闘って言うのもつまらへん。ここはアンティ決闘で勝負や！！」

「…やれやれ」

「どーしたネーチャン！びびってるならネーチャンの不戦敗でも別にええんやで？まぁその時はレアカードを貰うことになるやけどな」

「……いいさ、やってやるよ。流石にそこまで言われても逃げる

のも癪だしな」

「ッ……いい度胸や、なら始めるで……」

「決闘（デュエル）」

「決闘（デュエル）」

？？？　　ＶＳ　　？？？

「まずは先攻後攻を決めるわけやけど…ネーチャンの先攻でいいで！大サービスや」

「そいつはどーも…じゃあ私の先攻…ドロー！！……私は手札から、終末の騎士を召喚！効果でデッキからユベルを墓地に送るぞ」

「（くっくっく…今は好きに動けばええ。次のターン…ワイの最強カードで度肝抜かせてやるで！）」

「更に、私はカードを1枚セット……ターンエンドだ」

「ワイのターン…ドロー！！さーて一気に行かせてもらうでぇ！！ワイは手札からレスキューラビットを召喚！」

《レスキューラビット／Ｒｅｓｃｕｅ　Ｒａｂｂｉｔ》
効果モンスター

星４／地属性／獣族／攻　３００／守　１００
このカードはデッキから特殊召喚する事はできない。
自分フィールド上に表側表示で存在するこのカードをゲームから除外して発動する。
自分のデッキからレベル４以下の同名通常モンスター２体を特殊召喚する。
この効果で特殊召喚したモンスターはエンドフェイズ時に破壊される。
「レスキューラビット」の効果は１ターンに１度しか使用できない。

「そしてレスキューラビットの効果を発動！！このカードをゲームから除外することで、自分のデッキからレベル４以下の同名通常モンスターを２体特殊召喚！ワイが呼ぶのはコイツやっ！二頭を持つキング・レックスを２体特殊召喚！」

《二頭を持つキング・レックス／Ｔｗｏ－Ｈｅａｄｅｄ　Ｋｉｎｇ　Ｒｅｘ》
通常モンスター
星４／地属性／恐竜族／攻１６００／守１２００
恐竜族の中では強力なカード。２つの頭で同時攻撃。

「……！私はこの時永続罠カード「リミット・リバース」を発動する！墓地のユベルを特殊召喚！！」

《リミット・リバース／Ｌｉｍｉｔ　Ｒｅｖｅｒｓｅ》
永続罠
自分の墓地に存在する攻撃力１０００以下のモンスター１体を選択

し、
攻撃表示で特殊召喚する。
そのモンスターが守備表示になった時、そのモンスターとこのカードを破壊する。
このカードがフィールド上から離れた時、そのモンスターを破壊する。
そのモンスターが破壊された時このカードを破壊する。

《ユベル／Ｙｕｂｅｌ》
効果モンスター
星１０／闇属性／悪魔族／攻　　０／守　　０
このカードは戦闘によっては破壊されない。
表側攻撃表示で存在するこのカードが相手モンスターに攻撃された場合、
攻撃モンスターの攻撃力分のダメージを相手ライフに与える。
このカードが戦闘を行う事によって受けるコントローラーへの戦闘ダメージは０になる。
このカードは自分のエンドフェイズ時に
自分フィールド上のモンスター１体を生け贄に捧げなければ破壊される。
このカードの効果以外の方法で破壊された時、自分の手札・デッキ・墓地から
「ユベル－Ｄａｓ　Ａｂｓｃｈｅｕｌｉｃｈ　Ｒｉｔｔｅｒ」１体を特殊召喚できる。

「ハッ…そんな雑魚モンスターを出したって何の意味も無いで！！ワイは二体のキング・レックスでオーバーレイ・ネットワークを構築！！エクシーズ召喚…来い、エヴォルカイザー・ラギア！！」

《エヴォルカイザー・ラギア／Ｅｖｏｌｚａｒ　Ｌａｇｇｉａ》
エクシーズ・効果モンスター
ランク４／炎属性／ドラゴン族／攻２４００／守２０００
恐竜族レベル４モンスター×２
このカードのエクシーズ素材を２つ取り除いて発動する。
魔法・罠カードの発動、モンスターの召喚・特殊召喚のどれか１つを無効にし破壊する。

「コイツの効果は強力やでぇ…そんな雑魚モンスター共じゃ絶対に敵わへん！…言い忘れとったが、ワイの名前はダイナゴン・激！関西ではそこそこ有名な決闘者やっ！！」

「…ふ～ん。まぁ御託はいいさ、早くかかって来いよ」

「このアマッ……言われんでもやってるやるで！！バトルフェイズ！！ラギアでユベルに攻撃！！」

「……やれやれ、さっきから思ってたんだけどさ」

「？…なんや？」

「お前…相当馬鹿だな。攻撃力０のモンスターが普通、棒立ちで立ってたら何か警戒するのが普通だろうに……相手のモンスターに攻撃された時、ユベルの効果が発動する！私への戦闘ダメージを０にして、その攻撃してきたモンスターの攻撃力分のダメージをお前に与えるよ。ちなみに、ユベルは自身の効果により戦闘では破壊されない」

「なっ……！？」

ダイナゴン・激　　ＬＰ８０００　↓　５６００

「お前の攻撃は無駄だったわけさ。寧ろかなり一だな」

「うっ…うるさいっ！！どっちにしろラギアの効果は絶対無敵やで！コイツは自身のエクシーズ素材を２つ取り除くことで、相手の魔法・罠　モンスターの召喚・特殊召喚をどれでも一つ無効化して破壊できる！ネーチャンはもう、何もできへんで！！」

「さーて…それはどうかな？」

「…その余裕……絶対後悔させてやるっ！！ワイはこのままターンエンドや！！」

現状

？？？　　ＬＰ８０００　　手札４枚
フィールド上　ユベル　１体　終末　１体　永続罠　リミットリバース　１枚

ダイナゴン・激　　ＬＰ８０００　↓　５６００
　手札５枚
フィールド上　ラギア　１体　伏せ

カード　無し

第六十二話　新たな出会いを求めて（後書き）

何気に、エクシーズ初登場モンスターがラギアさんとは…ｗ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6999t/

とりあえずデュエルしようぜ！

2011年12月18日12時47分発行